

君と、ずっと

マツハでゴーだ！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

記憶がなくても互いを求めていた立花 瀧と宮水 三葉。

最後、君の名は。そう二人が紡いだ言葉はきつと、明るい未来を――

※本作は『君の名は。』の結末から続く後日談です。

映画を見て、その結末から作者の妄想が爆発した結果、自分なりのハッピーエンドまでを書きたいと思った自己満作品なので、肌に合わない方はブラウザバックをお勧めします。

なお本作は基本的に瀧と三葉のイチヤイチャ成分強めの恋愛小説です。

一応、瀧や三葉を除くキャラクターたちも登場する予定ではあるのですが、興味がある方に楽しんでいただけると作者は感激です！

丁寧な文章、描写を心がけてがんばりますので、よければ感想評価ともどもよろしくお願ひします！

目次

プロローグ

君を知ること、始まるんだ | 1

初々しいオトメゴコロ | 4

きっとこれが、運命って呼ばれるもの | 10

デート編

瀧くんデート大作戦 | 22

瀧くんデート大作戦 | 32

〜夜の部〜

むすばれるココロ | 43

日常編

最近の二人は | 56

女子高生探偵・四葉ちゃん | 69

それはそれで大切な『なにか』 | 82

三葉さんのオハナシ | 100

交わされる約束 | 114

再会編

再会×再会？ | 126

二人の関係は？ | 136

ココロの底から、君と…… | 151

思い描くは、いつかのこと | 174

にたものどうし | 188

お嫁見習い・三葉さん | 207

幸せのカタチ | 218

誓いはいつかの未来へのムスビ | 228

旅路編

二人のプレゼント	〜前編	243
二人のプレゼント	〜後編	254
思い出のあの場所へ		272
あの景色を、再び		284
ムスビの神は、きっとほくそ笑んでいる		299
あの日、忘れてしまった物語		308
君と、ずっと		316

蛇足編

幸せな未来のプロローグ		331
幸せな未来のサクセッション		340
幸せな未来へのエピローグ		350
特別番外編「君と俺がもっと早く」		364

プロローグ

君を知ること、始まるんだ

ずっと探していたような気がした。

ずっと求めていたような気がした。

心がどこか、ぽっかりと穴が空いた様に寂然としなかった。

それがいつ頃だったかなんて、もう覚えていない。

——そんな時、俺はすれ違った。

電車の反対車両で目があった瞬間、俺の心が高鳴った。

根拠なんて何も無い。ただの日常の風景で、そんなもの出会いともなんともいえないほどのものだ。

電車のすれ違い際に目が合うなんて普通のこと、何の運命もない。

——それでも、気づいたときには駆け出していた。

「はあっ、はあっ……!!」

普段は運動をしないものだから、自然と息が乱れる。

それでも不思議と疲れたような気持ちにはならなかった。

むしろ胸の高鳴りで、心がどうにかなくなってしまっただった。

何の当てもなくて、この行為が無駄かもしれないことは薄々気づいている。

それでも何故か——ここで走らなきゃ、永遠に後悔すると思っ

た。
わざわざ一駅で途中下車をして、その前の駅へと向かって一心不乱に走り抜ける。

時折住宅街を歩いていたり自転車で走り抜ける人たちに怪訝な目で見られようが、一切気にも止まらない。

ただ足で地面を蹴って、汗を拭いて、いるかもわからないあの人を求めて、走り抜ける。

「——」

……走り抜けた先にいたのは彼女だった。

彼は息を乱し、汗を流しながら俺を目を見開いてじっと見つめる。階段の上と下から視線が重なる。

……どんな言葉を掛けたら良いんだろう。だって俺は、彼女のことを知らない。

ただ電車の反対車両で視線が交わって、本能的にここまでできてしまったのだから。

だからか、交わっていた視線も次第に遠のく。

互いに視線を地面に向け、何事もなかったように俯きながら階段を上り、下る。

俺が彼女と再び視線が合ったのは、階段の真ん中で通り過ぎる時だった。

その目は不安そうに、でもどこか期待するように縋っているような目だった。

——階段を上りきって、俺は思った。

——階段を下がりきって、私は思った。

俺は、このまま何もなくあのつまらない日常に戻っても良いのかって。

——私は、この心の高鳴りを我慢して、通り過ぎてしまつて後悔しないのになつて。

唇を噛み締める。馬鹿みたいに心臓がドクドクと振動しているのが自分でもわかる。

口を開くのも恥ずかしくて、顔もきつと真っ赤だ。

——だけど、俺は彼女の声を聞きたい。

聞きたいことがたくさんあるんだ。

この心の動きの正体を、このどうしようもない高揚を。

この正体を知らない限り、きつと現実には戻れない。

だから、声を掛けたい。

——俺は、振り返った！

「あ、あの……!!」

声が重なる。

同じことを考えていたのだということだけ、俺私の心は高鳴った。声を交わすだけで、今まですっぽり空いていた何かが埋まっていくような感情に囚われる。

「あの、変なこと聞いているかもしれないんだけどさ……」

「わ、私も……変なこと、聞きたいんだけど、さ」

唇が震える。

手も足も、緊張で震える。

なんでこんなことをしているんだろうと。これから仕事なのに、後で怒られることも確定的なのに——時間を忘れたように、会話を交わす。

——俺私は、だれかひとりを、だれかひとりだけをさがしていた。

誰にもそんなことを話さなくて、誰にも相談できなくて、自分の中でも妄想の類って決め付けてた。

でも今なら断言できる。

——俺私は、君を探していたと。君のことを、ずっと探していたのだと。

そんなことをいきなり言えるはずはない。

だから最初に聞くことはきつと……

「——君の、名前は？」

——そんな、ありふれた言葉なんだろう。

——俺たちの世界は、見えていた景色は変わった。何色もなかった楽しくない世界に、色彩豊かな温かな色で彩られる。

——私たちは、触れることで、話すことできつと始められる。心に空いたものはいつの間にか埋まっていて、私たちの足りなかったものを埋めてくれる。

——君の名を知ること、俺私たちは始まった。

初々しいオトメゴコロ

——運命的な出会いを果たした彼らに待ち受けていたのは、案の定上司からの説教だった。

仕事の遅刻に加えてその日の立花瀧と宮水三葉は仕事に身が入っておらず、挙句の果てには体調不良を心配される始末。

そんな日の終わり、仕事が終わる自宅へと帰宅した三葉はそのままベットへと倒れこんだ。

そして枕に顔を埋めて、奇妙にも「んくくく」と声を漏らす。その顔は——

「え、へへ……瀧くん、かあ〜」

——ひどく締めりのない、ふにやふにやな笑顔だった。

彼女、宮水三葉を知る人物ならば想像もできない表情だ。

宮水三葉は家族、友人、会社など様々な顔を持ち合わせているが、基本的にこんな笑顔を浮かべている女性ではない。

思慮深く、どこかいつも何かを考えているというのが周りからの彼女への印象だ。

美人であるのに男の影はなく、どんな男性からのお誘いも即答で断るなど、社内でも「鉄の女」などと噂されるほどだ。

そんな鉄の女、三葉は手元のスマートフォンを操作して、今朝方に連絡先を交換した彼——立花瀧の連絡先を眺めて口元を緩める。

「瀧くんはまだお仕事かな？ 電話するのは迷惑かな〜？」

恋する乙女、と称しても良い。彼女の年齢を忘れさせるほどに可憐な三葉はベットの上でゴロゴロと転がる。

——今朝、三葉は立花瀧と出会った。

もちろん二人には面識はなく、本能が体を突き動かすように通勤を放棄して電車を降りて、そして出会ったのだ。

何の変哲もない住宅街の、短い階段で。

そこで二人は互いの名前を知る。

——立花瀧、宮水三葉。

その名前を聞いたとき、不思議と二人はすつとその名前が頭に入っ

ていった。

まるでその名前を知ること待っていたというように、瀧は三葉と自然に呼び、三葉は瀧くんと自然に呼ぶ。

本当ならそのまま一緒に居たいと思っていたが、しかし二人は社会人である。互いに仕事があるので、とりあえず連絡先と互いの顔写真を交換して別れたのだ。

——三葉はふと顔写真のことを思い出して、携帯画面に表示する。そこには突然写真を撮られて驚いている瀧の顔があり、三葉は蕩けた表情で画面を指でなぞる。

「瀧くん、端正な顔つきだよね……。可愛い系？　でもでも、体つきはしっかり男の子だし……」

傍から聞いたら変態的であるが、今の三葉を縛るものは何も無い。瀧と交わした言葉は二言三言であるが、それでも三葉はこれほどに暴走するほどに瀧という年下の男の子に対して溺れているのだ。

それを証明するように、現在は瀧を抱きしめるようにスマートフォンを胸に抱いてしめている。

——面白いほどに三葉が壊れているとき、ふと胸元のスマートフォンが振動する。

「ひゃっ！　も、もしかして瀧くん!?!」

三葉はスマートフォンの振動が電話であることを気づき、それを瀧だと断定してワンコールで電話に出て、すぐさま話し始める。

「た、瀧くん!?!　ど、どうしたの？　あ、もしかしてもう仕事終わった!?!　よ、よかったら今からお話とかできたなって——」

『「ごめんなー、お姉ちゃん。四葉は瀧くんじゃないんやよー」
「——つつっ!!?!」

——三葉はスマートフォンの受話部分から急いで耳を離して、通話相手を見る。

そこには『宮水四葉』の名前が表示されていた——と、同時に血の気が引く。

今の失態を、しかも一番知られたくない実の妹に知られたことに三葉は絶大な羞恥を抱くしかなかった。

『あれ〜？ お姉ちゃん大丈夫？ あれ、切れてるのかな。おーい、お姉ちゃん〜！ 早く返事してくれないと瀧くんに嫌われるよー』

「——嫌われんよお!!」

三葉は四葉の悪戯心からの言葉に敏感に反応する。その反応を聞いて、余計に四葉が楽しそうに笑うのだが、冷静さを失っている三葉がそれを理解できるはずもない。

『まあまあ落ち着いてよ、お姉ちゃん。そっかそっか、とうとうお姉ちゃんにも春が来たんやね』

「は、春なんてそんな、やめてよねー！ ……えへへ〜」

『……お姉ちゃんってたまに可笑しくなるよね、昔だって一時期自分のおっぱい揉んでいたことがあったし』

なんてことを軽口で呟くも、惚気ている三葉にそんな言葉が届くはずもなかった。電話越しにでもわかるほど四葉が肩を落としているのが目に見える。

……面白いことには間違いないが、四葉は壊れている姉に電話をした理由を思い出し、電話越しに話しかけた。

『お惚気中に悪いけどさー。今日、一緒にご飯食べに行くって約束、忘れてないよね？』

「……あ」

先ほどまでの緩みきった笑みは四葉の一言で消えて、三葉は妹との約束を思い出す。

今日は四葉からの相談を受けると言う名目でご飯を食べに行くことになっていたのである。

『……お姉ちゃん、忘れてたんだ』

電話越しでもわかる、四葉の怒りの声。三葉はすぐに先ほどまでの幸せな気持ちはどこかに消えて、背筋がビシッと伸びた。

「す、すぐ向かうから待ってて!!」

『ほんと、しっかりしてよねー。ホントまったく、お姉ちゃんは』

「だ、だからごめんってー!」

『——ま、いいや。おかげで面白そうなこと聞けたし。後でその辺りのこと、根掘り葉掘り聞かせてもらおうからね?』

四葉からの悪戯に楽しそうな声が三葉の耳に通り、そのまま電話を切られる。

最後の一言で恐ろしく足が重くなる三葉。しかしそうは言っていられないので、すぐに身支度を済ませた。

……ただ、いつもより化粧や身だしなみに気をつけて。

「で、電車に乗るんだから当たり前……だよ。うん——瀧くんに会えたらな、なんて考えてないんだから！」

誰に言っているんだか、という言葉がどこからか聞こえてきそうになるほど彼女はやはり面白かった。

●●●

「うわぁ……」

三葉は電車の車内の状態を見て、ついついそのような声が出る。

電車内はいわばすし詰め状態で、恐らくはサラリーマンなどの帰宅ラッシュと重なったのだろう。女性である三葉はこの中に入ること少し拒否したくなるが、この電車を逃したら確実に四葉から小言を貰うことは間違いない。

三葉は意を決して無理やり電車に乗り込んだ。

……ガタンゴトン、と車内が揺れる。その度に前後から身体を押し付けられるような感覚に囚われる三葉。

もちろん痴漢などされているわけではないが、やはり嫌なものは嫌なのだ。三葉は何とか出口付近の手すりに掴まろうと手を伸ばした。出口付近は比較的スペースがあって、しかも降車するときに楽である。押し潰されるような感覚に囚われながら三葉は手すりに向かって歩き、そしてそのまま掴んだ。

『ええ、次は○○、○○。お忘れ物のないようにお降りください』

つと、三葉の目的駅のアナウンスが聞こえる。

三葉はこの地獄からようやく抜け出せると安堵して、時間を確認した。幸いにも三葉は快速急行の電車に乗り込んだため到着は予定よりも早く着く。

電車は到着したが、しかし三葉の掴んでいた手すり側の扉とは反対の扉が開く。三葉はそれに気付いてすぐに降りようとした。

「す、すいません降ります！」

三葉は人筋を抜けていき、電車から降りようとした——その時、一人のスーツを着た男性が車内に乗り込んでくる。無論、三葉が降り遅れたことが原因で車内に入ってくる男性と肩がぶつかった。

三葉は体勢を崩して倒れそうになるも、その男性は彼女を支えるように抱き留めた。

その行動はひどく紳士的で三葉も少しドキリとしたが、三葉には今は瀧にしか目がない。

その男性に一礼だけ感謝を述べようと去ろうとしたとき、男性の顔が目に入って動きが止まる。

——今一度言おう。三葉の目には、今は瀧しか映っていない。

たとえ目の前の男性がどれだけ紳士的な行動に出ようと、どれだけ容姿が整っていても、三葉は何とも思わない。

だが例えばそれが——

「——大丈夫か？　三葉」

「た、瀧くん!?!」

——例えばその瀧であれば、相乗効果によって三葉のただでさえ温まっている瀧への感情が爆発する。

まるでタイミングを見計らっていたと疑ってしまうほどのタイミングで、三葉は今朝ぶりに意中の相手——立花瀧と念願の再会をするのであった。

しかしそれは……

『えー、扉が閉まります、ご注意ください』

「……あ」

——妹を更に怒らせる結果になってしまった。

無情にも閉まり行く扉に対して諦めの目を送る三葉は、妹に怒られることを覚悟した後すぐに喜びの気持ちを大きくさせる。

——瀧くんにまた会えた、という喜びが三葉の心を再び鼓舞する。

三葉は瀧と距離がほぼゼロであることにドキドキを隠せず、頬を赤らめた。

それは瀧も同じで、満員電車のため仕方ないとはいえ三葉と至近距

離にいるために視線を下に向けない。

そんな瀧を見て、三葉は不意に「可愛い」と思った。

……三葉はドギマギする瀧のスーツの裾をギュツと掴んで、小さな声で呟く。

「——瀧くん、ちょっとお話ししない？」

——三葉のその行為に、瀧は内心で心拍数が上がりながら頷いた。

きつとこれが、運命って呼ばれるもの

案の定というべきか、仕事場で頭ごなしに怒られた。社会人として10分前行動は当たり前で、新人の癖にギリギリ入社した自分に待っていたのは先輩からのキツイお説教だった。

……立花瀧は電車を待ちながら、今日の出来事をずっと考えていた。

事の始まりはある女性との出会い。一目見た瞬間から心の底で想いが高揚し、居てもたつてもいられず電車から飛び降りて走った。

走り、たどり着いた先にいた女性は自分と同じように走って来ていて、そのことに瀧はやはり高揚した。

そんな瀧がまず最初に知ったのは名前。

その女性の名前は

「——三葉、か」

瀧の頭にすつと入ってくるほど、自然な名前だと彼は思った。その名前を無意識に呟いては怒られ、ボーとして呟いては頭を叩かれるのが今日の彼の仕事中の出来事。

その割には仕事は着実に終わらせる辺りで、とうとう先輩から大丈夫？と尋ねられ、早退を勧められる次第だ。

瀧はふと、急いでいるからと交換だけした三葉の連絡先を見つめる。スマートフォンに彼女の顔写真と共に登録されるその文字列を見て、一人悶々とする。

——そんな交換してすぐに連絡してみてもいいものなのか？ そんなことしたら、引かれるんじゃないか？ ……などという草食思考の考えに陥ってしまうのが何とも微笑ましいものである。

「……でもなあ」

メールの画面を操作して、当たり障りのない文面を書くこと数回。ちよつと冒険したグイグイと攻める文面を書くこと1回。その文面を見られて先輩から憐れみの視線を向けられること十数回。

瀧は既に社内において弄られキャラが定着してしまつた一日だったりするのだが、彼がそのことを認識するのはもう少し後のことだ

あつたりする。

書いては消して、消しては書いての連続。その文面を要約するのであれば、「また会って話さないか？」というだけなのだが、簡単だからこそ瀧はそのメールを送れずにいた。

本気で三葉という女性を知りたいからこそ、慎重にならざるを得ないのだ。それが奥手すぎると瀧も理解してはいたりするのだが。

『電車が到着します、白線の内側でお待ちください』
などと悶々と考えている間に電車が到着する。

瀧は軽く溜息を吐いて、ポケットにスマートフォンをしまつて扉の右側に寄って降車する人を優先する。

そして大方降りきつたのを確認して、乗車しようとした。心で「また電車で三葉と会えたら楽なものにな」なんて考えながら。

そんな時、混雑する車内の奥から声が聞こえた。
「す、すみません降りますー！」

その女性は急ぐように人と人之間を潜り抜けて降車しようとするも、瀧は突然のことなので流石に避けることが出来なかった。

——突然のこと。まさかその女性が、自分が追い求める三葉であると思ひもしなかったからだ。

三葉と瀧の肩が勢いよくぶつかり、その衝撃で三葉は倒れそうになる。

瀧はふと我に返り、倒れそうになる三葉の身体を支えるように抱き留める。

——ふわりと甘い匂いが瀧の鼻孔をくすぐり、何故か覚えがある女性特有の柔らかい感触が彼の身体を刺激した。

その煩惱を振り払い、瀧はまずは彼女の心配をするように
「——大丈夫か？ 三葉」

そう、出来る限り優しく割れ物を扱うように、三葉にそう問うた。三葉はそこでようやく瀧の存在に気付いたように驚き、目を見開く。

——それと同時に、本来三葉が降りるはずであった電車の扉が閉まった。

……三葉との再会はそんな風に訪れ、瀧は内心で嬉しくもあり複雑

でもあった。

現在瀧が最も興味を注ぐ存在である三葉であるが、しかしそんな女性とこんな至近距離で関わるなんて予想外である。

それに身長差があるからか、先ほどから瀧の腹部に何やら柔らかいものが当たっていた。

「(……つかしいよな。なんか、俺この感触知ってる気が)」

もちろん瀧とて女性経験が全く無いわけではない。元々が端正な顔つきをしているため、たまにサークルの後輩や先輩からアタックされたことがある。

それでも頑なに彼女を作らないことに彼の友人である藤井司や高木真太も疑問を抱いていたほどだ。

だから、女性の柔らかさなんて自分が知っているわけではない……と瀧は思いながらも、三葉の胸の感触に確かな既視感を抱いていた。

……つい視線を逸らしてしまう辺りが、経験不足を否めないが。

そんな瀧を見て、三葉は少しばかり笑みを浮かべていた。

「な、何で笑ってんだよ」

「え？……ううん。なんかさ、瀧くんがちよつと可愛いなって思ってた」

「お、男に可愛いとか言うなよ！」

ツッコまれて、大人げなくそう言い返す瀧。

三葉を前にすると、何故か瀧は高校生に戻ったように照れ隠しをしてしまうように、頬を真っ赤にして視線を逸らしてしまう。

……そんな瀧のスーツの裾をキュツと、三葉は掴んだ。

「三葉……っ？」

三葉の行動に疑念を抱き、瀧は三葉を見下げた。三葉は上目遣いで瀧のこことを見つめており、その些細な仕草に瀧はドキツとしてしまう。

——本当に、三葉の所作の一つ一つで、どんどん心が奪われる感覚だ。困った。……なんて、瀧は心の奥で思っていた。

そんな三葉は意を決したように

「——瀧くん、ちよつとお話しない？」

そう言った。

○●○○●

「三葉、これ」

「……ありがと、瀧くん」

夕暮れ時の公園で、瀧と三葉は缶ジュースを片手にベンチに腰掛けていた。

あれから一駅で途中下車をした二人は、ドギマギとした所作で今いる公園に歩いてきたのだ。

会話を少し交わすも、交わした後で緊張からすぐに沈黙になってしまふ。その沈黙が怖くてすぐに話だそうとするも、話題がないから口を閉じてしまうのだ。

……ただ不思議なのは、沈黙で不安であっても、それが苦痛ではないということだ。

「……あはは、何かちよつと懐かしいかも」

「懐かしい？」

ふと、三葉はそう思い出すように呟いた。

三葉は缶ジュースを両手で持って、その手でそれをクルクルと回す。

「昔はね、私は東京じゃなくてもつとつごい田舎にいたんだ。東京みたいにお茶をするところとかなくて、友達と自動販売機をカフェに見立ててたな……なんてことを思い出してね」

「田舎か。……俺からしたらカフェないとか考えられないけどな。昔からカフェ巡りが趣味だったから」

「うわ、すんごい都会っ子やね」

不意に標準語が崩れ、恐らくは地元の方言が出る三葉。自然に出た方言に三葉は口元に手を充てて瀧を見た。

「良いよ、気にしなくて。なんか、そっちの方が三葉っぽいっていうか……。自然体の方が、俺は嬉しいかな……なんてさ」

瀧は少しはにかみながらそんなことを口走る。その言葉で三葉の体温が急上昇していることを、きつと彼は気付いていないだろう。

「……それじゃあ、私も気にせんことにするよ」

——三葉の満面の笑みに、次に体温が急上昇するのは瀧であった。美人は何をしても美人というが、三葉の笑顔にはもつとインパクトがあった。

東京に住んでいる時点で三葉よりも可愛い女の子や美女はたくさんいる。しかし瀧の目にはそのどんな女性よりも、三葉が美しく思えた。

もちろん恥ずかしくて、そんな声を表には絶対に出さないが——

——気付いたときには、瀧と三葉は自然体になっていた。

まるで、元々見知っていた二人と言われても不思議ではないほど、三葉と瀧は親し気に話す。

自分のことを。家族のことを。友達のことを。

ほんの数十分の出来事だが、二人はたくさんのかたまりを話した。

そう——三葉がついつい、約束を再び忘れるほどに。

「そんでそんときテッシーがね——」

ブブブブ……そう、三葉のスマートフォンが小刻みに振動する。それまで心の底から楽しく話していたのを邪魔されたと感じた三葉は、「なんやね」なんて悪態をつきながら表示される着信者の名を見た。

——宮水四葉。その名を見た時、血の気が引いた。

「ん、出ないのか？ 俺のことは気にしなくても大丈夫だぞ？」

「え、えつと……」

……約束の時間から既に30分以上の時間が過ぎてしまっていることに、更に先に注意を受けているために三葉は電話に出ることを躊躇う。

——高校2年生の妹に頭が上がらない25歳の姉。そんな情けないところを瀧に見られたくないのだろう。

……三葉は、恐る恐る通話ボタンを押すと——

『おねーちゃん！ 今どこおるん?! さっき電話したん、こないもう忘れたん?!』

「ご、ごめん!! ちょっと急な用事できたんよ!! 今すぐ向かう……」

向かいたい……向かいたくない——どないしたらええん?!」

『知らんわ!!』

三葉が瀧をチラチラと見ながら、コントのようなやり取りをするものだから、瀧は不意に笑いが零れる。

そんな瀧を見て、三葉は条件反射のように声を荒げた。

「な、なんで笑ってるの、瀧くん!? 今、私すごいピンチなんよ!」
「ふ、ふふふ……いや、なんかすごい新鮮だからつい……。ほら、妹さん?と約束しているんだろ? 俺のことは……良いことはないけど、男だから我慢する。行ってやれよ」

付き合ってもない癖に、と瀧は心で自分に毒づく。でもやはり、気になる人には恰好を付けたくなるのが男の性だ。

苦笑いしながらそう瀧に、三葉は幾分かは落ち着きを取り戻す。

一つ深呼吸をしてスマートフォンを耳に当て、四葉と通話を再開した。

「ごめんね、四葉。今すぐに向かうから——」

『ほーほー、なるほどお……。そっかそっか。——瀧くん、と一緒に居たんだ、お姉ちゃん♪』

「……………」

あんな大声で「瀧くん」なんて叫べば、電話越しに聞こえることなんて当然である。

しかしながら、三葉は凄まじいほどの嫌な予感に囚われていた。

四葉のこの悪戯な声音は、間違いなくよからぬことを考えているときのそれだ。この17年、彼女の姉をしていれば嫌でも分かる。

宮水四葉は小悪魔的な性格で、とにかく面白いことが大好きな少女なのだ。それに当てはめていくと、自ずと次に彼女が言う台詞は容易に想像できた。

『——連れて来て、お姉ちゃん♪』

四葉はそれだけという通話を切った。

それだけ言われて電話を切られた姉、三葉はまるで機械人形のようにギリギリと瀧の方に顔を向けて、半笑いの引き笑いで彼を見つめた。

そして……

「た、瀧くん——じ、時間、ある?」

「お、おう。げ、元気出せよ？ 俺も言い訳、手伝うからさ」

——力のない声で、そう呟くのだった。これから三葉に待ち受けているのは、8歳年下の妹から玩具にされるといふ現実なのだから、そうなるのも当然であった。

瀧は美しさからかけ離れた表情の三葉を励ますように言葉を掛けながら、まるで介護をするかのような錯覚に囚われたのであった。

●●●

「初めまして！ 私、そこで呆けている宮水三葉の妹の四葉つていいます！ 末永く、よろしくお願いしま〜す♪」

「お、おう……よろしく」

四葉の視線が完全に三葉を弄るものだと瀧は確信しつつ、差し出された手を取って握手をする。

やけに「末永く」という部分が協調されていたと瀧は感じるも、とりあえず好感は持たれているということだけは理解した。

対する姉の三葉は彼女の言う通り呆けており、非常に情けない表情を浮かべていた。

そんな彼女のことをどこか愛らしいと感じている瀧は、やはり苦笑いを浮かべた。……そんな瀧を観察するように凝視しているのは四葉。

……あれから瀧は呆ける三葉を連れて彼女が約束の地としていた新宿に向かい、そしてそのまま新宿で三葉を待っていた四葉と対面した。

そして今は新宿のカフェテリアで四葉を前にして、瀧と三葉は対面している。

「えっと、俺は立花瀧。年齢は22歳だ」

「あ、お姉ちゃんの方が年上なんだ——それでそれで？ お姉ちゃんとはどこで知り合ったんですか？ つていうかぶっちゃけどこまで進んでいるんですか？ あ、もしかして結婚を前提の」

「ち、ちよっと待って四葉!? 話が飛躍し過ぎやから!!」

あまりにも話が飛躍する四葉の言葉を止めるように、三葉は彼女の口を両手で塞ごうとするも、彼女は悠々とそれを避ける。

……瀧はそんな彼女を「今時の女子高生」と思った。二つ結いのツインテールに自分の地の良さを生かすためのナチュラルメイクで制服を着こなしている容姿。

可愛いらしく、恐らく学校ではモテるだろうと瀧は思った。

……が、やはり視線は三葉に向かう。

「……ふうん♪」

「……な、なんだよ」

「いえいえー。瀧くん、やっぱりお姉ちゃんに視線が向かうんだなーって」

……矛先が次は、瀧に向かう。その言葉は凶星で、瀧は四葉の言葉で顔が真っ赤になった。それを見た四葉はクスクスと笑った。

——この天性の小悪魔め、なんて瀧は内心で思っていたりする。

「これはやっぱり出来てるのかー？　ねね、お姉ちゃん」

「うううう〜」

妹に好き勝手されて顔を真っ赤にして唸る三葉は、視線をテーブルに向ける。

……瀧はあつと少しばかり息を吐いて、四葉からの弄りを受けることを覚悟した。

ツンツンと三葉の腕を肘で突いて化粧室の方に注意を向けると、彼女はその意味を理解したのか席を立った。

「お、お化粧直ししてくる！　瀧くん、その間、四葉の相手をよろしくねー！」

「あ、逃げた」

「逃げてへんわ!!」

三葉は分かり易く反論しながら、鞆を持って化粧室に向かう。

その光景をニヤニヤと笑いながら見る四葉に、瀧は話しかけた。

「趣味悪いぞ、妹」

「いやあ、お姉ちゃんは弄り甲斐がありましたよ♪　それに瀧さんも良い感じですよ」

「……その、新しい玩具を見つけたって顔止める」

そんな会話を続けていると、四葉は不意に瀧の顔をじつと見つめ

た。

その表情に瀧はドキリとする。

——まるで、瀧を見定める目。先ほどまでのふざけた表情ではなく、真剣な表情だった。

「……お姉ちゃんね、すつごく優しいんよ」

四葉は手元にあるフラペチーノに刺さるストローを弄りながら、そう呟いた。

「四葉があんな風に弄つても許してくれるし、家事とかも引き受けてくれるし、でも怒る時は怒ってくれる——でも、結構な頻度で寂しそうな表情浮かべてたんだ。鏡で自分の顔を見ながら、手の平を開いたり閉めたりしてさ」

「それって——」

——瀧はその癖について、どこか聞き覚えがあるような気がした。

当たり前だ。それはいつしか、瀧の身に染みついていた癖と同じものだったからだ。まるで何かを忘れたように自分の顔を毎朝見つめ、まるで何かを失くしたように手の平をじつと見る。

まるで何かを求めるように、毎日毎日飽きもせず。

——でも今は不思議に、その癖をしようとは思わなかった。

本当に何でかは分からない……なんてことはないと言えど瀧は苦笑する。

……そうだ、彼だって理解している。

彼の中にあつた空洞は、彼女の中にあつた空白は、もう既に存在しない。

二人は出会って、知ったから。

——名前を。立花瀧を、宮水三葉を。

彼の求めていた空洞はきつと三葉だったんだ。だって彼女と出会ってから瀧は、心からの笑みで埋もれているのだから。

瀧は知る——三葉も、同じであったと。

なんの奇跡かも分からず、何のオカルトチックで前世の記憶かも分からない。理屈云々より分かることはたった一つ。

「——三葉に会えて、よかった」

ただ、それだけであつた。

「……それが、お姉ちゃんを笑顔にしてくれたきっかけなんだね」

瀧の言葉を聞いて、四葉は満面の笑みを浮かべた。そこには先ほどの真剣なものはなく、心の底から嬉しそうな優しい笑みだった。

「……それは本当に、分からないんだよな」

「……んん？ でも瀧さんと出会ってからお姉ちゃん、昔みたいに元気になったよ？」

「いや、きっかけも何も——俺と三葉が出会ったのって、今朝だし」

——俺のふとした言葉で、四葉は口をポカンと開いて目を丸く見開いた。

当然の反応だ。ここまで深い話をした人物が、まさか今朝知り合っただばかりの存在であると四葉は思いもしていなかったのだから。

大方姉が存在を隠していた気になる人と思っただけに、その衝撃は凄まじい。四葉はそのため、しばらく呆然としているのだった。

「ただいまー。瀧くん、四葉何か失礼はなかつ——四葉？ 何呆けているの？」

なお、化粧室から帰ってきた三葉に心配されるのは必至だった。

●○○●

暫くすると四葉は自分を取り戻し、瀧と三葉に言葉通り根掘り葉掘り事の次第を追及すること数時間。

二人の出会いがあまりにも運命めいたものを感じた四葉は、今時の女子高生の習性からか、目をキラキラさせて二人の話を聞いていた。最初とはまた違う意味で二人の経緯に興味を抱いた四葉の攻めに最後は二人して肩を落としており、逆に四葉は艶々していたというのはご愛嬌だ。

……瀧は夜も遅くなっているため、三葉と四葉を見送るために彼女たちの最寄り駅で途中下車した。

四葉は二人よりも少し先を歩いており、瀧と三葉は肩を揃えて夜道を歩く。

「今日はごめんね？ 四葉が遠慮なく色々聞いてくるから」

「いいよ。俺も疲れたけど、でも楽しかったし」

「……そう言ってくれると、助かるよ」

三葉が柔らかい笑みを浮かべると、瀧はすぐに視線を逸らす。

——雲間から漏れる月の光に照らされた三葉の笑みが、あまりにも綺麗と感じたから。

幸い辺りは暗く、瀧の顔色は見えないだろう。

……良かった、これでは完全に初心な年下男子だ。

瀧はそう思った。

「……正直さ、今でも良く分からないんだ」

「私もだよ。でも私、あの時に確かに感じたんだ」

……それは二人同時に紡いだ一つの糸のような言葉。

一本では紡ぐことが出来なくとも、二本になれば紡げる、確かな言葉。
葉。

「俺私が探していたのは、君だって」

瀧の手の平と、三葉の手の平が重なる。

ただそれだけで二人の心臓が痛いほどにドクンドクンと鳴り響く。

瀧の目と三葉の目が交差して、その目に吸い込まれるような感覚に包まれる。

「私が求めていたものは言葉に出来ないものだった。心にすっぽり空いてしまった何か。その何かも分からなかったんだ——8年前の、あの時から。でも、今は違うの」

「……この手の平に、三葉の手の平があるだけで何か安心するんだ——無くなっていった何かが、埋まったみたいだ」

……近くに四葉がいるのに、その手を離せずにいる。

もつと、この手の温もりを体全体で感じたいと思ってしまう。

瀧にも三葉にも分からなくて、そして分からない癖に納得できる想い。

——もつと傍にいたい。もつと触れ合いたい。少しでも長く、少しでも一緒に。こんな風に想えるのは、瀧も三葉も初めてだった。

——でも何故か、初めてとは思えなかった。

……その真実が分かるのはきつと今ではない。二人が全てを知るのはまだまだ先だろう。

ただ今は二人は——

「——三葉。三葉、これからも……よろしく！」

「——瀧くん。瀧くん、うん！ 私もずっと……よろしくね！」

——お前が世界のどこにいても、俺が必ず、もう一度逢いに行く。それは今はもう忘れてしまった、彼が誓ったこと。言おうと思つて、言えなかったこと。

……温もりを通して、幸せは広がる。

そう——二人の未来は、始まったばかりだ。

デート編

瀧くんデート大作戦　〈昼の部〉

ずっと心に残る景色があった。

8年前にティアマト彗星の一部が分裂し、日本のある地域に落下し、とある田舎町を消失させたという出来事があった。

隕石の落下によって消えた田舎町——糸守町。

何の変哲もない田舎町であった糸守町はそれによって消失し、今では見る影もない。

……そんな悲劇に遭った糸守町だが、何の奇跡かは分からないが、丁度彗星の片割れが落下した日に避難訓練を催していたそうだ。

その結果、墜落による人的被害は異様に少なく、死傷者は限りなく少なかった。

……なぜ俺がこんなにも糸守のことに詳しくなってしまったのかといえば——厳密には分からない。

ただ、俺は今から5年前に糸守に訪れた。友人である藤井司やバイト先の先輩であった奥寺ミキと一緒に、小旅行という形で。何の目的でわざわざ学校をサボってまで何もないあそこに向かったかは、今となってはもう覚えていない。

不思議なことに、それを思い出そうとすると頭にモヤのようなものがかるんだ。

……それでも一つ、鮮明に覚えていることがある。

二人と別行動を取った俺は、糸守にある変な洞窟に一人で入っていった。そして山の山頂で一晩過ごしたんだ。

その間の記憶が俺にはない——でも、それからだ。

俺が既に消えてしまった糸守という田舎町に心を惹かれたのは。

その風景を見ると、心がどうしようもなく締め付けられるようになったのは。

「……でも、今はそんなことないよな」

俺は糸守町の人々が有志で集まって作った、今はない糸守町の美し

い風景が収められている一冊の本をじつと見つめる。

その中の一ページを見て、ついつい表情が穏やかになった。

……時折、この本を見ることが習慣付いた。心が押しつぶされそうな時、ストレスが限界を超えた時にこれを見ると、なんでかまだ頑張れる気になったんだ。

変な話だけど、さ。心が締め付けられる激情に駆られると同時に、心が癒されるんだ。

……俺は、学生時代のいつかは忘れたけど糸守の風景をスケッチブックに描いていた。

俺は不意に、時計を見る。

既に短針は0時を示していた。

「……つと、そろそろ寝ないと明日に響くよな」

俺は本を閉じて本棚に戻して、リビングの照明を消した。

そして歯磨きをしようとして洗面台にいき、鏡の前に立って自分の顔を見た。

——三葉に会いたいな。鏡に映る自分を見て、そう思った。

……駄目元で良いから行動に移そう。漠然とだけやりたいことを見つけてることが出来たんだ。

俺はそう思って、ポケットに入っていたスマホを取り出して操作する。三葉の電話番号を見つけると、そのまま三葉に電話をした。

プルルル、プルルルと二度ほど音がなり、3コール目で三葉は電話に出た。

『もしもし？ どうしたの、瀧くん。こんな時間に』

「ああ。その……えつと」

三葉に正論を言われて言い淀む。

……普通に「明日どこかに行かないか」って言えばいいのに、俺のヘタレ具合がそれを許してくれない。

……とりあえず自分の心を落ち着かせる意味合いで世間話でもしよう。

そう考えて話し出した。

「——な、なんか三葉の声が聞きたくなってさ」

『……………ふえ？ ええええええええ!!』

——そう考えた上ですつと出た言葉が、誘うことより言い難い恥ずかしい言葉であったことに気づくのは、そんなに時間はかからなかった。

○●○●

「お姉ちゃん何してるん!? 今から瀧さんとデートでしょ?」

「何着ればええんか分からんのお!!」

「いつも通りでいいの!!」

昨日の夜、突然瀧くんから電話を貰ってからというものの、私はずっと困惑の連続だ。

瀧くんは私の声を聞きたいから電話を掛けてきて、それで……なんか吹っ切れたようにデートに誘ってきてくれた。

今日は二人とも休日ということを知っていたし、ものすごく嬉しいんだけど——急過ぎて心の準備が出来てないんよ、瀧くん!!?」

「い、いつも通り!? 駄目駄目、そんなんじゃあ幻滅——」

「されないから!! 瀧くんはお姉ちゃんにベタ惚れだから最悪ジャージで行ってもダイジョーブだから!!——お願いだから、早く洗面台からどいてよお!! わたし今から学校なんだからー!!」

朝から、私たち宮水姉妹の絶叫が家中に響き渡る。

奥からおばあちゃんが「元気でええのお」なんて呟いているのが見えて分かった。

……結局身支度に時間が掛かり、私が出たのは数十分後。

電車に乗って向かう事、数十分。新宿で待ち合わせしていて、そこから色々と遊びに行こうってことになっているんだけど……自分は電車の中で自分の恰好を見直した。

フラワープリントのワンピースに白のカーディガン。髪の毛もしっかりとセットで来てるし、化粧もぼつちり（代わりに四葉はメイクを断念したけど）。

これなら大丈夫! ……なんて意気込んでも、やはりまだ足りないかな、なんて思っちゃう。

どうでも良い人なら気にしないけど、絶賛接近したい人ナンバーワ

ンの瀧くんなんだから、仕方ない。

……私は電車のガラスに軽く映る自分を——髪を結っている、組紐を見た。

この組紐は小さい頃からずっとつけているものんだけど、実は一度だけどこかで失くしていたんだよね。気付いたときにはまた自分の元にあっただけど。

……そうしている間に、私を乗せた電車は新宿に着いて、私はすぐに瀧さんと約束している集合場所に向かった。

駅からそれほど遠くないところにある歩道橋で待ち合わせしていて、私がそこに着くときにはもう瀧くんが既にいた。

「瀧くんー！」

私はすぐに瀧くんの名前を呼んで彼に近づくと、私に気付いた瀧くんが微笑んで私を受け入れてくれた。

「おはよう、三葉。その、急に誘っちゃって迷惑だった？」

「ううん！ 全然そんなことないよ！ むしろ嬉しいくらい……だったりする」

「そ、そっか……よかったあ」

瀧くんは安堵するようにそう言葉を漏らした。私はそこで瀧くんを良く観察する。

……最後に会ったのは一週間ほど前で、あの時の瀧くんは髪の毛を無造作に伸ばしていた。それでも私の補正も入ってカツコいい部類だったんだけど、今は……たぶん、誰の目から見てもカツコいいと思う。

美容室にでも行ってきたのか、短く綺麗に切り揃えられた髪をしっかりとセットしていて、彼によく似合うジャケットを着こなしてカツコよさを底上げしている。

……手、抜かなくて良かったあ!!

「三葉、その……似合ってるよ、服」

「あ、ありがと……」

……この何とも言えない空気が、ちよつと憧れだったりする。たぶん瀧くんもあまり経験がないからか、言葉をすごく選んだり私のこと

を考えてくれているってことがすぐに分かるから——なんか、すっごく幸せだった。

私は瀧くんのことを考えてると落ち着かないけど、いざ瀧くと一緒にいると安心できるからか、すっごくリラックスできるんだよね。

「……瀧くん、仕事場ではそれ禁止だからね」

「え、それって?」

「……にぶちんの瀧くんには言いませんっ!」

「ちよ、三葉!?!」

ちよつと意地悪すると、瀧くんは焦ったように背を向ける私を窺って話し掛けてくれる。

——そんなカッコいい姿、他の人に見せたくないなんてことは絶対に言えない。そんな独占欲強い女だなんて、思われたくないから。

……つと、その時、瀧くんが私の手を掴んだ。その瞬間に、一気に心拍数が急上昇する。

「……瀧、くん?」

「あ、あのさ……今日って、デートで良いんだよね?」

「う、うん……」

「じゃあ……そういうことで」

……瀧くんは少し汗ばんだ手で私の手をギュッと握り、視線をあらぬ方向に向ける。

——もう少しスツとする方が男らしいんだろうけど、こう自分のために頑張ってくれてるって思うと、これはこれで有りなんじゃないかなと思う。

少なくとも私にはすっごくドンピシャで心打たれた——瀧くんはあれだ、年上キラーだ。

後で瀧くんの周りのことを色々と聞かないとね。

……ともかく

「——色々と考えてきたから、今日はいっぱい楽しもうな!」

——とりあえず、今日は心の底から楽しもう!

○●○●

昨日の夜に誘ってからネットとかをフル活用して立てたデートプ

ラン。

仕事でもこんなに使ったことがないって思うくらいに頭を捻ってデートプランだからか、三葉も楽しんでくれるかなーってちよつと心配してたけど——杞憂に終わって良かった。

「ふあく……こんな快晴だと、眠くなっちゃうね。あ、でも寝たら勿体ないから、寝んよ！」

——俺たちは今、新宿御苑に来ていた。御苑といえは様々な様式の庭園が観れることで有名な、新宿に来るならここに、つてことでここを選んだ。

今は庭園を見ながら芝の上にレジャーシートを敷いて、三葉と並んで座っている。今日は快晴でアウトドア日和だからか人もちよつと多いように思える。

俺は鞆の中から無難に選んだ紅茶を取り出して、三葉に渡した。

「……ありがと、瀧くん」

三葉は下手に遠慮をすることなく、微笑んでそれを受け取ってくれ。キャップを外して三葉が紅茶を飲むと、コツンと俺の肩に頭を乗つけた。

「み、三葉？ 周りの視線とかは気にしないのか……？」

「ん〜？ ……気にしないよ。外でチューしてるわけでもないんだから」

「………」

三葉がチューなんていうものだから、自然と視線が三葉の唇に向かう。

……リップが口紅かは分からないけど、プルンと瑞々しい唇。形は綺麗で……って昼から止めろ止めろ。変な気分になる。

三葉の狙ってか天然か分からない行動のせいで取り乱してたらキリがない。三葉はたぶん、割と男を勘違いさせるタイプの女性だ。

——勘違いも糞も、そもそも一目見た時点で堕ちているのは俺だけども。

「……………あれえ。四葉の雑誌には、効果抜群って書いてたのに」

「——」

聞かなかったことにしよう。ああ、三葉さんがそんな小悪魔みたいな考えするはずがない。

俺は心でそう断言して、ふと三葉の口から出た妹の話題を吹っつけた。

「そういえばあれから四葉から何か弄られてないのか？」

「……まあ、ご想像で」

「うん、察した——」

どうやら毎日弄ばれているようだ。ちなみに四葉とは連絡先を交換していて、割と高い頻度でSNSで絡まれる。主に三葉関連だけだ。

「四葉とは確か一緒に暮らしているんだっけ？」

「うん。四葉と、お婆ちゃんとの三人暮らし。大学卒業してしばらく経ったら一人暮らしするつもりだったんだけど、妹とお婆ちゃんだけだと心配だからね」

「……両親は、って聞いても大丈夫か？」

俺は恐る恐る三葉にそう尋ねると、三葉は苦笑しながら首を横に振った。

「お母さんはご想像の通り、私が小さい頃に亡くなったんだ。お父さんは……今は私たちのために頑張って働いてくれてる」

三葉はスマホを操作してある一枚の写真を俺に見せてきた。

そこに映っているのは今より幼く、でも面影を残している高校生くらいの三葉と、小学生の四葉。そしてその左右にいるのは恐らく二人のお婆ちゃんとお父さん。東京のアパートの前で撮ったのか？

「8年前かな？ 地元に住られなくなつて、東京に越してきたんだ。元々お父さんとお婆ちゃんが凄く仲が悪くて……って私もかな？」

とにかく、すつごく揉めたんだけど——最終的にはお父さんが親としての責務を果たさせてくれつて、そう言つて皆で東京に来ることになったんだよ」

「……良いお父さんじゃん」

「すつつつつごく、頑固だけどね！」

三葉の何とも言えない表情に苦笑する。

……俺は高校生だった頃の三葉を凝視する。化粧つ気が全然ないのに、めちやくちや可愛い。髪型は今と違って短髪で、髪をカチューシヤの代用で紐紐で飾っていて——ぶっちゃけ、可愛いけどあんまり似合っていないかも。

俺、ロングの方が好きだからな。

「……あんまり髪、似合っていないって思ったでしょ」

「お、思ってたねえよ」

「嘘！ 昔、同じようなこと言われたもん！ あの時だつて——」

……三葉はそこまで言つて、少し言い淀む。

眉間に皺を寄せて、なにかを考えるように声を唸らせた。

「……あれ？ 誰に、言われたんだっけ……。あはは、ちよつと昔のこと過ぎて思い出せないのかな？」

……三葉は寂しそうな表情でそう言った。

——その表情を、俺は知っている。俺もよく似たことがたまにあるんだ。

何か思い出しそうなのに、その何かを思い出すことが出来ない歯がゆさ。それがどうしても、何かを失くしてしまつたような感覚がして、どうしても好きになれない。

……俺は気付いたら、三葉の手を握っていた。

「——俺、黒髪ロングが好きなんだよ」

「……それ、なんの慰めにもなつたらんよ？」

「だから！ ……今の三葉、つていうか三葉なら何でもいいつていうか——強いて言うなら黒髪ロングで居てくれつてこと！」

俺はぷいっと顔を逸らして、少し大きめの声でそう言う。

そのせいで周りからは突き刺さるような視線を貰い、ちよつとだけ居心地が悪く感じた。

「——ぷっ、ははは……そっか。ほんなら、私は瀧くん好みの黒髪ロングでおるよ。つてそないことを大声で言わんとつて。恥ずかしい」

「さつき自分で気にしないつて言つた癖に」

「むう……人の揚げ足取るの、瀧くんの癖に生意気!!」

三葉はプクツと頬を膨らませて、俺の額をコツンと小突く。少し子

供っぽいことをしてくるので、俺は三葉の組紐をスツと抜き取ってやった。

「あ……もう、せっかくセツトしたのに」

「最初に餓鬼っぽいことした三葉が悪い」

「女の子のせいにするの、男らしくないよ」

「……俺だって、こんなことするのお前だけだよ」

……小声で呟くも、その声はぼつちり三葉にも聞こえていたようで、彼女の顔が赤くなっているのを確認する。

——俺は不意に、自分の指にある組紐を見つめる。赤色と橙色で編まれた何の変哲もない組紐なのに、俺はそれをどうしても懐かしく感じた。

……俺の頭の中に、何故が残ってるフレーズを今思い出した。

この組紐を見ていると、まるで懐かしい何かが頭に浮かんでくるように——俺は不意のそれを言葉に出した。

「——よりあつまって形を作って、捻じれて絡まって、時には戻って、途切れ、また繋がる」

「……それ、どうして瀧くんが知ってるん？」

……すると三葉は、俺の言葉を聞いて不思議そうな顔でそう言った。

「分からないんだ。誰に聞いたかも覚えてないけど、でも確かに覚えてるんだ。なんか、大切なことなんじゃないかって思うんだ」

「……その組紐、私が小さい頃にお母さんが組んでくれたものなの」

三葉は俺の手元の組紐を指さしてそう言う。少し昔を懐かしむような表情だ。

「私とお婆ちゃんに聞いたんだ。糸を繋げることはムスビ、人と繋がることもムスビ、時間が流れることもムスビ——全部同じ言葉を使うんだって。私の家って元々神社で、私は巫女をしてたんだ。私たち巫女が編む組紐はその色々な『ムスビ』を司る神様の技なんだって」

「……神様、か」

「そっ。……ずっと信じてなかったけど、今はそう信じてみるのも良いかなって思ってるんだよね」

「——どうして?」

俺は三葉にそう尋ねると、三葉は満面の笑みを浮かべ——

「——瀧くんとかうして出会って、楽しく笑っていられるんもきつと……ムスビやからね」

澄んだ声で、そう断言した。

——ムスビ。その言葉が妙にしっくりきた。俺がこの組紐を妙に懐かしく思うのも、その言葉を知っていたのも分らない。

だけど『ムスビ』というのは、とても大切なことのように感じた。もう二度と忘れないようにしないといけないような気がした。

俺はもう一度、三葉の小さな手をギュツと握る。

三葉は少し驚くも、すぐに微笑んで手を握り返す。

その温もりを感じながら、俺たちは昼をゆつくりと過ごした。

瀧くんデート大作戦　～夜の部～

瀧くんとこのデートは、終始楽しいものだった。

この日のために色々と下調べをしてくれていたことに、嬉しさからずつとドキドキしていた。

隣を見ると、そこにはいつも瀧くんがいる。そのことが言葉に出来ないほどに嬉しくて、心をキュッと握られるみたいな感覚だ。

……これはもう、末期だ。認めてしまった方が気が楽だと思うくらいに私は——瀧くんに、恋い焦がれていた。

……瀧くんと出会ってから日が浅いのにそう断言するのはおかしいかもしれないけど、私の中の心がそう断言している。運命の出会いなんてドラマでしかないと思うけど、もうこれは運命としか思えないほどの出会いだったんだ。

瀧くんの目が好き。瀧くんの気遣いが嬉しい。ちよつと私を女性として見る目も、好き。

今の私にはそんな、色々な好きが入り組んでいた。

そんなデート日和の今日も、そろそろと言わんばかりに日が暮れ始めていた。

昼間のデートは新宿御苑でのんびりと庭園を眺めたり、話したりした。そこで色々な話をした。

私の家族のこと、瀧くんの友達のことや先輩のこと。偶に職場の愚痴や、趣味……瀧くんの趣味がカフェ巡りってことで、今度二人でカフェ巡りをしようっていう約束もした。

……偶に、おかしな感覚がある。

瀧くんから聞く話は始めて聞くはずなのに、どこかで聞いたことがあるように感じるが多々あった。

それどころか、どこか懐かしいとまで思ってしまう。

……気のせい、だと思うけどさ。

——ともかく瀧くんとこのデートはまだまだ終わらない。

次はいつデートできるかも分からないんだから、楽しめるときに一杯楽しまないとね！

「――三葉は何にする?」

「あ、どうしようかなー……じゃあカシスオレンジで!」

「じゃあ俺は生一つお願いします」

瀧くんが店員の女の子にそういうと、可愛らしい女の子が笑みを浮かべて「かしこまりました!」と掛け声をあげる。

……今、私たちは個室型の居酒屋に来ている。

居酒屋といってもものすごくオシャレな内装をしていて、一見したらイタリアンのお店と勘違いしてしまうほど。

瀧くんは慣れたようにおつまみや料理を色々頼んでくれ、ほどこして飲み物が私たちの席に届く。

……誰と良く来ているんだろう、なんて考えてないからね。うん、これっぽっちも!

「あの、三葉? そんな風に睨まれる理由が俺には分からないんだけど」

「あ、気にしないで。物凄く逆恨みだから」
「何に対して!?!」

瀧くんは私を伺うも、その意味がないと悟ったのか、肩を落としてキンキンに冷えたジョッキビールを片手で持つ。

……最初に生ビールを頼むあたりが男の子っぽいというか、なんていうか。

ともかく私もお酒を持って、瀧くと乾杯をする。特に音頭とかは必要ないから、カンッとグラスを当てるだけ。

瀧くんはよほど喉が渴いていたからか、一杯目のビールを一気に飲み干した。……ちよつと羨ましいかも。

私も最初は生ビールにしたら良かったかな?

「瀧くんはお酒強いのか?」

「うーん……そこそこ、だな。友達とかと行くときは大体最後まで飲んでることが多いから、強い方だと思う」

「そうなんだ。ちよつと羨ましいかも」

「三葉は弱いのか?」

……実はあんまり強くなかったりする。

瀧くんにそう言われて素直に言おうとしたけど、でも——たぶん瀧くん、私が弱いつていつたらすぐく気を使ってくるだろうな。お酒の席で、しかも絶賛恋愛中の相手に遠慮されたくない。だから私は嘘をつくことにした。

「わ、私も結構飲める方なんだよ？　だからこんなお洒落な居酒屋に連れてきてくれて嬉しいなー……なんて」

「そっか……良かった。無理に飲ませたくなかったから気が引けたんだ。それなら今日はとことん飲もう！」

瀧くんが爽やかな笑みを浮かべて追加のお酒を頼む。

その時、私はちよつと後悔した——これ、もう逃げ道なくなったよね。でもこんなに嬉しそうな瀧くんの顔、なかなか見れないし……すつごく複雑だよ!!

「俺の周り、お酒強い奴がいらないからいつも心置きなくは飲めないんだよな。一人で飲んででも詰まらないし」

「あ、あはは——じ、じゃあ今日はいっぱい飲もうねー」

私は完全に棒読みでそう言つて、空になったグラスを見つめる——出来る限り度の低いお酒で頑張ろう！

そう心に決めて、私は次のお酒を頼んだ。

……………。

割と序盤で、すごく身体が暑かった。

まだまだホロ酔いなんだけど、お酒を飲むごとに瀧くんに対してすつごく甘えるような声音になってくるのを、内心自覚していた。

そして私は——

○○●○○

「たべさせてー?」

「あの、三葉さん?　これ相当酔ってるよな?」

「よつてへーん!　みつは、すごくれいせいなんよ?」

……通算で7杯目で三葉は可愛い甘え口調になり、通算10杯目を越えてからはついに呂律が回らなくなっていた。そんな完全に酔っぱらっている三葉は現在、俺の席の隣に移っている。

最初に結構飲める方つて言つてたけど、たぶんそれは俺に気を遣つ

てのことなんだろうなあ、って思う。っていうか、これは完全に悪酔いだ。現に距離が近すぎる！

たまに注文を届ける店員さん（この店には良く通っているため、顔見知り）が酔いが回っている三葉を見て、苦笑いをしているのがもう心に痛かった。

……ちよつと子供っぽいけど、これはこれで有りだなんて口が裂けても言えない。

「あれえ〜？ タキクン、グラスあいてるん？ みつはがたのむんよー。てんいんさん！ かるーあみるくひとつー！」

「三葉、ちよつと水を飲め！」

いもしない店員に注文をする三葉に、事前に貰っておいたお水を飲ませる。……も、ちゃんと飲めずに水で服が軽く濡れた。

「ああ、言わんことないな」

「ふいてえよお……」

「はいはい、わかったから」

俺は嘆息しながら、おしぼりで三葉の口元の水滴を拭い、服を軽く拭こうとする——が、固まる。

三葉のワンピースはフラワーペイントされているとはいえ、素は白の薄い生地だ。白は濡れると透ける——つまり、三葉の青色の下着が、肉眼で確認できるってこと。

「ん〜？ ふかんの〜？」

「……この無意識小悪魔め」

俺は三葉の頭をグリグリと撫でまわし、恥ずかしさを紛らわそうとした。

——結構、でかいんだな。何とは言わないけど。

「ちよ、いじわるせんといてえよ〜……あ、でもやつぱりもつと〜」

「三葉は酔うと甘え上戸になるのか……」

異様なほどにくっついてくる三葉に対して拒否できないのは、男の性か？

ただ俺だって男なんだ。こどもも密着されたら、やっぱり反応してしまう。それに相手が酔っているからって何かするのは男らしくな

いからな。

……三葉の酔いを冷ますのは勿体ない気もするけど、仕方ない。

「ほら、もうこれ以上飲んだらダメだぞ」

「いややあ〜!!」

……ホント、なんだこいつは。普段の三葉はもつと大人の女性らしさを醸し出してるけど、今の三葉は子供みたいに駄々っ子だ。とりあえず、腰にくっ付くのはちよつと、位置的に危うい……っ!

「たきくん、いいにおいするう〜」

「……嗅ぐな嗅ぐな! 今日結構汗かいてるから臭うはずだからさ!」

「そんなことない〜♪」

俺の腹部を頭でグリグリとしてくる三葉。三葉の髪からトリートメントか、花のような匂いが俺の鼻孔をくすぐった。

……もう、一周回って落ち着いてきたな。俺は若干諦めて、三葉の髪の毛を手櫛をするように、すうつと梳いた。三葉は心地良いといわんばかりの吐息を漏らす。

……こんなのただのバカップルだ。付き合ってもない癖に。

——予定では、そろそろ店を出て行く場所があったんだけどなー。

「三葉の髪、綺麗だよな」

「ていれ、がんばってるんよ〜? かみはおんなのいのちやの!」

「……ごめん、あんまり触らないほうが良いか?」

「……たきくんなら、いいよ」

……お酒のせいなのかは分からないけど、三葉は顔を紅潮させて焦点の合わない目で俺を見つめてそう言った。俺は軽く笑みを浮かべて三葉の髪を梳く。

糸のようにしなやかな髪はどれだけ梳いても飽きなかった。

——やばい、俺も結構酔ってるぞこれ。

こんなの、普段の俺じゃない。こんな小っ恥ずかしいこと、普段の俺なら絶対に出来ない。

……良く考えたら、三葉も結構飲めるって聞いてハイペースで飲んでたもんな。ここまで酔うのは初めてだけど、俺は酔ったら気分が上

がるタイプなのか。

ただまだこう考えることが出来る分、マシではあるか。

……三葉との触れ合い？は、それから数十分ほど続いたのだった。一つだけ分かるとすれば——俺、しばらくあの店には行けないな。

●●○○

「三葉、ちよつとは酔いは冷めたか？」

「うん……でもまた、気分はフワフワやから、たぶんまだ残つとる……」

三葉は少しふらつくから、俺は彼女を支えるように肩を掴んだ。

あれから店を出て数十分が経ち、今は三葉の酔いを覚ますために新宿から離れた公園でベンチに座っていた。

流石の三葉も先ほどまでの酔いは幾分かは冷めているものの、普通には歩けないためか俺の腕をギュツと掴んで離さない上に、座つてからもそのままだ。役得つて言えば役得だけ——

「三葉、それは流石に俺でもわざとって気付くぞ？」

「……あ、あはは。流石にばれるよね」

三葉は俺がツツコムと、少し苦笑いをしてそそつと俺の腕を離す。

……居酒屋での三葉の暴走は本気だろうけど、流石に素面に戻ってこれをされるとワザとを疑う。

大学時代のサークルでどこぞの先輩や後輩にされたことはあるけど……人によってされたら効果は違うもんなんだな。

——冷静さ気取ってるけど、結構グツときたりしているんだよな。

「ごめんね。私、本当はあんまりお酒強くないんだ」

「分かってるよ。俺に氣遣ってくれたんだろ？」

「……うん。それに瀧くんとお酒飲みたかったのは本当だから、頑張ろうかなって思ったんだけど——すつごく暴走しちゃった」

……腕を離しても、手を繋ぐことだけは止めない。

俺も三葉も、どちらも繋いだ手を離すことはしなかった。

——手の平に三葉の、俺の手の平が埋まるというのを、俺は特別なように感じるんだ。手を握っていると安らぐ。俺が触れ合いに飢えているとかそんなことではなくて、根本的な部分で俺が欲している

ものの正体が、この手の平にあるような気がしていたんだ。

それが三葉で埋まって、俺は納得できた——求めていたものを。

「でも、あれはたぶん私の本音。瀧くんに甘えたかったんは、私の欲しかったことやと思う」

「……俺だって、三葉が酔っているのを良いことに髪とかベタベタ触ったから、人のことは言えないな」

「そーねー。お腹に胸当たってちよつとドキドキしとつたし」
「え、バレてんの!?!」

——女って、酔ってるのにしれつと気付くもんなんだな。くれぐれも変な視線を送る時はこっさりしないといけないな。

そんなこと他愛無い会話をしながらも、俺は空を見上げた。

……東京の空にはほとんど星が見えない。きつと三葉の田舎は、さぞかし綺麗な星が観られるんだろうな。

——星。それで思い出すのは、8年前のティアマト彗星だ。肉眼でも見えるほど地球に接近したティアマト彗星を俺は見ていた。東京の空を覆いかぶさるように目ではつきり見えた彗星は、夢の景色のように、ただひたすらに美しい眺めだった。

……その結果で消えた町があることも、決して忘れてはいけないんだぞき。

——その時、一筋の流れ星が空を切った。

「……もつと星、見えたら良いのにな」

「意外と、ロマンチックなこと言うんだね」

「意外って失礼な。俺だって偶にはそういうこと言うんだよ」

「……誰にでも?」

……三葉は少し不安そうな声でそう尋ねた。

——きつとそれは、俺の勘違いではない。そう断言できる。三葉は、きつとずっと俺と同じ気持ちだ。不安な理由は、きつと俺と同じ。自分の知らないところで、自分の知らない顔の三葉がいるって考えたら、心が掻き乱される。どうしようもなく、息苦しいほどに。

だから曖昧な言葉はいらない。でも直接的すぎるのも必要ない。彼女に伝われば、それでいい。

「——そんな殊勝な男なら、今まで彼女の一人でも出来てた」

「——そっか」

俺は表情を見ない。見る必要がないから。

きつと三葉は笑っている。苦笑しながら、でもどこか安堵の表情を浮かべている。

……流れ星は一筋、また流れた。でも叶える願いなんて俺にはもうなかった。

——願いは今、手の平の中にあるから。

「三葉、俺さ——」

俺は空を見上げている状態から、三葉に顔を向ける。

表情は真剣なもので、三葉に自分の想いをぶつけるために色々覚悟が決まったんだ。

それを今から伝え——ようと思ったのも束の間だった。

「……すう……んん……」

「………三葉、お前」

——本当に、見計らっていたんじゃないかと言いたいタイミングで、三葉は俺の肩に頭を乗せて、吐息を漏らして眠っていた。

本当に心地よさそうに眠っているものだから、俺は不満の前に笑いが生まれた。

「ははは。……馬鹿三葉」

「んん……」

俺は三葉の頬つぺたを人差し指で突つくと、三葉は嫌って言いいたような仕草を取る。

……本当に馬鹿野郎。気持ち伝える最高のチャンスって思ったのにさ。

——でもちよつと安心した。それではあまりにも早すぎるんじゃないかってとも思っていたから。

俺は今を、ゆつくりと楽しく過ごしたい。もちろん到達点はいつも一緒にいることだけど、それでは性急だ。

……ゆつくりと、三葉ともつと深い関係になりたい。他愛無い触れ合いや会話をして、それから二人でしか出来ないことをたくさんして

——ゆくゆくは、さ。

「——で、問題はそれじゃないか。まったく、三葉のせいで終電逃した」俺は三葉を気遣いながらスマホの画面を見ると、既に終電の時間は過ぎていた。

……一応三葉の家を知っているとはいえ、距離はここから結構ある。

今の所持金は自分の家までのタクシー代ほどしかないし、眠っている三葉の財布から勝手にお金を抜くのも忍びない。

……はあ、手は一つだよな。

俺は少し億劫ながらも、スマホを操作してある連絡先を開いた。その番号に電話し、その電話主はワンコール目で電話に出た。

『——もしもし、瀧くん？ こんな時間にどーしたのー？』

「おう、すまん——四葉」

……三葉の妹である四葉は、前に会った時と同じようなテンションでそう尋ねてくる。

もう目を跨いでいるから失礼だとは思ったけど、こうなつてしまえば仕方ない。

「三葉が酔って、甘えてきて、寝た」

『なんだ、ただの惚気か』

「惚気じゃねえよ！ お前のダメダメな姉が無防備に寝ちまったから、どうしようか対処に困ってるんだ」

俺は四葉にそう事実を言うと、四葉は少し面倒くさそうな声を出しながら応える。

『それならもうお持ち帰りしちゃったら？ お姉ちゃんも拒まないだろうしさ』

「お前、実の姉を何だと思ってる!？」

むしろそれを推奨してくる四葉に戦慄を覚えるものの、確かに一番分かり易い解決法はそれだったりする。俺の財布には金はないしな。

だけど、寝ている三葉を自室に連れ込むのは流石に気が引けるんだ。

『そもそもお姉ちゃんがそんなに気を抜くような相手、家族除けば瀧

くんくらいだよ?』

「それは嬉しいけど——わかった。それなら責任もって、三葉はうちで預かるよ」

『責任取るって瀧くん大胆♪ これは瀧くんが私のお義兄ちゃんになる日も近いかな? キヤツ♪』

「……さあな」

……あながち、その未来を否定できないことで曖昧なことを四葉に言ってしまう——こいつにそれは禁句だって理解しながら。

『……まあどっちでも良いけど、私は瀧くんは信頼に足りるって思ってるから、不安はないよ』

「それどこからの情報だよ」

『ふっふっふ。現役JKの観察眼を舐めないですよ? これでも前に会った時に、しっかり査定してたんだから』

……四葉の言葉に、ぶるっと寒気を覚えた。

査定って、おい。しかし、四葉は更に会話を続けた。

『結構男子ってさ、まず最初に女の子を舐めまわすみたいで全身を見るんだ。顔を見て、おっぱいを見て、お尻を見て、腰を見て、脚を見て。それで基本的に視線はその中でも好みなところに向かうの。お話する時だってチラチラみてるし。まあそれは仕方ないと思うんだけど、問題はここから』

「問題?」

『そ——大抵の男の子って目を見て話してくれないんだ。見てるのはパーツとして整っている顔で、自分のことを想って喋ってくれない。でも瀧くん、お姉ちゃんと話してる時、ずっと目を見て話してたよね。もちろん私とも』

……まあ確かに、初対面でじろじろ見るのはあれだと思って、極力目を見て話したけどさ。

だけど四葉はそれがよかったと言った。

『最初は今朝あったばかりで聞いて驚いたけど、お姉ちゃんは結構良い男に目をつけたって思ったよ。だからまあ、信頼はしてるよ? 瀧くんはお姉ちゃんの嫌がることはしないって』

「ああ、それは誓ってしない」

『——じゃ、オツケーだよ。ゆつくりとお姉ちゃんとおしゃべりしてあげて？ ほら、お姉ちゃんって意外と甘えん坊なところあるから』

……なるほど、四葉も三葉の甘え上戸ぶりを知ってるってわけか。

——四葉はそれだけ言うとお姉ちゃんをよろしくとだけ言って電話を切る。俺はそれを確認すると、少し席を立ててタクシーを呼んできて、そして眠る三葉を背負って自分の家に向かうのだった。

……今日はまだ、終わらないようだ。

——つと、電話を切った四葉がSNSでメッセージを送ってくる。

『あ、それとするならちゃんど避妊しないとダメだよー？ 流石にそれだとお父さんとお婆ちゃん怒っちゃうから』

——そう書かれた文面を見て、俺はそつとスマフォの電源を切る。

……そんなことを一々言われて、意識しない男がいると思うか？

これは絶対に四葉の野郎、わざとだ。

俺はそんな悶々とした気持ちを抱きながら、三葉を支えながら車に

揺られ、家に向かった——

むすばれるココロ

「……ん」

彼女、三葉が目を覚ました時、まず最初に視界に映ったのは知らない天井だった。アルコールの影響がまだあるからか、自分が置かれている状況を理解することに時間がかかる。

三葉はそこがどこであるかという疑問を抱くことなく、うつ伏せになつて枕に頬ずりした。

「瀧くんの匂いや〜」

なんて情けないほどのダラけた声で、そう本音を漏らす三葉。

瀧の匂いがするのは当然だ——ここはその当人の家で、そして当人のベッドで枕であるのだから。

夕食として居酒屋にいった瀧と三葉は、三葉の予想外の酔いによる暴走で終電を逃し、瀧がマンションに帰る分しか持ち合わせがないということでは彼は三葉を家に連れ帰った。

もちろん理性が微妙に飛んでいる三葉がその事実を認知するのは、もう少し後のことだった。

——数十分後。

「……あれ、ハンコどこ？」

一通り匂いを堪能した三葉が本当の意味で素面に戻った瞬間であった。三葉は起き上がり、しかし枕はしっかりと抱きしめながら辺りを見渡す。

部屋は暗く、三葉はまだ少しふらつく足つきで部屋の電気を付けた。

その室内には卓が一つと本棚が置かれている。本棚には建築や美術関連の本がびっしりと収納されていて、そこで三葉はここが瀧の家であるということを確認した。

「瀧くん、建築の勉強してたって言ってたよね。……そっか、ここは瀧くんのお家——瀧くんのお家!」

取り乱す三葉だが、もう既に手遅れの反応である。

いわば三葉は酔い潰れた挙句に好きな男に介抱されただけでなく、

お持ち帰りされているわけである。状況を客観的に言い表すと、なんら違いはない。

何気に身持ちの固さには自信を持っていただけに、三葉は自分の軽率な行動に後悔した。

——相手が瀧くんだからいいものを、他の男の前で絶対そんなことしちやダメだ。

三葉は声には出さないが、心の底からそう思った。この台詞を聞けば瀧が赤面するのは確実であろう。

「……うう、トイレ」

急激な尿意に苛まれる三葉は、瀧の部屋を出てトイレに向かう。

初めて瀧の家に来たというにも関わらず、三葉はまるで場所を知っているようにトイレへと向かう。

リビングを抜けてトイレの扉を開け、下着を脱いだところで三葉はふと思った。

「——あれ、なんで私、トイレの場所知ってるんだろ？」

ふと、そんな疑問を抱いた三葉であった。

○●○○

トイレを済まし、三葉は瀧を探すためにリビングにある椅子に腰かけていた。

物は比較的少ないものの、元々瀧は父とここに二人で住んでいたため、父との二人暮らしの面影はまだ残っているのだ。瀧の父は仕事の転勤のためこの家を瀧に託して、今は違う地域で一人暮らしをしているというのを三葉は知っている。

しかし、残念だがリビングには瀧のいる様子はない——と三葉が考えていた時、不意にシャワーの音が聞こえた。

「あ、瀧くんはお風呂か」

三葉はリビングの時計を見て納得する。既に時間は午前2時を過ぎていて、眠っていても可笑しくない時間だ。

……しかし、その静けさと共に聞こえるシャワー音が三葉の緊張を促した。

気になる男性の一人暮らしの家に、酔った結果とはいえお邪魔して

しまい、更にはその男性こと瀧は一人シャワーを浴びている。

アルコールは完全には抜けておらず、まだ身体がほんのり熱い三葉は、その事実から色々と思いを巡らしてしまう。

全てが全て初めてのことからか、良からぬ想像をしてしまう。それこそ女性がするようなレベルでない想像を。

「た、瀧くんが迫ってきたら……ううう」

きつと抵抗できない、というか抵抗をしないと三葉は思う。たぶん、受け入れてしまう。

三葉はそれほどに瀧という男を受け入れているのだが、やはり彼女がそもそも巫女をしていたところからか、順序を重んじているのだ。

……欲望と理性は共存しない。どちらかを我慢しないと、突出できないのが欲望と理性だ。

ただ時に理性的に欲を叶える人もいないわけではないが――

三葉はそんな妄想を振り切るために、リビングを色々と見て回る。

いくつか写真立てがあり、そこには友人と共に映る瀧や、父親と高校や中学の入学式に写真を撮っている瀧が映っていた。

「ふふ、瀧くん、今より子供っぽくて可愛いな」

三葉は中学生時代の瀧を見て、ふとそう微笑む。

思春期にありがちな、親と微妙に距離を取っている距離感が微笑ましいのだろう。

三葉にとつて親との触れ合いは、子供の時代ではほとんどなかったのだから、少し羨ましくあった。

……三葉はふと、写真立ての近くに置かれているスケッチブックが目に入った。

「あー、瀧くん結構絵を描くって言ってたっけ……。ってか建築をお仕事してるんだっけ？ 確か内装デザイナーだよな」

三葉の言う通り、瀧の仕事はインテリアデザイナーだ。もちろんまだまだ駆け出しで下っ端ではあり、今は先輩監修の元で修行中の身。

そのせいか、物は比較的少ないものの瀧の家は非常に洒落な内装をしていて、そのセンスがにじみ出ている。

……対する三葉もまた瀧と少し似ているものを職業としている。

三葉は組紐などを作る経験を基に非常に器用であり、今はファッションデザイナーとしてアパレル業界に身を置いているのだ。故に三葉は常にファッションには気を遣っており、そういう意味では瀧と同じく服装にセンスがにじみ出ている。

——職業柄、他人の価値観というのが気になる三葉。特に互いにデザインの仕事を手につけているため、三葉は瀧の描く世界が気になった。

「……ごめんね、瀧くん！」

三葉は好奇心には勝てず、スケッチブックを手にとってその一ページ目を捲った。

そこには瀧くんが想像するたくさんの内装装飾のデザインがあった。それだけではなく家具のデザインや、時には風景画さえも。

三葉は瀧の世界に魅入ってしまう。まだまだ粗さはあるものの、三葉は瀧のセンスを肌で感じていた。

それに触発されるように、三葉はその室内に合う内装の装飾や染色がどんどん思い浮かんでくる。

「……すごい！」

——最初に出た言葉は、それだった。共通の価値観を得て嬉しく思う前に出てきたのは、一人のデザイナーとしての尊敬と賞賛の言葉。

インテリアとファッションで違いはあるものの、三葉は素直に瀧の価値観に凄みを覚えた。

瀧の創造する内装は、心の底から落ち着くような穏やかなものばかりだ。どこか自分の元々いた糸守の風景を思い出す三葉。現代風にアレンジされたその内装に、三葉は心を、目を奪われる。

ページの序盤でそれだ。三葉はスケッチブックを更に捲ろうとしたその時——パサッと、二つ折りにされた千切られたスケッチブックの紙が床に落ちる。

三葉はそれに気付いて、すぐにその紙を拾い上げた。

そしてすぐにスケッチブックにそれを挟もうとした——が、やはり好奇心がその意味深な紙の中身を知りたがる。

その紙は何年も前なのか、少し湿気で茶色く変色している。

……三葉は、その紙を開く。

——そして、目を見開いた。

「ま、まって……っ！ど、どうして——」

……三葉は驚くしかなかった。

その紙に大きく描かれた風景に、心の底から驚いた。

——それは三葉も知っている風景だった。

それは特別知られているような風景ではない——いや、ある意味では有名であるが、その風景を世間一般で知っている人は中々いないもの。

少なくとも、三葉はこれを偶然で片づけることは出来なかった。

——三葉の目に映る風景は、彼女の故郷の風景。

「——糸守を、どうして？」

——今は亡き糸守の風景を見て、三葉は涙を瞳に溜めた。

突然のことに、三葉は糸守の風景を見つめながらそこから動けなかった。

……その時だ。

——シャワーの音は止まっており、リビングの扉が開いた。

「あっつー。三葉は寝てるか——な……」

「た、瀧くん！勝手に見ちゃってごめんなさい！でもこれについてちよっとお話が——あるん……」

瀧が開かれた扉から現れたものだから、三葉は手元の糸守の絵について聞こうとした。

……しかし、瀧と三葉は互いに最後まで言葉を言い終わることなく、固まる。

——三葉の視線は瀧の顔から、瀧の下腹部へと向かう。

——瀧の視線は三葉の姿から、自分の下腹部に向かう。

……普段の家での習慣というものは、割と誰かが居てもしてしまうものである。特にその相手が心を許している相手なら尚更である。

——男の一人暮らしなら、風呂上りに身体が冷めるまで裸でいるのは普通である。瀧もまさか、リビングに三葉がいるとは思わなかったのだろう。

「——ご、ごめんなさい瀧くん……!!!」

「——う、うおおお!? 三葉、なんでリビングにいるんだあ!?」

——あられもない瀧の裸を前にして、三葉は顔を手で隠して謝る。瀧はそんな三葉を前にして、すぐにタオルで下半身を隠す。

……リビングに、なんとも言えない空気が立ち込めた瞬間であった。

「——私も脱ぐから許して……!!!」

「ちよ、早まるな三葉あ!!」

——夜中にも関わらず、近所の迷惑を忘れていた二人の騒動であった。

なお、翌日隣人から苦情を受けるのは必至なのであった。

●●●

「三葉がいるのにもいつも通り裸でいてごめん!」

「瀧くんの家なのに勝手に勝手で、勝手に色々見ちゃってごめんなさい!」

……あれから少し経ち、とりあえず瀧は自分の部屋で着替え、三葉も瀧から服を借りてシャワーを浴びて現在となる。

二人は少しは落ち着いたのか、互いの悪い所をリビングで対面になって謝っていた。

……三葉の謝罪内容に若干違和感を感じる瀧だが、もうツツコまないことにした。

瀧は見られたことに羞恥を覚えるも、いつまでも気にしていても仕方ないと割り切って、席を立てて冷蔵庫に向かった。マグカップを用意し、お湯を沸かして冷蔵庫に入っているレモネードの原液をカップに適量注いだ。

湧きあがったお湯をその中に淹れ、瀧はホットレモネードを三葉に手渡した。

「ホットレモネード。これ飲んだら少しは酔いもマシになるだろ?」

「サラッとお洒落な飲み物出すね。普通自家製レモネードとか作らないよ?」

三葉は何気にお洒落な瀧に苦笑しながら、温かいレモネードを飲み込む。

ほんのりある酸味に甘味が混ざって、絶妙な美味しさであると三葉は思った。あとでレシピを聞こうということを決めつつ、三葉が気になってしまうのはやはり、糸守の絵のことである。

隕石の落下によって消えた自分の故郷の絵を、何故都会出身の瀧が描いたのか。それがどうしても気になってしまうのだ。

しかし先ほどの裸事件のせいで、中々聞ける雰囲気にならなかった。

「仕方ないだろう？ 家は父さんとずっと二人暮らしで、家事を分担してたんだからさ。それに考えに詰まったときこれ飲むと落ち着くんだけ？」

「……まあ、それは分かるけどさ——女の子的には、やっぱりそういうのをしれつとやられちゃうと何か負けた気がするんだよ」

「——じゃあ今度は三葉が俺になんか作ってくれよ」

瀧は特に意識することなく、考えたことをそのまま三葉に言った。すると三葉は目を丸くする。

……そして、笑みを浮かべた。

「——うん！ 絶対瀧くんの胃袋掴むんよ!!」

三葉は満面の笑みでそう断言し、そして意を決したように手元に隠していた絵を瀧の前に出した。

瀧はその絵を見て一瞬驚くも、すぐに目を細めて絵を懐かしく見る。

「ああ、それか。どこで見つけたんだよ、それ——懐かしいな、その絵」

「……瀧くん、知つとるん？ この絵のこと」

三葉は窺うように、瀧にそう尋ねた。対する瀧はと言うと、その絵を手にもって見つめながら三葉の質問に応えた。

「——糸守。8年前にティアマト彗星の隕石落下で消えてしまった、田舎の町」

「……そう——それで、糸守は私の故郷なんよ」

「……っ」

瀧は三葉からの告白に一瞬目を見開いて驚くも、すぐに納得する。以前に家族で東京に来たと言っていたことと、8年前の糸守の出来

事が繋がって納得したのだ。

「そっか……。だから、この絵を見て驚いたのか」

「……うん。これ見た時はびっくりしたよ。まさかこんなところで故郷の風景を見ることになるなんて、思ってもなかったから」

三葉は8年ぶりの糸守の美しい風景を見て、表情が綻ぶ。

もちろん糸守の風景自体は写真などが残っているからいつでも見ることが出来る。しかし三葉はそこからは何も感じないのだ。

だってその写真に、命は一切宿っていないから。

だけど瀧の絵は違うと三葉は思った。瀧の描いた糸守の絵は、言葉にならない良さがあったのだ。

まるで——糸守の風景を心の底から想って描いた。そんなものを三葉は感じ取っていた。

「……それで、何を聞きたいんだ？」

「うん。……瀧くんはこれ、いつ描いたの？」

「そうだな……。たぶん、5年前」

「たぶん？」

三葉は瀧の曖昧な返答に首を傾げた。

しかし、瀧もこう言うしか方法がないのだ。何故なら、瀧もはつきりとは覚えていないから。

「俺もこの絵を描いていたはずの時ははつきりと覚えていないんだ。むしろこの絵を久しぶりに見つけるまで、ずっとこの絵のことを忘れてたんだ」

「……つまり、思い出していることもあるんだよね？」

「ああ——少なくとも俺は、糸守を心の底から美しいと思いつながらこれを描いていた」

瀧は絵の線をなぞりながら、懐かしむようにそう言葉を連ねる。まるで今、その時のことを思い出しながら話しているようであった。

「これを描いた理由は……確か、どうしても糸守に行かないといけない何かがあったはずなんだ。だけど俺の持っていたのは記憶だけの糸守で、それを絵に起こした……んだったと思う」

「記憶？」

「記憶っていうのはたぶん語弊がある。でも確かに、俺は糸守を知っていたんだ。でなければ5年前のあの日、俺は糸守を訪れなかった」
瀧はそう言うと、自分の手の平をじっと見る。

「この風景を見ると、どうしても心が苦しくなるんだ。でもそれとは反対に、この風景を見るとどうも心が休まる——まるで住んでいたって感覚に囚われたんだ」

「……私と同じ感覚だよ、それ」

——三葉は瀧の隣に座りなおし、彼の手を握ってそう言った。瀧はその行動に少し驚くも、繋がれた手から三葉を感じて、何も言わず三葉の目を見つめた。

「私もね、瀧くんの絵を見た時、もう故郷はないって心苦しくなった。でも久しぶりに見れた糸守が綺麗だって、心が温かくなった——可笑しいよね。変な話、私と瀧くんが一緒になってるみたいな感覚だよ」
「……なあ三葉」

瀧は三葉を見つめながら、手を強く握る。

「最初、俺たちが会った時にさ。俺はお前にどこかで会ったことがあるって言ったよな？」

「……うん。私も、会ったことがないはずなのに、瀧くんのことを知ってるみたいだった」

最初の出会いから、妙な確信が二人にはあった。妙な予感があった。

ずっと誰か、名前も知らない人を探していた。ずっと何かを求めていた。

その誰かが、求めていたものを二人は互いにそれぞれであると確信していた。

ここで改めて、そのことを瀧と三葉はしっかりと伝えた。

「——俺、もっと三葉のことを知りたい」

「——私も、もっともっと瀧くんを知りたい」

二人の心の底からの本音を、想いを互いにぶちまけるように。

繋がれた手は二人を『ムスビ』、二人の全てを繋ぐように紡がれる。

言葉と共に熱を、呼吸を、視線を——想いを結んだ。

「こんなことをき、勢いで言いたくはないんだ。でも、もう我慢できない。この気持ちに、これ以上俺は蓋をしたくないんだ」

瀧は言葉を紡ぎ、三葉はそれを紅潮して、待つように聞く。

既に二人には、周りの音は聞こえてなかった。

時計の奏でる規則的な音も聞こえない。

聞こえるのは互いの鼓動音。うるさくけたたましいほどの胸の高鳴りだけ。

「——知り合ったのは1週間くらいだけど、もっと前から俺と三葉はムスばれてたんだ。だから一目見て、俺たちは後先考えずに動いたんだ」

「……この手の平が、きつとその証拠だよ」

……瀧は思った。

……三葉は思った。

——誰にも、この三葉を見せたくない。

——誰にも、こんな瀧くんを見せたくない。

それほどの激情が二人を支配するほど、もう想いは高まっていたのだ。

……勢いだけではない。元々望んでいたことだ。ずっと、最初に会った時には想い合っていた。

「——君のことをもっと知りたい。君ともっと過ごしたい。もっと話して、もっと一緒にいて……」

「……うんっ」

瀧は頬を真っ赤にして、探り探りの想いの形を言葉にして、それを紡ぐ。

三葉はそんな瀧を待つように瞳に涙を浮かべ、でも笑みを浮かべて瀧を待った。

そして——その時は来る。

「——ずっと、一緒にいたい……ッ!!」

——瀧は、三葉を強く抱きしめる。

三葉は瀧に抱きしめられた事実を理解し、理解した上でそれを心の底から受け入れた。

瀧を抱きしめ、涙を流した。

——ずっと言葉には出来なかったこと。瀧も三葉も、言葉にしたいでも出来なかった言葉。

「——好きだよ、瀧くん。どうしようもないくらい、君のことが……大好きっ!!」

「——」
——三葉の言葉は、瀧の言葉を、行動を受け入れるには十分なものだった。

……三葉は、こんなにも嬉しいのに涙を流したことは初めてだった。

涙を流しているのに、どうしてこんなにも嬉しいのか——答えは、分かり切っていた。

想いは通じた——二人のしてきたことは、決して無駄ではなかったのだ。

「……ずっと一緒にいよう、三葉。もしどっかに行っちゃまって、どんなとこにいても——お前が世界のどこにいても、俺が必ず、もう一度逢いに行くよ」

「——なんやの、それ……。かつこ、つけすぎや……。ッ」
……二人は嬉し涙を流しつつ、ずっと抱きしめ続ける。

——互いの空白の時間を埋めるように、互いで互いを満たすように。ただ抱きしめ合った。

そこには劣情などというものはない。

純粋な想いで、互いが互いを想う気持ちで……二人はこの時間が、ずっと続けばいいと。そう心の底から願っていた——

○○●●

——名残惜しくも、終わりの時間は来る。

その日を抱きしめ合ったまま眠りに落ちた二人が起きた時、それは心が休まるものだった。

衣服の乱れなどなく、本当に抱きしめていただけ。それだけなのに、瀧と三葉は、全てが結ばれたような気分であった。

起きて、互いに目を見合わせて、次に生まれるのは笑顔だった。

……三葉は身支度を済ませ、一旦家に帰る。幸い仕事は昼からで、それまで時間があることに三葉は安堵した。

家に着き、三葉は祖母に顔を見せる。祖母は朝帰りについて特に怒ることなく、逆に「ええ顔、しとるな〜」なんて言葉を漏らした。

すると三葉の帰りを待っていたと言わんばかりに、少しばかり悪戯な笑みを浮かべる四葉。彼女は両手を後ろで組み、窺うように三葉に近づいた。

「お姉ちゃん？ 昨日はどうだった〜？」

「……ん？ ああ、四葉か」

三葉は四葉に背を向けながら、特に焦ることなくそうしれっと返した。

そのことに四葉は疑問を持ち、すつと三葉の前に出た。

「おつかしいなく。何かあったのなら、もっと動揺すると思ったんだけど、そういう反応ってことは何もなかったって——」

四葉は少し期待外れだったと言わんばかりに嘆息し、やれやれと言わんばかりに肩を落とし、初めて姉である三葉の顔を見た。

——そして、その顔を見て驚いた。

いや、違う。驚いたのではなく——見惚れた。

そこにあつたのは、四葉の知る『宮水三葉』ではなかった。もちろん彼女が別人になっているというわけではない。

瀧と出会う前の三葉とも、瀧に出会ってから変わった三葉でもなく

「……どうしたの？ お姉ちゃんの顔に、なんか付いとる？」

——こんな幸せそうに微笑む、穏やかな三葉を見たのは初めてだった。

こんな笑みを浮かべられたら、どんな人だつてひとたまりもない。それほどの魅力的な三葉を前に、四葉は言葉を失ってしまったのだ。

……三葉は安堵した。仕事が昼からであることに。

時間があることに安堵した——だって、この余韻をまだ少しだけ、味わっていたかったから。

三葉は自室にて、自分の身体を抱きしめるように両手をギュツとする。

「——残ってる。瀧くんが……」

——腕の中にある大切な恋人の温もりを感じる三葉。

その心は……満たされていた。

日常編

最近の二人は

最近、瀧は裏で人気がある。

ある時を境に瀧はそれまでの少し頼りない雰囲気が一転し、仕事などが上手に運べるようになっていた。

……仕事だけではなく、対人関係においてもそうである。

「先輩、これまとめておいたので確認お願いします」

「……え？　それってついさつき立花くんに渡したものだよね？」

「はい、それを部署ごとに分けて、修正もできているので確認を……ってことなんですけど？」

「あ、そうなんだ……」

「はい！　あ、それとこれよかったら」

瀧が仕事場の先輩に手渡すのは、温かいコーヒーの入ったマグカップだ。

瀧の教育係である女性の先輩はそれを目を丸くして見る。別に瀧は特別なことをしているわけではないのだが、彼女は丁度飲み物が欲しいと思っていたのだ。

ただ、彼女は砂糖の入っていないコーヒーが苦手なのだが、せっかく可愛い後輩が淹れてくれたものを断ることはせず、それをありがとうと受け取って一口飲む。

——口に広がるのは、コーヒー独特の苦みではなく、砂糖とミルクで苦さが軽減されたものだった。

「先輩、確か苦いものはあまり好きじゃないですよね？」

「うん、そうなんだけど……あれ？　そんなこと私言った？」

「いや、先輩はよく甘いものを食べたり、偶に差し入れてくれるので好きかなって思ってた……お口にあったようでよかったです」

瀧は柔らかい笑顔を浮かべて先輩のもとから離れる。

その行動で、彼の年上の先輩は頬を紅潮させて彼の背中を目で追っていた——これが今の瀧である。

瀧が三葉と結ばれ、恋人になってから1ヶ月ほどの月日が経過した。

その間に、社内において瀧の評判は非常に良いものとなっていた。……これまでは特に気をつけている様子もなかった容姿も、髪を短く切り揃え、好青年風の出で立ちになった清潔さ。更に態度や言葉遣い、行動がどこか他人のことを考えたものとなっており、先ほどのように気を使って何かしてあげるといふ場面も増えた。

更に仕事においてもその発想力で先輩の助手を十全にこなし、技術なども次々と飲み込んでいく。

……特にあの柔らかい笑顔は年上を悶絶させるほどだ。

——そんなこともあり、瀧は会社にとつて非常に人気な新人となっている。

もちろん同僚とも交流を深めており、男女関わらず——特に女性先輩から気に入られているのだ。

「立花くんの教育係羨ましいー。可愛いよね、あの子」

「……うん。すごく良い子だよ。飲み込みもいいし、気も利くし」

「知ってる？ 結構狙ってるみたいだよ、皆」

瀧の教育係は、同僚の言葉に敏感に反応する。

彼女もまた、瀧のことをよく思っているのだろう。その反応を見て、同僚はわざとらしい笑みを浮かべた。

「んじや、今日は彼を誘って皆で飲みにいこっか！ めぐを立花く

んの隣にするからさー」

「もう、そんなんじやないのに……。ちよつと可愛いなーって思っただけだから!!」

——そんな会話をしているものの、当の瀧をどうしようなどという考えは無駄に等しい。

瀧がこうも変わったのは、心にゆとりが生まれたからである。極論を言えば元々瀧にはそれだけの能力や才能があったのだが、心のゆとりがなかったためにそれを発揮出来ていなかった。

しかし、今の瀧には『宮水 三葉』という心の支えがいるのだ。

そこに第三者が入り込める隙なんて存在しない。

……そんな瀧は昼休み、高校、大学の同級生で旧知の仲である親友の藤井司と昼食を摂っていた。

「ほんと、最近の瀧はなんか違うよな」

「なんだよ、司。そんなことないだろ？」

「…そんな彩り豊かな弁当について、俺が気付かないか思ってるわけ？」

すると司は少しばかり目を鋭くして、眼鏡拭きでレンズの汚れを拭き取りながらそう言う。

核心的な部分を突かれて瀧は一瞬動揺するも、少し苦笑した。

「ああ、はいはい。もう降参だ、降参降参——彼女、できたんだよ」

「……まあ納得だな。ただ彼女が出来たくらいでお前がそんなに変わったっていうのは今でもちよつと信じられないけど」

「くらいってなんだよ——俺からしたら、結構革新的なことだったんだからさ」

「——」

微笑む瀧の顔を見て、司は目を見開いて驚く。

——何年も親友をしていれば、瀧が何かに思い悩んでいたことなんて気付いていた。

その気分を晴らしてやるために色々と瀧を遊びに連れて行ったり、時には女の子を紹介もしてきた。……だが司は、今の瀧の顔を見てもうそれが不必要なことを悟る。

——親友は知らないうちに良い意味で変わっていた。それは嬉しくもあり、同時に少し寂しいものであった。

それと同時に、親友を変えてくれた存在に司は感謝をする。

いつも憂いていた瀧に、何かに大切なものを与えてくれたことを、心の底から感謝した。

「——今度彼女、紹介しろよ？　俺がお前にふさわしいか判定してやる」

「んだよ、それ。お前は俺の親か」

「ある意味で保護者気分だよ。ほら、お前よく無茶するし」

反論の意志を示す瀧を軽くあしらう司だが、次の瞬間に瀧の耳元で何かを呟いた。

「——で？　ぶっちゃけどれくらい進んだわけ？」

「……やっぱり、気になんの？　そういうの」

「当然」

口角を吊り上げて不敵に笑う司に対して溜息を吐く瀧。この親友に対して隠し事をすることは無駄だと理解しているのだろう。

とは言っても、瀧は司が聞きたがるような下世話な話題はない。

——何故ならば、瀧と三葉の付き合いは控えめに言っても『純粹』であるからだ。

瀧と三葉にとって大切なのは、二人での触れ合いである。常に近くにいたいと思っていて、手を繋ぎたい、腕を組みたい……可愛らしいスキンシップを一緒に居る時はしている。

だが、特にそれ以上を強く望んでいないわけではないのだ。

二人はその存在を感じ取れて、安心できる距離感で共に過ごせれば時間を忘れる。

同じ部屋で背中合わせで本を読んでいるというだけでも十分に幸せなのだ。

……つまり、瀧も三葉も性急な関係の進展は望んでいない。段階を踏みたい、ゆっくりたくさんのことを共にしたい。

それが二人で共感していることであるのだ。

——瀧はそれを司にかいつまんで説明すると、司は呆れた顔で瀧を見ていた。

「……弄ろうと思ったけどさ。異様なほど純愛で驚きだ」

「普通って言えよ——まあ大切にしたいとか、ありきたりな言葉で済ますならそんな感じなんだ」

「なるほどねえ……。でもよ、興味が無いわけじゃないだろう？」

「……まあ。程々には——つつても、お前が想像してるとような下世話なものばっかじゃないからな！」

瀧がそう言うと、司は可笑しそうに笑った。

……そうしていううちに瀧は手作りであろう弁当を食べ終えて、弁

当箱を袋に直していく。その弁当は勿論三葉お手製のものであり、今朝に三葉が瀧の家に訪れて渡したものだ。

三葉曰く、四葉に愛妻弁当と弄られて困ったと瀧に苦笑いで伝えていたようである。

「……んで、お前の噂の彼女さんはどうなんだ？」

「どうなんだって言われてもなあ——料理上手で裁縫得意で、美人でスタイルが良いってくらいで」

「——なんだよその女子力の塊みたいな女は」

司は些か信じられないからか、口を少し開けて驚くばかりであった。

——しかし、だ。こう、三葉のことを出すことで瀧は彼女の声が届きたくなる。もはや病気であると彼も自覚してはいるのだが、それが本音であるからどうしようもない。

……そんな休憩を謳歌している時、彼らに話しかけてくる会社の先輩たち。瀧の働く職場は比較的女性比率が高く、その先輩たちの中には瀧や司の教育係の先輩もいた。

彼女たちは仕事終わりに二人を飲みに誘ってきたのだ。今年の新入社員の中でも瀧と司は特に女性人気を博しており、時折こういう誘いがあるのだが……瀧は少し迷う。

予定は特にはないのだが、しかし予定はなくとも三葉と会いたいという欲がある。いつも二人は会う約束をするわけでもないのにも関わらず会って、その上でスキンシップをしているのだ。

……しかし、先輩からの誘いを無下にも出来ない。どうしようかと考えている時、司が先輩たちに対して口を開いた。

「あ、すいません。実は今日、俺とこいつともう一人、高校の時の親友と三人で飲みに行こうって話になってるんですよ」

「え、そうなの？ あ、それならその子も交えて——」

「——止めといた方が良いですよ？ あいつ酔うと女に対して見境なくすんで」

——当然、嘘である。もちろん今日、瀧と司と、彼らの共通の親友である高木真太が飲みに行くという予定はなく、彼が飲んだら狂暴に

なるなんて酒癖はない。

しかし司が敢えて誘いを断るように嘘を付いたのは、瀧のためであると同時に彼女たちの思惑を見抜いたからだ。もし司が彼の事情を知らずにこの誘いを受けていたならば乗っていただろうが、そうでないのならば彼が誘いを受ける理由はない。

司の話を聞いた先輩たちは引き笑いをして「そ、それなら今度いこーねー」なんて言って二人から離れる。

「おい、真太はいつから女癖悪い設定になったんだよ」

「嘘は方便っていうだろ？」

……瀧はつくづく、彼を食えない奴と感じたのであった。

●●●

都心から少し離れた住宅街の一角のアパートに、三葉は昔からの友人と対面していた。

「久しぶりやねー。三葉が元気そうで何よりやよ」

「さやちゃん、前よりなんか綺麗になっとる！」

「失礼やね!？」

——その女性は三葉と同じく糸守出身で、現在は都心から離れた千葉で生活をしている彼女の幼馴染、名取早耶香である。昔の三つ編みの髪型とは違いショートボブで大人らしさが滲み出ており、そのことを指摘すると早耶香は頬を膨らませて断固抗議する。

三葉はそんな早耶香を見て可笑しそうに笑うと、早耶香もまた笑った。

——実に半年ほどぶりに二人は再会した。それ以前では割と高い頻度で会ったりお茶をしたりしていたのだが、特にここ半年ほどは互いに多忙で会えていなかったのだ。

……早耶香が多忙であったのは、その薬指に通されている指輪が原因であるが。

「……まあバタバタしとったからね。テッシーもこれ用意するためにすっごく頑張ってくれたし……私はそんな気張らんでええっていうたんやけどね、婚約指輪くらいはええもん贈らせてくれって聞かなくて」

「——テツシーの漢気で惚れ直したと。うんうん、幸せそうで砂糖吐きそうやわ」

……お前が言うな、と言いたくなるような台詞であるが三葉側の事情を知らない早耶香は苦笑いをするしかない。

——三葉と早耶香、二人の共通の幼馴染である勅使河原克彦と彼女は4ヶ月後に結婚式を挙げ、夫婦になる。三葉が今日彼女の元を訪れた大きな理由がそれである。

三葉は鞆と共に置かれている花束を早耶香に渡した。

「——ちよつと気が早いけど、婚約おめでとう！ 長年の片思い、実つて幼馴染的にめっちゃ嬉しいやよ！」

「……ありがと。三葉、ずっと見守ってくれてたもんね」

「そりやあもう、なんとかくつ付けようと頑張ったもんよ」

三葉は胸を張り、腕で力こぶを作って決め顔で早耶香を見る。それを見て早耶香は「なんよ、それ」なんて言って笑った。

……三葉も、きつと1か月前ならどこか憂いながら幸せな二人を祝福したであろうが、今は心の底から祝福できていた。やはりずっと三人組であった二人が結婚して幸せになるということは嬉しい反面、寂しいものがあつたのである。

しかしながら今の三葉には瀧の存在があり、それが彼女の支えになつていた。

「……でも私も、ちよつと安心したんよ。三葉がちよつと変わってて」
「……まあ、その辺りは自分でも自覚しとったよ」

流石は幼馴染、と言うべきか。早耶香は三葉がずっと何かに憂いていることに気付いていて、その上でずっと彼女の心配をしていたのだ。

そのことは同性の幼馴染だからこそ、彼女の悩みに敏感に気付いていたのだらう。現に、同じ幼馴染である克彦はあまり察している雰囲気はなかった。

「さつき私のこと綺麗言うたでしょ？ それ、こっちの台詞やからね

——三葉、前よりうんつと綺麗になつたね」

「……そう、かな？」

「そうやよ！ そんなんやったら絶対男放つとかんって!!」

早耶香が少し興奮気味に言うが、しかしながら既に三葉にとって『他の男』というのはどうでもよかった。むしろ放っておいて欲しいほどである。

——ふと瀧を思い出したせいで、三葉の頬が紅潮する。

今朝ここに来る前に瀧の家に立ち寄り、朝から愛情を込めて作った弁当を渡したことを思い出していたのだ。

ちようど今は瀧のお昼休憩頃であり、自分のお弁当を食べてくれていると考えると落ち着かないのである。一応彼女自身、料理にはそれなりに自信があると自負しているが、それでも不安なものは不安なのだ。

全く以て幸せな不安であるが。

「……んん？　なんか、反応薄ない?」

「そうかな。まあどうでも良いんよ、他の男は」

「——え、もしかして」

「……うん。出来ました——カレシ」

——三葉の恥ずかし気味に両手で口元を抑えながらした告白に、早耶香は一瞬口を開いて呆然とする。

そして数秒の間を置いて——

「——えええええええ!!　い、いつできたん!?　ってかいつの間に出会ったん!?　っていうか見せて!」

驚きと好奇心が入り混じったような反応を見せる早耶香に苦笑いをする三葉。

椅子から立ち上がって問い詰めてくる早耶香だが、彼女のそれは普通である。

——幼稚園から今まで、昔からの幼馴染である早耶香は彼女の事情をかなり知っている。神社の巫女で町長の娘ということでも中々男が引っ付かないということもあつたが、基本彼女はモテていたのだ。

特に東京に来てからの彼女は、田舎からの転校生ということを差し引いても同級生男子からかなりモテていたと彼女は認識している。

そんな三葉は今までどんな男にも靡くことがなかったのにも関わ

らず、鉄の女の彼女が恥ずかし気に彼氏が出来たと告白したのだ。

驚きと好奇心が出てきても当然である。

「さやちん、お、落ち着いて?」

「落ち着けんよ! あの子に彼氏やよ!? 気になって仕方ないよ!!」

「わ、わかったから肩揺すらんで〜」

早耶香が三葉の肩をガクガクと揺らす。三葉は三葉で予想外の反応に困惑しつつ、なんとか早耶香を宥めてスマートフォンの写真フォルダを開いた。

——画面をスクロールする必要もなく、一番最初に現れた写真は瀧の寝顔だった。

「……………あ」

瀧が眠っているのを良いことに数日前に激写した一枚であった。彼女としても映りが良く、お気に入りの一枚である。むしろ毎日眺めているほどである。

しかしまさか一枚目にそんな甘々な写真が出てくることを、早耶香は予想もしていなかったのだ。何より、あの三葉がこうもベタ惚れなのが予想外過ぎて、次に早耶香から出た言葉は——

「——私たちの三葉が穢された——!!!」

「ちよつと人聞きわるいよ!?!」

「うわあああん!!」

何故か泣き喚きはじめた早耶香に、三葉はただただ困惑しつつ、しかし人聞きの悪い叫びを訂正せずにはいられなかったのである。

……………そして、早耶香が落ち着きを取り戻したのは実に十分後であった。

「はあ、はあ……………ごめん、ちよつと取り乱しちゃった」

「うん、それはもう色々言うとしたよ。とりあえず瀧くんは十分紳士で優しいからね」

謝罪をする早耶香に対し、微妙に無表情の三葉が彼女を追い込むようにそう言葉をつらつらと重ねる。早耶香も流石に少し反省しているのか、肩身を狭くして謝った。

……ともあれ、早耶香は改めて写真（三葉と瀧のツーショット）を見た。つい先週撮られた写真には、三葉とすっかりと身だしなみを気をつけている瀧が映っている。

早耶香の目から見ても瀧の容姿は比較的整っている。三葉に急に写真を取られたから驚いてはいるものの、苦笑いを浮かべつつも幸せそうな表情をしていた。三葉は満面の笑みであるが。

とにかく分かることは、二人が幸せそうであることだ。

「すごい美男美女やね。改めてみると——うん。お似合いやよ」
「ありがとう」

早耶香の言葉に三葉は満面の笑みで、ありがとう、と漏らした。

やはり一番の親友に祝福してもらうことは嬉しいのだ。少し恥ずかしいながらも、瞳にうつすらと涙が溜まる。

……実を言えば、少しだけ気がかりだったのだ。早耶香は本当に、このまま克彦と幸せになってもいいのだろうかと思っていた。

親友の憂いを知っていて、それを知っていながら何も出来ずに二人で幸せになつてしまえば、三葉を一人ぼっちにしてしまうのではないだろうか。親友を第一に考えていた早耶香はずつとそう思っていたが、でも今は心の底から安心していった。

何故かは分からないが、三葉が心底惚れている瀧に対して、早耶香は安堵の気持ちを感じるのだ。

——何故か、三葉の隣にずっと一緒にいれるのは彼しかいないと思ってしまった。理屈ではなく感覚的にだ。

その上で、やはり彼と一度話して本当に三葉を預けられるかどうか審査しなければ、なんて早耶香は考えていたりした。

……ふと、三葉のスマートフォンに着信音が鳴る。

三葉はハツとしてその画面を見て、その数秒後に分かり易く破顔した。

それは瀧からのSNSからのメッセージであり、そこには『今晚家に来ないか?』というものだった。三葉はそれを二つ返事で返すと、間髪入れずに瀧から『じゃあ待ってる』と返ってきた。

……その一部始終を見ていた早耶香は、幸せそうに画面を見ている

三葉を見て、両肘を机の上に乗せて、両手で頬を覆って笑顔で彼女を見ていた。

●○○●

「瀧くん」

「ん？ なに？」

「んくんく……呼んでみただけ」

「なんだよ、それ」

……夜も更ける時間、瀧からの誘いを受けて彼の家に行き、三葉は瀧の太ももを枕代わりにして、本を読みふける瀧にちよつかいとも言える行動をしていた。

実は今の三葉は瀧のことが愛しすぎて仕方がない状況なのだ。

三葉が瀧の家にお邪魔したのは午後7時くらいなのであるが、彼女が部屋の扉を開けた時に漂ったのは香ばしいシチューの匂いだった。

そう、瀧は三葉のために夕食を振る舞ってくれたのだ。瀧からすれば昼のお礼のようなものを兼ねているのだが、三葉からしたらそのようなサプライズを受けてもう心は有頂天。

更に今日一日、早耶香と瀧とのことを話していたおかげで、瀧への愛情はこれでもかというほどに大きくなっていった。

だからいつもより甘えていて、いつもより構って欲しいからちよつかいをかけているのだ。そんな三葉に対して苦笑いを浮かべつつ、しっかり頭を撫でたり髪を解きほぐしたりしている辺り、瀧も嫌がっているわけではない。

「瀧くん、三葉さんは瀧くんに構って貰えなくて不満があります」

「はいはい、じゃあどうしてほしいんだ？ 三葉さんは」

「んく……」

瀧は本を閉じて三葉を上から見つめながらそう問うと、三葉は人差し指を下唇にあてがって考える。

……確かにもう十分に構って貰えている自覚はあるものだから、これ以上何かをしてももうなんでもそう思うっかないものだ。

——厳密にはたくさんあるが、それは三葉の口からは言えないこと。いつもなら求めないことでも、今日の三葉はそれを心の底から望

んでいた。

「……しりとりしよう？」

「……まあ良いけどさ」

三葉から子供っぽい提案に苦笑しつつ、瀧は頷いてしりとりをすることにした。

「めだか」

「かい」

「いす」

「すし」

「しき」

……しりとりを初めてすぐに「き」の文字が三葉に回ってくる。

——三葉は言葉を詰まらせる。すごく言いたい言葉があるのに、それはとてもじゃないが言えないのだ。言ったら自分がすごくいやらしい女なんじゃないかと思ってしまうのだ。

三葉はあれこれ考えた結果、やはり言えずに言葉を返した。

「き、きつつき」

「……キス」

——三葉の返しに対して、瀧が返したのは彼女が求めていた言葉であった。

瀧は頬を真っ赤にしながら、三葉に顔を近づける。

……三葉は突然のことに驚き、胸の高鳴りを抑えられない——しかし瀧を受け入れるように、目を瞑った。

部屋に聞こえるのは瀧と三葉の鼓動の音と、時計の短針の音だけだ。

瀧と三葉の吐息が交わる。

「……んっ」

——そして、三葉の唇と瀧の唇が、ゆっくりと重なった。

唇が重なった時、三葉の吐息が漏れる。

……その時間は本当に数秒ほどのものだが、しかし体感時間はもっと長く感じていた。

——ただの唇の接触である。手を繋ぐのとなんら言葉の意味では

変わらない行為に、二人は満たされていた。

「あつ……」

「……ご、めん。その——ちよつと、今日はそういう気分だったんだ」
……唇が離れることが名残惜しいのか、三葉はそんな声を漏らす。
瀧は突然三葉の唇を奪ったことを謝罪しつつ、視線を彼女から逸らした。

——そんな彼を見つつ、三葉は彼の後ろ首を両手で抱えて、無理やり自分の顔に彼の顔を近づけさせた。

瀧は三葉の突然の行動に驚くも、三葉は紅潮しながら瀧を真っ直ぐと見た。

「……ずるい。私をこんな気分にしたんやから、責任取つてよ」

「……三葉も、ズルい」

——重なる二度目のキス。一度目よりも長く、瀧は三葉の身体を抱きしめ、三葉は瀧の身体を抱きしめる。

……ただのキスで、二人は満たされる。

……すると、三葉のスマートフォンがブルブルと震える。

——三葉はそれを無視して、今は……瀧との時間を、吐息を感じる距離で過ごした。

女子高生探偵・四葉ちゃん

三葉が社内で「鉄の女」と呼ばれ始めたのは、実に入社一年目の出来事であった。当時社内でも人気のあった先輩男性に言い寄られていた三葉なのだが、その時に彼女のとった行動がそのあだ名で呼ばれる所以となる。

……そんな彼女であるが、ここ最近では社内でも驚かれるほど柔らかい笑顔を浮かべることが話題になっていた。

その変化が顕著に伺えるようになったのは丁度一か月前である。三葉自体はあまり自覚はしていないのだが、瀧と恋人になってからの三葉は女性的にも人間的にも魅力が段違いに上がったのだ。

ただし、やはり男性との絶妙な距離感は健在で、社内では好意的ではあるものの彼女に近づこうとする男性は少ない。

その一方で彼女に言い寄る男も少なからずいるのである。とはいえ、三葉は全く以て興味が皆無であるが故、相手にされていないことがほとんどであるのだが。

……そんな彼女を一番身近で見守る少女がいる。現役の女子高生で、三葉の変化をいち早く気付いていた少女——宮水四葉は、姉が忘れていったお弁当を眺めながら考え事をしていた。

「お姉ちゃん、絶対浮かれてるよ」

「……そない言うもんやない。三葉が楽しんでればええんよ」

「……そうやけどさ」

四葉は少しつまらなそうな顔をしながら、ぶうつとこうべを垂れる。四葉をあやすように祖母である宮水一葉は組紐を編みながら、微笑んでいた。

……四葉自身、こうも気が乗らない理由が思いつかないのだ。

——ただ、姉の好意が自分以外の知らないところに向かうのが、何故だか無性に気が立った。四葉は知らないこの感情は、別の言葉にするならば「嫉妬」と呼べるものであった。

「……お婆ちゃん、ちよつと出掛けてくる」

「そーかい。気い付けて行ってきかない」

四葉は三葉の忘れたお弁当を自分のリュックサックに入れて、家を飛び出す。スマートフォンを取り出して姉に対して一通の連絡を入れた。

「お姉ちゃんは仕方ないんだから」

そんなことを小声でつぶやき、四葉はマンションの階段を段飛ばしで駆け下りた。

三葉が見れば「スカートで飛んじゃ駄目やよ!」などと言いつつ、それほど無防備である。ともかく彼女は休日の予定をお姉ちゃんの忘れ物を届ける（ついでに社内での姉を確認する）ことで決定した瞬間であった。

電車に乗ること数十分。休日であり、しかも既に通勤ラッシュの終わっている車内は比較的人口密度が低く、四葉は痴漢の心配をすることもなく扉近くの手すりを掴みながら、外の風景を見ていた。

…そういえば、瀧と三葉の出会いが電車の対向車で目があつたことが原因であつたとか。

普通はそんなことはありえないものであるが、現にそれで瀧と三葉は現在交際しているのであるから、運命と呼べるものも否定は出来ない。四葉は思った。

…ふと、四葉は電車内でイチヤイチャしている若いカップルをみた。人目が付きすぎるといふのに、恥ずかしげもなくくっ付いたり、キスをするその姿を見て思った。

「……あれは違うや」

——自分が望むものとは違うということ。

生まれてこの方、特に高校生になってからの四葉はかなり異性に人気がある。姉の三葉同様に母の遺伝子を色濃く継いでいる四葉はかなりの美貌で、特にメイクもしていないのにも関わらず周りの同性よりも魅力的である。

当然何度も告白を経験しているが、それでも彼女は誰とも付き合つたことがない。

……その端的な理由をいえば、それは単純で——彼女は姉よりもかっこよくて頼りになる存在を知らないからだ。

四葉がそう思ったのは今より8年前のことだ。その時、三葉と四葉、そして祖母の一葉の三人は当時神社のご神体があった山の頂上まで向かった。

火山の噴火によって生まれた山の頂上のクレーター。そのほぼ中心にある巨木と巨石によって出来た洞窟に宮水神社のご神体はあるのだ。

その道中に、三葉は体を屈ませて一葉をおぶると言い出したのだ。……それだけじゃない。その時期の三葉は時折人が変わったようにかっこよくなっていたのだ。

その時の三葉の姿が、四葉にとってのかっこよさの頂点であり、自分に告白してくるタイプは上っ面だけの見た目だけ気取ったタイプがほとんどであった。

……あれこれ考え事をしている間に、四葉を乗せた電車は目的駅に到着する。四葉はそれまでの考え事を振り払うように頭をブンブんと振った。

——ともかく、四葉による三葉身辺調査の1日が始まったのであった。

……身辺調査対象その一、三葉の仕事先に到着する。

アパレル系のデザイン会社からか、その外観も非常に現代風にお洒落で、四葉は社内に入ることを一瞬躊躇う。

鏡で自分の姿を確認して深呼吸する——意を決してドアを跨いで社内に入った。

社内の一階は視線の先に受付と思われる女性が二人いて、周りには休憩スペースのようなソファや机、テレビが置いてあるスペースや、社内でデザインされた資料が保管されている本棚のようなものがある。

四葉は初めての場所に関心を抱きつつ、周りから視線を感じるため、そそくさと受付の方に小走りで走っていった。

「すみません、お姉ちゃん……宮水三葉はいますか？」

「お姉ちゃん、ってことはもしかして三葉さんの妹さんですか？」

「あ、はい。三葉の妹の四葉つていいいます！ 今日はお姉ちゃんの忘れ物を届けに来たのですが……」

四葉は受付の女性に事の次第を伝えると、受付の二人は四葉に親身に明るい声音で話しかけてくる。

恐らくは三葉と仲がいいのだろうと四葉は予想するも、情報は他人から聞いたほうが信憑性が増すため、四葉は少しばかり話をする事にした。

「お姉ちゃん想いの優しい妹さんだね！ それに三葉さんと似てすつごく可愛い〜」

「そうね。将来有望で引く手数多だわ」

馴れ馴れしく話してくる受付と、淡白な話し方の受付の賞賛に恥ずかしそうに笑う四葉だが、今は自分のことはどうでもいいのだ。

とりあえず、今知りたいことは社内での姉のこと。それについて四葉は尋ねる。

「お、お姉ちゃんは会社ではどんな感じですか？ 皆さんに迷惑をかけたりとかは……」

「あ、それは大丈夫だよ！ 三葉さんはすごく優秀で、同性の後輩にも親しげに接してくれてみんな慕ってるし……」

「そうね。みんなのお姉さんって感じ」

……それはそれで複雑である四葉。ただ会社でも人気があるっていうのは妹としても嬉しくあったりと、内心は非常に複雑なものである。

「……ちなみに、男性面の人気の方は」

四葉は二人にそう尋ねると、二人は顔を見合わせて少し考え込む。

……二人の様子を鑑みて、姉に彼氏ができたということはあまり知られていないと四葉は確信した。

「少し前までは収まってただけど、最近になってまた三葉さん人気が戻ってきたって感じかな？ ここ最近の三葉さんって同性から見てもすごく綺麗だから、男の人は敏感に反応してる感はあるんだけど……」

「ただ三葉さんは男に対してはわかり易い線引きをしているから、誰も近づけないって具合ね。基本女性社員に囲まれてるし、なんていうのかしら……あまり男には近づいてほしくないって感じね」

……姉が徹底しているのを聞いて、四葉は彼女を改めて尊敬する。一途というか極端というか。

ただ三葉は昔からすることが極端な時があったのは確かである。突然嫌味を言ってくる同級生に対して机を蹴り飛ばして驚かせたり、突然東京に行っていくると言い出したりと。四葉はそのことを思い出してどこか納得した。

ただある程度知りたいことを確認した四葉は、受付の女性へ三葉に渡す弁当を預けようとした。

「——あれ、四葉？」
「あ」

そのとき、後ろから突然三葉の声が聞こえる。四葉は振り返ると、そこには財布を持って四葉がいることに驚いている三葉がいた。

○●○○

三葉はちようど昼休みに差し掛かったとき、自分がお弁当を忘れていたことに気づいた。

しかも今日のお弁当を用意してくれたのが四葉であったため、後で彼女に怒られることを覚悟しつつ、気分的に外にご飯を食べにしようとしていた矢先、受付の方で四葉を発見したのである。

無事四葉から弁当を受け取った三葉なのであるが、このまま四葉を帰すのは申し訳ないので、お昼ごはんを奢るために近くのカフェに来ていた。

オープンカフェのテラスに对面で座る三葉と四葉。三葉は四葉の作った弁当を広げ、四葉は三葉に奢ってもらったサンドイッチとドリンクを広げる。

「ごめんね、四葉。わざわざ届けてもらって」

「全く、お姉ちゃんには困っちゃうよね。妹の愛情のこもったお弁当忘れられちゃあねー」

「だからごめんって」

三葉は両手を合わせ、苦笑いしながら四葉に謝る。ただ四葉も実は大して怒っていないので特に何も厳しく言及はしなかった。

ついでお昼ご飯もデザートつきで奢ってもらえるなら、と少し得した気分でもある。

そもそも、本来の目的は弁当を届けることではないのだから、なんて口を裂けても言えないが。

「それにしても、四葉もお料理うまくなってるね」

「まあ、良いお手本がおるからね——おねえちゃんは最近は、その女子力を彼氏に発揮しまくっているようだけど？」

「あ、あはは。……でも案外瀧くんも料理とか家事できるから、難しいんよ？ 作るもんが日々お洒落なんやもん」

「はいはい、そんな惚気話聞いてたらストレートティーが激甘の紅茶になるよ」

「……もう、そんなんじゃないって」

少し照れ笑いをしながら三葉は否定する——その表情がもう反則であることに気づきもせず。

四葉は少しぶうたれた表情になりながらカップに入った紅茶を飲む。

「……もう、ホントに苦くないよ——もう付き合って一ヶ月少しかつげ？」

「一ヶ月と半月くらい。……まあ順調だと思うかな」

「……そう？」

……最近の三葉は弄り甲斐がないのが少し不満なのではないかと四葉は思った。

最初期は弄っていて返ってくる反応が面白かったから良かったが、最近では弄っても照れながら受け止めてくるものだから、四葉からすれば面白くないのである。

——もちろん瀧のことを認めていないというわけではない。むしろ瀧は少ない時間しか一緒に過ごしていないものの、何故か安心してしまうような男性である。

ある意味では四葉も瀧に懐いているのだ。……だからこそ、四葉は

自分の感情がわからない。

こうも幸せな瀧と三葉を見ていて少し物足りないのかが、心の底からそのわけを知りたかった。

「四葉も彼氏作ったらどう？」

「それ、お姉ちゃんだけには言われたくない。25なるまで彼氏の一人もおらんかった癖に、生意気!!」

「あんたもおねえちゃんに失礼やね!!」

——三葉も四葉も、作ろうと思えばいつでも彼氏なんて作れた。ただそれをしなかったのは、やはりしつくりとこなかったためである。

どこか似たもの同士である三葉と四葉——二人とも気づいていないだけで、本当は恋愛の価値観も一緒だったりするのだが、二人がそれに気づくことはないのであった。

「……ところでお姉ちゃん、朝結構早く家を出てるのに、どうしてお弁当忘れたの？ 急いでいたわけでもあるまいし」

「あ、それは瀧くんのお家に寄ってるからで……」

「——もう通い妻やん」

「……うん、自分でも薄々自覚してたよ」

そんな会話をしつつ、姉妹のお昼時間は過ぎて言った。

●○○●

……三葉身辺調査対象その二、彼女の幼馴染二人の家に突撃である。

四葉は姉の会社に行く途中、勅使河原克彦と名取早耶香に連絡し、姉との昼食後に二人の家にお邪魔していた。以前四葉が結婚祝いをしに来たときとは違い、今回は克彦も仕事は休みであり、実に数年ぶりの再会であった。

「おおー、四葉ちゃんめっちゃ綺麗になったなー。最後に見たん何年前や?」

「今日はわざわざ来てくれてありがとお!」

リビングの椅子に座りながら、四葉は久しぶりに再会した二人に懐かしさを感じる。

四葉の知る限り、最後にあつた時には既に二人は付き合っていた。

三葉から聞いた話では、転校した高校で何か二人が急接近する出来事があったらしく、それをきっかけに付き合うことになったと聞いている。

もちろん紆余曲折の出来事を経ての交際だったから色々あったらしく、しかしながら幸せそうな二人を見て昔馴染みとしてしつかりと帰結したことに安堵していた。

——残念ながら、四葉には三葉や二人のような今でも繋がる親友のような存在がいなかったため、少し三人を羨ましく感じていた。

「結婚おめでとう！ お姉ちゃんから色々聞いてるけど、私の方からも言いたくて」

「もう、そんなんええのに。結構ここまで来るのに時間かかったやんな？ 何もないけど、ゆつくりしていつてね」

「俺、ケーキでも買ってくる！」

「え、ええよええよ！ そんなん申し訳たたへんよ」

……やはり親友の妹だからか、異様なまでに過保護に扱われるので四葉は苦笑いしながら遠慮をする。

早耶香や克彦からすれば四葉は自分たちにとっての妹同然の存在であり、優しくしたり甘やかす対象であるから仕方ないのであるが。

……少しばかり世間話に話の花を咲かせたところで、四葉は今日ここに来た理由である話題に路線を変更させる。

「ところで最近お姉ちゃんめっちゃ機嫌いいんやよね。そりやもうとびつきり、呆れるくらいに」

「あ、彼氏が出来たことやね。私もある程度聞いてるけど、あれはベタ惚れやよ」

「幼馴染としては複雑ではあるけどなく。なんか娘が遠くに行つてしもうたみたいで」

克彦はわざとらしく目元をゴシゴシと拭うふりをしながらそう言うのと、四葉は可笑しそうに笑った。

……一応克彦も学生時代は三葉のことを恋愛的な好きではないにしろ、好意を持っていたことを四葉は知っていたため心配ではあったが、杞憂であったことにも安堵する。

もしここで揺れ動くようであれば早耶香も三葉も、当然四葉も許しはしないが。

「まあでも、その瀧くんって男は聞いとる限りでは誠実そうやし、キスもしたらんくらいみたいやから信用してもええやろ？」

「そうね。テツシー……やなかつた。克彦は最初はがつつきすぎやつたし、正直引くくらい慣れてなかつたしね」

「お、お前もよう似たもんやろ！　ってか、慣れてたら許さんし」

「……もう、当たり前のこと言わんといて。四葉ちゃんもおるんやから」

早耶香は少し頬を赤らめて克彦の頭を軽く小突くと、彼もまた照れ隠しのように笑む——幸せなカップルが周りに二組もいることで何とも言えなくなる四葉。しかし、目の前の二人は心が休まるというべきか、心から祝福できるというのは四葉にも理解しがたいことである。

「……それで、お姉ちゃんから何か瀧くんのこと聞いてへんかな？」

私が聞くとお姉ちゃん、はぐらかすんよお」

「まあ妹ならお姉ちゃんとの恋愛事情は気になるよね——って言っても、私もそんな詳しくは聞いてへんよ？　奇跡みたいに運命的な話は聞いたけど」

早耶香の語る話は、四葉としても既に見知っていることである。更にいえば瀧からも教えて貰った情報がある分、四葉の知っていることの方がより真実味が強い。

「——あ、でも三葉言ううとつたよ。瀧くんをずっと探してたつて。理屈やないけど、でもずっとずっと探していた誰かもわかんない誰かは、瀧くんだったんだつて」

「……誰かもわかんない誰か？」

「うん。三葉つてたまに訳分かんない言葉遊びするから、たぶんそんな深い意味はないと思うんやけどね」

……早耶香はそういうのが、四葉の頭の中で「誰かも分かんない誰か」という言葉がすつと納得出来た。

こういうところが姉と自分が似ている点であると彼女も自覚して

いるが、なるほどまで思えた。

もちろん理屈はなく、言葉の意味を全て理解できることはないが、ただ——三葉の感覚については共感を覚えた。

……四葉もまた、言葉には出来ない何かを探している。目には見えない何かで、求めている正体もつかめないままだ。

「誰かも分からない誰か」と「何かも分からない何か」と言葉に少し違いがあるだけで、もしかしたら少し前までの三葉の抱いていた感覚と四葉の現在抱いている感覚は近いものなのかもしれない。

もちろんそれを四葉が知ることは恐らくはないが。

「……ま、それを知れただけでもいいか」

「ん？　どうかしたん、四葉ちゃん？」

「んんん♪　なんでもないよ！」

小声の呟きが聞こえたのか、克彦の問いかけに笑顔で誤魔化す。

——それから数十分の時間が経ち、四葉は二人の家を後にする。そして再び電車に乗り継ぎ、東京に帰っていく。

……目的は最後の調査対象である。それは三葉を変えた張本人で、ド直球の当事者。

——三葉身辺調査その三、現在進行形で彼女の恋人である立花瀧との接触であった。

○●○●

四葉は夕方、四ツ谷駅で瀧を待ち伏せしていた。直接会ったことは少ないものの、実はSNSを利用して割と高い頻度で瀧と会話をしている四葉。そこから得た情報から仕事が夕方で終わり、自宅の最寄り駅が四ツ谷駅であることも知っていた。

特に約束をしているわけではなく瀧がいつ現れるかわからないため、四葉は自分の腕時計をチラチラと覗きながら周りを時折見渡す。

「……暇だなー」

四葉は駅が見えるほどのところにあるベンチに座りながら瀧を待つ。

四葉が少し早く来てしまったからか、四葉が待つこと1時間ほどが経過した。今日の四葉の一日はずっと動き続けていたため、体力的に

も少し疲れていたのだろうか。ベンチに腰掛けていると、少しウツラウツラと眠気が彼女を襲う。

その眠気を遮ろうと目を擦るも、それを何度か繰り返すうちに四葉は――

……四葉は夢を見ていた。

それは幼いころの夢で、彼女がまだ小学生高学年ほどの時代の夢か。その光景には彼女も覚えがあった。

夢の光景には自分と、自分と手をつなぐ姉の三葉の姿がある。三葉は乱暴に髪の毛を一束ねにした髪型をしていて、少し困った顔をしていた。

「(……これ、あれだよ。確か、私が巫女のことだからかわれた時に、泣いちゃった時の)」

当時小学生であった四葉は同級生の男子に言われもないからかいを受け、感情の赴くまま喧嘩してしまったときに叩かれて、号泣したという出来事があった。そのときに三葉がたまたまそこを通って、同級生の男子をこっぴどく叱ったのだ――女の子を虐めて手を上げて何やってんだ。男の風上にも置けねえな、ホントについてんのか？

そんな凡そ女子高生が口に出さない荒い口調であったが、それで四葉はそんな姉に救われた大切な思い出だ。

『……おねえちゃん、結構これ、きついんやね』

当時の四葉は三葉が恥ずかしがる巫女の仕事に対して、奇想天外な発想でどうともないだろうと考えていた。しかしこの出来事をきっかけにその考えを改めたのだ。

からかわれて、馬鹿にされて悔しかった。喧嘩になって殴られて痛くて、そして泣いた。その出来事はその考えに直行してしまったのだ。

当の三葉はなんと声を掛けたらいいかわからないのか、頬をポリポリと搔いて困った顔をしている。

『……殴られたら、まあ痛いよな』

『……うん、痛かった』

『そっか——んじゃ、今度あいつらの親に文句言いに行くか』

『え!? そ、そこまでせんでも……』

『いや、駄目だ。妹に手を上げたんだから、それなりに報いは受けてもらわないとな』

三葉は四葉の頭に掌をポンツとにおいて、彼女の頭をなでる。

『あいつらも、まあ餓鬼にありがちな気になる子を虐めたくなくなるとか、そんなんだろ——でもやっていいことと悪いことはあるんだ。先に手を出したのは四葉かもしれないけどさ、それを仕向けたのはあいつらなんだよな?』

『……うん』

『——おれ……私も、まあ色々あるよ。実は喧嘩っ早いとか、すぐ感情優先させるし——でも女に手を出す時点で、男は駄目だ。碌な男になりやしない』

……妙にそのとき、姉は男っぽい口調で男の子のような面影を見た
と四葉は思った。でもそれが、何故か——かっこいいと思った。

夕暮れのかたわれ時に、夕日が三葉を逆光で照らす。そのときの三葉はすごく綺麗と、四葉は幼いながらも思っていた。

『——だからまあ、あんな奴ら放って妹は良い女になればいいんじゃない? ほら、私みたいに』

『——なんやね、それ……自意識過剰やよ』

四葉は涙を拭いながら、でも笑顔でそう言う。そこには先ほどまでの悲しい表情はなかった。

——四葉の夢は、揺れる。

どこからか、彼女の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「——は」

……少し名残惜しいものの、彼女の夢は終わりを告げる。

しかし、彼女は不意に感じた——なぜこれほど大切なことを、今まで忘れていたんだろうと。

そんな疑問を抱きつつ、彼女は意識を現実に戻していった——……

……意識が戻るとき、彼女の前には男性が立っていた。

「——つたく、こんなところで何寝てんだよ、四葉」

その男性——瀧が四葉をベンチで見つけたのは数分前のことだ。最初は目を疑ったものだ。

何せ、彼女の妹が仕事終わりで疲れている矢先に、ベンチで眠りかけていたのだから。

実際に彼女が眠っていた時間は10分ほどであるのだが、事情を知らない瀧には関係ない。

「おーい妹ー。気は確かか？ 何ボーっとこっち見てるんだ？ 寝ぼけてるのか？」

しかし、四葉は細めで瀧をじっと見て何も動かない。

瀧は少し困ったと思い、三葉に連絡をしようと思った——そのときだった。

突然、四葉がすつと瀧の手を握り、そして……

「——お姉ちゃん？」

——そう、小さな声で呟いた。

それはそれで大切な『なにか』

四葉が目を覚まして、瀧を見た瞬間の出来事だ。

その時、瀧の姿と三葉の姿が重なり、そして四葉はふと呟いた――

それが突然の四葉のお姉ちゃん宣言であり、そのせいで瀧は辺りの視線を集めた。

……言うに事欠いて、男に対してお姉ちゃんである。もう一度言おう、何の変哲も無い男に対して「お姉ちゃん」である。敢えて言えば割と男前に「お姉ちゃん」だ。

つまり何を言いたいかといえば――昨今の性事情を鑑みれば、あなたがちそれを否定することはできないのである、周りの他人からすれば。そのような趣味の漢、と勘違いされても言い訳のしようがないのである。

瀧は全力で焦る。何せ今彼がいる場所は普段彼が最寄駅で使っているところである。偶にしか使わない駅ならともかく、毎日使う場所でそんなことを言われ、そんな言われのない勘違いをされた上に噂が仮に広まれば、ひとたまりもなかった。

「だ、誰がお前の姉ちゃんだ！ 流石にそれは洒落になんないから止めろよ!？」

「いひゃ!？」

突拍子もないことを言う四葉の額を瀧は指で弾くと、四葉は可愛らしい声を上げて目を見開いて瀧を見つめる。

その目は先程までの眠る状態と起きている状態のちようど真ん中の状態ではなく、完全に覚醒していた。

「あ、あれ？瀧くん、なんでそんなところに……」

「それはごっつちの台詞だ。無防備に寝てるかと思えば言うに事欠いてお姉ちゃんだ？ なんだ、俺を煽るためにここにいたのか？」

瀧は多少唇を尖らせて文句を連ねたところで、四葉は自分がここにいる本当の理由を思い出す。

……そう、瀧と三葉の現在の状況を知るための今日1日を、すつか

り忘れていた。

「あ……。ううん、違うよ。瀧くんを待ってたの。ちよつと話したいことがあったから……。そしたらうたた寝しちゃってさ」

「……なるほどな。だけど、気をつけるよ？ まだ明るかったのと、俺が見つけるのが早かったからよかったけど、お前は充分魅力的な部類に入るんだからさ」

瀧は不意に四葉の頭に掌をポンと置いて、撫でるような仕草を取る。

四葉はそれをされて嫌がるわけでもなく、目を見開いて軽く頬を赤く染めていた。

——それとともに、何故か瀧の姿が三葉と重なったのだ。

四葉は目を疑うように目を擦り、もう一度瀧を見る。もちろん映るのは自分の頭を撫でる優しい男の表情だけだ。

……四葉は今のことを気のせいと考え、しかしながら不意に思い出したのは先ほどの夢で思い出した出来事だ。あの時の温かい気持ちと、今瀧に撫でられることで感じる温かい気持ちと同質のものということに気付いた。

「……ごめんなさい。私が軽率だったよ」

「分かればいいんだ。——で、俺に用だったな。つっても俺、仕事終わりでとりあえず家に一回戻りたいんだけど……」

四葉は瀧に素直に謝り、瀧は自分の心情を呟く。

その呟きを四葉が聞いたとき——四葉の瞳が輝いた。

「それなら瀧くん。私の望みと瀧くんの望みの二つを叶える手段があるよ。」

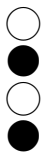
「……おいお前、まさかと思うが」

瀧は次に四葉が何を言うかが理解できたのか、顔を引きつらせて彼女の頭を撫でるのを止める。

そして次の瞬間、四葉が言い漏らした提案のせいで、瀧は頭を押さえる羽目になる。

……四葉はあざとく上目遣いで瀧を見て、提案だからか挙手をした上で言い放った。

「――瀧くんのお家にお邪魔します♪」



あれから四葉を止めることが出来なかった瀧は、渋々といった表情で四葉を招き入れた。

瀧宅に入るなり四葉は部屋をジロジロと興味深そうに見回し、ほへえ、と声を漏らしていた。

「結構綺麗にしてるんだー。お部屋もおっしやれー」

「そっち関連の仕事してるんだからな。それにしょっちゅう三葉が来るもんだから油断できないんだよ」

「あー、なるほどね」

四葉はクルリと一回転し、スカートの丈をヒラヒラと靡かせながら、そのままソファーに押し乗る。

その仕草を見て、瀧は不意に笑みを漏らした。

無防備というかなんというか……こういうところは姉妹そっくりだな、と思ったのだ。

三葉も二度目ほどの訪問の際に有頂天に同じことをしていたので、瀧からすれば面白いの一言だった。

「……あ、もしかして見えた？」

「心配しなくともお前のガードの固さは姉譲りだよ」

四葉はわざとらしくスカートを抑えてそう尋ねる。実際には回つてる間、スカートの裾は抑えていたので、下着が露出するはずがないのだが。

瀧はため息を吐きつつジャケットを上着掛けに掛け、ネクタイをその方の部分に掛けた。

そのままリビングに向かい、四葉のために飲み物を淹れ、カップを持ってソファー前の机の上に置いた。

「……ありがとうー」

四葉は少し訛った口調でお礼を言ってカップに入っているココアに口を付ける――もちろんそれは好物であるが、瀧にそれを言ったことはなかったはず。

しかしよく考えてみれば瀧は三葉と付き合っているのである。世

間話で自分の好物を知っていたも不思議ではないと考えた四葉は特に気にも止めずココアを飲んだ。

……仄かに温かく、甘さも四葉の好みに合っている。むしろ、四葉が一番好きな味のココアに限りなく近かった。

四葉がココアを好きになったのは、昔、先ほどの夢の後に三葉が淹れてくれたココアが理由だ。

……それを思い出して、心が温かくなる四葉。

瀧くんのくせに、なんて心の中で毒突いた。

「んで、俺に何のようなんだ？別に三葉と喧嘩とかしてないぞ」

「喧嘩どころか、いつもイチャイチャしてるくっせにー」

「……あれは三葉が、思った以上に甘えてくるからで——つと、流石に妹の前で言うことではないよな」

瀧は流石に自重したのか、それより先のことを言い淀む。しかし、四葉が聞きたいのはその踏み込んだ話だ。

ソファアの上で前のめりになりながら、目をキラキラさせて瀧に追求する。

「ええー、そこから先のことが面白いんじゃないか。いいよいいよ、私、口堅いし」

「いいか、口が堅いって自分で言う奴の大半がペラッペラに口が軽いんだ」

「四葉は特別だよ？ね、だから教えてよー」

「強引に聞こうとしても無駄だからな。お前に弱み握られるとか不安でしかない」

瀧は頑なに情報を話そうとしないので、四葉もそれなりに考える。

……行き着いた結論は、少しばかり姑息な手であった。

「じゃあいいや。ちなみに瀧くん、最近はお仕事順調なの？」

「……潔いな。まあ順調だよ。先輩には優しくしてもらってるし、最近は調子が良いから高く評価してもらってるんじゃないか？めぐ先輩も瀧くんはよく頑張ってるよーって言ってたし」

「——ほお、女のお先輩に優しくしてもらってる、ねえ」

瀧の何気ない呟きを聞き逃すほど小悪魔な四葉は甘くなかった。

まるでその言葉を待っていました！　と言わんばかりに四葉はニヤリと笑い、ソファアの肘おきに肘をつけて足を組んだ。

「——四葉、そのお話を詳しく聞きたいなあ〜？」

「……あ」

今更ながら、瀧は自分が墓穴を掘ったことに気がついた。しかし既に手遅れである。瀧は一番知られてはいけない人に隠すべき情報を知られてしまったのであった。

……知られたからには、下手に黙っていた方があらぬ誤解を生むことがある。更に言ってしまうえば、四葉の性格を考えるならば何も話さなければ三葉に事実だけが知られることになるのは必至だ。

……瀧としても、三葉とは喧嘩もなく、穏やかな恋人生活を送りたいのだ。だからこそ、瀧は仕方なく四葉のお願いを聞くことにした。

まあ実際には聞くのではなく、話すのだが。

「一応分かってると思うけど、俺は別に先輩と仲が良くもないからかな？　仕事の先輩としてだけで、一緒にご飯さえ行ったことないから」「へー、そうなんだ。でもなんか向こうからお誘いとかあつたりしないの？」

「……一応、この前同僚と昼食食ってる時に飲みに誘われたくらいだな。あの時は他の先輩もいたし」

「……ふむ」

四葉は唇に人差し指をつけて、少しばかり考える。

彼女は瀧を客観的に観察した上で、今の彼はかなり好感的に評価していた。簡単に言えば前よりも良い男になったと思っっている。

それは容姿もそうであるが、何よりも心にゆとりが出来たような余裕が大人らしさを助長しているのだ。だからこそ、実は姉と同じように彼もまた社内で女性社員に人気があるのではないか、と思った。

——そう思っつて、何故かイラツとした。

「……最近、割と話掛けられたりしない？　特にその先輩に」

「ん〜……まあ言われてみると、そんな気も——って本当に何にもないからな？　なあ四葉、そんなに疑うなよ」

「疑っているというよりかは警戒つてのが合ってるよ——でもそつ

か。うんうん、良く分かった」

四葉はとりあえず知りたいことは確認できたので、満足する。

が、彼女の最も知りたいことはそれではなく、三葉と瀧がどこまで進んだのかということだ。既に四葉の興味はその部分にしかない。

一つ、四葉が今日一日で分かったことがある——それは自分が、少なからず瀧を気に入っているということ。

何故だか分からないのだが、瀧とは大好きな姉と同じように接することが出来るのだ。基本的にどんな男性にも一定の距離を空けている四葉にしてはこれは本当に珍しい。

だからこそ、自分の気に入っている二人のことを知りたい好奇心は強い。ただし、姉も同様に瀧がそれを四葉に早々に話すとは思ってもないが。

「……質問じゃないけど、知ってる？ 最近、お姉ちゃん仕事場ですごく人気があるんだって」

「……へえ、ま、三葉は綺麗だから仕方ないんじゃないか？」

唐突な四葉の告白に、瀧は特に乱すことなくそう言い返す。しかしその表情はあまり面白くない顔をしていることを四葉は見抜く。

「……ちよつとした嫉妬の表情であるが、その顔を見て四葉の悪戯心が働く。」

「まあ元々すごい高嶺の花みたいな存在だったんだけどね。瀧くんと付き合った途端、物凄く狙われるようになったみたい——カレシくんとしては、複雑？」

「お前、分かって言ってるだろ」

瀧は四葉の隣にドサリと座って、彼女の頭を軽く小突く。それと共に、四葉の心拍数が少しばかり上がった。

——距離が、近いのだ。元々二人掛けのソファーなものだから、当然二人で掛けたら距離は近くなる。

瀧は基本、四葉に対してそこまで距離が遠くない。それは心の距離であるのだが、心の距離は身体の距離にも比例する。

「うっ……そ、それで？ 瀧くん的是はどうかかなって思っ」

「……まあ、面白くはないよな。彼女が他の男から嫌な目で見られて

るんだから、それは仕方ないな」

……瀧はそつと手の平を開き、じつとそこを見つめる。

その時の表情は、どこか優しげだったと四葉は思った——まるで手の平を通じて三葉を想っているような、そんな気がした。

……キュツと、心が締め付けられる。こんなこと、今までの彼女にはなかったはずのことだった。

「でも、あんまり取り乱しはしてないんだね」

「まあそうだな。別に嫌なだけで、それでどうともならないし」

「どうともならない？」

「そうだ、当たり前のことだけど——俺、三葉のことをそんな軽い女だなんて思っていないから。あいつは俺だけを見てくれてる。誰よりもきつと、『俺』だけを見てくれると思うんだ」

——瀧はそう屈託のない笑顔で言いながら、四葉を見た。

……この顔だ。この顔を見ると、彼女は何も言えなくなってしまう。

同じなのだ。あの時の笑顔と——三葉が本当に幸せそうに笑った、あの時の笑顔と。あの時の彼女の微笑みに四葉は見惚れた。

だけど——それと同時に、羨ましく感じたのだ。

そんな笑顔を浮かべられるほど幸せな姉に対して、心の底からそのような相手がいることを。

……四葉はふと気づくと、瀧の手を握っていた。瀧の開かれた手を軽く握って、その温度を感じ取っていた。

「……どうした？ 妹」

しかし瀧は、どうしようもなく優し気な声で、彼女を気遣う。

……まるで姉のように。

「……そういえば、と思っただけ。瀧くんって、私のことを妹か『四葉』って呼ぶよね。私ってさ、基本的に『ちゃん』付けなんだよ。お姉ちゃんの友達とか、学校の男子とか友達の女の子にも絶対に。でも瀧くんは最初から私のことを名前で呼んでくれたんだよね」

「ああ、そういえば意識したことなかったな。……でもなんでかしくりしたんだよな。四葉って名前、なんか呼びやすくてさ」

「……そっか」

……四葉はどうしようもなく幸せを感じた。瀧の手の平から伝わる温もりを感じつつ、これが姉の幸せの元なのかとも思った。

——これは流石に彼女も自覚した。自分は姉とそっくりである。姉が瀧にベタ惚れの意味も理解できた。

年下の四葉からすれば、三葉から見るとはまた違うのだろう。

四葉からしたら瀧は理想のお兄ちゃんという見方が強かった。優しく、でもちよつとそっけないところがある年上の男性。気が利いて、自分の我が儘も聞いてくれて、しかも頭を撫でるのが上手い。

……それは自分が好意的に思うわけだ、と自分の心にツッコむ四葉。

「瀧くん、ズルいな……。お姉ちゃんのものだって分かってるのに……」

四葉は心がズキツと痛くなる。この行動が、姉に対しての裏切りのように感じて辛かった。

しかし、繋いだ手を振りほどけないのだ。

「……四葉。あのな、俺、一応お前の姉の彼氏なわけだし」

「……ダメ？ どーせ瀧くんはお姉ちゃん一筋だから大丈夫でしょ？」

「そう言う問題じゃないだろ!! ほら、こんなの三葉が知ったら俺、怒られるからさ——四葉に何、手え出してるん!! ……つてさ」

「あ、お姉ちゃんの真似上手いね」

「はぐらかすな、馬鹿妹」

瀧は彼女の額を軽く指で弾き、少しため息を吐いて諦めたように力を抜く。

四葉は罪悪感を感じつつもまだ触れられることに安堵して、そつと瀧の方に体重を掛けようとした——その矢先の出来事だった。

——ピンポン、と突然瀧の部屋のインターホンが鳴り響いた。

瀧はそれにビクツと反応し、四葉の手を離してフロントと繋がるカメラのモニターの方に行った。

四葉はせつかくの幸せが遠のいたように感じ、少しイラツとする。

「——誰やの、もう……」

そう小言のように呟い、ソファアの上で体育座りでモニター越しで訪問者を確認している瀧を見る。

すると、瀧から声が聞こえた。

「——あれ、三葉？ どうしたんだ、こんな時間に」

『仕事が長引いて、疲れちゃって……その、お邪魔しようかと思って』

——それは他の誰でもない、三葉であった。

四葉はそのことを知った瞬間、ドキツとする。まさか今日も姉が来ることを予想していなかったのだろう。姉にこんなことを知られたら………と思うと同時に一つ、思いつくように閃いた。

「……そっか。あ、でもちようど良かった。今さ——」

瀧は四葉がいることを三葉に伝えようとした瞬間であった。

いつの間にか彼の背後にいた四葉は瀧を引つ張って抱き寄せて、三葉に聞こえないように耳元でそつと呟いた。

「——私、隠れるからお姉ちゃんといつも通り接してね♪」

「は、お前何言って——」

瀧の了承も受けず、四葉は自分の荷物を持ってリビングにあるクローゼットの中に隠れに行く。何気に靴をしっかりと持って。

……しかしながら、こうされては仕方ない。瀧はそう思って三葉との会話を再開する。

『どうしたん？もしかして都合悪い？』

「いや、大丈夫だよ——あのバカも、ちよつとしたら満足するだろ『ん？』」

瀧は溜息を吐きつつ、しかし三葉が訪れてくれたことに少し嬉しさを覚えながらフロントのロックを解除した。

●○○●

「ん……瀧さんの部屋は落ち着くなー」

「それ、毎回言ってるからな？……何か飲む？」

「うん……じゃあホットレモネードで！」

「あれ、好きだよな三葉」

「それはもう、瀧くんが私のために初めて作ってくれたものやもん。いいでしょ?」

瀧は三葉を招き入れて、一緒にソファアームに座っていた。

瀧と三葉が一緒にいて、それを観察するように妹の四葉がクロゼットのの中にいるという何とも言えない状況であるが。

瀧はふと、テーブルの上を見る。そこには四葉のために淹れたココアのカップが残っていたが、瀧としては別に四葉がいることを知られたくないわけではない。

特に気にも止めず席を立って三葉のために飲み物を淹れようとりビングに行くと、何故か三葉もついてきた。

「どうした、別に座って休んでくれていいんだぞ?」

「ううん。瀧くんが飲み物作るのすごく上手いから、ちよつと見ようかなって思ってた」

「……ま、昔から色々なカフェ行ってたからな。行っている内に自分でも作りたくなっただよ。で、レパトリーが増えつつあってわけ——まあ料理はあんまり出来ないから、そこで三葉と良いバランスじゃないか?」

「出来へんことないくせに……ん」

三葉は瀧の後ろに子どものように抱き着き、背中を頬擦る。そんな甘えた行動を受けて瀧は苦笑しながらも特に嫌がることなくホットレモネードを作った。

「見に来たくせに、見てないじゃん」

「瀧くんの背中が広いのがいけないんよ? んん……幸せえ」

「今日は一段と甘えてくるな」

「うん。今日、仕事場に四葉が来て色々瀧くんの話をしたからね……だから来たんよ? 無性に瀧くんの顔見たいなって思ってた」

「……俺は別に、毎日でも」

瀧は自分に対して真っ直ぐ甘えて、真っ直ぐな物言いをしてくる三葉にしどろもどろになりそうになるが、ぶっきらぼうにそう言った。

その態度が少し可愛いと感じた三葉は更に強く抱き着く。

……ちなみに、その一部始終を見ている四葉。間近でそれを見てい

るため、何とも言えないドキドキに襲われていた。

「(お、お姉ちゃんってあんな甘え方するん!? ……でも、あれやられた男の人堪らないよね。普段のお姉ちゃん知ってる分、余計に可愛く見えるもん)」

なんて冷静に解釈してる時点で何気に四葉も肝っ玉が据わっていた。

「瀧くん可愛い〜」

「か、可愛いとか止めろよな。あんまり嬉しくないんだぞ、男って可愛いって言われるの」

「って反論する辺りが三葉さんの好みにドンピシャなんよ?」

三葉は瀧を珍しく年下扱いのように弄る。瀧も反抗はするものの、最後は諦めたようだ。

三葉の長い髪を撫でながら、三葉の視線を盗んで四葉のいるクロゼットを覗む。

流石に瀧も羞恥心というものはある。三葉の妹である四葉の前で、姉である彼女に対してあまり下手なことはできないのだ。今の段階でもギリギリであるので余計に気を遣う。

しかし三葉はそんな事情は知らないのです、いつも通り——いつも以上に瀧に甘えていた。

「っていうか、仕事場に四葉が来たのか?」

すると瀧は、先ほど三葉が言っていたことを思い出して尋ねた。当然、あえて四葉がいる状況で彼女の話題を出したのはわざとである。せめてものやり返しというべきだろう。

「うん。お弁当忘れちゃって、届けてくれたんだ〜」

「おいおい、俺のところ来る余裕があるなら忘れるなよ」

「何、私が朝来て嫌なの?」

「……嬉しいけどさ」

「ならまた来るね!」

三葉は満面の笑みでそういうと、彼の肩に頭を乗つけた。

不意に三葉特有の髪の毛の匂いが鼻孔をくすぐる。……まずい、と瀧は思った。

こういう何気ない女性らしさに瀧はめっぽう弱い。無自覚ではあるものの、三葉は瀧の好みに直球な仕草を頻繁にするのだ。

ふと、三葉が瀧を見上げる。当然、彼の目が向かう先は唇だ。

……瀧はあの唇の柔らかさを知っている。瑞々しさを、温かさを肌で覚えている。

——まるでそんな瀧の思考を汲み取ったように、三葉は瀧に顔を近づけた。そしてその唇を、捉える。

「んん……んん」

「み、……んっ!？」

突然三葉に唇を奪われる。

瀧はそのことに驚き、口を離して彼女の名を呼ぼうとするが、それを阻止するように三葉は再び、しかし先ほどよりも深く彼の唇を奪う。

……瀧の舌と、三葉の舌が少しだけ触れる。それに両者とも——厳密に言えば三人はそれぞれ顔を真っ赤にしていた。

……二人の唇が離れる。離れた口からは妖艶にも唾液が糸を引き、三葉は少し息を乱しながら瀧を見つめていた。

「……キス、好きなんよ。なんか、してるだけで幸せ。前のやり返しやよ?」

「——生意気」

……瀧はこの時、四葉のことを完全に忘れていた。

瀧はソファアーの上で三葉を押し倒して、少し強引に唇を奪う。

その光景を見ていた四葉は、これ以上ないほどに胸がドクンドクンと高鳴っていた。

「(ダメダメダメダメ、こんなダメや!! さ、流石にもう見てられへんよお!!)」

まさかキスまで進んでいるとは思っていなかったのだ。更にあの瀧が姉を押し倒した瞬間に、彼女の許容範囲を越えてしまった。

今もなお、瀧は先ほどよりも深いキスを三葉にしている。四葉には刺激が強すぎた。

「た、き……くん」

「……三葉、ごめん」

「謝らないで。ちよつと、嬉しいから。瀧くんが自分を求めてくれてるんだって思えば、むしろ……もつと、とか」

——本当に、三葉は男心を無意識にくすぐる。

瀧の本能が振り切れそうになって、彼女の唇を再び奪おうとした——その時、彼女の人差し指が彼の唇を止めるように触れた。

「——やけど、続きはやっぱ二人きりの時にしたいな」

——ガンツ！……つと、クローゼットから物音が響く。

三葉は瀧の唇に軽くキスをして彼の下からどき、そして先ほど音の鳴り響いたクローゼットに向かった。

そしてその扉を開いて、そこにいる少女をニッコリと見た。

「——お昼ぶり、よーっは？」

「お、お姉ちゃん？ え、い、いつから……」

四葉は満面の笑みの姉を前にして、慌てふためく。当然だ。自分がここにいることを三葉は知らないと思っていたのだ。

しかし蓋を開ければ、まるで三葉は最初から四葉がいることが分かっていたというような表情をしている。

——三葉は笑顔で怒る。それが満面に近ければ近いほどニコニコするのだ。

四葉の体温は急激に下がる。そんな四葉の頭を三葉は鷲掴んだ。

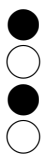
「——四葉、ちよつとお話しない？」

「……は、はい」

その光景を引き笑いで見ていた瀧は二つのことを思っていた。

一つは、その台詞が自分の知っているものとは違い、お話ではないこと。

そしてもう一つは——三葉を怒らせてはならないということだ。



瀧と四葉はソファアに座り、三葉は腕を組んで二人の前に立ちほだ

かる。瀧は完全に被害者なのであるが、流石に四葉を一人怒られるのを見てるだけ薄情ではない。

そもそも自分も黙っていたことを同罪と考えて彼女の隣で追求を受けることにしたのだ。

そんな三葉であるのだが、どちらかと言えば怒っているというよりは呆れている側面が多くを占める。

そもそも何故彼女が、瀧の元に四葉がいるということを知ったかと言えれば――

「珍しく私のところに来て、しかも昼間はさやちゃんとテツシーのところ行っとなつたって聞いたときは驚いたよ。それで四葉が私の周辺のことを調べてるって思っつて、一応瀧くんのところに来たの」

「で、でも私、靴も隠してたなのに」

「――毎日一緒に生活しとつて、あんたのシャンプーの匂いわからんと思う？」 お姉ちゃん舐めたらダメやよ」

三葉は四葉をジロツと睨みながらそう言った。

しかしながら、瀧は納得する――三葉は四葉がいると分かっていたからこそ、あそこまで甘えてきたのだ。

彼女をからかうため、といえば良いだろう。少なくともおいたをした妹にはうってつけな罰だ。

……当の瀧は、そんなこともいざ知らず危うく四葉の前で三葉を抱こうとしていた辺りを心の底から反省をしていたのだが。

「――それで、あんたの知りたいたいことも知れた？」

「はい、お姉様。ぶつちやけ知りたかったのは二人の進展具合です。もう嫌っていうほどわかりました」

「……もう。ホントは恥ずかしかったんだよ？　でも正直、私もやり過ぎたとは思う――キスしてたら、四葉のことを忘れてたのも事実だし」

三葉は頬を赤らめて恥ずかしそうにそういうと、先ほどの濡れ場を見て悶絶していた四葉の記憶も戻ってくる。

――四葉は思った。姉を馬鹿にしたら怪我をすると。

少なくともこの姉には敵わないと生まれて17年目にして初めて

知ったのだった。

——つと、三葉はそこで四葉に近づいて彼女の頭を撫でた。

「お姉、ちゃん？」

「……こんなことしたのつてさ、最近私が四葉に構っていなかったからだよね？」

「え、つと、その……そうかも」

——四葉はそう言われて、納得する。彼女がつまらなかつたのは、大好きな姉が自分に構わず瀧にばかり構っていたからだだったということ。

特別仲の良い友人がいない四葉にとって、三葉の存在は家族であり、尊敬する存在であり、どこか親友のような存在なのである。だからこそ、その姉がご執心になる人のことを知りたくなった。

四葉の今日の行動という暴走は、嫉妬と好奇心が合わさつたものだったのだ。

……四葉は今更になって、自分がシスコンであると自覚した。

「……私ね、今は毎日がすごく楽しいんやよ。瀧さんと過ごす毎日はずつごく新鮮で、ずつごくドキドキして——でもね？　私が楽しい

毎日には四葉もしっかり入ってるの。四葉は私にとって、ずつごく大切な妹だから」

——四葉の目頭が、少しだけ熱くなる。心のどこかで、大好きな姉は自分のことをどうでもいいのかと考えていた。

でも、そんなことがあるはずがない。

——だって彼女は、三葉はどうしようもなく優しいのだったから。

「……お姉ちゃん！」

四葉は三葉に抱きつく。三葉はそんな四葉を抱きしめ返し、ポンポンと頭を撫でていた。

……ふと、瀧と三葉の視線が合う。

——最近四葉が少し元気がない、という会話を二人はしていた。瀧がわざわざ彼女を家に招き入れたのも、元を辿れば彼女を心配してのものだった。

……実を言えば、三葉が四葉を見たとき、既に四葉には元気が戻つ

ていた。そして四葉を元気にしてくれた瀧だと確信して、彼に感謝する。

——四葉の1日は、そのような形で終わりを迎える。

そのとき、四葉の心には今朝の時のようなつまらなさは微塵も残っていないかった。

——そんな姉妹の愛情劇も終わり、二人は瀧の家から帰宅することになった。三葉は先に家を出ていて、玄関口で瀧は四葉を見送ろうとしていた。

……四葉はふと、瀧を見る。

「どうした？」

「……………」

自分の顔をじつと見る四葉を不思議に思ったのか、瀧はそう聞くも彼女は黙ったまま何も言わない。

——四葉は思った。瀧くんと、もつと接してみたいと。姉とは違う側面から、彼のことをもつと知りたいと。

この感情はきつと、三葉のモノとは違うものだということを確信する——だって四葉が瀧と接して得られるものは、安心なのだから。だからこの気持ちはきつと親愛だ。……そう、心に強く思った。

「——瀧くん、結構罪作りな男やな」

「は？ 何言ってるんだよ。生まれてこの方、三葉以外にモテた試しがねえよ」

「…………それはたぶん、周りが見る目ないだけ。……瀧くん」

四葉は彼の手を取って、そつと握る。……ドキドキなんてしない。顔も熱くない。ただ手を握っているだけ、この人はもつとすごいことをお姉ちゃんとしている。

……四葉は願う——この高鳴りが、一過性のものであるということ

を。

「——ホント、ズルい」

四葉のその言葉は、きつと二人に向けたものであっただろう。

しかし、その言葉と共に四葉に浮かんだ表情は——満面の、笑み

だった。



——その日の夜中、瀧の元に二通のメッセージが届く。

一つは四葉からで、瀧はスマートフォンを操作して文面を見る。

『今日はありがとう、そしてごめんなさい。でも瀧くんのおかげでなんか気持ちに整理もつきました♪ これからもよろしくね? —

—お兄ちゃん』

……四葉の最後の一言を見て、あんな妹が居ても楽しかっただろうと思ってしまう。だけど意外とお兄ちゃんという言葉がしつくりと来た。

一人っ子である瀧にとって兄妹は少し憧れがあったため、実は三葉と四葉のような仲の良い姉妹が羨ましくあった。

……しかし、この最後の文字を打つ辺りが何とも四葉らしいと瀧は思った。どうせニヤニヤしながら俺の反応を予想しているんだろうとも思った。

「……せめて義理はつけろよな、あの馬鹿」

それを見て、瀧は自然と笑む。

……しかし、だ。短く書かれたメッセージには、空欄が長く続いていた。瀧は画面の上下にスクロールして、その先の文章を読む。

——そして、その追伸を見て青ざめた。

『あ、それとお姉ちゃんに聞かれたから全部話しちゃった♪』

——全部。その言葉を見て、寒気がした。

つまり、自分の会社でのことを、女性関連のことを、更には四葉と少し恋人のような触れ合いをしたことを。

その全てを四葉は三葉に言った、ということだろう。

……人間とは不思議なもので、危機に陥れば陥るほど、心は一瞬冷静になる。

——恐る恐る、二通目のメッセージの送り主の名を見た。

そこに書かれていたのは……

「——み、つ、は……」

……瀧の手は震える。タイミング的にも、明らかにこれは不味いと

瀧は思った。

そつと指は画面に向かい、メッセージを押す。そして……瀧は文章を見た。

『全部聞きました。瀧くん、今度オハナシがあります。覚悟していてね?』

「……………」

瀧は一瞬だけ、押し黙る。次に出るのは濁いた笑いで、その次に来るのは――

「――四葉アアアアツ!!!」

夜中にも関わらず、瀧は叫ぶしか出来なかった。実質言えば彼は何も悪くない被害者ではあるのだが、今の彼にはそれを理解できる術を知らなかった。

とりあえず言えることが一つあるとするならば――この日、瀧は心の底から四葉を恨んだのであった。

宮水四葉、彼女はやはり小悪魔な女子高生である。

三葉さんのオハナシ

この日、三葉は異様なまでに――

「瀧くん、チョコとカスタード、どっちが好き？ あ、私は瀧くんが好き!!」

――優しすぎて怖かった。

これは俺が体験した、人生で一番甘くて、そして人生で一番怖かった、そんな1日の序章であった……。

――ある日の日曜日のことだった。その日は仕事が休みで、珍しく三葉からの連絡もなかったためのんびりと過ごしていた。四葉の一件から数日が経ち、その間に三葉は特に何も怒っていなかったから、俺はもう大丈夫と思って安堵していた。

……今になって思えば、なぜ俺はあるとき安堵してしまったのか。そんな浅ましい考えの自分を責めたい。

――天国と地獄の1日の幕開けは、最愛の声から始まった。

プルルル、とスマフォが鳴る。今は昼頃で、ちょうどお昼でも作るうとしていた矢先の電話。

俺はソファアに座りながら電話に出ると、相手は他の誰でもない三葉だった。

『もしもし、瀧くん。今、時間いい?』

「ああ、今日は1日特に予定もないから――もしかして三葉も?」

『そうなんだよ。それでちよつと瀧くんの予定を聞こうかなって思ってた……暇ならどうか?』

……ん? いまいち要領を得ない聞き方だな。

三葉のお願いがいまいちよくわからずにいると、間髪入れずに三葉は言った。

『――偶には私の家に来ない? 今日は四葉もお婆ちゃんも出掛けて誰もいないんだよ』

「あー、そういうことか」

そこまで聞いてようやく納得する。

確かに三葉が俺の家に来ることはあっても、俺が彼女の家に行くことは今までなかったな。

以前三葉と四葉を送って帰ったことがあるから一応場所は知っているし、それにせつかくの彼女からのお誘いだ。

そもそも断る選択肢はないか。

「行くよ。今から行っても良いか？」

『うん！　じゃあまた後でね！』

三葉はそれだけ言うとうと電話を切る。

……なんか、今日の三葉はちよつと機嫌が良かった気がする。

——ただ、俺と話すときは偶に漏れる方言がさっきの会話で一切なかったこと。それを特に俺は気にすることはなかった。

……部屋着を脱いで外着に着替え、電車に乗ること十数分。三葉の家の最寄駅に着き、俺は手土産でケーキを三葉の家族分＋自分の分を買って家に向かった。

……確か四葉はチョコ系のケーキが好きで、三葉は抹茶とかが好きはずだ。お婆ちゃんの方は知らないから、甘さが控えめなケーキを買った。

……しかし、ちよつと緊張するな。何分、今まで彼女がいたことがないから、彼女の家にお邪魔するって経験は初めてだ。

駅から少し歩くと、次第に三葉のマンションが見えてくる。俺はそのフロントで三葉の部屋番号を入力し、インターホンを鳴らした。

数秒すると電子ロックが外れ、俺は三葉の部屋に向かった。

「……よく考えれば、三葉一人だけか」

俺が思い出すのは、最後に三葉を押し倒したときの記憶。

……あれは良くなかった。三葉も俺を誘惑しすぎだし、あれは理性では止まらなかった。

……エレベーター前で考えるように待っていると、チンと音が鳴る。既に一階にエレベーターが来ていて、俺はそれに乗り込もうとした——つと、そこには顔見知りの女性が乗り込んでいた。

「あれ？　立花くん、どうしてこんなところにいるの？」

「あ、めぐ先輩」

そこにいるのは俺の会社の先輩で、俺の教育係りのめぐ先輩——
巡ヶ丘さつき先輩だ。名前が長いから略して俺はそう呼んでいる。

……まさか三葉と同じマンションに住んでるとは、驚きだ。つと、
先輩と話している間にエレベーターがまた上の階に行ってしまった。

「ご、ごめんね！ でもどうして立花くんがここにいるの？」

「あー、それは——」

……ふむ。これは言葉を濁すべきなのか。個人的に会社で恋人が
いることが広まるのはあまりよろしくない。

これは司からの助言なんだけど、誰かのものになった男ほど女は集
まるらしい。

俺としては良く分からないんだが、ここは司の意見に従って……

「ちよつと知り合いの家遊びに来たんですよ。そしたら先輩がいて
ビックリです」

「そうなんだ……」

……先輩は何かは知らないけど、下を見ながらモジモジしている。

俺としてはすぐに三葉のところに行きたいものなんだけど、先輩を
無碍に扱うのも今後に関わるし——ふむ。

つと、先輩が唐突に顔を上げた。

「立花くん、今日はそのお友達との遊びが終わった後、時間あるかな
!？」

「え、えつと……」

……なんかお友達って言われてムツとなる。

三葉は友達じゃなくて恋人だし。その辺をすごく訂正したくなる。

「たぶん時間はないかと思えます」

「あ、そ、そつか。ご、ごめんね、急に」

先輩が俺に謝った時に丁度エレベーターが再び到着する。

俺は住人のお婆ちゃんが降りてきたから、道を譲る。するとお婆
ちゃんはエレベーターの段差で躓いたのか、転びそうになった。

「おっと——大丈夫ですか？」

「……ありがとうねえ。おかげで助かったんやよ」

——その少し訛った喋り方のお婆ちゃんは、俺に柔らかい笑みを浮

かべながら一礼して、杖を突きながら歩いていく。

……このドア、結構重いんだよな。俺はそれを思い出して、お婆ちゃんの先回りをして先にドアを開けた。

するとお婆ちゃんは少し驚いた顔をして、俺の顔を見てくる。

「……親切やな。ウチの孫みたいや——名前聞いてもええ？」

「えつと……瀧、です」

「……ウチの孫の恋人が、あんたみたいな子やったらええやけどなあ」
お婆ちゃんは優しくそんな微笑みを浮かべながら俺に肩に手を置いて、開かれた扉から外に出て行く。

その様子を見ていたからか、先輩は関心深そうに俺を見ていた。

「……立花くん、優しいね。そういうこと出来るのってすごく魅力的と思うよ」

「普通のことだと思いますけどね」

俺は次こそは、と言うべきかエレベーターに乗り込んだ。

先輩は俺をお見送りするのか、まだエレベーター前で俺を見ていた。

……律儀というか、変というか。たまに先輩はぼーっと見てくるかな。

俺は先輩に軽く会釈をして、ようやく三葉の部屋に向かった。

エレベーターを降りて三葉の部屋番号を探そうとする。階を軽く歩いていると、ある部屋の前には既に三葉がいた。

……部屋の前でお出迎えとは、また可愛いことをしてくれるよな。

俺は片手を上げて挨拶をしようとした——すると三葉はニコツと満面の笑みを浮かべながら、俺の方へ小走りで走ってきた。

「おはよ、瀧くん。扉開けてから来るの遅かったね？」

「ああ、ちよつとあつてさ。……それにしても、なんか気合い入ってるな」

俺は三葉を見て不意にそう思った。

……いつもよりも気合いの入った化粧に、部屋着なのかは知らないが少し露出の多めの服装だ。ショートパンツにヒラヒラのついた可愛い感じのトップスのシャツ、髪は三つ編みにしてそれをお団子のよ

うに一纏めにしている。

……正直可愛い。控え目に言って可愛すぎる。俺の彼女、ポテンシャルすげえ。なんていうか、これぞ三葉って感じでじっくりする。

——そんな風に三葉をじっと見ていると、三葉は目を見開いてクビを傾げる。

まるで「何当たり前のこと言ってるの？」って言いたいような表情だ。

「——瀧くんがせっかく遊びに来てくれるんだよ？　それは気合いも入りまくりだよ」

「——やば、可愛すぎだろ」

つい本音が出てしまう。三葉は少し顔を紅潮させるけど、次第に笑みを浮かべ、俺の腕をぐいっと引いて無理やり家に連れ込んだ。

扉を閉めて、そこで三葉はギュツと俺を抱きしめてきた——

「……久しぶりだから、ちよつと我慢できなかつたんだよ？」

「ひ、久しぶりって……ほんと数日会わなかつただけ、だろ？」

「数日でも、触れ合わなかつたら寂しいの——だから、ちよつと強めに抱きしめて欲しいな？」

——三葉のお願いに身体が動いたのはすぐだった。

三葉のふわふわで、柔らかい身体をつよく抱きしめた。

……今日、俺の理性が本当に持つのか心配になってきた。こんなが続いたら流石に俺もやばい。

ここでキスでもしたら——そう思っていると、三葉は目を瞑っていた。

……ゴクツ、と唾を飲む。

「あ、う……」

動揺する。今日の三葉は絶対におかしい。いつも甘えてくるけど、今日はその三割り増しだ。

——今はまだ昼間だぞ!?!それに三葉だつてそのために呼んだわけじゃ……ないとは言えないけど、でも少なくともいきなり押し倒されるとかは絶対に思っていない!

つてか三葉は割と天然でこういう男心をくすぐる行動をする。

……よしオツケー。たぶん今ならキスしても押し倒さない。冷静さと思考力はとりあえずは取り戻した。

「……三葉」

——俺は彼女の名前を呼んで、当てるだけのキスをする。チュツ、と音が軽く鳴り、俺は三葉の唇から唇を離した。

三葉は薄目を開けて俺を見つめる。

……もう一回とは、この娘は。

俺はもう一度、玄関口で先ほどよりも深いキスをした——三葉と会ってまだ数分の出来事だった。

——本気で俺は、大丈夫か？

●○●○

「瀧くん！ チョコレートとカスタード、どっちが好き？ あ、私は瀧くんが大好きだよ？」

あれからの、これだ。

三葉は橙色の少しばかりフリルのついたエプロンをつけて、今はお菓子を作っていた。

今日の三葉は自分で「今日は新婚さんの気分でおもてなしします！」って言うくらい、嫁力が高かった。

そういう観点から言えば、最初のお出迎え抱きつきからのキスも嫁力の表れなのか？

……家に入り、リビングに着くと漂ってきたのは料理の良い匂い。

三葉は俺がまだ昼食をとっていないかと思い、ホワイトクリームベースのチーズグラタンを作ってくれていたんだ。

それを二人で仲良く食べて（三葉は俺の席の隣に座ってちよくちよく食べさせてくる）、のんびりとしていたら（三葉に膝枕してもらって）三葉がケーキを作ると言って、今は二人でリビングに立っている。

「俺は三葉が好きだ——って何言わせてんだよ」

「えー、言ったのは瀧くんでしょ？ それより、どっちが良い？」

「じゃあチョコで」

……見た感じ、三葉が作っているのはフォンダンシヨコラか。何回かカフェで食べたことがあるお菓子だ。

フォンダンシヨコラつてのはチョコレートケーキの一種で、フォークを入れるとそこからクリーム状のチョコレートがとろけるようなケーキだ。

あらかじめ用意していたかのように冷えて固められたチョコレートの固体を混ぜ合わせたカップの容器に入れられた生地の一つ投入し、それをオーブンで焼くこと十数分。

……時間が経つごとに漂ってくるのはお菓子が焼ける甘い匂い。そこにほんのりリキュールを香り付けで入れているのか、その匂いも微妙に匂う。

——三葉はやっぱり、女子力の塊だということを今更ながら再認識した。完成したお菓子を見て深々とそう思った。

本当にカフェとかで出てきそうな出来栄えでちよつと感動する。

……三葉、お菓子作りもできるんだな。

「……瀧くん、ちよつと危ないよ?」

「……いいんじゃない?」

……机の上に鉄板のプレートを置いた時に、後ろから三葉を抱きしめる。なんか、自分のために色々頑張ってくれて嬉しいというか……なんか抱き着きたくなった。

三葉は特に慌てることなく苦笑しているけど、特に嫌がるそぶりは見せずに彼女の前にある俺の手をギュツと握る。

……やっぱい、これ。めちやくちや幸せだ。もうずっと抱き締められる気さえする。

お菓子の甘い匂いが俺に伝染したように、ただひたすらに甘い心境だ——時間を忘れたように抱きしめた。

「瀧くんって一回こうなると、すつごく甘えん坊になるよね」

「……いやか?」

「……嫌じゃないから、困る。もつとたくさん考えてたのに、それがどうでも良くなるんだよ?」

俺はそつと彼女を離すと、三葉はほんのり赤くなり、微笑んでコツンと俺の胸を叩く。

……甘酸っぱい。言葉にするなら何故かそれがしっくりきた。

ただただ甘い触れ合いなのに、どうしてこんなにも甘酸っぱいんだろう。……三葉と触れ合っている時、たまにそう感じるんだ。

でも甘酸っぱさを幸せに感じた。

「——あ、でも流石にそれは無理かな」

——そんな甘酸っぱい空気は、あっけらかんとした三葉の言葉によつて霧散する。

三葉の表情はかなりの笑顔だ。笑顔すぎると言っても良いほどの笑顔だ。

「だけど何故だろう——ちよつと、その笑顔が怖かった。」

「え、それって」

「瀧くん、先に席に座っていて？　色々用意してくるから」

……三葉は相変わらずニコニコと笑いながら、今一度リビングに消えていく。

——俺はその一抹の不安を胸に抱きつつ、今はただ席に座つて三葉を待つことしかできなかった。

○●○○

結論だけというと、先ほどの不安が嘘のようにその後の時間を過ごした。

今はリビングから三葉の部屋に移り、ベッドの上で二人寄り添いながらアルバムや雑誌を見ている。彼女とベッドの上で手を繋ぎながら触れ合っているというのに、俺は何故かドキドキよりもハラハラが先決していた。

まるで、何かの前触れのようにも感じる。

——三葉はずつと、ニコニコしている。話していても常に笑つて、ずつとゼロ距離で甘えてくる。

「ちっちゃい三葉と四葉だな——三葉は高校の時と今の髪型はほとんど一緒なんだな」

「そうだね。普段は時間ないからしないけど、昔はいつもこの髪型だったんだよ」

「へ、へ……」

写真を見て何故か懐かしいと思うものの、でもそれが今は気になら

ない。

そこで俺はふと思いつく——もしかして三葉、何か怒ってるのか？いや、だけど思い当たる節は……あるにはあるが、それにしたって異様に甘えてくる。

「ん、どうしたの？　何か考え事かな？」

「い、いや。み、三葉のことを考えてたんだよ」

取り繕うような言葉に、なおも三葉は笑顔だ。

「そっか。私もいつも瀧くんのこと考えてるから、お揃いだね？」

「あ、ああ……」

三葉と繋ぐ手の平が汗ばむのを自覚した。いつもとは違うタイプの緊張が俺を襲い、心臓も嫌な意味で高まり響く。

——やっぱり違う。これはいつもの甘え方じゃない。いつもはもつと自然というか、少し恥じらいつつも正直なのが三葉だ。

俺はすつと、三葉の手を離す。すると——

「……へえ。離すんだ、私の手。——四葉とは手、握ってたのに」

——三葉の声のトーンが、一気に低くなる。その瞬間体温が下がっていくのを理解した。

……俺の馬鹿野郎。何大事なことを忘れてんだ——これはオハナシだ。三葉が言ってたじゃないか、次に会った時にお話がありますつて。

「い、いや！　これは違っ」

「違わないよね？　四葉を家に連れ込んだ拳句、誘惑に勝てず手を

出したんだよね？」

「その言い方には語弊があるからな!?　それにあいつは妹みたいな存在で——」

「——会社で、八方美人して点数稼ぎしてるんだよね？　めぐ先輩、

だっけ？」

——筒抜けな上に、大事な情報が伝わっていないことを理解した瞬間だった。四葉はよりにもよって、伝えて欲しくないことと伝えてほしいことを最悪な塩梅で伝えてしまっていた。

……ベッドの上で、三葉が迫る。俺は逃げるようにベッドの端に後

ずさった。

「いや先輩はそもそもどうでもいいっていうかさ！ さつきだって——あ」

「さつきって、どういうことなん」

自分が失言をしたことを自覚した。これはマズイ——とうとう三葉から微笑みが消えた。

……無表情のまま三葉は俺を押し倒す。シユチュエーシヨンのには最高だけど、これは喜べない!! っていうか怖い!!

三葉の横髪が俺の顔に掛かり、三葉の吐息が掛かるのにどうしてこんにもいやらしい気持ちにならないんだろう……。

——現実逃避をしながら思っても、三葉は変わらなかった。

「まさかと思うけど、ここに来る前に先輩に会ったの？ ねえ瀧くん、その辺りをお姉さんじいーっくり、聞きたいなー？」

三葉の人差し指が俺の胸元をすうっと沿うようになぞる。

……これは嘘を吐くとか、取り繕う場面じゃない。

——俺は弁明することを諦め、全てを素直に話すと誓った瞬間だった。

俺が事実を包み隠すことなく話すこと数十分。その間、三葉は俺の上に跨り、上から見下ろすように俺をじっと見つめている。

——胸や太ももが思いつきり密着しているけど、今の心情的に三葉を性的に見ることは出来ない。

……一通りの説明を終えると、三葉は少し溜息を吐いた。

「まあそんなことやろうと思っただけだね」

……三葉は肩の力を抜くように、俺に体重を委ねる。頭を俺の胸元にコツンと乗つけて、さつきまでとは違って方言を端々に漏らした。

「その、俺としては言う必要がないと思っただよ。でもそれが三葉を不安にさせたなら、謝る——ごめん」

「……いいんやよ。半分は私の勝手な嫉妬やから」

三葉はその状態のまま、そう話し続けた。

「……私以外が瀧くんに何かしてあげるのが、ちよつと嫌やった。だからかな。今日、瀧くんに凄く尽くしてあげたくて呼んだんやよ——」

でもやっぱり追求は必要と思つて、最初はとことん甘えようつて思つて」

「だからいつもよりも甘えてきたのか……。それで、後で最後に俺が余計なことを言ったから」

「……うん。まさか同じマンションに住んでいるとは思つてもなかったし、瀧くんを誘つたつて聞いて、もう我慢できなくて——やな女だよ。瀧くんのこと信じてるのに、嫉妬ばかり」

三葉は俺の服をキュツと掴み、自己嫌悪をするようにそう呟く。

……馬鹿か、俺は。彼女を不安にさせて、それでも男か。

元はと言えば俺の中途半端な行動が招いた結果なんだ。確かに三葉は嫉妬深いだろうけど、それでも俺が悪い。

——俺は三葉を優しく抱き締めた。

「……瀧、くん？」

「……ごめんな三葉。でもさ、こんなことをするのは三葉だけだよ」

俺の上の三葉は、顔と視線を俺に向ける。

少し瞳に涙を溜めるその顔を、俺は見たくない。俺の前ではいつも笑顔でいてほしい。

「三葉の綺麗な髪を梳くのは俺だけだし、華奢なこの体を抱きしめるのも俺だけだ。三葉とキスできるのも世界中で俺だけで——って、くっさい台詞だよな」

つまり何が言いたいかと言えば、それは言葉を捻る必要がないのならば——

「——三葉だけがいいんだ。他なんてどうでもいい。それだけは、信じて欲しい」

三葉の額にキスをした後で、俺はそう断言する。心配症で嫉妬屋の三葉にさ、包み隠さずに断言しよう。

好きは好きと、嘘偽りのない言葉で向き合おうんだ。

……三葉は俺の胸元に顔を埋め、少し震える。

「……ダメ。今は、私の顔を見んといて……ッ！」

「——やだ」

俺は攻守を逆転するようにクルリと回転して、三葉を押し倒す態勢

になる。

半端無理やり顔を隠そうとする彼女の両手首を抑え、その顔を見ようとした。

「い、いややあ……っ。こ、こんな情けない顔、瀧くんに見られたくないんやよお……っ!!」

「……………」

——三葉は涙で目元を潤わせながらも、頬を真っ赤にして口元を緩ませていた。ふにやふにやに歪んだ幸せそうな表情を見て、彼女はイヤイヤと首を振る。

そんな三葉に顔を近づける。こんな三葉に、何もしいなんて無理だ。

これは三葉が悪い——こんな庇護欲を、支配欲を催させるくらい可愛い三葉が悪いに決まっている。

「んむ……ッ!? たぎ、く——」

話させない。俺は逃れようとする三葉の唇を啄ばむように、より深く……もつと深く繋がる。室内におおよそ似つかわしくなくちゆつと、粘膜が擦れるような淫猥な水温が鳴り響く。

——数分とも思えるほどの数秒のキスが終わり、唇を離す。俺と三葉の口からは糸が引かれ、三葉は荒い吐息を漏らして俺を見開いた目で見ていた。

ほんのりと滴り落ちる汗の雫と共に、部屋の中に俺たちの心臓の音が鳴り響くようだ。

「……………わかつてくれた、よな?」

「わ、わかったから! わかったから、もうこれ以上は……瀧くんが、もつともつと欲しくなるから……っ」

三葉はプイツとそっぽを向いて、小恥ずかしそうにそう呟く。そうやって一々俺の好きな仕草をするからこの娘は——

「……………ダメ。やっぱり私、瀧くんにはずっと敵わないんやよ」

三葉は肩の力を抜く。まるで、拒むことを諦めたように——それから先のことを求めているように、力を抜いて、腕を俺の背中に回して俺を引き寄せた。

三葉と俺の顔が至近距離になる。三葉は目を瞑って唇を尖らせた。
……俺はそんな三葉を——

「——たっだいまー!! ……あれ? 瀧くんが来てるって聞いたのっ
たのに、おらんやん」

——理性を司る糸がぶちぎれた瞬間に聞こえる、能天気な声。

その声が聞こえた瞬間、俺と三葉はその状態のまま固まる。

……その能天気な声の主——四葉の帰宅を境に、俺たちの関係の進展は今回もない。

——それをどこか安心してなのか、落胆してなのかは分からないけど、でも俺と三葉はどちらともなく噴き出すように笑った。

「ふ、あはははははー! なんだよ、このありがちな展開」

「ホント、そうやよ! ってか四葉のタイムミング良すぎ!」

……後であいつには説教が必要だけど、でも——そんなに急ぐことはないよな。また機会があれば構わない。

俺と三葉はやっぱりゆっくりが似合っているんだ。ゆっくりと、でも着実に。

そんな俺たちのペースで進んでいくのが、きつと大切だ。流れに流されるほど面白くないことはないからさ。

「……名残惜しいけど、タイムアップやよ」

「何、残念なの? 三葉って意外とエロいよな」

「なッ!? 瀧くんこそ私のおっぱいばっか見てるやん! 変態!!」

「男は皆変態なんだよ! ってかそんな綺麗な体してる三葉が悪い!!」

「全部瀧くんのためやもん!!」

……口喧嘩してそうで、これって結局喧嘩してないよな。そんな言い合いをしていると、そろりと三葉の部屋の扉が開いた。

「お姉ちゃん、何楽しそうに話してるん——あ」

「ん?」

四葉が勢いよく扉を開いて、俺たちを見た瞬間に「やっちゃった……」と思っっているような顔をした。

……俺と三葉は、自分たちの状態を確認する。

——俺が三葉に覆いかぶさって、そんな俺を抱きしめている三葉。目と鼻の先に顔を近づけて、頬を擦り合わせて笑っている。

……それはどこからどうみても、二人の邪魔をしたとしか思えない状況であった。

「え、えつと……ぐ、ぐ——ぐゆつくりいいい!!」

「ちよ、四葉あ!?! 違わなくはないけど、でもやっぱり違うから!! お前のそれは確実に勘違いだから!!」

「ん〜……せつかくやし、続きする?」

「三葉、お前は悪乗りするな!! ってかもうそんな気分じゃない!!」

俺は三葉の上から飛び退いて、自室に走り去っていった四葉を追いかけようとする——も、その手を三葉に取られた。

俺は何だと思ひ振り返ると——ふにゆん、と三葉にキスされた。

先ほどまでとは違い軽いものだけど、このタイミングでそれをしてきた三葉を俺は見開いた目で見る。

……キスは一瞬だけで、三葉はそれをするとか納得したような顔つきになった。

「——うん、そうやね。私ももう気分じゃないやよ。チューしても、温かい気持ちにしかないから」

「……………」

「それと私以外の女の部屋に入るなんて許さへんからね? 次同じことするんなら——分かってるよね?」

「——はい」

……俺は三葉の背後に、なにかもつと別の恐ろしいものを感じた。

三葉の分かっている、というのはつまりあれだ——もつと線引きをしつかりしろと、勘違いさせるような行為は控えろと。三葉はあの笑顔で暗にそう伝えているんだろう。

——今日一日の三葉との触れ合いにおける教訓。

……三葉さんのオハナシは、甘くて怖くてエロかったです。

なお、この後で俺は三葉と四葉のお婆ちゃんの一葉さんと対面するわけだが、それはまた別の話である。

交わされる約束

自宅訪問という言葉をご存知であろうか？

小学校の頃であれば家庭訪問、とても言い表わせるものだが、しかし時にそれを大人になつてと仮定すれば、意味は二つある。

一つは友達間で家に遊びに行く意味。そしてもう一つは——彼女が自分の家に彼氏を呼んで、かつ家族との顔合わせの意味。

瀧は今回、ある意味でその二つを同時に味わっていた。

ただ彼には特に緊張などはない。何分、既に四葉とはかなり仲を深めていて、更には——

「瀧くんがウチの孫の彼氏で安心や。初めて連れてくる言うもんやから、ちよつと身構えてたんやよ」

「朝のお婆ちゃんが三葉のお婆ちゃんだったのか……偶然つてすごいですね」

——今朝、瀧が助けたお婆ちゃんこと宮水一葉が彼のことを気に入っているからだ。

……先ほどの三葉のオハナシを経て、四葉が色々な空気を壊した後、四葉に事情を説明した瀧であった。その後、一葉が家に帰ってきて初顔合わせ——となるはずが、既に瀧と顔を合わせていたため、それも省略。

三葉もそれを知らなかったため事情を話すと驚いていたが、しかし恋人である瀧が一番の関門である一葉に気に入られていたことに安心した……というよりも、素直に嬉しかった。

今は一葉の前に瀧を中心として右に三葉、左に四葉が彼を挟むように座っており——

「つていうか四葉、なんであんたが瀧くんの隣におるん？」

「それは……ほら、将来のお兄ちゃん候補だし？」

「お、お義兄ちゃん候補……そ、それならしょうがないね！」

三葉は分かりやすく顔をニヤけさせて、四葉の言うことに納得する。全く以つて、単純な姉だと思いつつ、彼女もまた三葉の恐ろしさを知っているため、そんなことを口にも出さないが……。

ちなみにその時に四葉と目があつた瀧は、彼女の考えていることを理解できたのか、苦笑いをして彼女の肩にポンポンと手を置いた。

……三葉からすれば失礼な話であるが、今回と前回の一件でより一層仲良くなつた四葉と瀧。恐怖の共感とは、このように結束力を高めることになるのだ。

「そ、それでお婆ちゃん。私、この瀧くんとお付き合いをしてるわけ……偶にでいいから、瀧くんの家にお泊まりしたいな——とか思つてるんよ」

「……まあええんちゃうか？　そもそも三葉はもう大人や。それにその子なら、三葉を無闇に傷つけはせんやろ」

一葉の視線が三葉から瀧に向かう。それは鋭い視線というよりも、彼を試しているような視線であつた。

……もちろん答えは一つだ。

「その、偶にちよつと三葉を怒らせたりはするかもしれませんが——絶対に大切にします」

「……やつたら、別にお婆ちゃんから言うことはないわ」

一葉は湯飲みに入っているお茶をズズツと飲んで、それ以上は特に何も言わなかつた。

対する三葉はホツと一息ついて、瀧の方に身体を少し寄せた。椅子の下で手を握ると、瀧は三葉の手を握り返す。

それをチラツと見ていた四葉は何とも言えなくなって、プクツと頬を膨らませる——と、同時に何かに閃いたように机をバンツと叩いて立ち上がった。

「わ、私もお姉ちゃんと同じで偶に瀧くんのお家に外泊したいんよ！

ほら、やつぱり将来のお兄ちゃん候補とは仲良く——」

「そんなアホなこと言うてる暇あつたら彼氏の一人でも見つけ。それにあんたは高校生で子供やろ」

……少しキツめの一葉の一言で一刀両断される四葉——それを見ていた瀧と三葉は苦笑いを浮かべるのであつた。

ともあれ、瀧はこれで今日の役目を無事に果たせたと思つた。そろそろ時間も良い頃で、そろそろお暇しようと荷物を持つとうとする——

も、その荷物は三葉と四葉の巧みな連携によって部屋の隅に放り投げられた。

さらにその手を二人によって握られ、動きを完全に拘束される。

「……は？」

「ダメやよ、瀧くん。今日は心置きなく宮水家を堪能してしてもらはんやよ」

「いやいや、もう充分……ってちよつと待て。それってもしかして――」

瀧は三葉の言いたいことを理解したのか、少し狼狽しながら答えを言い当てようとした時、宮水姉妹は悪戯な笑みを浮かべ――

「ねえねえ瀧くん。どうして今日四葉がお家にいなかったと思う？」

「し、知らねえよ。それよりも」

「――瀧くんが無事お婆ちゃんに認められた後です、瀧くん歓迎祝賀会のためなんだよ？ その食材とかの準備でいなかったんだ――
――これはもうお泊まり決定だね！」

……瀧の予想が的中する。

――彼女の家の初訪問に加え、初お泊り。しかも保護者と妹付きという、なんとも言えない状況になってしまった瀧であった。

●○○●

瀧はリビングで居た堪れなくなり、今はキッチンで四葉と隣り合つて食材の調理をしていた。今日の晩御飯はみんなで突けるといふことで、親睦を深めるためにお鍋をすることになった。

そして今日の調理当番は四葉だったらしく、今は野菜を切つて調理をしており、瀧はボールに鶏と豚の挽肉をミンチ状にして、何かを作っていた。

……ちなみに今日に関しては、三葉は全力で四葉と調理当番を代わって欲しいと思つていたりする。

「瀧くんは何作ってるの？」

「ん、つくねだよ、つくね。昔父さんがよく作ってくれたんだけど、鍋になら合うかなって思つて。丁度材料も揃つてたし」

「へー。お姉ちゃんが言つてたから知ってるけど、結構料理するんだ

ね」

「お前は逆に出来るのがめっちゃめっちゃ意外だけどな？」

「あ、それ失礼だよー。花のJKなんだから、料理くらいはね」

……四葉は楽しそうにそう軽口を叩きながら、瀧と楽しく料理をしていた。ちなみにその光景を見ていた三葉は羨ましそうな目で四葉を睨んでいるのだが、それを四葉が気にすることは無い。

ただ、瀧と四葉の触れ合いと雰囲気は兄妹であると言われても不思議ではないほど自然であった。

「あの子はあれやな。宮水の女と相性がええなあ。四葉もよう懐いとるわ」

「ううー。あれは懐きすぎやよお」

「しゃんとしない。心配せんでも、あの子にはあんたしか映つとらんよ」

「それはわかってるやけどさー」

家族にしか見せない顔を三葉がするのを、瀧は横目で見て、不意に微笑みが漏れる。

あまり自分には見せない顔だ。たぶん四葉にも見せない、三葉の一葉にだけ見せる顔。

それを見ただけでここに来た意味はあつたと瀧は思った。

……ただまあ、彼も全く学習しない男ではない。三葉の許容範囲で四葉と親交を深めつつ、お鍋の用意をすること数十分。

瀧と四葉は下準備の済んだ食材を鍋の中に綺麗にいれて、そこに割下を注いでリビングの座敷のテーブルに設置してあるガスコンロに持っていく。

三葉によって既にお皿やお箸、お茶碗の用意はされており、そして——つつがなく、親睦会を兼ねた食事は進んでいった。

……ちなみに——

「そういえば、俺何気に三葉のお父さんに挨拶してないんだけど、大丈夫なのか？」

「あんな馬鹿息子、文句言うて来たらお婆ちゃんが言うたる」

「え、でも——」

「そうそう、それにうちは女家系だから、お父さんは肩身狭いんだよ？
特に糸守から出てからは頭が上がらないんやよ」

「感謝はしてるけどね。でもお兄ちゃん認めないなら、絶交とかい
えば何とかなるよ？」

「あ、そう——とところで四葉、ちやつかりお兄ちゃんって呼ぶの止めろ
よ。しかもそれ、確実に義理って言葉は入ってないだろ」

……瀧は心の底から、まだ顔も見たことのない三葉と四葉の父親に
同情するのであった。

——彼は覚えていないだろうが、そんな父親の胸倉を勢いよく掴ん
だことがあるのだが、そんなことを瀧が知る由もなかった。

ともかく、楽しい鍋パーティーは平和に進んでいった。瀧はこのと
きで完全に宮水家の女性陣とさらに仲良くなったのだった。

……彼女たちの父親よりも心が開かれているなどは、口が裂けて
も言わないが。

○●○○

——結局泊まることになった瀧であるが、今は風呂を済ませて三葉
の部屋……ではなく、畳の敷かれた一葉の部屋にいた。

なんでも一葉が瀧に話があると少し前に言って、それならばと瀧は
快諾して現在に至る。

なお三葉は今、お風呂に入っているためこのことを知らないのであ
るが。

「そないところに突っ立つとらで、はよ座りや」

「あ、ありがとうございます」

「別に敬語はええ。あんたもワシの孫みたいなもんやからなあ」

「……ならそうするよ、婆ちゃん」

瀧もその方が何故かしつくりと来たため、言葉に甘えることにし
た。

畳の上に胡坐を掻き、何故一葉がここに自分を呼んだのかを考え
る。もしかしたら実は自分のことを三葉の彼氏と認めていない？

なんて考えたりと複雑な心境になっていると、見抜いたように一葉が
言った。

「心配しない。別にあんたと三葉の交際についてとやかく言うつもりはないんやから」

「それなら何で——」

「——礼、言いたくてのお。三葉を幸せにしてくれて、ありがとうと言いたかったんやよ」

……瀧は、礼を言われるほどのことをしていないと思った。しかし、それを言う事は出来なかった。

何故なら一葉は、心の底からそう言っていたから——そんな真摯な態度の一葉の言葉を、否定することが出来なかったのだ。

「……糸守。ワシたちは代々あの地で神様と人間を『ムスブ』巫女の役割を賜っていたんやよ——まあそれも、あの一件でお役目御免になっってしまったんやけど」

「……ティアマト彗星の隕石落下」

「そう。あの災害でワシらはお役御免になった。んでな——あの時くらいからや」

……一葉は畳の一部に刺繍されている組紐の模様をなぞりながら、憂いた表情をしながら話し続ける。

「あの時から三葉はいつも何かを探しとった。形も何も無い、自分でも覚えとらん『ムスビ』を求めてのお……いつもどっか寂しげで、見てるこつちが寂しくなるくらいに——でもあんたと出会って、三葉は本当に幸せそうに笑うようになったんやよ」

「……それは、俺も同じで」

「そう——それがムスビや。例え何かの拍子で断られた糸も、もう一度結び直せば繋がる。そうやってあんたたちは、なるべくして出会ったんやと、ワシは思ったんやさ」

一葉は一つ、赤と橙色を基調にした組紐を取り出して、瀧に渡した。瀧はそれを受け取ると、どう反応してよいか分からなくて一葉の顔を一度見る。

「……ワシは元気やけどな、たぶんそない長くない。あの子らには言うとらんけどなあ」

「——どうして、俺に？」

「……あんたになら、三葉も四葉も任せてもええと思ったんやよ。一目見て、そう確信したわ——もし遺言残すなら、俊樹にあんたのこと絶対認めろって書くくらいや」

一葉は冗談交じりに笑いを交えるも、瀧は言葉の重みを感じた。

……反応は鈍い。突然こんなことを言われたことに驚いているというのもあるが、それ以上に——彼女からの『ムスビ』の話に何か面影を感じたのだ。

……瀧は考える。ここまで一葉に見込まれて、なんて言葉を返したらいいのだろうと。

「……何も言わんでええよ。こんなこと急に言われたら、困るんは分かってたんやさ。でもどうしても、言うときたくてな」

——考える。考えて考えて、瀧は考え抜いた。

正しい答え何てまるで分からない。そもそも何が正しいのかなんて分からない。

何を言っても軽く聞こえてしまうのではないかと、何を言っても肯定されてしまうのではないかと。

瀧は考えた——真に一葉を安心させることが出来る、心に響く『ムスビ』の言葉を。

……いや、そもそも考えるまでもなかったのかもしれない。

——瀧が次に口を開いたとき、瀧の口から発せられたのは考えていた言葉なんかではなかった。

それは自然に口から出てしまった、何気ない何の変哲もない言葉。それは……

「——ずっと、幸せでいるよ」

——それは「する」ではなく、「したい」であった。

「この先何があるかは分からないけど、でも俺たちは何だって乗り越えられると思うんだ。理由は分からないけど……何かさ、俺たちはもっと大きなものを乗り越えてきた気がするから」

その正体は分からなくとも、断言できることを瀧は続ける。

「だから、その——婆ちゃんが生きてる間に、三葉の晴れ姿を絶対に見せるから。そのために色々頑張るし……あ、でもこれって」

「——約束やで。言質、とったんやよ」

……一葉は心の底から優しいと表現できる表情で、瀧の頭を撫でる。

瀧は何かを言おうとするも、しかしその優しい手つきで何も言えない。

——どこかで知っている感触だ。何故かは分からない。それでもこの優しさを、俺は知っている。

……瀧はそう心に思いながら、しかし発言に後悔だけはしていなかった。結果的に瀧は言いたいことを集約し、言ったのだから。

「……そうか。あんたが——」

……一葉はふと、何かに気付いたような表情になる。

しかし、それ以上は彼のの前では何も言わず、「そろそろ三葉の元に行きない」と言って、瀧を部屋から退出させた。

部屋には一葉が一人だけいて、そして小さな声で

「……やっと見つかったんか——あんたは幸せ者やよ、三葉」
そう、呟いた。

●○○●○○

瀧は三葉の部屋に来て、二人で就寝用の服に着替えてベッドの上で隣り合っていた。

しかし、三葉の様子が少しおかしいことに瀧はすぐに気付く。

「三葉？ ちょっと顔、赤くないか？ それに何か距離も近いし……」
「べ、別にそんなことないよ!? た、瀧くんといるときはいつもこんな感じだし!」

「いや、それにしたって何かいつもより——」

「そ、そないことより早く寝よ!? ほら、布団に入るんよ!」

三葉は何か慌てるように瀧を布団の中に引っ張り、電気を消す。瀧は三葉の行動が昼の時とは違い、余裕がないように見えて訝しく思った。

……しかしそれよりも

「お、同じ布団で大丈夫なのか?」

「……いい、一回だけやけど、一緒に寝たでしょ? それに今日は……」

ずっと、こうやって」

……三葉は横になつて、瀧を真正面からギュツと抱きしめる。お腹から背中に向けて手を回し、これでもないほどに密着した。

——この一連の行動は、三葉が瀧と一葉の最後のやり取りをこっそり聞いていたことが由来する。

要は簡単に言つてしまえば——瀧が三葉と結婚したいということ。を他の誰でもない一葉に断言したことが、どうしようもなく嬉しくて、瀧が愛おしくて堪らないのだ。

触れたい、キスしたい、もつと先の繋がりが欲しい……昼間よりもその欲求が強い三葉だが、しかし今は瀧からたったの一瞬でも離れたくないため、それが出来ない。

……更に強く彼を抱きしめる三葉。そんな三葉を見て、瀧は追及を諦めたのか抱きしめ返した。

「——抱きしめていてほしいんやよ」
「あのな、三葉。俺だって男で、こう密着されたら反応しちゃうんだよ」

「……き、気にしないから大丈夫！　むしろ反応されて嬉しいっていうか……で、でも今日はダメ!!　色々あり過ぎて、たぶん今日しちゃったら心臓がドキドキで破れるんやよ!」

「——そんなはつきり言うなよ、まったく」

三葉の暴走発言に頭を抱えるように瀧は溜息を吐く。

……三葉の割と大きな胸の感触を何とか耐えながら、瀧は彼女の髪の毛を梳いた。

「——俺だから我慢できるんだからな？　他の男だったら、もう襲つてるんだから」

「……いいもん。瀧くんしか知りたくないんやから……っ」

「だーかーら!　——我慢してるんだから、そんなこと今は言うなよ。襲つちまうぞ?」

「……して、み、……みたら?」

「さつきと言つてることが逆転してんじゃん、この馬鹿娘は」

「ば、馬鹿とは失礼やよ、アホ——」

——最後まで言い切ることなく、三葉は瀧に襲われるような形で、抱きしめられながらキスをされる。

それを受けて、もう何も言えなくなってしまう三葉。

……瀧はそんな三葉の頭を、先ほどの一葉のように優しく撫でてあげた。

「……今日はもう、寝よう。ほら、三葉が寝るまでこうやって頭撫でていてやるからさ」

「……ありがとう。思ったんだけど、瀧くんってさ——絶対に、良いお父さんになると思う。面倒見よくて、かつこよくて、たまに家事してくれて、子供たちに好かれるいいお父さんに」

「——お前だって、絶対に良いお母さんになるよ。綺麗だし、料理上手いし、裁縫できるし、優しいし……おまけに面倒見がいいし」

……二人は少し寝ぼけながらそう褒め合うも、その会話が何を意味しているのか、まるで理解していなかった。

だけどそれは確かに——いや、これ以上は蛇足だろう。

瀧に頭を撫でられながら、三葉は次第にウトウトと眠気に襲われる。そんな三葉を瀧は微笑んでみて、そして——いつの間にか二人は、眠ってしまった。

……その日の夢は不思議なものであったと瀧は、そして三葉は思った。

——瀧が見ていたのは、三葉が見ていたのは互いの夢であったからだ。

瀧が見る夢は、恐らくは三葉の高校生の時の夢。自分には知りもしないはずの景色を、瀧は見ていた。クラスで三葉の陰口を叩く胸糞悪い同級生に対して、机を蹴り飛ばす三葉の姿を見て、瀧はふと「あいつにもそんなときがあったのか」と笑う。

三葉が見る夢は、瀧とあと二人、仲がよさそうに歩く三人組の男子の姿だった。瀧は一人の男子に肩を組まれてまるで女子のように恥

ずかしがって顔を紅潮させている。そんな少し可愛げのある瀧を見て、三葉は少し瀧が可愛く映った。

それから様々な景色を二人を見て、それを見て何故か——懐かしい、と感じた。

——何故知りもしないことを、夢で見ることが出来るのか。それについて疑問を抱かず、二人は次第に意識を覚醒させていった……

「——ん……なん、だ？ この感触……」

瀧は目を覚ました。周りを見ると、外は既に薄明るく、首を部屋の時計に向けると、そこには短針が6の数字を示していた。

……瀧は朝ということを認識した上で、手の平に感じる艶めかしく弾む『柔らかい感触』について考える。握って離してもすぐに元に戻るその感触は素晴らしく、瀧は無意識に何度も強弱をつけて揉んだ。

その度に何か声を押し殺したような喘ぎが聞こえた。

「んん……なん、やおお？ んんっ」

……んん？ つと瀧は次第に状況を把握していく。

——先日三葉と同じベッドで寝た。そして今は、手には割と大きい何か柔らかいものがあり、更にそれを揉むことで聞こえる艶めかしい喘ぎ声。

——瀧は気付いた。抱きしめて寝ていたはずの三葉のパジャマが、いつの間にか胸元だけはだけていることに。

更に自分がそれを——三葉の胸を、服越しどころか直接揉んでいることに。

そして——三葉が既に起きてしまっていることに。

「瀧、くん……いつ、まで、触つ、てんのお？ もう、私い……あんっ」

瀧は固まる。しかし胸は揉む。何故だか分からないが、瀧はこの感触が手に馴染んでいた。もはや吸い付くと言ってもいい。

しかし彼はまだ気づかない——

「——それに、お尻になんか、固いもん、当たってるんよお……」

——男性の朝の生理現象を、思い切り三葉の臀部に押し付けていることを。それに気付いたとき、瀧は血の気が引いた。

瀧はすぐさま三葉の柔らかい胸から手を離し、バツとベッドから飛び落ちる。そのまますぐに立ち上がり、服がはだけた三葉を見た。

——三葉は紅潮した上に蕩けた目で瀧を見つめる。寝ぼけていることと、朝からの強い刺激によるものだが、それが艶めかしさを助長していた。

その上で三葉は——

「——瀧くんの、えっち……」

——さて、お気づきだろうか。

半裸の三葉、現状の瀧の状態。こんな状態で第三者に見られれば、どうなるか。

そしてこの家にいる、好奇心の塊のような少女の名前を。

——瀧はギギギっと、部屋の扉を見た。……そこは、数センチほど空いていた。

そしてそこから部屋を覗くように見ている、眼を。

「……た、瀧くんとお姉ちゃんが、あ、朝チユン……——一度ならず二度までもごめんなさいー!!!」

「ちよ、四葉待て！ これには深い事情が!! ってか朝チユンじゃないからな!?!」

「嘘や! お姉ちゃんおっぱい揉まれて喘いでたもん! ちよっと嬉しそややったもん!!」

「……ほえ? ——よ、四葉あ!? あんたまた私の部屋覗いてえ!!」

「気付くの遅い!?! それと本当にごめん三葉!!」

——朝から宮水家は騒がしい。そんな三人の騒がしい声を聴いていた別室の一葉は、お茶をズズっと飲みながらふところ呟いた。

「——若いつて、ええのお」

——その後、三人が何とも言えない状態になったのは言うまでもなかった。

再会編

再会×再会？

「こうやって三人で集まるの、何気に久しぶりじゃね?」

「まーそうだな。俺だけ瀧と司とは別の職場だからな。だけど噂聞いたから、流石に瀧には色々聞いとかないといけないよなあ?」

「あ、それはモチ——ってことで全部吐けよ、立花瀧くん」

「——るっせー。ってか何でこんなことに……」

——仕事終わり、本日瀧は同級生であり同僚でもあり親友である藤井司と、これまで同級生であり親友である高木真太と共にお酒を飲みに来ていた。

本当は三葉との約束がありそちらを優先したかったが、しかしながら最近はずっと三葉ばかりに構っていたため、三葉から「友達は大事にしないとかかんよ! 私は……良いからさ? あ、でも後で電話はしようね!!」と言われたのだ。

そのため家族サービスならぬ親友サービスをすることになった瀧なのだが、やはり彼らの関心の焦点はやはり瀧の彼女についてのこと。

司はある程度は瀧から聞いているものの、核心的な部分は未だに知らないのだ。もちろんそれは真太も同じで、これまで彼女を作ってこなかった親友の彼女については色々知りたい部分はあるのだ。

場所は以前、瀧が三葉と訪れた居酒屋で、個室タイプの店だ。あ那时的のデートから既に三ヶ月にも近い日が経っている。時間の流れの早さに瀧は驚きつつも、しかし幸せな日々をすごしていることには間違いないので満足ではある。

「それで瀧さ。俺的にはその難攻不落の瀧を落とした彼女さんが気になるわけなんだ。なんか写メとかかないのか?」

「写メ? えっつと……」

瀧はスマートフォンを操作し、スクロールして画像を検索してい

く。

……基本的に三葉とのツーショットは多いが、割りと見せるには覚悟があるイチヤイチャしている写真が多いため、当たり前障りのないものを探す。

——しかしながら三葉はどんな写真でも可愛いな、なんて思いつつ、瀧が幸せそうな顔をしていると……

「おうおう、幸せそうな顔しやがって、瀧！」

真太は瀧の肩を軽く叩きながら、満面の笑顔を浮かべる——彼といえば笑顔だ。

大らかで優しく、時には瀧のことを助けたりもした。体が大きく、体育体系の割には繊細な作業が意外と得意なのが高木真太。現在は調理師免許を取り、大学ではその他にも栄養学を学んでその資格を取って、今は飲食業に携わっていたりする。

……ザ、男と瀧は彼のことを思っているが、司と同じく親友だ。少し蔑ろにしていたことを今更ながら少し反省する。

——つと、瀧はようやく見せられる写真を見つけた。

それは瀧が初めて三葉の家に訪れたとき、四葉によって無理やり撮られた瀧と三葉、四葉の三人によるスリーショットだ。

瀧はそれを表示して二人に見せると……

「……おっと、おいおい。お前、二人も侍らせてるのか？」

「やるねー、瀧い！ しかも両方とも美人とは恐れ入ったぜ！」

「ち、ちがつ！ こっちのロングが俺の彼女の三葉で、ツインテはその妹の四葉だ!!」

……司と真太がそう言うのも無理はない。

悪乗りとはいえ、このとき何気に四葉は瀧の腕を抱きしめていて、それに対抗して三葉も反対の腕を抱きしめているのである。

それを見て、少し顔をニヤツとする二人——弄るネタを手に入れたような顔をしていた。

「しっかし、お前もよくこんな美人と付き合えたな。しかも美少女の妹付きで」

「俺もある程度は知ってるけど、こいつらの出会いも中々変なもんな

んだよ。何でも、電車ですれ違つてからの付き合いだからな」

「——運命的だな！」

「~~~~~っ!!」

二人から格好の的にされる瀧は、顔を少し真つ赤にして唸るような声を上げる。その反応が二人を更に面白くさせていることには、瀧はおそらく気づかないだろう。

……しかしながら、司と真太は心の底から楽しいと感じた。

長らく瀧とこんな風に会話をしていなかったから。ずっと瀧はそこまで楽しそうに笑っていなかったから。だから、瀧が昔のように——昔以上に自然になったことに安堵した。

「つてか妹さんってまだ高校生なのか？ その割にはお前に懐きすぎだと思っけど」

「あ？ ……あいつはなんか、小悪魔系女子だよ。すぐに悪乗りするし、三葉を弄るためにこうやってくっ付いてきたりするんだよ」

「……ああ、なるほど。そういうタイプか——瀧よ、お前って相変わらず鈍いよな」

「ああ!? 俺のどこが鈍いんだよ!! 三葉の考えてることならすぐにわかるぞ！」

「……はあ」

司と真太は嘆息し、手元のジョッキのお酒を一気に飲んだ——学生時代から、特に大学生になってからずっとそうだ。

実は瀧は大学時代、結構モテていた。彼は気づいていなかったのだが、そんな彼を遠巻きに見ていた二人はそれを知っていたのだが、瀧は他人の好意に非常に鈍感であった。

特に司は彼と同じサークルに加入していたため、彼を狙う人物を何人か知っていたのだが……瀧があまりにも彼女たちに興味がなかったため、結局誰も彼と付き合うことができなかった。

それは現在の会社でも同じであるのだが——瀧からすれば三葉がいればいいので、それはそれでいい事であるのだが。

司は彼女の妹が、瀧に対して淡い感情を少しでも抱いているのではないか、と考える。しかしそれを無関係の自分というのも気が引ける

ため、何も言わなかった。

——ふと、個室の扉がコンコンと叩かれる。

「ん？ 注文は今はないだろ。どうしたんだろ」

「あ、そろそろか——実は瀧のことをどうしても聞きたいというお方を呼んでいるんだよ」

司は眼鏡をクイツと引き上げて、瀧に対して不敵な笑みを浮かべる。瀧はそれを見て嫌な予感がした。

扉は開かれる。瀧はそこを注視してみると——そこにいるのは、少し懐かしい人だった。

……お洒落の最先端を取り入れた女性で、見た目も美人でスタイルも良い。瀧の見立てでも外見的な魅力はジャンル別で三葉に匹敵するような人。茶髪の少し巻き髪の女性——奥寺ミキは微笑を浮かべながら、彼を見ていた。

「——やつほ。お久しぶりー、瀧くん。それに二人も」

「お久しぶりっす！ 奥寺先輩はまたお綺麗になりましたね！」

「すげえ久しぶりですよ。瀧とは偶に会っていたそうですけど」

真太と司がそれぞれミキに挨拶する中、瀧は嫌な予感的中したと思わざるを得ないと感じるように、頭を抱える。

そんな瀧を見てミキは笑いながらも、彼の隣の席に座った。

「ずいぶん面白い反応するじゃん、瀧くん。久しぶりに私の顔を見てそれはひどいんじゃないの〜？」

「いや、だってほら。司が先輩呼んだ時点で、嫌な予感しかありませんか」

「ほく、言うようになったじゃん。昔はあれだけ奥寺先輩、奥寺先輩くっつけて言ってた癖にい」

ミキは瀧の横腹を肘で突き、楽しげに瀧を弄る——ミキを呼んだのは他の誰でもない司だ。彼女もまた瀧の旧知の知り合いであり、また瀧を心配する人物の一人でもある。

瀧が最後に彼女と会ったのは、去年の就職活動中の秋の頃だった。そのときに彼女が結婚することを聞いたのだが……それからもう一年に近いほどの年月が経過していた。

「言つてませんからね!! ……ほんつと、先輩は結婚してもあんまり変わらないですね」

「人は結婚したところで、大きくは変わらないのだよ——ま、瀧くんは随分変わったみたいだけど。良い男になったじゃん」

「まあ——良い彼女がいるんで、良い男になるでしょ?」

「……………そっか」

——いつか、彼女は彼に言った。

いつか、幸せになりなさいよ。ミキは瀧にそう別れ際に言ったことを思い出す。それはどこか憂いていた瀧に幸せになつてほしいから言つた言葉だつた。

……………もうそれが不必要なことを、理解する。だって彼はもうこれまでにないほど、幸せであるのだから。

少なくとも昔の彼はそんなことを自信を持つて言うことはなかったのだから、それほど彼を変えてくれた瀧の「彼女さん」に対してミキは心からお礼を言いたかつた。

「んじゃ、今日はそこんとこ、いっぱい聞かせてもらおつか——彼女についてお話なさい?」

「……………司、俺お前のこと恨むからな」

「はは、知らねえよ」

司はぶつきらぼうに手をヒラヒラとさせて、瀧の苦言をあしらう。

——それからのことといえば、三対一で瀧がひたすら弄られるというものだつた。

○●○○

——酔い潰れた司と真太を横目に、二人で飲み続けている瀧とミキである。

ミキもまた瀧と同様にお酒に強く、瀧も久しぶりということとで今日はよく飲んでいた。瀧は自分の話を赤裸々に語らせられて赤面したりと散々な目にあつたが、今では一周回つてむしろ惚気るレベルになつてくる始末である。

……………それを楽しそうに聞いているミキは、終始笑みを浮かべていた。

「三葉ちゃんってすごいね。なんていうか、女子力の塊みたいな子で」「ホントそうなんですよ。この前なんて服が破れたのをその場で刺繍してくれて——ただその刺繍が無駄に可愛くやるもんだから、もうそれを外では着れないんですね」

「ははー。それ、瀧くんが昔私にしたことと同じじゃない？ まあ私はその後もずっとあのスカート、履いてたけど」

……瀧は突然、そう言われて頭を捻る。なぜなら瀧はそこまで刺繍が上手ではないからだ。

——それはまだ瀧が高校生で、ミキが大学生のとき。同じイタリアンのバイトをしていた二人なのだが、とある客の嫌がらせでミキはスカートをカッターナイフで切られた。

そのときに瀧がミキのスカートを針と糸で刺繍——しかも無駄に可愛い模様で刺繍したのだ。そこから二人は仲良くなつていったのだが……

「——そんなこと、ありましたっけ？」

「……あつたよ。それからだもん。私が君と仲良くなつたのは」

ミキはグラスに入った氷をカランと音を鳴らせ、懐かしむようにそう言った。

「……瀧くんが覚えていなくても、私はずっと覚えていたよ。あの時の瀧くん、すつごく可愛かったから♪」

「可愛かったって……。三葉と同じこと言わないでくださいよ」

「……や、だ♪」

ミキはわざとらしくウインクして、そう言った。

——ふと、彼女の薬指を見る。そこには今日は結婚指輪は嵌められていなかった。

「……指輪、どうしたんですか？」

「あ……。めざといなく、瀧くん」

ミキは瀧の頭を軽く小突いて、少し苦笑してそう言った。

「……ちよつと旦那と喧嘩しててさ。それで今日は気分じゃなくて外してるんだ。良い人なんだけど、偶に煮え切らなくて、それで喧嘩しちやつて——行動力がないんだよね。中々私に手を出してくれな

いってどうか、大切にしすぎてるってどうか」

「……その気持ち、俺はよくわかりますけど」

……瀧もまた、三葉を大切にしているからよくわかる。きっとミキの旦那もすごく良い人で、良い人だからこそ大切にしているんだろうと思う。

それはミキも理解しているからこそ複雑なのだ。

「俺も三葉とは、実はまだその……してないんですよ」

「へえ〜……って、付き合って三ヶ月くらいだよね？」

「はい。俺もそんなに馬鹿みたいに盛ってるわけでもないですし、それに三葉とは段階を踏みたいと思ってるんで——三葉は俺を変えてくれたんです。だからこそめちやくちや大切にしていますし、彼女の嫌がることはしたくない。……って言っても、結構ぎりぎりなんですけどね」

「……意外とディーブなこと言うよね」

ミキは瀧がド直球で性事情を話してくることに苦笑しながら、鞆の中の小さな小袋から指輪を取り出す。

それをすうつと薬指に通した。

「——ありがとう。今度、旦那とゆっくり話してみる」

「……どういたしまして。でも、何のことで喧嘩したんですか？」

「あー——赤ちゃんを作るかどうかだよ」

「——すみません、気軽に聞いてすみませんでした」

瀧は事情を聞かずに軽率なことを聞いたことを謝りながら、まさか向こうも性事情であったことに赤面したのだった。

……瀧はふと思う。確かミキは三葉と同じ年であるということ。しかも働いている職業が実は似通っているということ。

ミキもまたアパレル業で働いており、今は千葉で働いていると聞いている。何かの繋がりを感じてしまう瀧だが、しかしそのことは胸にしまった。

——このことでミキが興味を持つことを、危惧したためである。彼女の行動力を考えたら、三葉に接触するところまで容易に想像できたのだ。

「……まさか瀧くんに慰められるとは。人生って何があるかわからないね」

「それ、褒めてます？ 俺には馬鹿にしているとしたか……」

「褒めてるよ？ 本当に良い男になったってこと！」

ミキは瀧の背中をバンバンと叩いて、高らかに笑う。

……ミキはやつと、自分の長く抱いていた片思いとは違う「何か」が終わってくれたと思った。

瀧と一緒に心置きなくお酒を飲むことで、そう感じていたのだった。その「何か」はミキにもわからない。

——だからこそ、これ以上瀧に踏み込むのは危険であると感じた。今の彼にあるのは魅力そのものであるから。嵌ってしまえば傷つくのは自分であるから。

……彼女からしてみれば、随分と魔性の男に成長してしまったと思っただ。

「——瀧くん、気をつけなよ？ 三葉ちゃん以外からのハニートラップからは」

「あ、はい。それはもう二度と失敗しないです。二度と三葉のオハナシはこりごりなんで」

「……あゝ、うん。察した」

ミキは少し「宮水三葉」という女性のことを知り、瀧に同情した——彼が大変であるのはこれからだと確信したのだった。

……そして久方の再会の飲み会は無事に済む。

瀧は二人の親友をタクシーにぶち込み、ミキを見送るために電車の改札に来ていた。

「今日はありがとうございました——でも今日は千葉に帰らないんですね？」

「うん。明日は東京でちよつとお仕事があるんだ。なんでも、他の会社と提携して新しいことをするもんだから、私が派遣されてね……一応系列会社ではあるから、まずは挨拶をね」

「へえ……俺も近いうちに建築の現場に行くんですよ。それで建築の本職の人たちに話を聞いて、自分のデザインに少し新しいものを取り

入れようかと」

瀧とミキは少しばかり会話をして、そうしているとミキが乗る電車が来る。

ミキは改札を潜り、瀧に手を振った。

「——また飲みに行こう。そのときはちゃんと三葉ちゃんに言わないとだめだよ?」

「わかってますよ——また、会いましょう」

「うん。……あ、それと」

ミキは何かを思い出したように、電車に向かう前に振り返った。

「——明日、しっかり挨拶しておくから安心してね?」

——それだけ言って、ミキは電車に急ぎ足で乗り込んだ。

残された瀧はというと、特に意味がわからず、外で待たせているタクシーに向かうのであった。

——親友二人の介抱など、もう手馴れたものであった。

●●●

三葉は少し会社で一人、ニマニマとしていた。

それは今日、瀧が珍しく自分から三葉を家に泊まりにこないかと言ってきたからだ。三葉はもちろんそれを即答で返信し、今日の仕事終わりはすぐに瀧のところに行くつもりである。

——そのためにまず、今日の大きな仕事をこなす必要がある。

三葉は今、一人で応接間にいた。それは今日の仕事である、千葉にあるアパレル会社の社員との打ち合わせがあるからだ。

どうやら新しいウェディングドレスのデザインを考えてほしいというものが、そのアパレル会社から依頼としてきたのだ。

だから今日、その社員の女性が来るのだが……

「——確か名前は」

三葉は先日、来たメールの名前を確認しようとしたときであった。

——コンコン、と応接間の扉が丁寧に叩かれる。そこから聞こえるのは三葉の会社の社員の声で、どうやら先方が来たらしい。

三葉はさっと立ち上がり、扉に近づくと——扉は開かれ、そこから一人の女性が入ってきた。

三葉はその女性を見て、ふと……なぜか、懐かしいという感覚に囚われた。

「初めまして、宮水三葉さん……よろしいですか？」

「は、はい！ えっと、確かあなたは……」

その女性——パンツスーツを着こなした茶髪の軽い巻き髪の女性はお辞儀をして、そして——

「——奥寺ミキです。どうぞよろしくお願ひします」

——その女性、奥寺ミキは微笑を浮かべつつ、親しげにそう言った。

二人の関係は？

——奥寺ミキさんとの打ち合わせは限りなく順調に進んでいた。

彼女はすごく優秀な人で、販売業……特にお客様の求めているニーズに深い理解を示していた。今回の私たちのしていることは結婚式におけるウエディングドレスの制作が主に占めており、彼女の会社がチャペル系の会社と提携しているため、今回のような話が来た。

私も事前に色々なアイデアがあったのでそれを議論の中で提案すると、奥寺さんは柔らかい対応でそれに同意してくれて……つという風に、打ち合わせ自体はすごく順調。

……だけどさつきから、彼女が私をすごく観察するようになってくるのが、なんとも言えない気分だった。

——最初に感じた、彼女に対する懐かしさ。それは実際に話してみても確信に変わった。この感覚は、瀧くんのおきに感じたものと少し似ているんだ。

彼女のことをもつと知りたいたいと思う反面、今は仕事だから私情を挟むことはできないのだから、ある意味で八方塞り。

……そんな風に、悶々と打ち合わせをしている最中、奥寺さんは一段落がついたからか、肩の力を抜いてふうつと息を吐いた。

「んん……ちよつと一息入れませんか？ 宮水さん……三葉さんは確か年齢は……」

「あ、25歳です」

「なら私とほとんど同じだから——ここからはダメでいいかない？」

奥寺さんはにこつと笑って、口調を崩してそう言った。そういつて髪を軽く上げる。

……すごく綺麗な人だなー、なんて思いつつも、私は彼女の薬指を見た——結婚指輪だ。

「奥寺さんは結婚しているんだ」

「お、めざといなく。流石、やっぱちよつと似るんだね」

「ん？」

私は奥寺さんの言っている意味がわからず首を傾げると、彼女は微

笑を浮かべて首を横に振って「何も無いよ」って言うってくる。

……なんか、ちよつと掴みどころのない人だ。そう思っていると、彼女は話し始めた。

「結婚したのは1年前くらいかな？ 相手は年下でね。まあ大切にしてくれてるけど、遠慮がやっぱりあるんだよね」

「年下……遠慮」

私は奥寺先輩の言葉に少し反応する。

……瀧くんは年下だからか、偶に私に気を遣って遠慮してくることがある。それは本当に些細なことなんだけど、やっぱり大切な人には遠慮してほしくないっていうか。

女心は複雑なのです。そんな風に思っていると、奥寺さんは少し瞳を輝かせて私の顔を覗いてきた。

「ほおほお、三葉ちゃんもお年頃ですな〜——意中の相手でもいるの？」

「い、意中っていうか彼氏がいるんだけど——あ、会社では内緒にしてるから、言わないでね？」

私は少し照れくさくさうという、奥寺さんは変わらない笑みを浮かべてサムズアップをしてくれる。

「私も彼氏は年下なんだ。それですっごく良い男で、特に最近はもつと良い男になったせいで結構モテてるみたいで……」

「なるほど、不安なわけかー。ふむふむ……」

奥寺さんは何かを納得するような表情で頷く。

……瀧くんのことはもちろん信じてる。信じてるんだけど、感情はまた別問題。

自分しか知っていない瀧くんの良い所を、かつこいいところを知られたくない馬鹿みたいな独占欲だ。それに瀧くんも、私に遠慮してそういう不安要素を私には絶対に話さない。

——不安だよ、瀧くん。瀧くんがどんどこよくなるのが、私にとって彼が年上の私から離れていく気がしてならないことがある。本当に偶に、ふとしたときに。

それを四葉に話したとき「そんなことあるわけないじゃん」なんて

言ってきたけど、こればかりは恋人の私にしか分からないんだ。

——ふと、奥寺さんが時計を見る。打ち合わせは大体終わり、今からお暇する時間を確認するためか。

彼女は時間を確認すると、もう一度私の顔を見てきた。

「三葉ちゃん、今からお昼休憩？」

「あ〜……ちよつと早いですけど、打ち合わせが終わりならそうだね」
まだ12時にはなっていないものの、丁度いい時間だ。

すると奥寺さんは思いついたような顔で、ある提案をしてきた。

「——もしよかったら、一緒にお昼でも行かない？ 親睦も兼ねて」

「あ……うん。私でよかったら、お供しようかな？」

私は特に断る理由もなく、奥寺さんの提案に乗ることにした。私は資料を纏めて自分のデスクに保管し、財布と小さな鞆を持って奥寺さんと一緒に外に向かった。

○●○○

私と奥寺さんが来たのは以前に四葉と来たカフェの少し距離が離れたところにある、ここもオープンカフェ型のイタリアンのお店だ。私たちは互いにそれぞれランチセットを頼み、今はその料理を待っている——そのとき、瀧くんからメッセージが入った。

『今日、仕事終わったら連絡してくれないか？ 俺も時間合わせて買い物に行こう！』

……ダメ、奥寺さんの前なのに顔がにやけそうになる。こんなメッセージ一つで喜ぶなんて、今時の中学生でもならないのに！

これって私が恋愛経験皆無だからなのかな？ ……あ、でも瀧くん以外に恋愛経験したいと思わないし——瀧くんなら、むしろ今のままでいてくれて言いそうだね。

私はそう自己完結をして、瀧くんに対して了承のメッセージを送ってスマフォをしまった。

「なーんか嬉しそうだね、三葉ちゃん」

「え!? そ、そう? ……奥寺さんって結構鋭いよね」

「三葉ちゃんが分かりやすいだけだと思うけど——それと、奥寺さんはやめない? 私のことはミキでいいからさ」

奥寺さんは少し苦笑いをしてそう言ってくる——そういえば、いつの間にか私の呼び方も三葉ちゃんになってる。

……実は私は、そこまで社交的ではない。今では少しはマシになったけど、昔に関して言えばまともな友達はさやちゃんとテツシーくらいのものだったからね。

「じゃあ……ミキさん、で」

「ん、及第点かな？　ま、いっか」

奥寺……ミキさんは少し渋っているような表情をしているけど、とりあえずは納得してくれたみたいだ。

——それにしても、社交性の塊のような人だよね。私はちよつと見た目が地味だから、こういう華やかな『ザ・東京の女』っていうのに少し憧れる。

……これを瀧くんと言ったときに「三葉は絶対に黒髪ロングな。髪染めるとか絶対に許さないから。妥協でセミロングはオツケー」なんて言われて、挙句の果てには「三葉は今が最強だから、お願いだから今のままでいてください」なんて言われて……全くもう、瀧くんは仕方ない彼氏君だよな!!

「三葉ちゃんって結構百面相だよな。苦笑いしたり、にやけたり、惚気た顔したり……可愛いなあ」

「へ!?!　今私、そんな気持ち悪い顔してた!?!」

「気持ち悪いって言うか、思い出し惚けって感じ。すつごく幸せそうな顔してた」

「うわあ……ちゃんと気をつけないと。妹にも良く言われるんだよ、お姉ちゃんは基本変な人だって」

私はついつい笑って誤魔化す。ミキさんは楽しそうに笑って、それから料理が来るまで色々と話していた。

「ミキさんは旦那さんと何してるときに一番楽しいの?」

「あく。……実はうちの旦那、根っからの真面目君でね?　割と静かな方なんだよね。だから話して楽しいというか、一緒にいてちよつと甘えてみたり、ちよつと悪戯してその反応を楽しんだり——どつちかっていうと、可愛いんだよね。私結構昔から男の子の可愛いところ

で好きになることが多くて」

「へえ〜……それなら私の彼氏には会わせられないね。瀧くん、かつこいいけど偶に無性に可愛いときがあるから」

「うお、惚気るねえ〜——ふふ」

ミキさんは何に笑っているかは分からないものの、私の惚気に付き合ってくれる。

四葉は基本的に途中でギブアップするから、中々こういう会話はできないんだよね。会社じゃあ堅物気取ってるし。

それにしても、ミキさんとは話が弾む。なんていうんだろう、こう、長年の友人のように自然に話せる気がするな。

それもこれも、彼女のコミュニケーション能力の賜物だと思うけど。

「それでそれで？ その瀧くんとやらは最近はその、どうなの？」

「どうなの、って？」

「ほら——三葉ちゃんを求めるとか、ぶっちゃけその辺りは」

「も、求めるって……」

——私はミキさんの質問の意味が理解できて、顔が一気に熱くなった。

……瀧くんは、まあ結構えっちだと思う。何気に私のことをちよくちよく性的に見てくるし、この前なんて寝ぼけて30分くらいずっと私の胸を触ってたし。

瀧くんには言っていないけど、あの時間すっごく悶々したのに、結局あれ以降は進展はない——毎度毎度、四葉の邪魔が入るのがもう無性に腹立たしいよね。

まあ少し怖いっていうのもあるけど——ってもしかして、今日のお泊りってそう言う意味合いも含んでるの!?

そんな風に思考を張り巡らせていると、ミキさんが噴出すように笑い出した。

「あはははははは！ 三葉ちゃん、面白すぎだよ！ もう考えてることが分かり易くて、可愛すぎ!!」

「へ——も、もしかしてからかったん!？」

……つい方言が出てしまう。

うう、基本的に家族か瀧くんか同郷の親友の前でしか出ないのに、油断した。

「ご、ごめんごめん……でも三葉ちゃん、本当に何考えてるのかがすぐに分かるから——でもうん。すごく幸せで、瀧くんのことをすごく想っているって理解できたよ」

ミキさんは腕を組んで、ウンウンと納得するように頷く。

……なんか、今の言い方はすごく意味深に聞こえた気がするけど、まあ気のせいかな？

そう思っただけはグラスに入るお水を飲んだ——それと同時に同時に、料理が運ばれてくる。

「お待たせしました、こちらランチセットのパスタでございます——って、奥寺先輩じゃないですか」

「やつほー高木くん。ここで働いてるって昨日聞いたから、来ちゃったよ」

ミキさんはウェイター——ガツチリした体格の、シェフの服を着た男性と親しげに話す。話を聞いている限り知り合いのようだけれど……

「ああ、ごめんね。この子は私の昔のバイト先の後輩の高木真太くん。昨日この子と他の後輩の子達と久しぶりに飲んで、ここで働いてるって聞いたからね」

「いやあ、昨日は申しわけなかったっす。あいつ、めっちゃ酒強いからついつい飲みすぎて、潰れちゃいました……」

「つ、潰れたのに次の日に元気に仕事って……」

「まあ元気が取り柄ですから——って、あれ。なんかどっか……」
その、高木さんが私を見て、どこか訝しい顔つきで凝視してくる。

……少しすると何かを理解したような顔になった。

「ああ、なるほど——奥寺先輩、相変わらず悪戯好きとかかなんていうか」

「好奇心旺盛と言ってくれたまえ、高木くん♪」

高木さんとミキさんの会話の意味は分からないから、首を傾げる。

しかし私がそれについて追求しようとする、高木さんは私たちに一札して厨房に戻ろうとする最中、私の方をみて一言言った。

「ああ、それと宮水さん？ あいつに言つといてももらえます？ 昨日は助かったサンキューって」

「え、ちよ……あいつって？」

「んじや、そういうことで——ごゆつくり、お食事をお楽しみくださいませ」

高木さんは急に営業スマイルを浮かべて、私たちの元から去っていく。

私はそのことに疑問を浮かべつつ——まずなんで私の名前を知っていたということが理解できなかった。

「えつと、ミキさん。さっきのは一体どういう……」

「まあまあ、今は食事を楽しもー♪」

ミキさんは悪戯な笑みを浮かべつつ、フォークとスプーンを両手に持って、食事を始めた。私は何か釈然としないものの、ミキさんと同じく食事を始めた——……

……食事は30分ほどで終わり、今はウェイターの人が食器を片付けたため、テーブルには紅茶の入ったティーカップしかなかった。

「ふう、おいしかった。これ、高木くんが作ったのかな？ だとしたら腕上げたなく」

「結構若そうだけど、あの子って何歳なの？」

「22歳だよ？」

「あ、それなら……」

瀧くんと同じ年なんだ、あの子。

……瀧くんと同じ年、か——同じ年？

「……あれ？」

ふと、私は思った。そういえば、どこかで彼のことをみたことがあるような気がする。

そう思ったのは、彼が瀧くんと同じ年であるということを知ったことと、どこかで彼と話したことがあるような気がしたからだ。

……高木——真太。

真太、つていうのをいつか瀧くんから聞いたことがある。

え、待って。つまり、そういうことなら――

「――ミキさん、さっき瀧くんのこと名前で自然に呼んだよね？」

「――ありゃ」

ミキさんは少し目を見開いて驚くも、すぐに悪戯な笑みを浮かべる。

……そうだ、あの高木さんは瀧くんの友達だ――高校生の頃よりも見た目が少し大人になっていたから気づかなかったけど、彼のアルバムを見たときの面影がある。

そしてそんな彼の先輩であるミキさんは昨日、彼を含めた後輩二人、四人で久しぶりに飲みに行つたと言つてた。

――そして瀧くんは、昨日親友と三人で飲みに行つてたんだ。

「……今から言う質問に正直に答えてください――奥寺ミキさん、あなたは瀧くんのことを知っているよね？」

「――ばれちゃあ仕方ないな。でも、まさか瀧くんの名前を普通に言つてバレルなんてさ」

ミキさんは苦笑いをして、素直に白状した。

「――そうだよ。瀧くんは私のバイト時代の後輩くん。昨日は司くんと呼ばれて久しぶりにあつて、色々話したから三葉ちゃんのことも知つてたんだよ」

「……やっぱり」

私はようやく全部繋がつて納得する。

ミキさんが私に対して友好的なもの、なぜか事情を知っているように話すのも理解ができた。

……私の知らない瀧くんを知っている、女性。それを聞いて、少し面白くない感情が私の中で確かに広がる。

「……勘違いしてもらつたら彼に悪いから言うけど、瀧くんは私に来ることは知らなかったからね？ 司くんがドツキリで彼に知らせてなかつたんだから」

「あ……ごめんね。その、別に怒っているとかそういうわけじゃないんだよ」

「うんうん、わかるよ？ 怒ってないけど、ちょっとつまらないんでしょ？」

……ミキさんは見透かしたようにそう言い当てる。それと同時に私って、こんなにも分かりやすいのかなって不安になった。

——ミキさんは微笑みを浮かべながら、私を安心させるように話してくれた。

「瀧くんって呼ぶのは許してほしいかな。だって私にとって彼は今も可愛い後輩だからさ。それは本当に私も妥協はできないよ——でも心配しないで。瀧くんにとって一番はどんなときでも三葉ちゃんだから」

ミキさんは大切に、言葉を選びながら話してくれる。

……それはきつと、瀧くんのことをしつかり理解してくれている証拠だ。

瀧くんがそんな中途半端なことをする男でも、簡単に流されることがないことも彼女は理解しているし、それほどに信頼もしている。っていうかもしそうでなかったらとつくに私は瀧くんを食べられてる。

……それは、私にはない瀧くんとミキさんの絆のようなもの——私はそれをほんの少しだけ妬ましく思い、でもそれを嬉しくも思った。

瀧くんの外観の良さだけを知ったように理解する人とは違い、ミキさんは瀧くんの根底にある優しさを、人間性を理解してくれている。

それは私にとってとても嬉しいものなんだ。だからこそ、ミキさんに対しては嫉妬のような感情は浮かばなかった。

……それよりもっと、彼女の口から彼女しか知らない「瀧くん」を知りたかった。

「——わかってます。瀧くんと付き合いはまだまだ短いけど、それでも私の知っている瀧くんは、私を悲しませることは絶対にしないから」

「……そっか——ありがとね」

……ミキさんは何故か、私にありがとと言った。

それが何なのかは、それは私には分からない。だけどその「ありがと」には、色々な意味があると思った。

「さつきも言ったとおり、瀧くんはすごく幸せだよ。私が最後にあったときよりもいい男になっているのが証拠——君が変えてくれたんだ、瀧くんを」

「わ、私が？」

「そう。君と出会って瀧くんは変わった。もちろんそれで三葉ちゃんがつまらないこともあるかもしれないよ？ でもね、そんなので彼に寄ってくる女は、絶対に三葉ちゃんには敵わない」

ミキさんはそつと立ち上がり、私の肩に手を置いて、そして言った。

「——瀧くんはもう変えられないから。もし変わっても、それをできるのは君しかいないんだからさ。断言してあげる。……私の男を見る目は確かだよ？」

「ミキさん……。ありがとう」

——私は出来る限りの笑みを浮かべて、ミキさんにそう言った。

私、この人となら仲良くやっていけそうな気がするよ。会って話してみても、そう確信した。

なんていうか、空気が合うんだ。ミキさんと話していると楽しいし、それはさやちゃんやテツシーとは違う楽しさ。

見える景色が新鮮、って言えば良いのかな？……そんな感覚。

「……三葉ちゃん、たぶん大丈夫だと思うけど——その笑顔、無闇に瀧くん以外に向けちゃダメだよ？」

「え？いや、絶対にそんなことしないけど……」

ミキさんが当たり前前のことを言ってくるものだから、私は目を丸くしてそう言い返す。

……するとミキさんは少し苦笑いをして——

「——これは瀧くんも、すっごい女の子に惚れられたものだね」

「ちよ、すっごいってなんやの!？」

とつても失礼に、そう言ったのだった。

○○●●

お店を出て、それでも時間があつたためら私たちは話そうと公園のベンチに座る。

……話したいことは瀧くんの昔のことだったり、後は——下世話な

相談だけど、やっぱり夜のことだった。

私も瀧くんも経験がないため、やはり一步を踏み出せない。私もその……やっぱり大好きな人とはもつと深い繋がりが欲しい。

今でも心は深く繋がっているけどさ……

「瀧くんって高校生の時は結構喧嘩っ早くてね」

「へえ……あ、でも瀧くんって正義感強いところがあるから」

「そ、弱い癖に正義感出して喧嘩して怪我することもあったんだよ？」

「……なるほど」

頬にガーゼをした瀧くんを想像する——なんかちよつと可愛いと
思ってしまう私は、病気なのでしょうか？

もう症状の名称を瀧くんシンドロームとでも名付けようか。そんなアホなことを考えていると、ミキさんがすつと顔を私の耳元に近づけてきた。

「それで、本当に聞きたいことって違うよね？」

「……うん。ミキさんって、その——経験は多い方？」

「うわ、三葉ちゃんストレート過ぎね」

「あ、ごめん！」

流石に遠慮なく聞きすぎたからか、ミキさんが苦笑いをしていた。
いや、もう引き笑いに近い。

私はすぐに訂正しようとするも、ミキさんは間髪入れず話した。

「私、見た目ほど遊んでないんだよね。そりゃあ彼氏は何人かはいたけど……今の旦那に出会うまでなら、一人だけかな？」

「へえ……ちなみに最初は？」

「あー、あれは私の黒歴史よ。緊張し過ぎてね——」

ミキさんは自分の初経験の時の出来事を話し、私は参考のために聞くも……なんていうか、最初の彼氏とは長続きしなかったらしく、経験はその彼氏と今の旦那さんの二人とのこと。

今の旦那さんとはその……それなりに数をこなしているらしく、最近では子供を作ること喧嘩したらしい。

——今更だけど、これじゃあ私、すつごく変態だよね。瀧くんのこと
と言えないよ。

瀧くんも私のこと、すっごく心配してくれてるっていうのは分かるし、嬉しくはあるんだけどね。

「ちなみに瀧くんとはどれくらい進んでるの?」

「え、えっと……接吻から同衾くらい?」

「言い方古風すぎ」

思わず出た言葉にツッコミを受ける。

……やっぱり遅いのかなあ。瀧くんも、そういう気持ちはあるだろうし——私も良い年齢だからね。

こういう時、さやちんとかには中々相談しにくいから、ミキさんの存在はありがたい。本当に。

するとミキさんは考えるように下唇に人差し指を当てていた。

「何かきっかけさえあれば、三葉ちゃんと瀧くんならすぐにも進展すると思うんだけどね」

「きっかけ……そういうえば、今日の夜に——」

——私はミキさんに、今日この後のことを言った。

するとミキさんは悪戯な笑みを浮かべつつ、私にある提案をしてきた。ただだった。

●●●

仕事終わり、俺は三葉から連絡を貰って彼女を駅まで迎えに来ていた。

今日は俺の方が先に終わったから、彼女のお出迎え……って思ったんだけど、集合場所を見るとそこには既に三葉がいた。

……どこぞの知らない男付きで。

見た感じ、親しげに話しかけられてるっぽいけど、三葉は面倒臭そうな顔で適当に相手をしている。

——ちよつとムカつく。三葉を退屈させてあんな表情にさせているあの男が。

だけどここで癩癩をあげたら餓鬼の頃の俺と変わらないし……さて。

ここは大人の対応つてもんで三葉を連れ去ろう。

あとである男のことは聞くとして——俺はさつと人混みに紛れて

三葉にバレないように近づくと。

二人と距離が近くなるにつれ、話し声が聞こえてきた。

「――宮水さん、今日皆で飲みに行くって言ってたでしょ？」

「私は聞いてないし、それに行くとは一言も言っていないでしょ？」

「いやいや、でもほら、流れつてあるじゃん？ 宮水さんってあんまり皆と飲みに行ったりしないから、君と仲良くなりたい人いっぱいいるからさー」

「――私の交友関係は私が作るから、余計なお世話。それに今日はどう予定があるの？」

「……んー、大分しつこいな。同性でも聞いてるだけでイライラする。」

つてか俺の彼女に無駄なストレス与えてんじゃねえぞ。

――やば、だんだん心の声が荒くなってきた。

すると二人の口論はエスカレートし始めていた。

「あれでしょ、いつもの妹さんとの約束でしょ？ 姉妹との約束なんかよりこつち優先してよ。同居してるならいつでも会えるんだからさ」

「……ねえ、なんで今日はそんなにしつこいの？ そろそろ面倒臭いよ」

「め、面倒臭いって！ こつちは善意で誘ってんのにさ！ そういう言い方してるから男の一人も近づかないんだってそろそろわかれよ!？」

男は三葉の言い方が気に食わなかったのか、少し言葉を悪くして宣った。それを聞いて俺は、少し苛つく。

本当に少しだけだ。だってあいつは三葉の何も知らずに、三葉の外見だけを見て接しているんだから。

――だけど、ここまで自分の彼女を好き勝手に誘って、好き勝手に言いまくってるこいつに少しぐらいやり返ししても、誰も怒らないよな？

私は会社の同僚の男性に付きまとわれていた。

元々私のことを好意的に思っているというのは知ってたし、同僚の女性社員からも「あいつには気をつけろ」なんて言われてたから、これまでずっとそういう誘いは断っていた。

「ただ最近になってやたらとしつこくなつたんだ。」

「丁度瀧くんと付き合ってから、かな？」

今は瀧くんが迎えに来てくれるからここで待つてるのを良いことに、この人はずっとわたしの前に立って今なお誘ってくる。

……下心丸見え。それにその飲み会、たぶんほとんど男しかいないんだよね。

この人の誘いに乗る女の子はこの会社の中にはほとんどいないもん。

——その会話の中で、唯一頭に來た言葉があつた。

「そんな約束なんかより、こつちを優先してよ」——それを聞いた時、本気で叩きたくなつた。

例え今日の約束が瀧くんじゃなくて四葉でも、私は絶対に約束を破らない。先約が大切なのは当たり前だし、私にとって四葉は優劣をつけられないほど大切な妹だ。

それをどうでもいいなんて言われたから、私も言葉が少し鋭くなる。

「別に会社の人にどう思われようがいいよ。それに女の子とはしつかり仲良くしてるし」

「いや、だから男と——」

「余計なお世話。それに私、あなたなんかよりも万倍も素敵な男の人、知ってるから」

……男の子って、プライドの生き物と思う。

私の周りの男性は瀧くんかテツシーくらいだけど、それでも二人は私の目から見ても素敵と思える。

もちろん瀧くんには負けるけど。

——だけど私の言葉を聞いて、目の前のこの人は明らかに顔を真っ赤にした。こんなこと、今まで言われたことがないんだと思う。

確かに見た目は整っているし、話も上手いんだろうけど——そこに

軽薄さが消えないから。

この人はいつも自分が得をすることしか考えていないから、私は嫌い。人のことを想わず自己中心的なことしかしないから、前からずっと嫌いだった。

——何を言われても気にならない。今も暴言を吐かれているけど、毛ほども気にならなかった。

「男の一人もいない癖に調子乗りやがってさ！ どうせお前みたいな女、ずっと一人なん——」

……私は下の方を向いてそれを聞き流していると、それまで機関銃のように続いていた暴言が止んだ。

それを不思議に思い、私はふと前を見ようとした時——人混みから、誰かに引き寄せられた。

そのまま私はその誰かの胸に抱き寄せられて、私はその匂いですぐ気付く。

これは——

「——で、言いたいことあるなら俺が聞くけど？」

——私の大好きな匂いだ。

男の子の癖に汗臭くない、でも男の子っぽい爽やかな匂い。

……本当に、すごいタイミングだよな。

本当に——私の彼氏って、やっぱり誰よりもかっこいい。

「お、お前何？ っていうかなんで宮水さんを抱いて……」

「どーも、うちの三葉がお世話になってます。……さっき、こいつはずっと一人って言ってたよな？」

少し怒った風に、でも至って冷静に言葉を重ねる。私の同僚はそれだけでタジタジで、でも、彼は構わなく言った。

「そんな心配しなくても大丈夫ですよ——だって俺、三葉の傍にずっと一緒にいるんで」

私を強く抱き寄せて、そして——

「申し遅れたけど——俺、三葉の彼氏の立花瀧っていいいます。仲良くする気はさらさらないけど、一応よろしくお願いします？」

——瀧くんは、私を抱き寄せたまま笑顔でそう言った。

ココロの底から、君と……

——瀧くんは私を抱き寄せ、私の同僚に対して怯むことのない堂々とした態度で淡々と話す。

……瀧君の一つ一つの言葉で私は胸がキュツと締め付けられるほど嬉しさが広がり、瀧くんが私のことを自分のものと言いたいほど抱き寄せてくると身体が温かさに包まれた。

……どうしてこの人は、いつも私が一番居て欲しいときにいてくれて、一番してほしいことをしてくれるんだろう。

なんでこんなにも、優しくてかっこいいんだろう。

——一方的に責められて、内心傷ついているときに瀧くんが私を助けてくれて。

普通の男の人なら、こんなこと出来ないよ。

「っ—かまず、良く女に対してあれだけ恥さらしなこと出来るよな、しかもこんな公衆の面前で。常識つてもんがないのかよ、あんた」

瀧くんは大層鬱陶しそうな声でそう言いながら、少しむしやくしやするのように頭を搔く。

……この態度の時の瀧くんは、割と本気で怒っているときの瀧くんだ。普段は態度に出ないのに、あからさまに態度に出ている部分がそう確信させる。

対する私の同僚は突然の瀧くんの登場と、彼の恋人宣言で呆然と口を空けていた——っっていうか瀧くん、何気にばらした!?

あ、明日から会社の先輩とか後輩とか同僚の追及は覚悟しないとね……。

——とはいえ、瀧くんがたったそれだけで言葉を止めることはなかった。追撃というか、やり返しと言わんばかりに次々と彼を問い詰めていく。

「それで、色々言いたいことはあるんだけど、時間がもったいないから何個かだけ——何で黙ってたんの？ さっきまで好き勝手に言ってたの、言っても良いよ？ 三葉に変わって俺が聞くから」

……瀧くんの低い声が同僚に向けられる。その真っ直ぐな目が逆

に同僚に対して恐怖を刻みつけているようにも感じた。

「べ、別に俺は……」

「別にじゃないんだよ。良いから、言いたいことは全部言えばすつきりするだろ？ だから俺が代わりに聞くって言ってるんだ。あんだけ自分勝手に女の子に汚い言葉ぶつけまくってたんだからさ——つていうかももう飲みに誘わないの？」

——あ、これ瀧くんブチ切れた。しかも今の言葉から事情を全部知った上で同僚に話しかけている。

いたって冷静に、でも確実に怒って。

……瀧くんが、私のために怒ってくれてる。それで有頂天になるみたいに嬉しい私って、どうかと思った。

「あ、あれだろ？ あんた本当はただの知り合いで、こ、好感度上げようと思っただけに入ってるだけだろ？」

「……矛先を俺に変えるな」

暴言の矛先を私から瀧くんに変えた同僚。瀧くんはすぐにそれに気付いた。

瀧くんは更に声を低くして、もはや態度を隠そうとせず威嚇するように続ける。

「くっだらねえプライド傷つけられただけで人の大切な人を傷つけて、しかも自分の都合の良い妄想押し付けんな。あんたが三葉をどう思おうが、こいつは俺の女だ」

「お、俺の女……」

私は瀧くんの言葉について照れくささと嬉しさが混じって嬉し笑いを漏らしてしまう。

……同僚は、この場からすぐに去りたいと言わんばかりに私に目を向けていた——情けない目だった。

知らないとはいえ、年下の瀧くんに対してしどろもどろになっっている。それに加えて、さっきまで好き勝手暴言を吐きまくっていた私に助けを乞うなんて……怒りを通り越して呆れちゃうよね。

——瀧くんが、彼が私に視線を向けていることに気付く。その瞬間、盛大な溜息を吐いた。

「な、なんだよ……ッ！ あ、もしかしてあれか!? 宮水さんが飲みに行ったら、俺に墮とされるって思ってた必死に追及してんの!? はははっ、つまんないな、お前！ 宮水さんもこんな男より他の男の方が良いよ！」

……私の温かだった心が、煮えたぎるくらいの怒りに包まれる。

——私のことだったなら、いくらでも我慢できた。でも、でも！

瀧くんのことを馬鹿にされて、何も言えないなんて私には出来ない

！ 私は瀧くんから離れて同僚の頬を叩こうとした。

——でも、瀧くんは私を離そうとしなかった。

「……ふふ……っ。あはっ」

——その代わりに、瀧くんは彼の発言に対して声に出して笑っていた。

……本当に可笑しそうに笑っている。たぶん、本当にツボにはまったんだと思う。

瀧くんはひとしきり笑い終わると、すっと同僚の方を見た。

「な、なんだよ？ 何笑って」

「いやいや、笑うなっていう方が無理だろ、これ——そんなんで墮ちるようならとつくに三葉はお前の彼女だっつー話。三年も一緒に働いて何もないんだぜ？ いい加減脈ナシだって今時小学生でも気付くっての」

——同僚は恥をさらして、顔を真っ赤にした。

「そもそもさ、別に俺は三葉が飲み会に行くことを反対してるわけじゃないぞ？ 誘って、三葉が行きたいんなら行けば良いと思うし、例えば彼氏でも三葉の交流に口出しする権利はない」

瀧くんは「でも」と続ける。

「そうじゃないんなら諦めてくれ。それと、三葉を傷つけないでくれ。こいつ、黙って一人で傷つくタイプだから——それだけはお願しい」

「……っ」

……瀧くんは終始、大人の対応だった。同僚は瀧くんの対応に言葉を出せず、ただただ居心地が悪い表情をしているだけだった。

あれだけ煽られて、瀧くんはそれでも私を第一に考えて怒りをぶつけることをしなかった——私、ダメだね。瀧くんに止められなかったら、きつと叩いてたもん。

「な、なんだよお前……。ふ、ふぎげ——」

——同僚は慌てて瀧くんに言い寄ろうとした瞬間、周りを見た。

……彼に、複数の視線が突き刺さる。その中には私の会社の人も混じっていた。当然、この駅は私の会社の最寄り駅だから当然だよな。

周りの冷え切った視線に気付いた瀧くんは、私の手を引いて彼の横を通り過ぎる。

……その途中、瀧くんは同僚と私にしか聞こえないほど小さな声音で呟いた。

「——せいぜい明日からは真面目になれよ。じゃないと立場失くすからな」

——瀧くんは、そうして私を連れて人混みに入っていく。

……ただ、私の手を握る手は、ずっと強かった。

○●○○

……正直な話をすれば、瀧は言葉には出来ない感情を抱いていた。その正体を彼が知ることはない。

——それはちよつとした怒りと嫉妬。

同僚の心無い言葉に、瀧は本当は怒っていた。だけどあの場でそれを露わにすれば同僚の思う壺だったからこそ、瀧はその感情を押し殺して笑った。

「お前なんかと一緒にするな」「俺の方が何倍も三葉の良いところを知っている」

……そんな言葉が彼の本当に言いたかったことだろう。

それが怒りの正体。

——そして、理屈ではないが、瀧はついあの同僚の言葉で想像してしまっ

三葉が、自分ではない誰かと添い遂げる想像を。それをしてしまっ

て、心の底から悲しくなったのだ。

……だからこそ瀧は三葉の手を決して離さず、彼女の手を引いて歩

き続ける。

「……………」

そんな瀧とは裏腹に、先ほどの出来事により瀧のことをどうしようもなく恋しく想っている三葉は、そんな瀧のことを心配していた。

その強く握られる手から感じるのは、いつもの優しさだけではないことをすぐに理解できた。

むしろ——いつもより三葉という存在を、あらゆる意味で求めていると。そう感じ取った。

だからこそ、三葉は瀧に委ねるように無言で手を引かれ、彼についていく。

瀧の家の最寄駅に着き、駅を降りて二人は歩く。

「……………」

流れるのは、無言の時間。

しかし——二人はその無言の時間を苦には思わなかった。

……瀧は三葉のことを考えて無言になり、三葉は瀧のことを想って無言になっている。

そのことを心の底で無意識に理解し合っているからこそ、だ。

……本当ならば、この後に二人で買い物をして、そして家に帰るはずであった。しかし瀧はその予定を崩して、真っ直ぐに家に向かった。

部屋の鍵を開け、家に入り——玄関の扉が閉まった瞬間、瀧は荷物を放って三葉を抱きしめた。

「えっ？ た、瀧くん？」

三葉は瀧の突然の行為に少し動揺し、彼の名前を呟く。

しかし瀧からは何も返ってこない——返ってくるのは、三葉を求めのように彼女を抱きしめる強さだけ。

……三葉はそれを理解したのか、ふっと息を吐き、そして瀧のことを抱きしめ返した。

そして、そういえば、と思い出す。

「——ありがとう、瀧くん。さっきは瀧くんが来てくれて、ホントに嬉しかったんやよ？」

それはまだ三葉が瀧に礼を言っていなかったこと。三葉がそう言う
うと、瀧の力はまた強くなる。

……しかし、三葉はそれが苦しいとは思わなかった。むしろ心地良
いとまである。瀧が自分を独占してくれているということが、どうし
ようもなく嬉しかった。

——これまで瀧が自分に対して嫉妬のようなものを分かりやすく
抱くことがなかったため、その感情を向けてくれることが嬉しいの
だ。

三葉は瀧を包み込むように優しく抱きしめると、瀧はほんの少しだ
け力を弱めた。

「……三葉の気持ち、ちよつと分かった気がした」

……瀧はポツリと呟く。

「三葉が魅力的なのは誰よりも知ってるし、モテるくらいずっと前か
ら知ってたのに——それを目の前でされて、あんな人目の多い場所で
それに対抗してしまうなんてさ。駄目だな、俺」

「そんなことないよ。瀧くんは大人の対応だった。怒鳴り散らしても
誰も瀧くんを責めないのに、どうして瀧くんはあんな対応を取ったの
？」

三葉はそこだけが分からず、瀧にそう尋ねた。すると瀧は少し考え
込む様に三葉から視線を外す。

……そして少し照れを見せながら言った。

「——だってあそこは三葉の会社の人も通るところだろ？ 下手に俺
が感情だけで突っ走れば、それは後で三葉が困る状況になると思っ
てさ。だから」

……三葉は、瀧の言葉を聞いて、思った——やっぱり、この人より
魅力的な男なんて、もう二度と現れないと。あんな状況でも瀧は三葉
のことを第一に考え、そして三葉が一番傷つかない対応をしたのだ。

もしあそこで瀧が同僚を辱めるだけの責め方をしていたら、きつと
同僚は三葉を逆恨みしていただろう。そうすれば社内における三葉
の立場が危うくなる可能性だってある。

だけど、あの対応は確かに同僚に反省させるほど効果的であった。

特に最後の忠告に関しては、同僚も瀧に感謝をするほど。

もしあの場であれ以上の言葉を発していれば、同僚も完全に社内での立場を失くしていただろう。今回程度の傷で済んだのは、瀧のあの対応があったから。

——そう思うと、三葉は瀧のことが更に愛おしくなる。

「——ほんつとうに、ずるい。瀧くんって私を何回惚れさせれば気が済むん？」

次はやり返しのように三葉は瀧を強く抱きしめる——全ては三葉のため。瀧は常に三葉を守るために行動し、彼女を尊重して、そして彼女を想う。

三葉はそんな瀧のことを心の底から今——愛していると想った。

……瀧は三葉の言葉を聞いて、ついふふつと笑みが漏れる。

——それはこつちの台詞だ、と言わんばかりに。

あの時、三葉はそれまで自分のことでも何か言われても何も気にしなかったのに、瀧と四葉のことを悪く言われた時だけ感情を爆発させた。

……それがどれだけ瀧にとって嬉しかったことか。それをきくと、彼の愛する人は気付かない。

瀧は三葉の華奢な体を、次は逆に優しく包み込んだ。

「——何度でも。三葉の好意なら、何度でも欲しいかな？」

——そう、穏やかな声音で呟いた。

……抱き合うことに満足した二人は、近くのスーパーに食材を買いに行く。元々は帰りに行く予定であったが、例の理由でそれができなかったため、今は瀧は普段着に着替えて二人手を繋いで買い物に行っていた。

今日は二人で料理をすると瀧は決めていたため、そのための食材を買い揃え、最後に昔から瀧が使っている精肉店に向かった。

「いらっしやい——お、瀧じゃん。久しぶりだな、来るの？」

「はい。ちよつと久しぶりにここで買おうかなって思ってた」

「こつちとしては有難いことで——んで？ 隣の子は彼女か？ これ

見よがしに手繋いでんだから、違うとは言わせねえぞ？」

精肉店の若作りの店主は少しニヤけて瀧にそう言うと、特に隠そうとしない瀧は笑顔を浮かべて肯定した。

「ま、そういうことつす。いいでしょ、うちの彼女可愛くて」

「……まあ、瀧もやるもんだなあ。いつの間にこんな上玉引つ掛けられる良い男になったのかねえ。おっちゃん時間の経過を感じて、しみじみとしてるわ」

店主はわざとらしくしみじみとしている。その光景を黙ってみている三葉は、その二人の会話を聞いているだけで楽しくなった。

——店主はテキパキと注文された肉を包み、更におまけをつけて瀧に渡した。

「こいつはおまけだ。その可愛い彼女ちゃんのためのおまけだからな？」

「わかってますって。おっちゃん、女の子にしかおまけしないもん」

「嘘つけ。そんなこと言いつつ、お前にはいつもまけてやってんだろうよ——ああ、それと。お前のとこの親父に伝えとけよ？ 偶には帰って酒でも誘いやがれって」

「はいはい——んじゃ、また来ます」

「おう、次も彼女連れこねえとまけてやんねえからな！」

店主はそう笑顔で言うのと、瀧は少し頭を下げてから三葉を連れて帰路につく。

その最中、ふと三葉は瀧に尋ねた。

「すごく仲良さげやったけど、昔からの知り合いなの？」

「ああ。父さんの幼馴染でさ。昔からお世話になってるんだよ。最近はあるまり行ってなかったから——なんか父さん以外では親父みたいな人だから、ちゃんと三葉を紹介したほうが良いかなって思っ」

「——まだ私、瀧くんのお父さんに会ってないんだけどね？」

「あ、あはは……。あ、でも父さんは絶対に三葉のこと気に入ると思っ。あの人、基本愛想の良い女の子はめっちゃ気に入るから」

そんな会話をしながら二人は家に着き、そして楽しみながら二人で料理をした——瀧が二人で料理をしようと思ったのも、前回、瀧と四

葉が楽しそうに料理しているのを恨めしそうに彼女が見ていたのを知っていたからであった。

○●○○

食事も終わり、瀧と三葉はソファアームに腰掛けていた。

……三葉の太ももの上に瀧は頭を乗せて、耳かきをしてもらいながら、二人は少し話していた。

「そういういえばさ、今日一緒に仕事してた人がすごく綺麗な人だったの」

「へ〜……。あ、もしかして他の会社からの人と打ち合わせするって言ってたの？」

「うん。それですごく仲良くなっけさ——私とほとんど同年なんだけど、結婚してたんだよ」

三葉は瀧の髪を撫で解しながら、優しく瀧の耳掃除をする。

……顔半分に触れる三葉の生の太ももの感触にドキドキする瀧。何気に胸を触ったことがあるにも拘らず、瀧は基本的純情なのだ。

真新しいことには一々胸が高まってしまふ。そんな感情を押し殺すように、瀧は三葉と話す。

「へえ……。そういういえば俺の先輩も去年くらいに結婚したんだよな。元バイト先の先輩でさ。偶然だけど三葉と同じでアパレル系の会社で働いてて」

「あ、そ、そうなんだ」

つい核心を突かれて、三葉はドキツとした。実は昼間に奥寺ミキと出会って、既に事情を知っている三葉にとって瀧の発言は予想外だったのだろう。

——ミキから受けた「年下の男の子をその気にさせちゃう18の方法」の一つ、膝枕からの耳かきを実践で投入する三葉。もちろん効果は靦面である。つというより、ミキは瀧のことをとても理解しているので、彼の弱い部分を全て三葉に教えたのだ。

……もちろん、三葉も経験がないためタジタジであるが。この光景をミキが見れば、それはもう初々しさからずっと笑っているだろう。

「……実はさ、昨日の飲みにその人も来たんだよ。俺、来ること知らな

かったとは言え、三葉を何か裏切ったような気がしてさ」
「……良いよ。だって今、ちゃんとやってくれたでしょ？」

——知っていたとはいえ、瀧がすっかりと隠さず言ってくれたことに三葉は胸がキュンとした。いったい瀧は、今日何度三葉をそうさせれば気が済むのだろう。

「昨日は楽しかった？」

「ああ、久しぶりに親友にも会えたし、楽しかったよ。まあしっかりと三葉とのことも聞かれて、色々弄られたけどさ」

「何々？ 私のことを話すのは疲れるん？」

「二人のことは二人だけの秘密にしたいの！」

……また、だ。そう三葉は思う。

こうして瀧の何気ない言葉に三葉は何度も感情の昂ぶりを覚えた。心臓がドクンドクンと高鳴っているのが自覚できるほど。

「三葉もあんまり赤裸々に語らないでくれよ？ 特に俺のやらかしたことが」

「あ、もしかしてこの前の——」

「あれは誠に申し訳ございませんでした、心の底から反省しています」
瀧は以前の朝の一連の事件を思い出して、真面目な声で謝罪をした。

三葉の胸を30分以上弄り回していただけに収まらず、朝の生理現象を三葉の臀部に押し付けていたあれである。言葉だけにすれば凄まじくひどい男に思えるほどだ。

「や、やからそれはもう良いよって言ったでしょ!? わ、私も思い出しただけで恥ずかしいんやよ！」

「……ところで、あれから四葉は？」

「——二度と覗きません、ごめんなさい……だってさ」

……それを聞いて二人は同時に笑う。

——そうしている内に瀧の両耳の掃除が終わり、瀧はすつと上体を起こした。

「サンキュー、三葉。三葉、耳掃除上手いな。……また頼むよ」
「私で良いならいつでも」

三葉はにこつと笑い、瀧の肩に頭を乗せる——「年下の男の子をその気にさせちゃう18の方法」の一つ、何気ないスキンシップである。しかしながらそれに対しては瀧も経験があるため、そつと三葉の肩に手を回して、更に自分の方にグイッと寄せた。

——もちろん胸の高鳴りはある。しかしそれ以上に三葉の温もりを求めたため、自然とそうした行為をしてしまうのだ。やられる当人はたまったものではない。

「……三葉、目、瞑って」

「え——は、はい」

瀧は不意に三葉に対してそう言うと、三葉は主導権を握られたといわんばかりに目を瞑る。

既に瀧からの唇を奪われる準備は出来ていた——しかし、一向に瀧からキスが来ないことに、三葉は疑問に思う。

ふと目を開けた。するとそこには——

「——今日で俺たちが付き合って丁度三ヶ月目だよな？　これ、ちよつと記念に作ったんだよ」

——そこにあるのは、コルクボードだった。そのコルクボードには瀧と三葉がこの三ヶ月で体験した、たくさんの写真があった。

一番最初のデートから始まり、家での二人の写真、二人で行ったたくさんの場所——その中心には三葉と三葉の家族、そして瀧の四人で撮った写真。

これまでの「笑顔」が全て集まっていた。三葉はそれを見て——不意に涙が零れる。

「あ、あれ？　ど、どうして……」

三葉自身、どうして涙が溢れ零れるのかが理解できない。嬉しいのに……嬉しいからこそ、三葉から涙が零れたのだ。

……三葉は瀧からコルクボードを受け取り、それをじっくりと見る。じっくりと見て、そして瀧を見つめた。

——あまりにも愛おしい。どうしてこんなにも、一日で何度も惚れさせるんだろう。

三葉は瀧の服をキュツと掴み、胸に飛び込む。瀧はそんな涙を流す

三葉に何も言わず、ただ頭をそつと撫でた。

「俺さ、三葉と出会ってからずっと楽しいんだ。だから、君と一緒にいた時間を全て、形に残したかった——今は楽しいことばかりかもしれないし、この先楽しいだけではないと思う。それでも俺さ、三葉とならどんなときでもやっていけると思うんだ」

……だから形に残した。3ヶ月目の記念日に、こんなサプライズを用意して。

三葉も油断していた。1ヶ月目と2ヶ月目に何もなかったから、たぶん瀧はあまりそういうのが好きではないのだろうと。自分も特にそういうことを求めているわけではなかったため、特に不満はなかった。

……三葉の涙は止まらない。止められない、と言ったほうが良い。そんな三葉を受け入れるように瀧は優しく頭を撫で続けた。時間を忘れるほど、三葉の重みを忘れるほど、ずっと……。

「……たぎ、くん」

「なんだ、三葉」

「——ん、なんでもない。今のままで、いい」

まるで子猫のようにくすぐったく甘える三葉に、瀧はそつとソファアの上に倒れる。それにより三葉が瀧の上で抱きつく形になった。

……そつと片手を背中に回し、もう片手で頭を撫でる。これまでの中でもこの上なく甘い空気の中、二人がする行為は案外分かりやすい接し方であった。

心の底から安堵し、幸福でいて、そのくせに胸の高鳴りを通り越した安らぎで接する。むしろそうであることが自然なように、二人は触れ合った。

——この時点で三葉の「年下の男の子をその気にさせちゃう18の方法」は既に瀧の「年上の女の子を無意識にとろけさせてしまう方法」によって陥落していた。

●●○

完全に子猫モードに入った三葉の涙で服がくしゃくしゃになった

ため、とりあえず瀧はソファーに三葉をおいて一人、お風呂に入っていた。

……シャワーを頭から浴びながら、瀧は冷静に先ほどまでの三葉を思い出す。

「……あれは、やばい。あのままだったら、絶対に手、出してた」

——実はぎりぎりだったのだ。三葉は思いの外、瀧に甘えることが多々ある。もちろんそれであるのだが、さっきまでの三葉はそれではすまないレベルだ。

……子猫モードとはよく言ったものだ。三葉のそれはまさに子猫だ。

一度甘え始めたら止まらなく瀧に触れ合いを求める。お風呂に入るのも一苦勞であった。

何分、離してくれないのである。どれだけ胸が当たろうと、どれだけ三葉の肌に触れようが、三葉はそれすらも今は甘んじて受け入れていた。むしろそれを望んでいた。

……今日一日の出来事が三葉をそうなるまで蕩けさせたのだ。その一端どころか全端は瀧にある。瀧の行動一つ一つは三葉の子猫モードを作り出し、そして最後のとどめでそれを発動させた。

——瀧はクールダウンをするために、敢えて水を頭から被る。しかし、心臓のドキドキは収まらない。

「あれ、ちゃんと戻るのか？ ……戻ったら戻ったでなんか残念な気がするけど——こうなりや四葉に聞くしか。……駄目だ、あいつが関わりとここぞという場面で邪魔が入る」

四葉を気に入っているものの、これまでの彼女の起こしてきた悲劇から彼女を介入させることを危険と考え、瀧はその手を頭から消した。

瀧にある最後の頼りは——そう考えた時である。

——ガララ、と風呂場の引き戸が開いた。

「瀧くん、私も入るね？」

……そこには一糸纏わない生まれたての姿の三葉がいた。そのスタイルの良さを再確認した瀧——そう考えて、すぐに視線を背けた。

「お、おまつ！ 何考えてんの!? いや、ほんとに今は俺のクールダウンだよ!」

「くーるだうん？ 何のこと言ってるかわからんけど、別にいいでしょ？ ほら、恋人なんやし」

恥らう瀧のことをいざ知らず、三葉はニコツと笑顔で彼の背中に回る。

そして風呂場においてある身体を磨くためのスポンジにボディソープをつけて、泡立たせた。

「——背中、流しても良い？」

「あ、ああ……よ、よろしくお願いします?」

——ここからが瀧の戦いの始まりだった。

現在の三葉は既に羞恥心のようなものが残っていない。つというより、ありはするが瀧になら見られてもいいという考えから隠そうとしないのだ。

初めて見る生の女性の身体。それが度々鏡越しで見えてしまうのだ。

しかも三葉はその辺にいる女性よりも魅力的である。普通の男であれば視線は自然とそちらの方に向かってしまうのだ。

——三葉が丁寧に瀧の背中をスポンジで磨く。まるで自分の身体を綺麗にするように、優しい手つきで、だ。その度に瀧はくすぐったく身体をビクツと反応させてしまう。

「……あ。ふふ」

「み、三葉? 何を笑っているんだ?」

「んー。瀧くんが可愛い反応するもんだから、笑っちゃったんやよ」

三葉は穏やかな声音でそういつつ、背中以外も洗い流す。流石の瀧も、前はまずいと思いつつ、それだけは何とか阻止した。

しかし——

「はい終わり。じゃあ瀧くん、私も流して欲しいなー」

「……マジですか?」

「マジやよ」

「み、三葉さんの身体、いろいろ触れちゃうぞ?」

「……さ、触りたかったら、どこでも……いいよっ」

——瀧の思考が、完全に停止する。

あれだ、彼の理性を繋げる糸はあと一本を残して、既に残っていないかった。

瀧はそのあと一本を手繰り寄せ、なんとかハツとする。

ふと、瀧は思った——彼女にここまで言わせて、このままでは男が廃ると。

そうだ、俺はただ三葉の身体を綺麗にするだけ。そこに劣情なんて抱く余地なんて——などと思い、スポンジでまず背中を洗おうとした。

指先が軽く三葉の背中に触れた瞬間だった。

「ひゃっ……もう」

——抱く余地どころか、抱く要素しかなかった。

瀧は顔を上げて、思考する。このままでは本気で不味いと思った。

「へ、変な声出すなよー」

「ご、ごめんね？出来るだけ我慢はしよー思ってるけど、瀧くんに洗われてるって思うと……今更恥ずかしくなって」

顔だけ瀧の方に向けて紅潮した顔で苦笑いをする。

ただそれだけで瀧の最後の糸に傷をいれていることを、彼女はきつと気付かないだろう。

……瀧は深呼吸をするため、一度息を全て吐き出した。そう、この性欲と理性に阻まれた心（限りなく天秤は性欲に落ち込んでいる）を落ち着かせるためだ。

それが彼の思惑であったのだが——

「ひゃっ……息、ふきかけんといてよお」

——先の長い戦いである。

●○○●

なんとか一回戦を乗り切った瀧であったが迫る問題は次である。

先程は洗い場であったため、まだ距離はあった。しかし浴槽は訳が違う。

瀧の家の浴槽は、基本一人で入るほどの大きさだ。なんと三葉は、

一緒にお風呂に入ろうと提案したのである。

現状、三葉の申し出を断れない瀧は流される形で浴槽に一緒に浸かっていた。

……今一度言おう。瀧の家の浴槽は狭い。つまるところ、距離はほぼないに等しいのだ。

瀧が大股で開いたスペースに、華奢な三葉がすっぽり嵌る寸法である。つまり、何が言いたいかと言えば――

「(は、反応したらすぐバレる……っ!)」

瀧は戦慄する。

というより、ここまで拒否感のない三葉に驚愕さえ抱いていた。普通最初はこのような触れ合いは女性是否定的と思っていた瀧は、ある種のカルチャーショックを受ける。

そんな現実逃避をしなければ不味いにも関わらず、三葉は鼻歌交じりに瀧との混浴を楽しんでいた。

「……どーしたの、瀧くん。なんかあんまり話さないんやね」

「この状況でいつも通り話せる甲斐性を俺は欲しいよ」

「……三葉さん的には、こうしてほしいな」

三葉は浴槽の淵に置かれる瀧の両腕を、後ろから自分のおへその方に誘導する。

瀧の両手の平は三葉のお腹に触れ、自然と距離がゼロとなった。瀧は三葉を後ろから軽く抱きしめる形である。

「……細いな、三葉は」

「頑張ってるんよ? 瀧くんに見せても恥ずかしくないようにね」

ふつつつと瀧の頭に広がるのは、この身体を好きに堪能したい欲望。彼は三葉の恋人であり、それをすることが出来る。

……だけど瀧の理性がそれを邪魔する。瀧は暴走する形で三葉と一線を越えたくないのだ。

いずれはその時が来る。だからこそ、最初を大切にしたい。

――瀧の両腕に三葉の柔らかい胸の感触がする。そう理解したときには既に遅い。

「瀧くん、我慢……してくれてるんだよね?」

「……ッ。そ、そんなの……」

三葉は一度その感触を同じ臀部で知っているため、頬を染めながら瀧を見ずに、そう言う。瀧ははつきりとしなない口調で焦るも、既に反応してしまったのだ。

……三葉は浴槽の中でクルッと体を回転させ、至近距離で瀧と顔を合わせた。

頭を瀧の胸に預け、その両手で瀧を背中から抱きしめる。

——三葉は聞く。瀧の、どうしようもない胸の高鳴りを。耳元に瀧の心臓があるからこそ、どうしようもなく聞こえる緊張の音を。

「……凄いな、瀧くんのドキドキ。破裂するって思っちゃうくらいだよ」

「し、仕方ないだろ……。三葉が落ち着いているのが可笑しい——あれ、さつきからお腹に当たってんのに何でそんなに……」

「……私だってドキドキしてるよ。ちよつと怖いなあって思うこともあるんだけど——どうしようもないんだよ。瀧くんが私を助けてくれて、瀧くんが私を想ってくれて、私との時間をすごく大切にしてくれる……。今日一日で、どれだけ嬉しいことばかりだったか、瀧くんにはわからんよね？」

……三葉は恐る恐るといった手つきで、『それ』に触れる。

お風呂に入っているのにも関わらず、三葉は『それ』を、驚くほど熱いと感じた。

「……私に興奮してくれてるって思うと、それも嬉しいんやよ？ 私だって……同じ」

「三葉……」

……瀧はそつと、三葉の頬に手を触れる。

——そして、そのまま三葉と深く唇を合わせた。

「ん……っ。……そういえば、今日は初チューやね」

三葉は唇が離れてから笑顔でそう言葉を漏らし——そして更に求めるように、瀧の唇を奪う。

三葉からのキスを瀧は受け入れ、更に深く……より深く唇で繋がる。

……しかし、それでも足りない。三葉も瀧も、どれだけキスをして
も、舌を入れても——足りなかった。

「はあ、はあ……たき、くん。切ないよ……もう、私」

「……なあ、三葉」

三葉の顔が、瀧を求めぬ。

——このままではのぼせる。瀧はそう思い、三葉を抱えて浴槽から
出た。

脱衣所で三葉を下して、瀧は無言で三葉にバスタオルを渡す。自身
も水滴をある程度拭った。

「瀧くん……あの、ね？ 私……」

瀧が何も言わないため、三葉は不安になる——すると、瀧は彼女の
手を引いて、グイグイと引っ張っていった。

そして自分の部屋の扉をガラツと開いて、そのまま三葉をベッドに
押し倒した。

「ひゃっ……っ。た、瀧くん？」

「……ごめん、今日はちよつと無理だ」

……瀧は三葉の両腕を抑えるように押し倒しながら、三葉の顔に自
分の顔を近づけていく。

「俺、三葉が欲しい。もっとゆっくりでも良いって思ってたけど——
今、三葉が欲しい」

「たき、く——んんっ。……んっ」

ベッドの上で、唇を奪う瀧。三葉はそれに反抗することなく、受け
入れる。

——時間を忘れるように唇を重ね、糸纏わぬ姿で肌が触れ合う。
次に唇を離れた時、二人の舌から糸が引き、三葉はそつと呟いた。

「——はじめてだから……やさしく、してください……っ」

そうして二人は——……

●●○○

——鳥のさえずる鳴き声で、私は目を覚ます。

今日は土曜日で、瀧くんも私も仕事は休み。……私はふと、隣で眠
る瀧くんを見た。

……私を抱きしめるように眠る彼は、一糸纏わぬ裸。対する私も、裸だ。

——昨日、私たちは感情の歯止めが利かず、そのまま最後までしてしまった。以前は四葉の邪魔が入ってしまったけど、今回は邪魔が入らず……昨日のことを思い出して、私は瀧くんの胸に顔を埋める。

「うう……なんか、変な感じい」

……シーツに残る赤い染みで実感する——ああ、私、本当に瀧くんの女にされちゃったんだって。

もちろんそれが嫌なはずがなく、心が満たされる。

確かに昨日はちよつと痛かったけど、何か思ってたより痛くなくてびつくりしちやった。それも瀧くんが優しくしてくれたおかげで……。

——癩ではあるんだけど、同僚にちよつとだけ感謝していた。彼のおかげで、瀧くんとまた先に進めたから。

股に残るちよつとした痛みも、それも証のように感じる。

……ただ、最後の方は私から瀧くんを望んでいたから、少し気恥ずかしいな。

だって瀧くん、謎に上手いし——本当に初めてなの!? って心配するくらいだし。

「……今度ミキさんに聞いとかないと」

——結局、ミキさんに伝授された「年下の男の子をその気にさせちゃう18の方法」は成功したようで成功していないよね。

だって、私の方が瀧くんの無意識な行動でその気になっちゃったんだもん。

……瀧くんの唇が目に入る。それだけで昨日の行為を思い出してしまう。

——最初は凄く大切ってミキさんが言ってた意味、物凄く分かる。あの最中って瀧くんが私を大切に想ってくれてるなって思う点は何個もあったから。

「……年下の癖に生意気なんよ、瀧くんのあほ」

昨日は瀧くんにリードされちゃったから、次は私がリードしてや

る。そんなことを思いながら、私は瀧くんの頭を軽く小突いた。

瀧くんはそれで寝返りを打とうとするけど、私はそれをさせないように——瀧くんにキスをした。

「……幸せやよ、私——瀧くん。昨日は結局言いそびれちゃったけど、私もここまでずっと幸せ」

瀧くんとの日々はいつも新鮮で、私と混じり合って色々な色に変化していくことが、すごく幸せ。

昨日瀧くんが言っていたこと——三葉と一緒になら、どんなときでもやっていける。そのことを、私なりの言葉で返そう。

「——私、瀧くんとなら一生一緒にいれる。瀧くんと一緒になら、なんだって出来るんやよ?」

……あの時、私は瀧くんとお婆ちゃんの話し合いを聞いていた。

瀧くんが私のお家に初めて遊びに来た時、二人は話していた。

詳しい内容は知らないけど、でも瀧くんはあの時、お婆ちゃんに宣言したんだ——三葉の晴れ姿を見せるって。

……私、ずっと待ってるよ。瀧くんがその言葉を言ってくれる、その時を。

もう私には瀧くんしか考えられないから。

だから、絶対に瀧くんに飽きられない良い女で在り続ける。いつでも瀧くんが一番に求める女でいたい。

この先、何年も、何十年も……ずっと。

「んん……はああ——ん、みつは」

「おはよ、瀧くん」

「……からだ、だいじょうぶか?」

……全く、この男は。寝起きでこれか。寝ぼけながらも私のことをまず心配してくる瀧くんはズルいよね。

でも相変わらず、私の頭はお花畑のように嬉しくて、私は笑顔でこう言っちゃった。

「——誰かさんがとびつきり優しいから、大丈夫だよ? 大好き!」

「……ああ。おれも、おまえを……あいしてるよ」

……ダメ。ダメダメダメダメ。

瀧くんの愛してるは不味い、朝っぱらから昨日の余韻が復活してくるっ！

寝ぼけてる癖に、瀧くんは！

——その時、ふと私は気付いた。

そういえば昨日、終わった後に瀧くんが7時に起こしてくれと言っていたことを。

私は7時に起きる習慣があるから、了承したんだけど——あれ？

今の時間は——7時50分。

「あちやく……瀧くんの寝顔を堪能し過ぎたんよ——瀧くん、ごめん。ちよつと起こすの忘れてたよ」

「ええ……いま、何時？」

「8時前だよ？」

「——え」

——その瞬間、瀧くんは半開きの目を開眼させる。

目を見開き、瀧くんは部屋の中の時計を見た。

「や、やっべええ！ 寝過ごしたああ!!」

瀧くんはベッドから飛び降りて、すぐにクローゼットに向かった。

……えつと、もしかして瀧くん緊急事態？

私はシーツで体を隠しながら、急いで着替えている瀧くんに見つけた。

「えつと、もしかして今日仕事だったの？」

「仕事じゃないんだけど、仕事関係で千葉に行かないといけないんだ

！ つていうか自分で目覚ましかけるべきだった！」

「ご、ごめんね？」

「三葉は悪くないから大丈夫！ たぶん今出ればギリギリ間に合うから！」

瀧は小奇麗な新調したスーツを着込んで、荷物を持って部屋を出る。

私はそれについていった。瀧くんは洗面台で顔を洗って、水で頭を濡らして寝癖を整え、歯磨きを済まして玄関で靴を履く。

そうして家を出ようとした——その時、はつと思いだして玄関前に

おいている鍵を私に渡した。

「——それ、合鍵だから！ 三葉が持つてて！」

「え？」

合鍵を彼女に渡す——それってつまり、そういうこと……だよね？

そう思っただけはいいにやけちゃった。

「んじや行ってきます！」

「あ……—いつてらっしやい！」

——ああ、これ良い。

もつと言えば、瀧くんの下手くそなネクタイ結びを直してあげたかったな。

……私は瀧くんを見送りながら、扉の鍵を閉めてそつと合鍵を見る。

——いつでも来ていい。瀧くんはきつと、そう言いたいんだろう。

「……いつてらっしやい、あなた——なんちゃって」

——よし。今日は瀧くんのお嫁さん気分で家のことをしてあげよう。

とりあえず帰ってきたら「おかえりなさい」、かな？

そう思っただけ、まず着替えから始めた。

●●●

最短ルートで電車を乗り継いで、千葉に向かう。

……今日は以前から約束していた千葉にある建設会社の現場の人と話す日だったんだ。

その会社の有望な若手の人と話す機会を得ていて、その約束の時間が9時。

——本当は30分前には着いて、色々準備したかったんだけど、仕方ない。

俺は駅について、あらかじめ調べていた進路を走る——こんな時に自分の運動能力が比較的高いことが役に立った。

……会社前に、一人の長身の男性が立っている。

少し無精髭ながらも、堅気は守ってそうな人だ。

俺はその人の前に立つ前に時間を確認する——ギリギリ5分前に

は着けた。

——息を整え、俺はその男性の前に立った。

「あの、○○建設のお方ですよね？　自分はインテリアデザイナーをしています、立花と申します」

「——おー、やっと来たんやな。遅いもんやから、心配したんですわ」
——その男性は気さくな口調と、本当に心配してくれていたのか、ほっと胸を撫で下ろすような顔をした。

藍色の作業服のその男性は俺が名刺を出すもんだから、自分もそつと名刺を出して渡してきた。

「——俺はこの会社で働いとる勅使河原つていいいます。よろしくお願ひしますな」

その男性——勅使河原克彦さんは友好的な態度でそう言って、俺の名刺に目を通した。

……その時、ずっと目を見開いて俺をじっと見つめた。

「……こない偶然、あるもんなんやなあ——よろしくな、立花瀧くん」

——その眼は、まるで俺を見定めるような目であった。

思い描くは、いつかのこと

正直な話をしよう。瀧は少し、居心地が悪いと感じていた。

建設会社の有望若手こと勅使河原克彦との邂逅を経てから、より詳しく言えば彼が瀧の名前を知ってから、妙に克彦は瀧のことを興味深く接していた。

まるで自分のことを知ろうとばかりに、仕事以外のプライベートまで聞いてくる辺り、瀧は何かがあると感じざるを得なかった——のだが、それは本当に最初だけであった。

会社からほどなくのところにある少し古びた喫茶店。その奥の席で二人は対面しながら会話をしていた。

「へえ……地元から出て、上京して今の会社に入ったんですね」

「そうそう。やから俺、結構なまっとするやろ？ 一応隠そう思ってるんやど、中々抜けんくてなく。……幼馴染とか嫁とかは割りと上手くやってるんやどな」

「結婚してるんですか？」

「式はまだやねんけどな。色々延びて、来週に結婚式」

「——おめでとうございます！」

——このように、すぐに瀧と克彦は意気投合したのである。

何故かはわからないが瀧は年上とはいえ、克彦に妙な親近感を感じていた。実際に話してみても、会話がスムーズに進むのに不思議に思うほどに。

それは克彦の人柄があるのか、それとも波長があつたのか。それは定かではないが、少なくとも既に瀧には最初の居心地の悪さはなかった。

「……つと、これは私情やな——ところで瀧くん。君のことは色々聞いたよ。……君のデザインする部屋が気になってな、今日はこの場を設けさしてもらったわけよ」

「……そうですね。俺も、実はそちらの会社には前々から興味があつたんですよ」

……瀧が今回の勅使河原との邂逅。ないし建設会社の社員と話し

たかったのは、彼の求める建築の外観の理想が、勅使河原の設計するそれに近かったからだ。

勅使河原の生業とするものは建築の施工と外観。本来は相反するものなのだが、勅使河原は花形部門の作業人であり、なおかつデザイナーに近いこともしているのである。

彼が持つ独特の世界観を持つ外観。それが今回、瀧との会合に踏み切った理由の一つだ。

「この会社の雰囲気、それと施工とデザインを会社内で完結させているからか、完成度の高い建築物を造っていますよね。それが俺からしたら理想っていうか……」

「まあその分、色々と人員不足とかに悩まされてんねんけどな——君のデザイン、見せてもらったんやさ」

克彦はそつと封筒から一枚の紙を取り出し、それを机の上に置いた。

……それは紛れもなく、瀧が描いた内装デザイン——克彦はそれを瀧に提示した上で、笑みを浮かべた。

「俺も外観をデザインする上で、内と外つてもんは密接に関わるんものや。人間も同じでな——君の内装は、俺の理想とするもののそれなんよ。まさかと思つたわ。俺以外に、こんな発想のやつがおるとは思わなかった」

「……どこから引つ張ってきたんすか、それ」

瀧は苦笑し、それ——いつか三葉がスケッチブックで見た、糸守の雰囲気十全に表現されたスケッチのコピーを持った。

実は克彦の会社と瀧の会社の社長は昔からの交流があり、稀に社内の情報交換をするのである。

その情報交換の一つとして克彦が手に入れたのが、瀧の内装デザインというわけだ。

「瀧くんの会社の上司さんがこれお気に入りやって送ってきてな——それで君に興味が出たわけや——まあ、それ以外でも色々話したいことあるねんけどな——」

「ん？……で、このデザインでなんで俺を？　これ、うちの会社では

なんか評判悪いんですよ」

瀧は克彦の発言に軽く首を傾げつつ、紙をパサツと机の上に置いて皮肉げにそう呟いた。

すると克彦は置かれた紙をそつと手にして、それを見て懐かしそうな安らかな表情で呟いた。

「まあ価値観が現代風やからな、そっちは——ただな、俺は惹かれた。これ見てると、どーもな、思い出してしまうんや。地元を」

「……地元——同じこと言ってた奴がいましたよ。俺のデザインは、自分の故郷を思い出すって」

……それが最愛の人とは口が裂けても彼には言わないが。

瀧はそう言った後に気づいた——そういえば、似ていると。

克彦の話す言葉は色々な地方が混ざっているようにも見受けられるが、どこか三葉がたまに漏らす方言と似ていると思った。

瀧は、ふと聞いた。

「——勅使河原さん、糸守の出身ですよね？」

「……おお。ようわかつたな」

「まあ、そりゃあね——ああ、そういうことですか。だからさつきから、色々聞いてきたんですね」

そこで、瀧は合点が行く。

糸守出身で、瀧の名前を聞いて驚き、そして仕事と関係のないところまで色々聞いてきた理由。

瀧は核心を突くように、克彦に問うた。

「——三葉の知り合いでしょう？　勅使河原さん」

「……意外と鋭いなあ、瀧くん」

克彦は両手を開いて、まるで参ったと言わんばかりの仕草をする。

……瀧はようやく点と点が繋がった気分になった。たぶん、克彦は事前に三葉か四葉から聞いていたのだろうと考える。

「そない言うてもな、知ってたんは君の名前と、三葉の彼氏ってことだけや。いずれは実際に会って幼馴染みとして見定めようかと思っ

とったけど、まあこんな早くに機会が訪れるとはなあ」

「見定めると……」

「ああ、そんな身構えんでももう大丈夫や——そんなもん必要ないって内心わかつとったしな」

克彦は彼の肩を叩いて、がははと豪快に笑う。

「三葉の身持ちの固さは昔から知ってたし、あいつがしようもない男に惚れるわけない。そんなあいつが一目惚れした男や。見定める必要もない——まあ興味あったんは本音やけどな？」

「……心配しなくても大丈夫です。俺、あいつを絶対に幸せにするんで」

瀧は少し恥ずかしさの残る表情でそう断言すると、克彦はそつと手を前に出す。

握手を求めるような顔で手を出すと、克彦はニカッと笑った。

「——タメでええ。少なくともプライベートはもつと軽いかへんか？それにお前に敬語使われるのはなんか違和感覚えるんわ」

「——テツシーがそれでいいんなら、俺はそれでいい」

「お？そのあだ名は久しぶりやな」

瀧は克彦の手を取り、握手に応える。

……グツと握られる手。克彦は満足そうな笑顔を浮かべながら、よろしくと言った。

——その時、瀧のスマートフォンが小刻みに振動した。

「ん？ ごめん、テツシー。ちよつと席、外していいか？」

「おうよー。あ、でもここからは仕事の話戻るからな」

克彦は足を組みながら、手をヒラヒラとさせながらそう言うのと、瀧は席を立って喫茶店の外に出た。

その場に残る克彦はそつとポケットからスマートフォンを取り出し、嫁である名取早耶香に電話をした。

「ん、さやかー。ちよつとええか？」

『なんなん、テツシー……じゃなかった、克彦』

「いや、来週の結婚式なの、三葉の親父さんが確か来れへんことになつとったよな？」

『え、そーやけど……』

「——その席にな、ちよつと呼びたい奴がおるから、どうにかできん

か？」

克彦は少し悪い笑みを浮かべながら、早耶香にさういうと、早耶香は了見が届かず、電話越しでわかるほどに首を傾げたのだった。

○●○○

ところ変わって、着信を受けて席を立った瀧は喫茶店を出てスマートフォンを見る。

そこには三葉……ではなく四葉の名前が表示されており、瀧は少し身構える。

……基本的に四葉が何かに絡んだ場合、自分にとつともなく被害が加わることを既に理解しているのだ。ほんの少しの間、電話に出るか本気で迷う瀧。

「……仕方ないな。可愛い妹分のためだ」

——瀧は意を決して通話ボタンを押して、通話を開始した。

『もっしもーし。瀧くん、なんか電話出るとき間がなかった？』

「そりや身構えるだろ、馬鹿。最近お前が絡むと碌なことがないんだよ」

『人を疫病神のように！ どちらかといえば私はあれじゃない？ 座敷童っぽくない？』

「……切るぞ？」

瀧は大きいため息を吐いて、通話を切ろうとする。すると四葉はすぐさま手のひらを返して通話を繋ぎ止めようとした。

『ストップだよ、瀧くん！ っていうかちよつと冷たくない!？』

「最近の行いのせいだよ。……んで？ なんか用か？」

『うう、私は将来のお兄ちゃんやんと仲良くなりたいたけなのにく』
「お前最近あざといよな——そろそろ本題に入ってくれよ。俺も一応仕事中美たいなものだからさ」

瀧は腕時計で時間を確認しながらそう聞く。とはいえ、克彦も四葉からの連絡だと知れば大して気にならないということも理解しているため、心配はないのだが。

『おばあちゃんが友達とディナーに行くらしくて、家で一人なんだよ。それでお姉ちゃんに聞いたら、今日の晩御飯は瀧くんのところで

済ますって言うから、私も行っていいかなーって思ってた……』

「そういうことね——まあいいぞ。それなら帰り、行く時間合わせるか?」

『え、いいの?』

すると四葉は了承されることを予想していなかったのか、あっけらかんとした声音でそう呟いた。

瀧はその反応に首を傾げた。

「なんだよ、その反応」

『い、いやあ……ほら、私ってここぞって時に邪魔してるから、普通に断られるかなって思ってたさ』

「……まあなんだ? お前はなんか妹みたいだし、面倒くらい見るのは全然苦じゃないからさ」

……口が裂けても言えない。既に昨日、そのここぞという一線を越えてしまったことを。

瀧は少し声が震えながらもそう言うと、四葉は声音を明るくして電話越しでも分かるほど嬉しがつっていた。

『じゃあ瀧くん、後でね♪ 私も色々準備してから行くから!!』

「ん、別に準備とかは必要は——」

瀧は四葉の意味深な言葉を追求しようと思うも、四葉は言いたいことを言い終わると、通話を切る。

……瀧はほんの少し嫌な予感を感じつつ、スマートフォンをポケットに突っ込んで、再び喫茶店に戻った。

「すまん、テッシー……じゃなかった、勅使河原さん」

「いや、今は別にテッシーでもええからな?」

……しかしながらやはりどこかため口に慣れない瀧であった。

……一時間ほど経ってから、瀧と克彦は店を出る。

大体の聞きたいことを互いに聞き終えた二人は、特に目的もなく辺りをブラブラとする。

瀧は四葉との集合までまだ余裕があり、克彦もまた瀧と交流を深めようという考えだ。

「へえ、三葉って割と男勝り時期もあったんですね」

「おうよ。特に高校の時に、何かに憑かれてるみたいになつた時期があつてなあ……あれは狐憑きやつたわ。まあ俺はあの三葉の方が仲はよかつてんけどなあ」

話題は学生時代の三葉のことだ。

瀧も自分の知らない時代の三葉のことは気になっており、やはり彼氏としては昔の情報は欲しいものなのだ。意外とこれまで、第三者から三葉のことを語れたことがないため、瀧は克彦の話に熱心に聞いていた。

「まあ悪さはしたもんやさ。なんやろうな……あの時期は色々なことがありすぎて、その辺りの記憶は曖昧やねんけど、なんか大きなことを俺と早耶香、そんなでもって三葉の三人でしたんやさ。確か流星が落ちる前に——ダメやわ、それ以上は覚えてへんなあ」

「……いや、大丈夫だ。ごめん、辛いこと思い出させて」

「……まあ、辛いよな。二度と戻らんからな。俺の好きだったあの景色は——」

克彦は遠くを見るように快晴の空を見上げ、昔を思い出してそう呟く。

……克彦は好きだった。

よく幼馴染の二人が何も無い糸守の文句を漏らしつつ、東京に出るとボヤいていることがあつた。

その度に、彼は思っていたのだ——何でだよ、と。

確かに糸守には何も無い。電車は二時間に一本で、コンビニは深夜営業ではなく、喫茶店の一つもない。その癖にスナックは二軒もある。

でも——それでも糸守には言葉には出来ない美しさがあつた

克彦はそれを知っていた。誰もがそれを肯定しなかつたが、それでも克彦にとって糸守はずっとそこで生きていけるほどの掛け替えのないものだった。

「失くなって気づいたんや、皆。もう手遅れやつてのに、アホやよな。皆——俺も」

「……………でも、さ」

——ふと、瀧がおもむろに声を上げた。

克彦はその声に反応してハッと顔を上げ、瀧の顔を見る。

「もう取り返しはつかないし、消えたものは二度と戻らない——でもさ。だからこそ、その記憶を消したくないから。だからテッシーは求めてるんだろ？糸守っていう美しい町を」

……瀧は克彦の方を見ずに、淡々とそう呟く。

克彦は見た。

瀧の淡々とした言葉とは裏腹に、糸守を想っているような優しげな表情を。

まるで——過去を、紐解くように話す、瀧を。

「——湖を取り囲む町は夕焼けになったらひたすらに綺麗で、山中の紅葉は疲れを忘れさせるくらい穏やかで……きつと俺の知らない色々な景色があるんだと思う。だから俺は……って、何言ってるんだ俺」

「…………お前、どうして」

克彦は細い目を見開いて、ただ驚く。

ひたすらに、ただ——懐かしい記憶が、彼の頭を過った。

それはいつの日だったか……彼が初めて共感を覚えた、ある日の出来事。

もう今では誰と話して、何に共感したなどという明確な記憶はほとんどない。

ただ一つ、覚えているのは——自分以外にも、糸守の素晴らしさを知っている奴がいたということ。

それは身近で、でもどこか遠くにいる存在のようで……——

『——もったいないなあ』

……その台詞を言ったのは、三葉だった。

三葉と克彦、二人で集めた角材を使って造っていた木製の机と椅子。その時の二人の会話も、今の瀧と克彦がしているような会話であった。

その時に三葉の言った言葉。それが何を意味するかは厳密には克

彦も理解はしていなかったが——今しがたの瀧の言葉と、あの時の三葉の言葉が繋がったような気がした。

……克彦はそう一瞬考えて、すぐに頭を振る。

——こじつけど。そんなことあるわけがない。でも何でもだろう……瀧を見ると、昔、一度だけ心を通わせたあいつを見ているみたいだ。

……克彦はそんな風に思いながら、瀧の肩に手を置いた。

「まるで糸守出身みたなこと言うなあ、瀧よお」

「……俺も本当に、不思議な感覚なんだけどな」

……本当に不思議な感覚だと瀧は思った。

どうしてこうも、この男とは馬が合うのだろうと。建築の話でも、糸守についてでもそうだ。

勅使河原克彦という人物を昔から知っていたような感覚なのだ。

……もちろん瀧がその感覚を理解することはない。

感覚で言えば本当に懐かしいとしか思っていない。

——だが、この男との出会いがまた彼の中の何かを埋めた。

三葉と一緒にになったことで埋まった空白の、少しの隙間。その一つが埋まった——瀧はそう思わざるを得なかった。

「……いつか。俺が外で、お前が内。そうやって一から家を作りたいな」

「——作ろう。いつか、もっと俺がしっかりして、テッシーがもっとすげえ奴になったら。二人で一緒に最高の家を作ろう！」

「お、いいなあ！ 約束やぞ、瀧！」

「おう!!」

瀧と克彦は腕を組み合わせて、ニカツと笑い合う。

——覚えていないだろう。それは一度、結んだ友情であったということ。

——でも、覚えてもいるだろう。心のどこかで、確かなものとして。

……ここに、また再び結ばれる——一つの友情を。

二人の約束は、友情を再度結ぶには申し分ないものであった。

……瀧は克彦の住むマンションの前まで彼を送る。

克彦は瀧を家に上がれと誘うのだが、瀧はそろそろ四葉との約束があるため、それを断った。

「残念やなあ。早耶香も三葉の幼馴染やから、会わせようと思ってんけどな」

「まあ、またいつかな。……今後もたぶん、色々お世話になるよな——次は飲みにも行こうぜ」

「おうよ！……んじゃ、三葉によろしくな」

瀧はそう言つて別れると、そのまま駅に向かって歩いて行く。

——それと同時に克彦の後ろの自動ドアが開いて、そこから彼の妻である早耶香が現れた。

「あれ、克彦？　もう終わったん？」

「……早耶香か。まあ、終わったわ」

「……なんか、嬉しいことでもあった？」

早耶香は克彦の表情を見て、不思議そうな顔で首を傾げる。

そして克彦が見る方向に目を向けた。

「——まあな。ちよつとダチが出来た」

「へえ……あ、もしかして今日の会合の人？　珍しいね、克彦がそんなに気に入るなんて」

……早耶香は克彦の手をそつと取り、瀧を見送る。

もちろん早耶香は会合の人物が三葉の彼氏の瀧ということは知らないが——

「——三葉もええ男見つけたな。俺も負けてられへんなあ」

「……え？　もしかして、今日の会合の人って」

「おう、瀧や」

「え、ええええええ!!!?　な、なんで教えてくれへんの!?　私も会いたかったのに!!」

早耶香は克彦の台詞から察して、彼に対して猛反論する。

克彦はそんな彼女の反論を聞き流しながら、再度瀧の方を見ながら呟いた。

「——心配せんでも、長い付き合いになるから安心しない」

……克彦は、そう確信していたのだった。
そうして、瀧と克彦の邂逅は幕を閉じたのであった。

○●○○●

「あ、瀧くーん！」

瀧の家の最寄り駅に着くと、改札を出たすぐの所に四葉が待っていた。

以前は近くのベンチで眠りこけていたが、今回は少し大きめのリュックサックを背負い、今時の女子高生のような恰好をしている。そんな四葉は瀧に手をぶんぶんと振りながら、彼の元に駆け寄った。

「ごめん、ちよつと遅くなったな」

「ううん、全然待つてないよ。それよりも今日、何かあったのー？」

「ああ、テツシーに会ってた」

「へえ、テツシーに——ええ!? 何その展開!」

合流早々にそのように仲良く会話をする二人は、傍から見たら兄妹にしか見えなかつたりする。

ともかく、瀧と四葉は肩を並べながら話しながら道を歩いていた。

……さりげなく道路側を歩く辺り、三葉と交際をはじめてからの瀧らしい行動なのだが、四葉はそれに気付くと少しニヤツと笑う。

「こういうのにお姉ちゃんって弱いよね。さりげなく女の子扱いされる辺りが」

「ん? なんのことだ?」

「べつにつに〜? ……私も、実はこういうのに弱かつたりするんだけどね」

四葉は少しハニカミながらそう言うと、瀧の手を引つ張って走り出す。

「ちよ、四葉! 子供じゃないんだから、いきなり手、引つ張るなよ!」
「えー、私まだまだお子様だよー? それよりお姉ちゃんからおつかい頼まれてるから、一緒に買い物に行こう♪」

「……はあ、ったく」

瀧は半分諦めて、お姫様の言うことを聞くことにした。

……大方の買い物を終えて、瀧と四葉は家へと向かって歩く。

食材を鑑みる限り、今日のメニューは鍋と予想する瀧。季節的に言えば鍋の季節ではないのだが、まあ偶にはそういうのも風情があると考える。

……四葉は何故か機嫌よく、瀧と買い物袋を半分ずつ持つて歩いてきた。

「四葉、なんか最近俺に対して甘え方が普通じゃなくないか？」

「ツンケンされるよりは良いでしょ？」

「まあそうだけどさ。あんまり激しいと、また三葉さんのオハナシがな？」

「……まあ、加減はするから安心してください」

瀧と四葉の共通意識、それは三葉を怒らせてはならないという点である。

——そんな会話をしつつ、いつの間にかマンションに着く二人。

瀧はフロントで鍵を開け、部屋に向かっていく。

「もしかしたらお姉ちゃんのことだから、ここはあざとく『お帰り、あなた』なんて言うかもね！」

「……四葉辺りなら言いそうだな」

「あ、ひつどい！ 私ならちゃんと、ご飯にする？ お風呂にする？」

それとも——くらいは言うよ!？」

「……何に対して張り合ってたよ。後古い。めっちゃ古いから、それ」

瀧は四葉の後頭部に軽くチョップを入れつつ、家の鍵を開けて室内に入っていく。

四葉はご満悦な表情を浮かべつつ、それについていき、玄関で靴を抜いている時、ちょうどリビングの方からいい匂いがした。

……ほどなくして、リビングの方からスリッパが擦れる音が聞こえる。

「あ、おかえりなさい瀧くん！」

「……た、ただいま」

瀧はつい、三葉からの満面の笑みからの「おかえりなさい」に頬を染めて照れる。

——先日、初体験を済ましたばかりで、今更になって恥ずかしさが来たのか。それとも単にその初々しい言葉に照れているのかは定かではないが、少なくともそれを見て四葉がニヤツと笑っていたのは確かである。

「四葉、頼んでた食材は買ってきてくれた？」

「うん。完璧！」

四葉は軽く敬礼のポーズを取りつつそう言っ、三葉に買い物袋を見せる。

「あとはそれを調理したら終わりだから、三人でくつろいでてね！」

「お、おう——ん？」

「……三人？」

不気味に上機嫌な三葉は買い物袋を受け取り、リビングの方へスキップをしながら消えていく。

三葉の発言に首を傾げる瀧と四葉は、しかし特に何も気にすることなくリビングに入っていく、そしてそのままソファに座った。

「はあ……やっぱ家が一番くつろぐなあ」

「あはは、瀧くんおじさん臭いよー」

「ははは、全くだな。瀧、おっさんの俺と同じこと言っ、どうする」

「るっせーよ、親父、俺はそこまで落ちぶれちゃいねえよ」

瀧はからかってくるのを軽くないしながら——

「——ん？」

——違和感を感じた。

今、瀧は四葉と会話していたはずだ。にもかかわらず、ここにいるはずのない人物にツッコみを入れたのだ。

瀧は首を傾げて四葉に問う。

「四葉、何おっさんみたいな声出してんだよ。意外な特技か？」

「何言ってるの？ 私、普通の女の子の声出してでしょ？」

「そうだぞ、瀧。っていうか親に向かっておっさんとは失礼な。三葉ちゃんみたく、お父さんと呼べよ」

——いくら瀧でも、流石に理解した。

瀧はハツとして後ろ……声のした方向に体と視線を向ける。

……目を疑う。瀧は肩を震わせ、人差し指でその人物を指を指した。

指はプルプルと震えていて、そして——

「——お、お、親父いいいい!!」

——何故かその場に居合わせる人物、瀧の実の父親を指さしてそう大きな声で驚いた。

瀧の父親はははは、と笑いながら立ち上がり、そして四葉の方に視線を向ける。

「久しぶりだなあ、瀧。しばらく放っている間に随分と様変わりしたな——あ、俺は瀧の父親だ。四葉ちゃんだよな? よろしく」

「え、あ、はい……よろしくお願ひしますっ!」

四葉も突然のことで驚きを隠せない。

そのとき、ちょうど三葉が具材の入った鍋をリビングのガスコンロに設置して、パツと瀧の方に振り返り——

「はい、準備完了! それじゃあ皆でお鍋、するんやよ!」

「おお、これは美味そうだな」

……この時、瀧と四葉は不思議と心が一つとなる。

目の前で仲良さげに、何故か上機嫌な二人を前にして、思うことはたった一つ。

二人は特に息を合わせるわけでもなく、本当に自然と同時に声が重なり——

「二——ご飯の前にちゃんと説明しろお^{てえええ}お^おお!!!」

——そう声を荒げて叫んだのであった。

にたものどうし

その日の三葉をたった一言で言い表すとすれば、それは——主婦、であった。

動きやすいシャツの上からエプロンを着て、瀧を見送ってから三葉がしたのは、まずはシーツを洗うこと。

その前日の出来事から血で汚れたシーツを綺麗に洗い、更にそこから家中の掃除。更に少しだけ溜まっていた洗濯物を洗い、更にそれを外に干す。

……その際に掛かっている時間は、本当にわずかだ。

その辺りは長年の家事経験から来るものがあるが、それにしてもテキパキしていた。

お昼になる頃には家のことを全て終え、瀧が帰ってくるまで暇になっっているのが現状の三葉なのである。

「ふあ……。瀧くん、早く帰ってこないかなー」

あくびを漏らしながら、瀧の帰りを心待ちにする三葉。

……先日の出来事があるからか、三葉は今すぐにでも瀧に甘えたい気分満載なのである。もちろん三葉なりに年上として彼を引っ張りたいという願望はあるものの、瀧はなんというのだろう——年下なのに、年下のように思えない。

三葉の中にそのような認識があるのだ。

思えば三葉と瀧が最初に出会ってからほどなくして、瀧は三葉を年上と知った。にもかかわらず、瀧はごく自然と彼女のことを「三葉」と呼んだ。

『——三葉、か。いい名前だな……って、すみません！ 初対面なのに、年上の人に』

『……別に、いいよ？ なんか、君に——瀧くんにそう呼ばれるのは、すごくしっくりくるから』

『……じゃあ、三葉で』

『う、うん』

『……あ、時間が』

——瀧と三葉の最初の頃の会話は、そのようなものであったのだ。最初には本当に二言三言を掛け合っただけで、そこから時間の問題ですぐに別れた。

とりあえず連絡先を交換し、互いの顔を忘れないうちに適当な顔写真を送り合って——それも三葉は、とても昔のころのように感じた。「……もう三ヶ月なんだよね。瀧さんと恋人になって——って言うか付き合って三ヶ月でしちゃうって早いのかな？」

何分、彼女の周りにはあまりそのような経験の豊富な人物はいないため、参考になる人物は皆無である。

頼みの綱の奥寺ミキも経験自体は実は少ないから、比較対象というものはない。

……ただ、はつきりなことを言ってしまうえば、そこにあまり関心があるわけではないのだが。

——自分たちが早いか遅いかなんて、正直に言えばどうでもいい。三葉にとって重要なのは、瀧についてだけだ。

もし瀧がもっと早く三葉とこのような関係を望んでいたのならば、逆にまだ早いと思っていたのならば。その不安の方が大きい。

……同じことを瀧も考えているということ、三葉はきつと思いつかないのだろうか。

「……ダメダメ。あれやよ、はまっちゃいそうで怖い——っていうか初体験二日目でもたしたいとか乱れすぎやよお」

——実際のところは頭の中はピンクなお花畑であるのだが。

三葉は気分転換というようにすつと立ち上がり、伸びをする。

……するとそのとき、彼女のスマートフォンが鳴り響いた。

「……はい、もしもし」

『あ、お姉ちゃん？　もしもし、四葉やよ。今時間良い？』

その相手は彼女の妹の四葉であり、四葉はいつも通りの軽快な声で三葉に話しかけた。

「ええけど……どうしたん？」

『今日ってお姉ちゃん、晩御飯どうするん？　なんかね、お婆ちゃんが

今日は糸守の他のお友達とごぞつて遊びに行くらしいから、四葉、今家に一人なんよー」

「誰かと食べに行けばいいんじゃない？」

『……おねえちゃん、つめたーい。瀧くんなら優しいから、じゃあ家に来るか？ つてくらいは言うと思うのになー』

「……まあ、私の瀧くんならそう言うよね。四葉にもムツとするくらい優しいんやもん」

三葉は「私の」の部分を妙に強調しながらそう言うと、四葉は少し引き笑いを漏らした。

あまり誇示欲のない三葉がそうするのは非常に珍しいのだろう。

『ともかく！ 妹としてはお姉ちゃんとお兄ちゃんと一緒に楽しく晩御飯を食べたいの！ ねー、ダメえ？』

「ん〜……」

三葉は少し考える。

正直なことを言えば、瀧と二人でいるのが理想である——が、今日の精神状態で二人きりになれば、また今日もしてしまうと三葉は思った。

瀧は確かに、鋼の理性を持つてはいる。だが三葉は、その理性を容易に壊す方法を知ってしまったわけだ。

……簡単にいえばまだ余韻を楽しんでいたのだ。

しかし四葉が絡むと毎回何かが起こるため、三葉はかなり渋る。

「つてか何か自然とお兄ちゃんって呼んでるよね、四葉」

『え？ ……まあ、瀧くんって色々頼りになるし、理想のお兄ちゃん像？ つてやつ。私たちの家系つて中々頼りになる男の人がいないからさ』

「あ、それは同感だよ。お父さんは……うん」

仲違いの時期が長いから、未だに実父とそりが合わない三葉。四葉の言葉を聞いてただただ納得してしまった——それと同時に心配もあった。

それは四葉が瀧に懐きすぎているという点だ。

別に仲がいいのはかまわない。むしろもつと仲良くしてほしい――

—ただ、心配なのは四葉のこと。

三葉の目から見て、あそこまで男性に興味を持つ四葉を見るのは初めてだった。

根本な部分で自分と似ている妹だからか、四葉は初恋すらしたことがない。

……その初恋がもし、瀧ならば。これほど残酷なことはないと思った。

今はまだいい。四葉の中で瀧は姉の恋人で、兄のような存在で、あ
る意味では最も頼りになる異性であるから。だが何かが一転すれば、
それは恋心に変わる要因ばかりだ。

——姉として、妹には幸せになってほしい。その願いはどうしても
叶えたいのだ。

だからこそ、三葉は四葉と瀧を一緒にいさせても良いのかと考
える。

そこには、自分の感情はあまり入っていないかった。

「——四葉は、どうしても来たい？」

『うん。最近一番楽しいって思えるのってお姉ちゃんと瀧くんと一緒に
いるときなんやよ。だから、ね？ お願ひ！』

「……ああ、もうわかったからええよ。仕方ないなあー、あんたは」

三葉は肩から力を抜いて、嘆息する。

しかし微笑を漏らしていると、電話越しからも分かる程の四葉の喜
びの声が聞こえた。

『お姉ちゃんやっぱ大好きー！ じゃあすぐに——』

「あ、でも今は瀧くんいないから。それとちゃんと瀧くんにも許可を
取ること！ それはちゃんと守りなさい」

しかししっかりと咎めるところは咎めるあたり、三葉は立派な姉な
のであった。

——そんなとき、唐突にインターホンが鳴り響いた。

「あれ、なんやろ——ごめんね、四葉。誰かが来たみたいだから、電話
切るね」

『うん！ じゃあまた後でね!!』

三葉は電話を切り、そのまま玄関に向かった。

……何か荷物だろうか、と思う三葉だが、自分がこの家の住人ではないため、少し扉を開けることを躊躇う。

——すると、玄関口から何か一人言が聞こえた。

「……瀧は留守か。休日ならあいつのことだから、家でゴロゴロしてると思ったんだがな」

——鍵穴に鍵が刺さる金属音がする。

三葉がドアノブに手をかける前に鍵は開き、そしてそのまま扉は開かれた。

「瀧ー、いるなら返事し……ろ」

「あ、あの……」

……玄関口で無言になる三葉と、瀧の名前を叫んだ眼鏡を掛けた中年の男性。

その男性は三葉の姿を見るなり目を丸くして、キョロキョロと辺りを見回す。

三葉はなんとも言えず片手で反対の腕を抑えながら、居心地の悪い顔をしていた。

——その男性は眼鏡をクイツとあげて、一度玄関から出て家の表札を確認する。

そこにはもちろん「立花」と書かれており、それを確認すると再度玄関から家の中に入った。

そして満を持して——

「——どなたですか?」

「で、ですよー」

ごく当たり前の疑問を三葉に語りかけたのであった。

●●●

「これ、粗茶です」

「ああ、これはどうも」

三葉は瀧の関係者であろう男性をリビングに招いて、グラスにお茶を淹れて男性の前にそつと置いた。

……男性は特に乱すことなくお茶を飲み、三葉が対面に座るのを確

認してグラスを机の上に置き、その上で尋ねた。

「それで、そろそろ聞かせてもらってもいいかな？　まさか客人を招く泥棒がいるわけでもないし、その格好を見る限り……瀧の友人、ないし親しい人物で良いか？」

「は、はい。瀧くんとはとても仲良くさせていただいています——と
ころで、あなたは？」

「ああ、申し遅れたね——私は瀧の父さ」

「お、お父さん!？」

三葉は瀧の父の言葉を聞いて、目を見開いて驚く。

……それと同時に納得もした。確かに父親でなければ部屋の合鍵は持つていないだろうと。

それにどことなく彼と瀧は似ているからこそ、彼の言うことが正しいと三葉は認識した。

「はは、まあ君も突然のことで驚くよな」

「え、ええ。……でもその、立花さんはそんなに驚いていないんですね」

「まあ、見ず知らずの人間が家にいたときこそ驚いたが、今ではな。驚いても仕方ないだろう？」

……雰囲気こそ違えど、本当に瀧にそっくりだと三葉は思った。いや、この場合は瀧が父親に似ているといえはいいだろうか。

思えば瀧はここぞという時は意外と冷静だと三葉は思った。それは先日の同僚騒ぎもそうであるのだが。

「——それで、はつきりさせよう。君は瀧の恋人か？」

……すると、立花は目をすつと細めてそう問いただした。

その目は真剣そのもので、三葉はつい背筋をピシッとさせた。

「——はい。私は立花瀧くんとお付き合いさせて頂いている、宮水三葉と申します！」

「……そうか。あいつにも、やっと恋人ができたんだな」

——三葉の気持ちのいいほどの断言と自己紹介を受けて、立花は眼鏡をスツとはずして微笑を浮かべた。

……その顔は親の顔だ。心の底から子供の幸せを知り、喜んでいる

顔だ。

三葉はその顔が自分の祖母と同じように映り、たったそれだけで立花が瀧を大切にしているということが理解できた。

「三葉ちゃん、で良いかな？ 最近のあいつはどうだ？ あの野郎は電話の一本も俺のところによこさないからな。たまに顔を見に来るんだが——あいつは幸せか？」

「……はい。瀧くんはいつも笑顔で、私を支えてくれます。その笑顔の一端に私が少しでも入っていればいいんですけどね？」

「……そうか」

三葉が少し照れ気味にそう言うと、立花は一言だけそう言葉を漏らして再度眼鏡を掛けた。

「知らない間に随分と可愛い彼女を作ったものだな、瀧も——後で色々お問い合わせようか」

「か、可愛いって……お父さん、上手ですね」

「——お父さん、か」

三葉が小さくお父さんと言うと、立花は少し懐かしそうな表情になった。

「そういえば瀧も小さい頃はお父さん、お父さんって甘えてきたものだあつて思ってたな。うちは長いこと男一人だったからか、思春期迎える頃にはオヤジだのおっさんだの——思い出しただけで腹が立つてきた」

「あ、あはは……でも瀧くんが良い男性に育ったのは、お父さんが瀧くんをしっかりと良い子に育てたからですよ」

「……そんなこともないさ。俺は基本、放任主義だからな」

すると立花はグラスを片手で掴んで、そう昔を思い出すように呟いた。

「なんていうんだらうな。俺は、いざというときのあいつを止められる存在でいたかったんだ。あいつの人生だからあいつの自由にすれば良い。でも間違ったことだけは止める——そんな父親が俺だ。まああいつは割と良い子で育ったから、たまに喧嘩して呼び出されるくらいしか問題はなかったんだけどな」

「瀧くん、意外と血気盛んだったらしいですね」

「ああ——ただ、いつかだったな。あいつが高校生のとき、俺を久しぶりにお父さんって呼んでくれたんだ。そのときはあいつと色々なことを話して、色々なことを知ったよ。日記をつけているとか、カフェ巡りをしているとか、意外と女子力が高いとか、気になる先輩がいるとか……そのとき、俺の息子はしつかりと育っているんだって思ったな。ちよつとは可愛いところあるじゃねえかってな」

三葉は立花の発言の一部を聞いて少しばかり反応しつつ、思う——
本当に、優しい表情であると。

立花は本当に子供のことが大切で、その話の端々からそれが感じ取れた。彼は自分のことを放任主義と言ったが、三葉はそうとは思わなかった。

むしろ三葉にはこう思えたのだ。

「——信じていたんですね、瀧くんのこと」

——三葉はそう思えて仕方がなかった。

立花は瀧のことを、息子のことを信じているからこそ、瀧の自主性を尊重した。

そして瀧のことを信じられる過程を——そこまで育てたのは他の誰でもない立花なのだ。

三葉はそのような思いを全て詰め込んだ言葉を立花にぶつけると、彼は三葉にニコリと笑った。

「——ありがとうな、三葉ちゃん」

「……はいっ」

……やっぱり親子だと思った。

三葉は彼の笑顔を見たとき、自分の最愛の人を思い出した。

——やはりこの人は瀧くんの父なのだ、改めて思った。じゃなければ三葉が瀧以外の男性を魅力ある人物と思うはずがない。

……三葉は全く以って無意識だろう。彼女の立花への接し方が、自分が心から気に入られる所以となっていることを。

——瀧は以前言っていた。三葉ならば、絶対に気に入られると。

……そもそも瀧が好きになるような女性を、親である立花が気に入

らないはずがないのだ。

「……ところで、だ。さつき俺が言ったことに反応したよな？」

「……え」

「とぼけてもダメだぞ？そりゃあ気になるよな、彼氏が昔、自分じゃない女を気になっていたらなんて」

三葉は凶星を突かれてつい目を丸めて驚いてしまう。

立花は少し悪戯な笑みを浮かべながら三葉の反応を見て楽しんでいた。

……三葉が反応したこととは、瀧が昔気になっていた女性についてのことである。それについてはミキからも聞いていない情報だからこそ、気になるのだ。

——ミキが三葉に伝えていないのは、単純にその相手が自分自身であるのだが。

「そ、それは気にならないって言えば嘘になりますけど……」

「はは、素直で良いな。まあ俺もそんなに知っているわけじゃないから知らないんだけどな」

「あ、からかいました!?やっぱりお父さん、瀧くんの親です！」

三葉が怒ったふりをしながらそう言うと、立花はすまんすまんと冗談のように謝る。

……しかしすぐに穏やかな笑みを浮かべながら、こう言った。

「まあ安心していい。あいつは俺に恋愛観も似ているから」

「……恋愛観、ですか？」

「そうだ。……瀧から聞いていないだろうな。——俺の妻のこと。つまりあいつの母親のことさ」

……思えばそうだと三葉は思った。確かに三葉は瀧から母親のことを聞いたことがなかった。

もちろん瀧はそれを黙っていたわけではなく——知らないことは言えなかったからである。

「……妻はな、あいつを生んで数年経って亡くなったんだよ。まだあいつ物心がつく前だから、覚えていないんだろうけどな」

立花は少し寂しそうな表情をしながら、部屋にある一冊のアルバム

を引き出し、その写真の一枚を三葉に手渡した。

三葉はそれを見ると、そこにはまだ3歳にも満たない瀧と立花、そして三葉の知らない綺麗な女性が瀧を抱っこして映っていた。

「……身体が弱かったんだ。瀧のことも本当は産むことも出来ないような身体なのに、どうしても生むと聞かなくてな——ただ瀧を愛していた。そんなあいつのことを、俺はどうしようもなく愛していたんだ」

それは瀧ですら知らないことだった。

「俺が再婚しないのは、もう二度と誰かに惚れることがないから。一度本気で惚れたらそれ以外は眼中にない——瀧も同じだからな」

「……はい。それはもう、わかっていますよ」

——三葉は立花の言葉に笑顔を浮かべてそう返した。

「瀧くんがあんなに素敵なお男性に育ったのは、きっと瀧くんには比べようのない愛をずっと抱き続けた両親が居たから——やから、私も二人に負けないくらい瀧くんを愛します」

「………本当に、気持ちいいくらい素直なんだな——不肖の息子だが、よろしく頼むな」

「——はい！」

——これが瀧の父と三葉の突然の出会いだった。

○●●○

お鍋を突きながら事の次第を聞いていた瀧と四葉は、今日初めて会ったにも関わらず既に仲の良い二人を見て、呆然とするしかなかった。

何よりも瀧は、三葉が完全に外堀を埋めたことにただただ驚いている。

——なんともいえない気分のまま、瀧は前の席の四葉と目を合わせた。

自然体の三葉とは違って瀧の父との初対面で緊張している赴きであり、困っている目で瀧を見つめている。

そんな四葉を見て内心同情する瀧であるが、それとは他所に三葉は愛想を振りまくように立花のお膳に鍋の具材を綺麗に盛って渡して

いた。

「はい、お父さん！どうぞー！」

「おう、すまないな、三葉ちゃん——瀧、知らない間に良い彼女が出来て、父さん嬉しいぞー」

「やだなー、お父さんつたらー」

「……………」

そんな仲睦まじい二人を見て、瀧と四葉は席を立ててコソコソと耳打ちをし合う。

「…………お前の姉ちゃんすげえな。おっさんキラージャン」

「わ、私も初めて見るよ。とりあえず実のお父さんより懐いているあの姿見たら、お父さんたぶん鬱になるよ」

「ああ、違くない。つてか展開が急すぎてついていけないのは俺だけか？」

「安心してお兄ちゃん、四葉も全くついていけないから」

「そ、そうだよな？」

「うん」

またしても瀧と四葉の仲が良くなるに、二人はうんうんと頷き合う。

それを見た三葉はといえば——

「瀧くん、四葉ー？ そんなところで二人こそどこぞどうしたんー？」

「瀧い、若いからって女子高生に手を出しちゃいかんぞ？ 浮気か？」

ニツコリと笑う三葉と、それを煽ってくる立花。

既に謎の連携を見せている二人に、瀧と四葉はただただ溜息を吐くだけであった。

——そんな謎の緊張感のある食事を終えて、瀧は現在、玄関口にいた。

リビングには食器を洗っている三葉と四葉がおり、この場にいるのは立花親子のみ。

何故玄関なのかと問われれば、立花がもう帰らなければならぬからだ。

「んで親父よ。なんでこんなことになったんだ？」

「なんでと言われてもな。俺はたまたま近くを寄ったからお前の顔を見にきたら、家に知らない女がいたんだ。それで三葉ちゃんと話す中で仲良くなった。はい、以上」

「その過程を詳しく知りたいんだけど!？」

「お？ 俺に嫉妬か？ おっさんに嫉妬とは、お前もちっぽけな男だなあ〜」

——額に青筋が浮かび上がる錯覚に囚われる瀧。

引き笑いをしながらそつと拳が震えるのだが、立花は相変わらず豪胆に笑っていた。

「……なんてな。っていうかお前がそんなことねえってことを一番理解してるか」

「——当たり前だろ？ 俺が知りたいのは、親父が俺のどこまでを話したかってことだよ」

「……まあ大体？」

「——親父いい!!」

掴み掛かろうとする瀧をさつと避ける立花。

やはり親子といえど、あしらい方は父親の方が上なのであった。

「——まあ、なんだ。あの子を絶対に離すなよ？ 俺、三葉ちゃん以外は認めないからな」

「……おう。っていうか気に入るすぎだから」

「——あの子を見てたら、お前とあいつのことを思い出すからな」

——立花の言うことが何を指すかはわからない。

ただその表情は穏やかで、それだけを言っただアノブに手を掛けて扉を開いた。

「また来る。そのときも三葉ちゃん、呼んでおけよ？」

「じゃあ事前に連絡しろ。それと肉屋のおっちゃんか偶には連絡しろって言っただぞ」

「……いきなり来るから面白いんだろ」

立花はニヤツと笑いながらそう言うと、瀧は頭を抑えて溜息を吐いた。

……しかし久しぶりに父親の顔を見れたことは素直に嬉しかったから、そつと手を振った。

「また連絡するよ——お父さん」

「……おう」

まるでしてやられたといった顔をする立花。

そして思った——自分は自分で思っている以上に、愛していた妻と同じくらいこの馬鹿息子のことを愛しているんだと。

……しかし瀧の父親として、してやられて終わるわけにはいかない。

そう思い、立花は別れ際に——

「んじやな——それと卒業おめでとう。初夜はどうだった？」

「んなつつつつ?!? ち、ちよつと待て親父!! それ誰に聞いた!? おい、扉閉めんな!! いいから弁明しろお!!」

——そんな爆弾を言い捨てて、そのまま帰って行ってしまったのであった。

瀧の叫びを聞いて、リビングからひよつこり顔を除かせる宮水姉妹は目をクリツと見開いて彼を見ていた。

……家を後にする立花は、瀧たちの部屋をじつと見て、優しげな笑みを浮かべる。

眼鏡をクイツと位置を直して、すつと呟いた。

「——俺たちの息子は、幸せになったよ。だからお前は、そこで見守ってやってくれよ?」

——虚空を見つめるように立花はそう言うと、そのまま自分の家に帰っていく。

……それが何を意味しているかは、定かではないが。だがその虚空に、何か暖かいものがあるのかもしれない——。

○●○○

……夜、瀧の部屋でくつろぐ宮水姉妹の姿があった。

既に時間は午後10時を回っており、瀧はいつまで経っても帰る気配のない二人に首を傾げる。

三葉はともかく、何故四葉が帰らないのだろうか。そう思ってい

た。

「四葉、お前時間——」

「お姉ちゃん、そういうえば最近買った服かわいいね。今度貸してよ」

「え？　べ、別にええけど……四葉、そろそろ」

「——瀧くんもこっちに来て一緒に話そ！」

瀧と三葉が時間のことを言おうとすると、それを遮るように言動する四葉。

四葉は瀧の腕を引っ張り、自分と三葉の間に強制的に座らせた。

ベッドの上で美人姉妹に近距離で挟まれる瀧。男冥利に尽きる羨ましい状況であるのだが、そのような状況になればなるほど、三葉の審査が入るのだ。

……しかしながら、なるほどと瀧は思った。

「四葉よ。お前な……」

「……だめ？」

瀧は何かに気づいたように頭を抱えると、四葉はわかりやすく上目遣いで瀧を見つめ、両手の平を合わせた。

瀧は四葉の荷物のリュックサックを見る。明らかにただ遊びに来るほどの大きさではない。

今日は土曜日であり、明日は休日——四葉の狙いは火を見るより明らかだ。

「……まったく、お前はな——三葉。こいつ、今日ここに泊まっていく気満々だぞ」

「え？　……四葉？」

「っ……。だ、だって……私も、もつとお姉ちゃんと瀧くんと遊びたいし……。それはね？　二人からしたら邪魔だっと思うし、その……そ、そういうこととするなら、しばらく部屋には入らないし……」

「四葉？」

二人の威圧的な声が重なり、四葉は萎縮するように身体を縮こませる。

……そんな小動物のような彼女を見て、瀧は溜息を吐きながら彼女の頭にポンと手を置いた。

「お前はませてるっていうか、耳年増っていうかさ——泊まりたいなら最初から素直に言えよ、馬鹿妹が」

「別に頭ごなしに駄目って言うわけじゃないんやからね？ 本当に、あんたって変なところ不器用だよ」

……まるで姉と兄が妹を可愛がるように、四葉の頭を優しくなでる。

——幼少期に頃に母を亡くして、父親も別居。女三人の末っ子であった四葉は小さい頃からしつかりとした子だった。

家事も積極的に手伝って巫女としての役割も進んで引き受けていた。だがそこに、誰かに甘えるということは少なかった。

……その反動からか、ここ最近の四葉は遅い甘え期のようなものに掛かっていた。彼女からしたらそれは心地いいもので、それは姉である三葉と既に兄のような存在である瀧の二人から与えられるもの。

——瀧と三葉は互いに苦笑いを浮かべながら、仕方ないと思っていた。

「——ありがとう、お姉ちゃん、お兄ちゃん！」

「だから瀧くんに対するアクセントが違う！」

「……まあ別に、いいんじゃないね？」

——あながち、お兄ちゃんという言葉に対して満更でもない瀧であった。

それから三人でボードゲームをしたり、カードゲームをしたり、はたまた最近の出来事の話をしたり……。

その際に瀧と三葉は互いに奥寺ミキと勅使河原克彦に出会ったということを知ったりした。

そのように時間を過ごし、三人ともお風呂を済ませ、いざ就寝と思えば瀧はリビングに布団を敷いたのだが——

「四葉、あんたなあ……」

「え、いいでしょー？」

「……おいおい、お前マジか」

——現在、瀧と三葉の間に入り込むように、ベッドの上で川の字に

なる三人。

ほぼほぼ四葉の強行である。

しかし問題は、瀧の部屋のベッドは二人ならばゆったりできるサイズ
のベッドだ。

それを三人で眠るとなると、自然と距離がほぼ無くなるのだ。

「一回こういうの憧れてたんだよねー」

「よ、四葉？ 瀧くんは理性の塊だけど、それでも男の子なんやよ？

流石にこれは……」

「何々？ もしかしておねえちゃん、瀧くんが四葉の若さに負けて
襲っちゃうとか思ってるのー？ 自分に自信ないんだー♪」

「——ほお？」

四葉の煽りに簡単に引つかかる三葉。

ピキッとはつきり音が聞こえるほど三葉の表情は強張った。

「彼氏もおらんお子様が、言うもんやね」

「25歳になるまで彼氏もおらんかった生娘が、何を偉そうに」

「——私は！ 作れないんじゃないよ！」

「そんなの私も一緒やもん！ 四葉、学校で超モテてるもん！」

「じゃあすぐ作ったらええんやよ！」

瀧の左側で寝転びながら姉妹喧嘩をする二人。瀧はそれに関わり
たくないため、そつと二人に背中を向けてすぐに寝ようとした。

「そ、それは……」

……三葉の言葉に、四葉は言葉を失う。

そして——瀧のパジャマを、キュッと引つ張った。

「……好きになれる人が、いないんだから仕方ないもんっ」

「……四葉」

——今朝の危惧が、三葉の脳裏を掠めた。

四葉が瀧のことを懐きすぎているのは、彼のことを素敵な男性と見
ているからではないか。だからこうも絡んでくるのではないか。

……三葉はすつと、四葉を抱きしめた。

「……お姉ちゃん？」

「……どう？ お姉ちゃんに抱きしめられたら、どう思う？」

「……安心する。あつたかくて、柔らかかくて……」

四葉は思ったことをそのまま口にする、そつと抱きしめるのをやめた。

途端に四葉は「あつ……」と名残惜しい声を漏らし、三葉の顔を暗闇の中から覗く。

「……ねえ瀧くん——四葉のこと、抱きしめてあげてくれない？」

「……は？」

——三葉の突然のお願いに、それまで無関心を決め込んでいた瀧が振り返ってそう反応する。

流石の四葉もそれには驚いて、瀧と三葉の顔を交互に見た。

「お、お姉ちゃん!? な、何言つとるん!？」

「いいから——お願い瀧くん。いつも私にしてるみたいに、お願い」

「……三葉がそれで良いのなら」

……瀧は三葉の思惑を感じ取ったのか、そつと四葉の身体を寄せて——優しく、包み込むように抱きしめた。

「た、瀧くん……」

正面から抱きしめられる四葉は瀧の胸に顔を埋め、そのままなされるままに抱きしめられる。

——にも関わらず、彼女が感じたのは胸を張り裂けそうになるほどのドキドキよりも、違うものであった。

「……ねえ四葉。瀧くんに抱きしめられてさ、どう？」

「そ、それは……」

……男の子の癖に、少し良い匂い。石鹸に香りと、爽やかなシャンプーの匂いが四葉の鼻腔をくすぐる。

その身体は三葉よりも暖かく、抱かれる腕は意外とガツシリしていて男の子で、胸板も大きい。

……それでも、四葉は思った。

それは——

「——暖かい、よ。すごく、安心する……男の子に抱きしめられたのは初めてなのに、ドキドキするよりも、安心さが先だなんて……」

——三葉に抱きしめられたときと、同じ感覚だった。感触の違いは

あれど、四葉は確かに瀧と姉に同じ感情と安堵を覚えた。

いつまでも抱きしめてもらいたい……そんな感情。

それが恋愛感情なのかといわれれば、今の四葉ならば断言できる。

——これは恋愛感情のようで違う、親愛的な感情であると。

ただ一緒にいると安心できて、抱きしめられるだけで眠たくなってしまうほど自分を任せたくなる。そんな家族のような感情。

そう……家族になりたいのだ。四葉は瀧と、そして三葉とその関係を望んでいる。

そう自覚したとき、四葉は気づいた。

「……そっか——ありがと、お姉ちゃん」

「……いいんやよ。だって、お姉ちゃんなんだから」

それを気づかせてくれたこと、自分のことを気遣い続けてくれたこと、恋人を貸してくれたこと——その全てに四葉は「ありがと」と言葉を漏らす。

そんな四葉の頭を撫でる三葉。

……瀧はそんな二人を見て、思った。

「(似たものどうし、だよな——みんな)」

——四葉は姉に撫でられ、瀧に抱きしめられて、次第にまどろみに包まれる。

それは深い眠りになり、そして気づいたときには安らかな吐息を漏らして、眠りにについていた。

瀧はそっと四葉を抱きしめるのをやめて、肩肘をつけながら寝ると、ふいに三葉と目が合った。

「……四葉ね、きつと揺れてたの。初めての感情に」

「……そっか。だから」

「うん。自分の中ではつきりしてほしかった。だから荒療治だけど、こうしたんだけど——でも不思議と瀧さんと四葉がくつつついても、あんまり嫉妬はしなかったんやよ?」

「……三葉。ちよつと顔、寄せて?」

「え、良いけど……」

三葉はベッドの上で上体を起こし、四葉をはさんで顔を瀧の方に寄

せる——すると瀧は同じように上体を起こして、三葉の頬に手を添えてキスをした。

「ん……」

……三葉はそれを驚かずに受け入れ、むしろ深く瀧の唇を求める——
——昨晚のように。

——流れるのは淫らな水滴の音。舌と舌が絡まる音。ベッドが少し軋む音。

そして——四葉の穏やかな吐息。

「……駄目、今日はお預け」

……三葉を求める瀧を、彼女はそつと身体を離してそう言った。

離れる唇からは糸を引くように唾液が繋がっており、三葉の頬はもちろん真っ赤だ。

——それでも三葉は落ち着いた声音で瀧を止める。

「……だよな。ごめん……昨日のこと思い出したら、急に三葉がほしくなつて」

「……いやじゃないんだよ？ でも——今日くらいは四葉の傍にずっといてあげたいなつて思つて」

……そんな家族に優しい三葉だからこそ、瀧は彼女に惚れた。

——瀧と三葉は互いに気持ちを入れ替えて、そつと四葉の両手を互いに握る。

「……今だけやよ、四葉。お姉ちゃんがこんなに甘いんは」

「じゃあ三葉が厳しくするんなら、俺はげろ甘くなろうかな？」

瀧がそんな軽口を叩くと、三葉はニツコリと笑った。

「別にええけど、その分オハナシするからね？」

「……ほどほどに、甘くします」

「——よろしい♪」

——そんな会話をしつつ、瀧と三葉も次第に眠りにつく。

しかしその握る手は決して離さず、三人は仲良く川の字で眠った。

——そんな中、ふと小さな寝言が部屋に響いた。

「——だいすき……」

……そう呟く彼女の寝顔は、本当に幸せそうなものであった。

お嫁見習い・三葉さん

私、宮水三葉は上機嫌にいつもの日課に勤しんでいた。

いつも家を出る時間よりも数時間早く家を出て、恋人の瀧くんの家によって触れ合ってから会社に行く。

そうして始まる一日って、すつごく充実している。朝から瀧くんと一緒にいて心が温かくなったら、幸せで仕事も捗るんだよ。

……そういえば、会社といえは少しだけ変化があったりする。

以前、私が同僚に絡まれた時、瀧くんは私を助けるように間に入って、私の恋人発言をした。

その場面を実は会社の同僚や後輩、先輩にすっかり見られていて、割と広まっているんだよね。

「鉄の女に春が!」……新聞の見出しにしたら、こんなものなのかな？

私としては別に隠していたつもりはないし、バレてもよかつたんだけど、あれからかな。

同僚は私に近づかなくなり、私の周りには常に同性の社員が張り付くようになった。まるで男避けみたいにな。

……噂で聞いたけど、瀧くんのあのときの行動が一部始終知られている。だから、あのときのかっこよさとかもみんな知っているわけ——簡単に言って、ちょっととした噂の的なんだよね。

四葉にこのことを話したら……

『さ、さすがお兄ちゃん……でも大丈夫なん、お姉ちゃん。瀧くんが無意識にそんな男前な行動ばかりと取っていると、無駄に人気でちゃうんよ?』

なんて言ってきたから、しっかりと注意しないと。

私は結構嫉妬深いし、瀧くんの隣には絶対に私がいけないといけないんだから。……そんな風に思っていると、自分が重いと感じてしまう。

……でも、瀧くんはきつとそんな私を普通に受け入れてくれるんだよね。えへへ。

「……よしー」

私は瀧くんからもらっている合鍵を使って彼の家の鍵を開け、家の中に入る。瀧くんはまだ起きていないみたいで、私は彼の寝顔が見たくて先に寝室に向かった。

「……ふふ、寝てる」

……瀧くんはまだぐっすり眠っていて、無防備な寝顔を私に見せてくる。キュン、と胸が高鳴る。

瀧くんは普段は男らしいし、すごく頼りになる。でもたまに……私の前だけで見せてくれる無防備な仕草や行動。油断している瀧くんは、本当に愛くるしいというか、可愛いというか——とにかく母性本能がかきたてられる時がある。

特に寝ているときなんかは偶に寝言を言ったり、無意識に抱きついてくるときがあつて……ダメダメ。

これじゃあただの変な女だよ！

「たーきくーん？ 三葉やよ？ はやく起きないよー」

私は瀧くんの耳元で、小さくそう囁くように言いながら体を揺らす。

……しかし瀧くんは起きない。普段寝起きがいい瀧くんなのに、一向に目を覚ます気配がなかった。

「……あれ？ むむ」

……ならば次の手だ。私は無防備な瀧くんの頬にキスをする。

——そのとき、瀧くんの体温が尋常じゃないくらい高いことに気づいた。

「——も、もしかして……」

私はすぐに布団をどかして、瀧くんの状態を確認する。

……服は汗でぐしゃぐしゃになっていて、少し息が荒い。

私は自分の額と瀧くんの額を合わせた。

「……熱い。瀧くん、もしかして」

——紛れもない、風邪の症状だった。

私はリビングから体温計を取ってきて、瀧くんのTシャツの間から手を忍ばせて脇に体温計を挟む。

……計測が終わり、その数値を見て驚いた。

「39°C?! ……ど、どうしようー!」

私は少しあせるように動揺する——だけど、私が動揺してはダメだとすぐに気づいた。

今、苦しい思いをしているのは瀧くん、今この状況を知っている上にどうにかできるのは私だけ。

彼女が彼氏の危機を助けなくて、何が恋人だ! ……そう心を落ち着かせて、まず私はスマホをとって会社に連絡をする。

……事の次第を伝えると、すぐに返信はあった。幸い今日の仕事はミキさんの打ち合わせくらいだったから、先方にしっかりと連絡を取って同意してもらえるなら、今日は来なくてもいいらしい。

ミキさんの打ち合わせは昼からだから、次は瀧くんの方だ。

「瀧くん、ちよつとスマホ借りるね?」

私は瀧くんのスマホを勝手に触ることを謝りつつ、彼の電話帳にある瀧の勤務先に電話をかける。

数度のコールの後、電話は瀧の会社につながった。

『お電話ありがとうございます。〇〇建設デザイン会社の受付の塩田です』

「もしもし、私、そちらの会社の社員の立花瀧の関係者なのですが……」

『あ、立花くんですね。それでは、彼の上司にお繋ぎしますので少々お待ちください』

電話の受け付けの人は電話を保留し、内線で違う部署に通話を転送してくれる。数秒ほどのインターバルの後、電話は違う女性に繋がった。

『お電話変わりました。立花の上司の巡ヶ丘と申します』

「はい、私は立花瀧の関係者の宮水と申します」

『え……あ、はい。そ、それで宮水さん? お電話いただいたのですが、どういったご用件でしょうか?』

すると巡ヶ丘さんは何故か私の声を聞いて動揺する。

……特に私は気にすることなく、話を続けた。

「実は立花瀧が39℃の高熱を出しています……体もあまり動かせない状態なので、私が代わりにお電話させていただきました」

『そ、そうですか……そ、それはご丁寧にありがとうございます』

「それで、本日は瀧く……立花をお休みにしていただきたいのですが」
『え、ええ。課長には私から伝えておきます——と、ところで、宮水さんは彼とは、ど、どういったご関係なのですか?』

……む。巡ヶ丘さんの質問に私は疑問を抱く。

こういうことを聞いてくるというのは明らかにおかしいと言うか、確実に彼女は瀧くんに好意を持っていると思う。女の勘でしかないけどさ。

——ほんのちよつとやり返し。だって私が彼氏がいることがバレて、瀧くんがバレてないなんて不公平だもん。

「——とても親密な関係でして、あの……それ以上言う必要はありませんか?」

『——い、いえ……た、立花くんにお、お大事にと言っておいてください』

「はっ」

巡ヶ丘さんは明らかに動揺した口調でそう言うと、すぐに電話を切る。

……牽制のつもりではあったけど、ちよつとだけ自己嫌悪した。こんなの、すつごく性格悪いよね。

少なくとも巡ヶ丘さんのことは瀧くんから偶に聞いていて、後輩想いのいい先輩だと思う。

……思うけど、それで自分の彼氏に好意を持たれるのは気持ちよくないというか——女心は複雑です。

とりあえず私はむしゃくしゃして瀧くんの額を指でパチンと弾く。

「うう……」

瀧くんは力のない声で唸るも、私は少し唇をツンと尖らせて……

「——瀧くんの色男。あほ」

——ちよつとだけ、意地悪をした。



……目を覚ますと、とりあえず身体の節々が痛かった。
昨日の夜から身体の調子が悪かったのは自覚していたけど、まさかここまで身体がいうことを聞かないとは思わなかった。

——だけど、起きて自分の身の回りを確認して疑問を抱いた。

一つは寝る前の服と今の服が変わっていること。二つ目は自分の額に冷えた濡れタオルがピタツとつけられていること。

……すつと時計を見る。時間は家を出ないとそろそろマズイ時間に差し掛かっていて、俺はすぐに立ち上がろうとする——しかし、身体が言うことを聞かなかった。

「……っ。マジか……」

立ち上がろうとした瞬間に立ち眩み、俺はそのままベッドに寝転がる。

……辛い。身体は動かないし、頭痛もする上に身体が猛烈に熱い。そんな辛いときに思い描いたのは、三葉だった。

「みつは……なんて呼んでも、な」

俺は少し苦笑を浮かべつつ、もう一度何とか立ち上がろうと試みる。

上半身を上げて少しだけ伸びをし、恐る恐る立ち上がる。

……なんとか大丈夫だ。とりあえずまずは会社に電話を——そのとき、唐突に俺の部屋の扉が開いた。

「——瀧くん！ まだ寝とかんとあかんよ!」

「み、みつは?」

——そこにいるのは三葉で、三葉は手に小さな鍋を持ちながら驚いた表情で俺を見ていた。

彼女は机の上に鍋を置いて、すぐに俺を抱きかかえると、そのまますぐにベッドに寝かせる。

……し、思考が追いつかない。何で三葉がここに? っっていうか仕事は?

「駄目やよ? 辛いときはしつかりと休まんと……でも起きてくれてよかったあ」

……三葉は心から安堵したように表情を緩める。

三葉は俺の手をギュッと両手で覆うように握った——そんな一連のことに、三葉に対して愛情が募る。

……辛いときに居てほしい人が居てくれる、そんな普通のことだろうしようもなく嬉しかった。

「来たときはびびくりしたよ。瀧くん中々起きないって思ったら熱があるんだもん」

「ごめん……。実は昨日から体調が優れなかったからさ」

「そっか……。でもそういう時はちゃんと私に連絡すること！」

三葉はそう人差し指を立てて、少し強めの口調でそう言う。

「……本当に心配したんやよ。大切な人が自分の知らないところで苦しんでるんは、イヤだからね」

そう言つて三葉は、まるで俺を子供扱いするみたいに頭をそつと撫でる。

……三葉はちゃんと自分を頼つて、そう言っているんだと思う。でもそうだよな。

俺だつて三葉が困つているときは自分が誰よりも先に助けたいって思いから。……これは反省しないと。

「ごめん、三葉——今度からはちゃんと最初に言うから」

「……うん！ いつでも私は駆けつけるから！」

……ただでさえ熱いのに、余計に身体が、心が熱くなった。

三葉つてこういうことを無意識で言ってくるからズルイよな。

つて、それよりも——

「三葉、電話とつてくれないか？ ちょっと会社に電話を……」

「大丈夫やよ！ もう私が連絡しておいたから」

「え、じゃあ三葉は——」

「それも大丈夫！ ミキさんに連絡して、今日の打ち合わせは後で電話ですることになってるから！ 今日の私は瀧くんの専属の……—

—お、お嫁さんみたいに尽くすから!!」

——三葉は顔を真っ赤にしてそう宣言する。

……恥ずかしいのはこつちだつっの。三葉はこういうとき、年不相応に可愛いのがなんていうか——たまに不安になると共に、彼氏と

して嬉しいわけで。

「——じゃあ瀧くん、おかゆ作ったから食べよつか？」

「お、おう」

……ただ今日の三葉は、驚くほどに頼りになるお姉さんみたいだった。

料理、洗濯、掃除、水場……知っていたとはいえ、三葉の家事能力は完璧だった。

三葉の甲斐甲斐しい看病のおかげか、昼を過ぎる頃には俺の体調も幾分はマシになって、今は汗を流すためにシャワーを浴びている。

——三葉の介護の下。

「あ、あの三葉さん？ 流石にここまででは一緒じゃなくても……」

「病人は尽くされれば良いの！ そ、それに……今更恥ずかしがらなくても良いでしょ？ もっとすごいことしてるんだから……」

「そ、それとこれとは話が別だろ！」

「い、良いから!!」

……一糸まとわぬ姿で背中を流される俺。当然三葉も何も着用せず、俺の背中を流していた。

知識としてしかないけど、そういうお店にしか思えない俺。

——つていうか思えば三葉と初体験したきっかけてお風呂だったよな。

……反応するな反応するな。今反応したらただの猿だ。無心になるんだ、立花瀧！

——そんな風に自分に言い聞かせている間に身体を流し終えて、湯船には入らず風呂場を出る。

「はい、身体拭くよー！」

「それは自分でするから良いって!!」

——三葉は、これでもかかってくらいに献身モードに入っていることを今になって気づいたのだった。

最終的に身体は自分で拭いたのだが、そのとき三葉が少し不満げだったというのは今でも理解に及ばなかった。



……その一日、私は瀧くんに尽くせる限りを尽くした。
私の性格なのかわからないけど、どれだけ尽くしても何でもしてあげたくなるんだよね。

もし私が駄目男を引っ掛けてたら人生がむちゃくちゃになっていたらと思うけど……瀧くんが良い男で本当によかった。

ともかく普段はしっかりしている瀧くんが弱っていて、無防備な姿は私の心にグツと来るものがあった、とにかく今日は瀧くんに構い続けた。

そんな私の努力もあって、夕方になる頃には瀧くんの熱も大分下がった。

そして今は――

「……ん」

瀧くんは、子供みたいに私の膝枕で眠っている。

……こういう甘える一面は、初めてだ。もちろん今まで交際して一度もなかったというのにはなかったけど、瀧くんは中々年下の男の子と思えなかったんだよね。

それは瀧くんがすっかりとしていて、短期間でもものすごく成長したっていうのもあるけど――根本の部分で、私と瀧くんは差を感じない。

むしろ敬語を使われるほうが不自然なくらいに。

「でもこんな感じに年下っぽいのも……うん、あり」

……でも偶にでいいかな？ 瀧くんだって甘えっぱなしはイヤだろうし――ふと瀧くんの唇が目に入る。

……キス、したい。無防備な瀧くんにするのは、ズルイかな？

瀧くんが辛いのはいやだけど、今日はちよつと瀧くんの発熱に感謝する。こうして瀧くんの新しい一面を見ることができたんだから。

「瀧くん、瀧くん。起きてないよね？」

私は瀧くんの名前を呼ぶけど、瀧くんは反応しない。

……私は身体を屈めて――眠る瀧くんにキスをした。

「……も、もう一度」

私は一度だけじゃ満足できずに、もう一度瀧くんにキスしようとしたとき――

「――風邪、伝染るからダメ」

――起きていた瀧くんにそれを遮られた。瀧くんの指が私の唇を止めて、私は目を丸くして至近距離で瀧くんを見つめる。

……残念。そんな風に思いつつ、瀧くんは上半身を起こしてソファアの上で私の横にしっかりと座った。

「意外と三葉って積極的だよな。寝てたらキスしてくるし」

「嬉しいくせに」

「嬉しいけど、時を選べって話。風邪が伝染ったらどうするんだよ」

「そのときは瀧くんが尽くしてくれるんだよね？」

「……まあ、そうなんだけどさ」

私はわざとらしくそう言うと、瀧くんは少し気恥ずかしそうな表情を浮かべて返答した。

……そして私をそっと抱き寄せた。

「……今日は本当に助かった。ありがとう、三葉」

「……ううん。瀧くんのためやもん――それにこうやって抱きしめてくれたんだから、報酬は十分かな？」

私は瀧くんを求めるように、返すように瀧くんを強く抱きしめた。

……ああ、やっぱりそうだ。やっぱり好きだ、この人が。

理由なんていくらでもあるけど、私の根本の全てが瀧くんを心から欲している。でなきゃ、いくらなんでもこんなにも瀧くんだけを愛するなんてできない。

「……抱きしめるだけでいいのか？」

「……サービスでキスしてくれたらもっと嬉しい」

「……知らない、からな」

――瀧くんはそういつて、私の後頭部を手で押さえ、引き寄せてキスをする。

ほんの少しだけ深いキスをされ、私は本能的に瀧くんの身体を強く抱きしめた。

意外と引き締まっている身体と、私よりも大きな背中。手を回して

やっと回りきるくらいの男の子の身体。

……私を幸せにしてくれる、瀧くんの身体だ。もつと感じていた。常に、ずっと……そんな思考にすぐになる。

「……ねえ、瀧くん」

「ん……。なんだ？」

「私、こんなに幸せでいいんかな？　こんなにずっとずっと幸せで、本当に……。幸せすぎて、不安になるんやよ」

「……別に、いいじゃん」

唇を離し、目と鼻の距離で話す私たち。

すると瀧くんは、私を自分の元に引き寄せて、再度抱きしめながら

「——俺が、三葉を幸せに……。し続けるからさ。だから、その……。不安とか、必要ないし」

「……………」

……言葉が出ない。恥ずかしそうに、でもそう断言する瀧くんの言葉に歓喜のあまりジーンと肌があわ立つ。

だけど、瀧くんはきつとそうしてくれる。そう断言できる。

——でも、一方的なのは頂けないな。そんなの、許さない。

「——私が瀧くんをずっと一生、幸せでいれるように頑張るんやよ。二人でずっと、幸せでい続けようね？」

そう言つてやると、瀧くんは一瞬だけ驚くも、すぐに穏やかな吐息を漏らして私を抱きしめた。

私もそれを受け入れるように抱き締め返す——この幸せは絶対に手放さない。

何があっても！　……ずっと瀧くんを好きで、好きでいられるように頑張ろう。

——例え彗星が落ちてきても、私たちならそれが出来ると確信できる。本当に、何故だかわからないんだけどさ。

「……それに瀧くん、明後日には完璧に治しておいてよ？　もし無理ならまたつきつきりで看病してあげるから！」

「分かってるよ。テッシーにも必ず行くつて言ったし——二人は俺も

直接祝いたいからさ」

……私たちはそんな会話をしつつ、まあ平和な一日を過ごす。

——ソファアの前のテーブルの上にポツンと置かれている一通の招待状のコピー。参加、不参加の項目があるその招待状にはしっかりとした線で「参加」に丸が記されていた。

幸せのカタチ

「むむ……このネクタイは……ねえ四葉、どう思う？」

「ん、瀧くんは青が似合うんじゃない？ あ、でもテツシーとさやちんの晴れ舞台だからもつと温色でも」

「スーツももつとカジュアルな奴に——瀧くん、このスーツに着替えて！」

——現在、立花瀧は宮水姉妹の着せ替え人形になっている。

夕刻の時を刻む今日この頃、瀧は現在宮水家への宿泊用着替えと数着のスーツを持ってお邪魔をしていた。

その理由はと言えば、それは単純で——明日に迫った勅使河原夫妻の結婚式のためである。

入籍は既に済ませているが、色々なごたごたがあつたため結婚式を先延ばしにしていたのであるが、晴れて明日式をあげることになったのだ。

本来は三葉の父親である宮水俊樹が当日、どうしても外せない仕事があるとの理由で列席できないということで、急遽余つた席を瀧にあてがったというわけである。

これは克彦が望んだことであり、嫁である早耶香も快諾しての特例だ。

式は基本的に親戚や親しい友人だけを招いた小さなものだが、瀧としても他人の結婚式に出向いた経験が小さい頃を境にない。

よつて服装や作法などを教えてもらうために宮水家に泊まりに来たのだ。

……そして今に至る。

「ん、私はこつちの方がええと思うんやけど、四葉はどう思う？」

「これならネクタイは赤みのかかつた方がカッコいいと思うよ！ うん、我がお兄ちゃんながらこれは中々に……」

三葉が瀧のネクタイを結びながらそう言つて、四葉が上目遣いで瀧を品定めをする。どうやら四葉のお眼鏡にも掛かっているようだ。

「はいはい、ありがとよ——まさか1時間も着せ替え人形にされると

は思わなかったよ」

瀧は四葉の頭をクシャクシャと撫でると、四葉は少し嬉しそうな声で「キヤツ」とわざとらしく声を出す。

……それを見て微笑みを浮かべる三葉。三人の関係は非常に落ち着いた微笑ましい仲である。

そんな光景を見ている一葉はふと、瀧の方に近づいてきた。

「……お婆ちゃん？ どうしたんだ？」

「いやさ。あんたにちよつとこれやろう思ってたなあ」

一葉の手にあるのは、赤と黄色、橙色で組み編まれたもの——組紐であった。

その模様は三葉が普段必ず髪を縛っている組紐と同じような柄であり、瀧はそれを受け取ってじつくりと見る。

「お婆ちゃんが作ってくれたのか？」

「そうやさ。今時はなんや？ 同じもんを恋人同士で持つんがええんやろ？」

「お婆ちゃん意外と若いこというよな」

「はは。若いもんに囲まれてたら若返るんやよ」

瀧は一葉に苦笑しつつ、組紐を今一度じつくりと見た。

……本当に三葉のものと同じである。最近編まれたのか少しばかり真新しいが、それでも三葉と同じものを持っているということ嬉しく思う瀧。

「明日はムスビの場や。あんたも三葉も、同じもんを付けた方がええやろ？」

「いいなー！ お婆ちゃん、私もお姉ちゃんと瀧くんと同じものつきたいー！」

「……あんたはほんま。まあちよつと柄は違うけど、これでもつけとぎ」

一葉は少しばかり額を抑えながらも、仕方ないという風に黄色と橙色を主体とした組紐を渡す。

……しかし、瀧はその組紐をどう身につけるか考える。

三葉はロングヘア—だからヘアゴムの代用として使っているが、あ

いにく瀧は男の上に短髪である。

四葉は髪の毛を下して側頭部の片側のみを組紐で結ぶ（所謂サイドテール）。

——ふと瀧は、自分の手首を見た。

「……ん。良い感じ」

瀧は組紐を手首に巻き、良い具合の長さで固定してブレスレットのように着ける。

手を軽くブンブンと振って取れないことを確認すると、一葉に笑顔を向けた。

「ありがと、お婆ちゃん。すっげえ気に入った！」

「ええよ、喜んでくれたら何よりや」

……一葉はそう言うと、微笑みを浮かべながら再び椅子に座る。

——瀧の組紐には意味がある。

三葉の組紐は赤と橙色で編まれており、四葉の組紐には黄色と橙色の糸が使われている。瀧の組紐には、その三色全てが使われている。

……その意味は——瀧と三葉、そして四葉が結び続けていられる願いを込めたもの。

三葉と四葉の色が敢えて欠けているのは、その分、瀧に不足している色を補うように二人を支えて欲しいという願いもある。

しかし一葉はその心配は一切ないため、特に口には出さなかった。

「えへへ……瀧くんとお揃いやあ」

「ふふふ、お姉ちゃん。わ、た、た、しも！ お揃いだよ？」

「……なんか、気分的に微妙になったんやよ」

「ひどっ!?! お姉ちゃん、可愛い妹に対してそれは辛辣だよ!?! 瀧くん、慰めて〜」

「……はいはい——つてかまずスーツ脱がさせて。皺になるから」

——一葉は騒がしい若い世代を見て、今一度微笑みを浮かべるのであった。

……そんな時、ふと家の電話が鳴り響く。

「電話だ。お婆ちゃん、私が出て……」

「ええよ三葉。わしが出る」

一葉は三葉の申し出を断り、電話の子機を片手に部屋から自室に向かう。

「もしもし。やっぱあんたか。どうしたんや、こんな時間に」

『——いえ。明日、少し時間が出来そうなので、そちらに行こうかと思いで。明日は克彦君の結婚式ですから』

「……ほお。それはええ。きないきない——ちようどええやよ」

——その時の一葉の表情は、ほんの少しだけ悪戯そうな表情をしていたのは誰も知らないことなのであった。

○●○○

「で、あんたはなんでまた私の部屋いるん？ 正直お邪魔やよ」

「いやだねえー、お姉ちゃんは心が狭くて。そんなだとすぐにお兄ちゃんを他の人に——」

「それないから。絶対、ないから」

四葉の軽口に対して、三葉は恐ろしいほど低く冷えた声音で言う。

瀧の着せ替えも終わり、風呂を済ました三人は就寝準備も済ましていた。しかし瀧が三葉の部屋に入るのは当然として、四葉もそれに付いてきたのだ。

「そ、そうだよね！ それに私もお兄ちゃん横取りされたら困るし！

お姉ちゃんとお兄ちゃんは超お似合いだし!!」

「うんうん、そうやよねー。……四葉、笑顔、引き攣つてるよ?」

「ひ、ひいっ!!」

三葉の赤子を泣かすほどの笑顔に四葉は悲鳴を上げ、瀧に抱き付く。それにより三葉の青筋がピクピクと動くのを瀧は見逃さなかった。

「……はあ。三葉、妹ビビらせるのもそろそろ止めろよ?」

「た、瀧くんっ」

瀧は溜息を吐きつつ、三葉の頭をポンと撫でて、そのまま自分の胸元に彼女の頭を抱き寄せる。たったそれだけで三葉は何も言えなくなり、そのまま瀧の胸に顔を埋めた。

それを見ての四葉の反応は——

「……むう」

——頬を膨らませて、少しばかり羨ましそうな表情をしていた。
そんな四葉はそそつと瀧の近くに寄り、彼の就寝着の服の裾を
キュツと掴む。そのまま瀧の手を掴み、自分の頭の上に手を持ってき
て、そして撫でるように催促した。

「……ほんつと、この姉妹は」

瀧は仕方ないと言わんばかりに四葉のサラサラの紙を撫でる——
正に両手に花である。

最早瀧にとって三葉は最愛の人で、四葉も見えない繋がりで繋がれ
た大切な妹のような存在なのである。

そこには劣情などはなく、本当に純粋な好意がほぼ全てを占めてい
た。

……兄妹のいない瀧にとつてはとても新鮮な関係性。瀧は瀧で、現
在の状況に満足しているのである。

とは言え、瀧もこの二人の自分に対する依存度には少し危機感を覚
えている。

いずれ自分は二人のお願いを断れないようになるのではないかと
いう微かな不安を感じつつ、瀧は宮水姉妹を甘やかし続けた。

——恒例と言わんばかりの、川の字で横になる三人。

以前は四葉が真ん中だったのであるが、今日は瀧を真ん中にして三
葉、四葉が彼を挟むという形だ。

床に布団を敷いて寝る三人だが、実は瀧はすぐに眠ってしまい、今
は三葉と四葉が瀧越しに会話をしていた。

「ふふ……瀧くん、良く寝てる。私たちに挟まれても普通に寝れる辺
りがすごいよね。普通の男の子なら絶対無理だよ」

「……お姉ちゃんの良いよね。瀧くんみたいな素敵な彼氏がいて」

「いいでしょ？ でもあげないし、貸さないんやよ？」

「えー、偶にはいいじゃん！」

「ダーメ——って言っても、私も四葉に対してはすごい許しちやっ
てるんやけどね」

三葉は瀧の髪をすうつと梳きながら、そう言った。

「まあ私もしよつちゆう手とか繋いだり、抱き付いたりしてるもんね」
「あれ、最初は怒ってたからね？ ……でもさ。瀧くんも、四葉との距離は私と同じくらい近いんやよね。今となつてはそれも嬉しいけど」
「……変わったよね、お姉ちゃん。最近、すつごく穏やかになった」
「——変えてくれたんだよ。この素敵な彼氏くんが」

三葉は瀧を見て、そう呟く。

彼は気持ちよさそうに寝息を立てて眠っている。

「……私、思ったんだ。お姉ちゃんを見ていたら、そんなに焦らなくて
も良いかなつて」

「でもあんた、瀧くんを基準にしてたら良い人見つからんよ？ 瀧くん
つて何気に高スペックだし」

「うう……今日瀧くんが作ってくれた料理は、超美味しかったもんね」
四葉はそう言われて、瀧の調理能力の高さを思い出す。

今日の夕食は瀧が作った洋食メニューで、かなり凝ったものを作っていたのだ。

メインに煮込みハンバーグ、スープやサラダもレストランのシェフ
のように作り、極めつけはデザートまで用意していた。

「料理が出来て、運動も出来て、芸術も出来て、顔も恋人の鼻肩目なし
でも整つてる上に優しいんやよ？」

「そう言われたらお姉ちゃんも中々な男を引つ掛けたよね？ ——
ま、お姉ちゃんもよく似たものだから、つり合いは取れてるけど」

四葉は嘆息して、三葉に見つからないように瀧の左手を握る。

「……姉妹つて似るのかな？ 好みまでそっくりだもん」

「まあ瀧くんですから」

「お姉ちゃん、ほんまベタ惚れやんね」

四葉は方言が出るほど呆れるも、そんな姉を羨ましいと感じた。

……自分の周りが幸せになつていくのは嬉しくもあり、一人取り残
されることがどうしようもなく寂しく感じる時がある。

——そんな時に、瀧と三葉はそんな四葉の心を甘やかに温かめてく
れた。

あれからだ。四葉が心の底から楽しいと思えるようになったのは。

あの日、本音を二人にぶつけ、自分の本当の想いに気付いたあの時。あの時も三人一緒に眠ったことを四葉は鮮明に覚えている。ずっと繋いでくれた二人の手——だから今は心の底から二人の幸せを願っていた。

そうしたら自分も幸せだから。

「……お姉ちゃん。私、早く瀧くんのこと合法的にお兄ちゃんって呼びたいよ」

「うう……それって、あれやよね?」

「——期待、してるからね?」

「ぜ、善処しますっ」

四葉が悪戯っぽくそう言うと、三葉は恥ずかしそうにそう声を漏らした。

……夜は更ける。そして時間は過ぎ、そして——次の日を迎えた。

その日は、これでもかというほど綺麗な快晴であった——。

●●●

美しい音色の鐘の音が響く。

眩いほどの太陽光に照らされた真っ白なチャペルは、どこか幻想的な光景を作り出し、そして椅子に座る人たちはどこか緊張した趣だった。

今か今かと、今日の盛大なイベントの主演の片割れを待つ。

——勅使河原克彦、早耶香の結婚式は、一部の親戚筋と互いの交友関係の深い人物たちだけが招待された小さな規模で実施されていた。

……瀧は祭壇の近くで早耶香の登場を待つ克彦を見た。

緊張した趣で視線を色々なところに向けている彼を見て、不意に笑みを浮かべる。

そんなとき、克彦と瀧の目が合った。

克彦は瀧に助けを助けを乞うような目を向ける。そんな克彦に、瀧は口をパクパクさせて「頑張れ」と言った。

瀧の隣の三葉もまた克彦にサムズアップをすると、彼は可笑しそうに笑い、心を落ち着かせる。

——ガラツ、と重たい扉がゆっくりと開く。

チャペルの扉が重く開くと、そこにはスーツを着た中年男性とドレスを来た女性が腕を組んで立っている。

ゆっくりと一步、また一步と祭壇の神父と克彦へと近づく。

周りからはこの日を祝福するような声が掛けられ、女性——早耶香は恥ずかしそうな表情を浮かべながらも笑顔でその声を返した。

——瀧はその姿を初めて見て、色々なことを思った。

最初に懐かしいと感じ、そのあとドレスに身を包む彼女を綺麗と思つて、最後に——心の底から、温かな気持ちとなった。

今から幸せになる彼女の晴れ舞台がどうしようもなく嬉しいのだ。一度も会ったこともないのに、そう思ってしまった。

——早耶香が瀧と三葉と四葉の席の隣を通る。

「——さやちゃん、おめでとう!! すっごい、綺麗やよ!!」

その瞬間、誰よりも大きな声で親友の晴れ姿を祝福する三葉。その目には薄っすら涙が溜まっている。瀧はそんな三葉の手を握り、早耶香を見た。

……早耶香は三葉の言葉に最高の笑顔を見せた後、その隣にいる瀧と目が合った。

言葉はない。だが、早耶香は驚くこともなく、どこか安心した表情を浮かべる。

——早耶香は瀧に対して満面の笑みを浮かべた後、三人の横を通り過ぎる。ボールが靡く。

——その姿は、その光景は本当に美しいものだった。

早耶香は祭壇に到着し、克彦と顔を合わせる。その表情は少し困つたように涙を流して、しかし……笑っていた。

「……三葉」

「うん……ありがと、瀧くん」

瀧は涙を流す三葉にそつとハンカチを渡し、それ以上言葉を発さずに手を添えた。

——ずっと昔からの同郷の親友。同性故に気が合う早耶香と、ここぞという時に頼りになる克彦。たくさんの時間を一緒に過ごした二人だった。

最初は二人が繋がったことを嬉しく思う反面、一人だけ取り残されていると三葉は思っていた。そんな風に思ってしまう自分が嫌で、自己嫌悪した時もあった。

——そんな自分の手を握る瀧と出会って、三葉の世界は変わった。まだ数ヶ月前のことなのに、と三葉はつい思ってしまう。たった一つの出会いでここまで変わってしまうなんて、自分は随分と単純な人間だとも思った。

……それをどこか、心地よくとも感じた。

——挙式は順調に進む。

神父の言葉を真剣に聞く新郎新婦の二人。それを優しく見守る周りの観衆の人々。

「新郎、克彦殿。あなたはこの女性を健やかな時も、病める時も富める時も、良い時も悪い時も。どんな時でも愛し合い、敬い、慰め助けて、変わらなく愛することを誓いますか？」

「心から、誓います」

克彦は真剣な表情で断言すると、神父は頷いて早耶香の方を見た。

「よろしい。では早耶香殿。あなたはこの男性を健やかな時も、病める時も富める時も。どんな時でも愛し合い、敬い、慰め助けて支え合い、変わらない永遠の愛を誓いますか？」

「——はい。誓います。どんな時でも、克彦だけを愛し続けます」

神父はニコリと笑みを浮かべ、そして——

「あなたたちは自分自身の全てをお互いに捧げますか？」

「はい、捧げます」

二人の声は重なり、そして二人は指輪の交換をし、互いに笑いあう。

「では新郎。新婦のヴェールをあげて、誓いのキスを」

神父はそう言う的一步下がり、ニコリと笑みを浮かべる。

克彦は緊張した趣きで早耶香のヴェールをあげて、彼女と視線を交えた。

「……なんかさ。ここ来るまで本当は不安やったんやさ。もちろん

色々なことあるからなんだけど」

「なんよ、それ。……後悔してるん？」

「——んなわけあるか。俺にはお前しかもう考えられへんわ。……一度しか、言わんからな」

克彦は早耶香の肩を掴んで、顔を近づける。

克彦の方が背丈が遥かに大きいため、腰を屈ませ近づけ、そして

「——生守るから、ずっと俺と一緒にいてくれ」

——そう小さく呟いた後、克彦は早耶香に誓いのキスをした。

早耶香も克彦の言葉は予想外のものだったのか、最初は目を見開く。しかしすぐに穏やかな表情で目を瞑り、彼の肩に手を置いた。

ほんの数秒の誓いのキス。そのキスが終わり、唇を離れた時だ。

早耶香は克彦を見上げ、そして——

「——はい。喜んでー」

——ここ一番の満面の笑みでそう言った後、克彦を抱きしめた。

その瞬間式場から聞こえる黄色い歓声。

「……………」

——その瞬間、瀧と三葉は互いに手を強く握る。

理由もなく、ただ二人とも感覚的に手を握り合った。

その時の心境を一言で言い表すのならば、それはきつと——……

挙式は、そうして終わりを告げたのであった。

誓いはいつかの未来へのムスビ

披露宴の会場の、宮水家のために用意された円卓のテーブルには、一葉、三葉、四葉と瀧が座っていた。

本来瀧の座る席には三葉と四葉の父親である宮水俊樹の席なのであるが、今回は俊樹が不在ということで瀧が座っている。

しかしながらこの披露宴、瀧にとっては宮水家以外は知らない人たちばかりなのである。

それもそのはずだ。この会場にいるのは糸守出身の人たちがほとんどで、しかも平均的な年齢層も高目と来ている。

むしろ若い世代が瀧や三葉、四葉を含め数えるほどしかいないのだ。

「三葉、なんか俺、ジロジロ見られてないか？」

「ん〜……そうかも」

瀧の不安げな言葉に三葉は苦笑いで返した。

実際に瀧の言うとおりで、糸守出身の克彦や早耶香の親戚筋は興味深そうに彼を見ている。

宮水家は糸守ではかなり有名な家の一つで、更にその家の長女である三葉は巫女としても有名だったのだ。そんな三葉の隣に座り、親しげに話す男性——それだけで興味が集まるのは必然だ。

「しゃんとしない、瀧。何も、取って食われるわけじゃないんや。背筋を伸ばし」

「つつてもさ、お婆ちゃん」

「……しゃーない。三葉、あんたは瀧連れて一回化粧直してきない」

一葉はそう催促すると、三葉は苦笑いを浮かべながら席を立ち、瀧を連れて会場から出る。

その時も視線を集めるわけだが、瀧はなるべくその視線を気にしないようにしながら三葉についていった。

そして三葉は瀧を廊下に連れて行き、そして立ち止まると振り返る。

「……ごめんね、瀧くん。慣れないことに付き合わせちゃって」

「別に三葉が謝ることじゃないだろ？　そもそも俺が来たいと思って来たんだしさ」

「そう言ってくれるとは思ってたんだけどさ。……さやちゃん、すつごく幸せそうだったね」

三葉は話を変えるように、先ほどの克彦と早耶香の挙式のことを思い出して、しみじみと呟いた。

「そうだな。テツシーもすっぱー男らしいこと言ってたし」

「……そうだね。たぶんさやちゃんだけが知ってるテツシーなんだと思うよ」

人目も気にしないで、ただ早耶香にずっと一緒にいてくれと言い切った克彦は、瀧の目から見てもかっこいいと感じた。

それを受け止める早耶香についても、本当にお似合いであると感じたのだ。

……同時に、羨ましくも感じた。

「……………」

瀧は三葉のことをじつと見てしまう。

……果たして、自分は彼女を支えることはできるのかと。

今はいい。三葉も自分を求めてくれていると断言でき、実際に交際も上手くいっているから。

だが不安は募ってくるものだ。経済的にも瀧はまだ駆け出しの社会人で、そういう意味では三葉の周りには経済的ゆとりがある男性が多い。

何より三葉は魅力的な女性であることを瀧が誰よりも理解しているのだ。

……その不安を振り払うように、瀧は三葉の手を取った。

「……………どうしたの？　瀧くん」

「……………ちよつと不安だから」

三葉は特に動揺することもなく尋ねると、瀧はそう言って三葉の手を強く握る。

三葉はそんな瀧を受け入れるように握り返した。

——三葉の本当の魅力を知っているのは俺だけだと心に言い聞か

せる。本当は嫉妬深くて不安ばかりで、お酒を飲み過ぎて暴走したのを知っているのは自分だけだ。そのくせ甘えたがりで、年上ぶって……でも誰よりも純粋で優しいことを彼だけは知っていた。

本当の三葉は殻を被って本当の自分をひたすらに隠す内向的な人間だ。だから外見を気にして、周りを気にする。

そうやって出来た外側がなければ生きていけない——過去の話だ。少なくとも高校生のときの三葉はそうやって、本当に心の置ける友人にしか自分というものを見せなかった。

なぜ瀧がそれを見抜いたのか、それは瀧でもわからない。だけど、今はそれが自信に繋がった。

「ごめん、三葉。もう大丈夫だ」

瀧はそう言って三葉の手を離そうとする——も、三葉はその手を離さなかった。

その表情は少し悪戯に笑っていて、三葉はそのまま瀧と腕を組んだ。

「み、三葉？」

「——恋人のエスコートは彼氏の役目でしょ？ それに説明が面倒くさいんやったら、態度で示せばええんやよ」

「り、理解はしたけど納得できないんだけど!？」

「もう、行くよ！ ほら、覚悟決めてよね、瀧くん！」

三葉は楽しそうな声音で瀧の腕を引っ張ると、瀧は慌てたようにそれについていく。

しかし引っ張られ続けるのは癪なのか、それとも覚悟を決めたのか——最後は三葉の隣で彼女を引っ張っていった。

○●○○

「それでは大変長らくお待たせしました！ 新郎新婦のご入場です!!」

——司会進行の声とともに始まった披露宴。

それが始まるまでの時間は、瀧と三葉は質問攻めにあっていた。帰りに腕を組んで帰ってきたことが原因なのかはわからないものの、ともかく瀧と三葉の彼氏ということ周りが断定したのだ。

糸守にいた頃は彼氏どころか、男の影すらも見せなかつた三葉が連れてきた突然の男ということに話題が集中した。

……そんなこんなで始まった披露宴。今は克彦と早耶香は新郎新婦の席で楽しみに話していて、その周りにはたくさんの人がいた。

おそらくは彼らの親戚筋だろう。宮水家の席の四人はそれを遠巻きに見ながら、運ばれてきた料理を食べていた。

「あれは迂闊に近づけないな」

人が消えることのない二人の周りで、瀧と三葉は様子を見計らう。

この辺りが周りに気を使いすぎる二人の悪い癖なのであるが、仕方がない。

こういうときに真価を発揮するのは他の誰でもない――

「四葉、行ってきま〜す♪」

――四葉である。

四葉は自慢のツインテールをゆらゆらと揺らしながら、人の群れの中に突入して行った。

それに気づいた瀧と三葉はすぐさま席を立ち上がる。

「あ、あの子はホンマに！ お婆ちゃん、荷物見といて！」

「はいはい、行ってきかない」

一葉は手を振りながらさういふと、瀧と三葉は四葉を追いかけつけてく。

追いかけた先には既に四葉が克彦と早耶香と接触していた。

「二人とも、おめでとう！ お姉ちゃんと瀧くんに先駆けて、私が来ました♪」

「四葉ちゃん！ ありがとう!!」

四葉がわざとらしくびしつと敬礼をしながらさう言うと、早耶香が嬉しそうに声を上げた。

それとほぼ同時に瀧と三葉も二人の前に到着すると、克彦と早耶香の視線が二人に集中する。

「――三葉ー」

「さ、さやちゃんー」

早耶香は三葉の登場に感極まって席を立ち、抱きつくくと三葉は驚き

つつもそれを受け止める。

克彦もまた席を立てて瀧の隣に行くと、肩に手を置いた。

「前ぶりやな、瀧」

「テツシーも元氣そうで何よりだよ——結婚おめでとう。さっきの、めちやくちやかつこよかつたぜ?」

「よせやい、恥ずかしいわ! あんな二度と言わん!」

「ええ、それはさやちん的には可哀想だよ? ね、お兄ちゃん?」

克彦弄りに瀧と四葉が加わり、執拗に弄る。

……そんな中、ふと隣から視線を感じた。

「……なるほど、君が噂の瀧くんなんやね」

「え、えつと……初めまして」

そこには早耶香がいて、穏やかな表情で瀧を見ていた。瀧は少し緊張を覚えるも、克彦が彼の肩に手をポンと置く。

すると驚くほどに緊張は消えて、瀧は一步前に出た。

「その、テツシーと知り合ったのは最近で、ここに来て良いものなのか迷ったけど……でもなんか、二人のことを直接お祝いしたいのでお邪魔しました——三葉の恋人の立花瀧っていいいます」

「敬語はええよ? ……早耶香です。この度、勅使河原早耶香になりました」

早耶香は克彦の方をチラツツと見てそう言うと、克彦は恥ずかしそうに視線を逸らす。

その反応を見て可笑しそうに笑う早耶香と瀧。それにつられるのは三葉と四葉だ。

……ひとしきり笑うと、早耶香は瀧の方を見た。その表情はどこか納得したようなものだった。

「……なんか懐かしいと思ったけど、なるほど——何でかはわからな
いんだけど、瀧くんと三葉、そっくりやね」

「……そっくり?」

早耶香の意味深な発言に、二人は首を傾げた。

「ああ、ごめんごめん。別に見た目とか性格とかじゃないんやよ。ただ、雰囲気こそっくりと言うか……」

「なるほど、つまりオーラの波長が同じってわけやな」

「ん、克彦のオカルトが合ってるってのが癪やけど、そうだね。うん、克彦の言うとおりなんよ」

瀧と三葉は早耶香の言っていることの意味の真意を理解できないものの、それは褒め言葉であると受け入れる。

何より似ているという事は二人にとっては嬉しいことであり、特に深くは考えなかった。

「ん、でもなんかやっぱり知ってるような……なんかモヤモヤするよお」

「お前は何を言うてるんや——ほら、まずは他の親戚筋の挨拶終わらせるで。すまん、瀧、三葉、四葉ちゃん。また後でゆっくり話そうな」

克彦はそう言うと、早耶香を連れて席に戻っていく。

残された瀧と三葉は早耶香に言われたことに首をかしげながらも、席に戻っていった。

●●●

披露宴もかなりの時間が経過し、両家の親の言葉やちよつとした催し物が一通り終わり、お開きの時間が近づいてきた。

そんな時間に差し掛かった頃、三葉はそわそわとし始めていた。

なぜ三葉がそわそわと緊張しているのか——それは最後に控えている親友から二人に向けてメッセージを送ることになっているからだ。

二人のために何かしてあげたいと考えた三葉は瀧に相談したのはほんの数週間前の出来事。それから二人は色々と思見を出し合い、二人が何をしたら喜んでくれるかと考えた結果——披露宴で、三葉の口から直接言葉を掛けるということに決まったのだ。

……その時間も差し迫る中、三葉は緊張する。

伝えたい言葉がいくつもある。言葉だけでは伝えられないことがたくさんある。

——そんなとき、三葉の異変に気づいた瀧が彼女の手を握った。

「三葉も緊張するんだな」

「……うん。結構人の前に立つことが多かったから平気かなって思っ

たけど——大切な親友のためだからかな。緊張しちやった」

「——大丈夫。三葉の言葉は絶対に二人に伝わるから。だから三葉はいつも通りの三葉で頑張ってこい！」

瀧は三葉の背中を押す。

それとほぼ同じタイミングで会場が暗くなり、そしてスポットライトが三葉に当てられた。

——これはサプライズ。克彦と早耶香の親に三葉が直接頼み込んで計画したものだ。

突然のことに克彦も早耶香も驚きを隠せない。

三葉は一度大きく深呼吸をする。

そして新郎新婦席の近くにある壇上に歩いていき、そして壇上の上に立って二人に向き合った。

——緊張は、もうなかった。

「——まず最初に。さやちん、テツシー。二人の晴れ舞台に呼んでくれて、本当にありがとう。そしておめでとう！ 誰よりも大切な親友の二人が幸せになってくれたことが、私は本当に嬉しいよ」

三葉は用意していた手紙を開けず、今の自分の気持ちのすべてを言葉にしていった。

「考えてみれば二人との付き合いって、本当に長いよね。幼稚園も小学校も中学校も高校も……こっちに来てからもずっと仲良くなつて——大学生になって二人が恋人になったってきいたときさ。私、嬉しいうって思う反面寂しかったんだ」

……本当のことだ。三葉は本当に、祝福すると同時に寂しさが心に広がっていた。

「大切な二人が幸せになって、私は置いてけぼりになってしまいうんじやないかって。全然そんなことないのに、私の弱さが二人を心から祝福できなかったの。だからこの場でまずはごめんなさい」

「——そんなことないよ、三葉！ 三葉はずっとちゃんと向き合ってくれた！ 私が克彦のことが好きって知ってて、助けてくれたもん！！」

早耶香は涙ぐみながら大きな声でそう言った。

「……思えば二人にはすごく迷惑を掛けたこともあったと思う。私の我俣に付き合ってもらったことも、すごく危ない橋を渡ったことも——それでも二人はいつも私についてきてくれた。支えてくれた。それがさ、本当に嬉しかったんやよ?」

三葉もまた、涙が溢れる。その涙は瀧から借りたハンカチで拭いながら、言葉をついだ。

「私が周りに悪く言われたとき、何も言わずに傍にいてくれてありがとう。駄目なときはちゃんと怒ってくれてありがとう。怪我をしたときは助けてくれてありがとう——私とずっと親友でいてくれて、ありがとう……っ!」

「……三葉」

克彦もまた、目頭が熱くなつた。これまで三葉の本音を聞いたことがなかったからだろうか。

それともこうして勇気を出して、自分たちのために話してくれているからだろうか……克彦は三葉の言葉を黙って聞いた。

「——でもね。今は違うんだ。今の私は二人を心の底から祝福できるの」

三葉は、自分の胸に手を置き、穏やかな表情で言う。

「今さ、私は毎日がすごく楽しいんだ。今の私は二人に負けないくらい幸せって断言できる——私を支えてくれる人がいる。私を想ってくれる人が出来たの。いつも助けてくれて、頼りになって、でもたまに無性に可愛いときがある。……そんな大切な人が、出来たんやよ」

——だから。

「二人にはすつごく心配かけたと思う。だから言うよ——もう大丈夫。私も幸せになるから、二人も心置きなく幸せになってください。親友として、二人の末永い幸せを心から願っています!」

——三葉はそう言うと、壇上から降りて二人の前に行き、そつと便箋に包まれた手紙を手渡した。

早耶香はそれを受け取り、大粒の涙を流しながら三葉を見つめる。

「みつはあ……っ」

「もう、さやちんっ。そんなふうに泣かんってよ……っ」

「……泣かしたんはお前や。責任、とれよっ」

「……もう、しよーがないな。泣き虫なさやちんとテツシーは」

——それを見ていた瀧を含めた会場の空気は、暖かくなる。

そんな時、瀧の近くの席の四葉が傍に寄ってきた。

「ねえ、お兄ちゃん。お姉ちゃん、幸せになるって」

「……ああ。言ってたな」

「それってさ——遠まわしに幸せにしてくださいって言っているようなものだよね。たぶんあの人、そんな自覚ないけど」

「……そう、だろうな——まあ大丈夫だ」

「……ほんつと、良いよね。お姉ちゃんは幸せ者で」

——四葉は少し羨ましそうにそう言った。

しかしその声は瀧に届いており、瀧はそんな四葉の頭をグリグリと撫でた。

「心配しなくても、お前も大丈夫だろ。お前だって幸せ者だよ、馬鹿四葉」

「……本当に、この人は。彼女の妹をこんな気持ちにさせるなんて、罪作りな男だよ」

そんな風に口を開くも、四葉はどこか嬉しそうな声であった。

——二人は新郎新婦席の三人を見る。

その光景はいつまでも変わらない——親友たちの穏やかな光景であった。

○●○○

披露宴は終わり、お開きとなった。

そこから二次会となるのだが、実は瀧と三葉は明日は仕事であるため、二次会には参加できないのだ。

そんな二人のために早耶香と克彦は、二次会までの間の時間を作った。

少し小奇麗な普段着に身を包む克彦と早耶香は目の前の瀧と三葉と対面する。

「さつきはよくも泣かせてくれたね、三葉あ！」

「えく、可愛かったよ？ ね、テツシー」

「……まあまあやな」

「まあまああつてなんよ!?　そこは可愛いで良いじゃん!　ね、瀧くんもそう思うやんね?!」

「そうそう、素直に可愛かったって言えば良いじゃん、テツシーよ」
「おま、裏切るんか!?　男の友情も地に堕ちたもんやなあ!」

——特に着飾った会話でもなければ、特別性のないただのじゃれあいのような会話である。

瀧が入ってもさして違和感のないことに親友三人組は気づきもしないまま、楽しい時間を過ごしていた。

披露宴の会場から出た廊下で談笑する四人。

そこには四葉や一葉、それ以外の親戚筋はいなく、本当に四人だけであつた。

「三葉さん三葉さん、テツシーが汚い言葉を使って年下の俺を苛めてくるんだけど」

「テツシー、人の彼氏にいちやもんつけんといてよ!」

「お、おい!?　俺には逃げ道ないんか!?　ってか瀧、三葉を味方につけるんはズルいで!」

克彦は急いで瀧に取り入ろうとするものの、年下の特権と女性二人を味方にした瀧に通じるはずもない。

ともあれ克彦は格好の弄りの的になるのである——しかしながらそのような楽しい時間は長くは続かなかつた。

時間は楽しければあつという間である。数分に感じていた時間も、気づいてみれば一時間近くも経過していたのだ。

名残惜しいものの、瀧は時間を見ながら三葉の肩に手を置いた。

「……ごめん、そろそろ時間だ」

「もうそんな時間か——早いもんやな、時間っていうもんは」

克彦はしみじみとそう呟きながら、瀧の肩に腕を回した。

そして自分の方に瀧を引き寄せると、瀧にしか聞こえない声音で

「——今回は俺やったけど、次はお前のところに呼べよ?」

「わ、……わかつてるよ」

「ならええんや——お前も、未永くな。また遊びに来てくれ」

克彦は気持ちのいいくらいにニカツと笑うと、瀧を三葉の方に渡すように押した。

「三葉ー、こんなええ男、絶対に離すなよ!! 瀧手放したらお前ずつと独身やで!」

「んなっ!? 人聞きの悪い言い方すんなー! 私と瀧くんは心配しなくても大丈夫なんよー!!」

「……なら、心配あらへんな」

「うん、全くな」

——勅使河原夫妻は、穏やかな表情で瀧と三葉を眺めた。

先ほどから組まれた二人の腕は決して離れることはないように見えた。

例え離れていても、その離れた空白の部分に何か糸のようなものが見えるように感じた。

瀧の腕には三葉の持つそれと良く似た組紐があり、それを見て二人は大丈夫であると確信した。

「……よろしくね、三葉のこと。この子、意外と無理するから、君がしっかりと尻に敷いてあげて?」

「ちよ、さやちゃん!? そこは私の役目じゃ」

「——任せろさやちゃん。ちゃんと三葉の手綱は俺が引くから」

「——瀧くんも乗るなー!!」

……三葉はそう少し大きな声を出して怒るも、瀧はそんな三葉を収めながら彼女を連れて歩いていく。

その去り際、一度だけ克彦と早耶香の方を見て、ニコツと笑った。口をパクパクとさせて何かを克彦と早耶香に言うと、それを理解した二人は赤面させた。

「あ、あの野郎……っ。余計なお世話や阿呆!!」

「こ、子供なんて……っ。か、克彦は何人くらいほしいん……?」

——次は子供が出来たらな。そんなことを笑顔で言ってくるのは、彼らの周りでは瀧くらいだ。

そんな爆弾を置いて二人は去っていく。

……残された早耶香と克彦。すると早耶香は少し赤面しながら、克

彦の腕をキュツと掴んだ。

「……じ、実はね。今日つて、その——結構危険日なんやよ」

「え、えつと……そ、それは……」

「ほ、ほら！ 克彦も収入が安定してきて、私も気分的にそろそろママになりたいな……なんてさ？ うん、でもこういうのつて勢いは駄目だし、やつぱナシ——」

早耶香が克彦の手をパツと離れた瞬間、克彦は早耶香の腕をギュツと引き寄せた。

「……お前が悪いんやからな。その気にさせたんやからな」

「……うん」

——早耶香は少しばかり強引な克彦の言葉に、少し驚きつつも弱い声音で頷いた。

ともあれ、どうやら二人の一日はこのままでは終わらないのであった。

●○●○

「……あなたはええんか？ 子供たちに顔見せんで」

「ええ。……あんな幸せそうな娘たちの顔を見たら、今私が出て行くのはお呼びではないでしょう」

——披露宴会場の外で、先ほどまで一緒に話していた四人を何うように見ていた一葉と一人の男性は、二人で会話をしていた。

「……あんたやったら、三葉に恋人が出来たって知ったらいの一番に出て行くと思ったんやけどな」

「それは相手の男がどうしようもない男だった場合ですよ。……少なくとも、三葉と四葉が認める男がそんな男ではないでしょう？ ……」

まあ、いずれは男同士で話しますが」

「——心配せんでも、瀧なら三葉も四葉も幸せにする。わしが保障したる」

「……ならば安心です——はは。こうやって母さんと腹割って話すのも、久しぶりですね」

男性——宮水俊樹は先ほど通り過ぎていった瀧と三葉の後姿を見つめながら、一葉にそう小声でそう言った。

「……あんたが過去を清算してなかったら、まあなかったことやけどなあ」

「わかってますよ——それでも三葉に本当の笑顔は戻らなかった。あいつに必要だったのは私ではなく、彼だったんでしょね」

「……嫌に素直やな」

「——似たような経験があるんですよ。きつと三葉もそうだったんでしょ」

俊樹は懐かしそうにそう呟きながら、自分の胸に手をやる。

「——私が二葉に恋焦がれたときも。彼女しかいないと思つたものでした。私は彼女と繋がるために生きてきたとも思いました」

「……そうやな。——わしら年寄りには、そうやって子供たちを見守つて行くしかないんやよ」

「珍しく意見が合いましたね」

……俊樹は空を見上げる。

「——彗星の片割れが落ちたあの日、私は三葉の本当の姿を見ました。私に『今すぐ避難指示を出して』と願つたあいつの顔は、誰よりも二葉に似ていて……私の愛した二葉とは、全く違うものでした」

三葉は二葉に年を重ねる毎に似ていった。

娘の成長を喜ぶ反面、それを見るのが辛くなつていった。

……それもようやく、過去のものとなつてくれたのだ。なぜか俊樹には確信がある。

「……彼なら、三葉をずっと笑顔にし続けてくれますよ。二葉の言い方にするなら——ずっと探していた何かを見つけてたような笑み、でしょうか？ 二人はそんな表情を浮かべているものですから」

——いつか先にある未来。

その光景を、俊樹は思い浮かべる。

恐らくはそう長くはない。何故なら——宮水の直感は、馬鹿に出来ないから。

瀧と三葉は帰りの道を二人で歩く。

周りには誰もいなく、無言のまま、互いの温もりを感じながら歩み続ける。

ほんの少し先から駅の近くに軽いイルミネーションのようなものが見えた。

「……そろそろ寒くなってきたね」

「……そうだな。肌寒くなってきたかも——もう10月か」

瀧と三葉が出会って6ヶ月。それまでたくさんのがあった。

春が過ぎ、夏を越えて、秋を迎えた。きつとこれからいくつもの季節を越えるのだと二人は思う。

……三葉は思い出す。今日の、親友たちの幸せそうな笑顔を。自分の言葉で泣いてくれた二人の姿を。

そんな二人を見て心の底から羨ましいと思った。もし自分があの二人みたいになれたら——なんて、まだ気が早いだろうか。

「……三葉」

そんなとき、瀧は三葉に声をかけた。

「……まだ俺たちが出会って6ヶ月くらいだけだよ——きつとどれだけでも俺たちは一緒にいれる」

「そ、それって——」

「——でも、まだその言葉は待ってほしい」

瀧は、少し俯きつつもそう包み隠さずにそう言った。

——瀧はまだ、自信が持てないのだ。今日の克彦を見て、改めてそう思った。

克彦は早耶香を養えるほどの稼ぎを得て、経済的な安定を鑑みて結婚に踏み切った。

だけど瀧はまだまだ若く、あまりにも未熟なのだ。

「……気持ちだけでいいなら今すぐにも言いたい。でもさ。そういう言葉って、勢いで言うものじゃないんだと思うんだ。俺はずっと三葉を大切にしたい——俺、色々と考えてるからさ。今後、三葉と一緒にいられるためならどんな努力だってする」

瀧は三葉を抱きしめた。

「——だからもう少しだけでいい。俺に、時間をください」

「……………」

——自分の知らないところで、瀧がたくさんのことを考えてくれた。
いた。

そのことを三葉は知って、三葉は無性に嬉しい反面——少しだけ怒る。

「——ちよつとは彼女に頼ってよね。そういうのは一人だけで頑張るものじゃないんやよ?」

……三葉は瀧の頭を撫でながら、余った片手で瀧を抱きしめ返す。

「……それはさ、嬉しいよ? でもね。瀧くんはまだ社会人になつたばっかで、下積みの段階なの。だから焦つたら駄目——大丈夫。いつまでも私、待てるよ? だって8年も——あれ?」

——三葉は自分の言葉に疑問を覚える。

今、自分は何を言おうとしたのだろうか。……8年も待った。三葉はそう言おうとしたのだ。

わからない。なぜ自分がそう口ずさみそうになつたのか。だけど何故かそうであるとも思えた。

「……そんなに長くは待たせないからな?」

「う、うん——それにそんなに待たせないから」

「うわ、止めろよ。尻に敷くとか——さやちゃんに尻に敷くようお願いいされてるんだからさ」

「なっ! あれはさやちゃんの冗談で」

三葉は反論しようとした時——グイッと頭を引かれ、そのまま瀧にキスされた。

それで三葉は何も言えなくなり、瀧の顔を見開いた目で見つめる。

「……瀧くん。我俣、一個だけ言っ方がいい? そしたら何も言わないから」

「……ああ」

「——もう一回、キスしても……いい?」

——ほんのり涼しい秋風の元で、ほんのりと輝くイルミネーションの輝きに照らされた二人が、吐息混じりに唇を合わせる。

まるでそれは、誓いのキスのように神聖なものであった——……

旅路編

二人のプレゼント　　～前編～

——季節は巡り、秋を越えて冬になる。

紅葉は全て散り、枯れ木となった冬景色の道を二人きりで歩く男女がいた。

「——瀧くん、今日の夕食は何にしよっか？」

「んー……。ハンバーグとか？」

「あ、瀧くん子供舌やー」

「いいだろ。それに三葉の作るハンバーグ、めちやくちや美味いんだからさ」

「……………そう言われたら何も言えなくなるって分かってる癖に。生意気ー。瀧くんの癖に」

——立花瀧と宮水三葉は、もはや恒例となった会話を続けながら道を歩き続ける。

……………12月の中盤となった。昨日は東京にしては珍しく雪が降り、現在は少しばかり雪が積もっている。

克彦と早耶香の結婚式を経て、二人の関係は少しばかり変わった。

——自然になった、というべきだろうか。

例えば会話をするにしてもごく自然な会話をするようになった。恋人の域を超えた落ち着きのある付き合いといえればいいか。

互いの不安や不満を伝え合える信頼関係を得たのだ。恋人のステップが一段階進んだといえれば良いだろう。

他が変わったといえれば——三葉が瀧の家に泊まる頻度が高くなったことだ。

最早実家にいる日数の方が少なくなっているほどだ。一週間の内、多い時で四日泊まる日があるほどに三葉は瀧の家に入り浸っていた。

もちろん今日も泊まる予定であり、肩に掛けられたトートバックには着替えや生理用品が入っている。

「……………寒いね、瀧くん」

「冬だからな。……ほら」

瀧は三葉のかじかんだ手を掴み、そのまま自分のコートのポケットの中で手を繋ぐ。

三葉の冷えた手は瀧の手の平の温もりで暖かめられ、彼女は彼の肩にポンと頭を乗せた。

「……うん。あったかい」

「おかげで俺の体温が下げられてるけどな」

「むー。デリカシーがないんやよ。こういうときはキスくらいするの
が男の甲斐性でしょ?」

そう言うのと三葉は立ち止まり、顎をクイツと上げて、目を瞑って唇をキュツとしめる。

……そんな三葉に対して苦笑いをしながらも、瀧は周りに誰もいないことを確認して彼女にキスをした。

「ふふ。瀧くん、唇カサカサやね。後でリップ塗ってあげる」

「悪かったよ、感触わるかったか?」

「……ううん。いつも通り、優しいキスだったよ——ほら、早く帰ろ?」

三葉は頬を赤く染めながら、瀧の手を引っ張って前に進む。

——これが二人の日常。

季節は冬——二人はクリスマスを控えていた。

●○●○

……台所から心地いい包丁の音が聞こえる。

今、三葉は夕食の準備をしてくれていて、俺はと言えば——パソコンとにらめっこするように向き合っていた。

もうそろそろクリスマスだ。三葉と恋人になってから初めてのクリスマスだから色々と考えているんだけど、これが何分難しい。

なんせ今まで恋人がいたことがなくてクリスマスだってバイトか、司や真太と遊んでいたくらいだからな。

……三葉は一緒にいるだけで良いつて言うかもしれない。
だけど俺的には何かしてあげたいんだよな。

プレゼントについては色々考えついてはいるんだけど、問題は当日だよな。

今調べているサイトでは夜景の見えるレストランやら、豪華ホテルやらそんなのばかりだ。

……でもなあ。良いとは思っただけど、それって俺っぽくないんだよな。

気取ってるっていえば聞こえは悪いんだけど——もっと俺たちっぽい祝い方があると思うんだよ。

……でもサプライズも捨てがたいしなあ。

「ああ、どうしたらいいんだろうなあ」

「——どうしたの、たーきくん」

——俺が頭を抱えて悩んでいると、蕩けそうな三葉の声が聞こえ、間髪入れずに後ろから抱きつかれた。

「うええ!? み、三葉?」

「うええ、ってひどい反応ー。それでどうしたの?何か悩んでたみたいだけど……」

三葉が俺の顔を真横で覗きながらそう心配してくる。俺はバレないようにパソコンを閉じた。

……バレてもいいけど、出来れば知られたくないしな。

「何でもないよ。……って、いつまで抱きついてるわけ?」

「許してくれるならいつまでもこうしているよ?」

「……じゃあしばらく」

——甘えてくる三葉が無性に可愛く思えて、俺は顔をそらしてそう言った。

三葉の髪の毛の香りが鼻腔をくすぐって気持ちが高揚する。

……そんな風に接していると、先ほどまで悩んでいたことが嘘みたいに解決していく。

——思いついた。俺も嬉しくて、三葉も喜んでくれること。

「……三葉、ありがとう」

「えっ……ど、どういたしまして?」

三葉は何に対してお礼を言われてるか理解していないのか、首を傾

げながらそう返答した。

……やることは決まった。

あとは準備な訳だけど——三葉喜ぶ顔が見れるなら、なんだって頑張れる！

その日から俺は動き出した——クリスマスのサプライズパーティーに向けて。

○●○●

クリスマスを数日後に控えた今日、私はミキさんの前で沈んでいた。

沈んでいるというよりかは気分が乗らないんだよ——瀧くんとの触れ合いが足りなくて。

「三葉ちゃん、どうしたの？机に突っ伏しちやって……」

「んん……最近ね、瀧くんがお仕事忙しくてなかなかゆつくり出来ないんよー」

「ああ、それで寂しいわけだ。うんうん、放ったらかしにされるのは辛いよね」

ミキさんは私の肩をポンポンと叩きながら、同情するようにそう言う。

……もうすぐクリスマスなのに、瀧くんはクリスマスってことわかってるのかな？

私だって特別なことを望んでいるわけじゃない。一緒にいて、触れ合って、夜はその……うん。

とりあえず普段みたいに出来ればそれで良いんだよ。

だけど今、瀧くんは仕事が凄く忙しくて一緒の時間を作れないし……。

「でも瀧くんのことだから、クリスマスに三葉ちゃんと一緒に過ごすために必死で仕事を終わらせようとしてるんじゃないかな？」

「……そうだよ。うん、きつとそう」

……私が瀧くんを信じないで誰が信じるって話だよ。

——今日辺り、瀧くんのお家にお邪魔しようかな？

最近色々ご無沙汰だし、ちゃんとご飯を食べてるかも分からない

からね。

瀧くんはああ見えて自分の事になると適当なことがあるし！

「ごめんね、ミキさん。愚痴みたいになっちゃって」

「私からしたら惚気みたいなものだったけどね——とりあえず仕事しよっか」

「あ、はい」

——今が新作の最終打ち合わせであることをすっかり忘れていた私だった。

……しつかりしなきゃ！

そう意気込み、私はミキさんとの打ち合わせに勤しんだ。

ミキさんとの打ち合わせが終わり、私は一足先に瀧くんのお家に向かった。

途中で夕食の買い物を買って済ましてから瀧くんのお家に向かう最中、駅の方でイルミネーションの光が灯されているのを見た。

……ああいうのも良いよね。二人で綺麗な景色をゆつくりと見ているのも、嫌いじゃないから。

そんなことを考えながら私は瀧くんの部屋に向かう。マンションの階段を上がって、靴の中から合鍵を出して扉を開け、部屋に入った。

「瀧くんはまだお仕事かな？」

部屋の中に人の気配がない。私の方が仕事が早く終わることは結構あるから、よく先に帰って夕食の準備をしているんだよね。

——我ながらお嫁さんみたいなことをしていると思った。

「瀧くんのお嫁さんか……。えへへ——おかえりなさい、あなた……。なんて、似合わないかな？」

私の頭がお花畑になっていることを自覚しながら、私はリビングに入ってエプロンを着る。

買ってきた食材を冷蔵庫に収めて、調理の準備をしようと思った——その時、リビングの机の上のノートパソコンに気がついた。

瀧くんは朝急いでいたのか、ノートパソコンの電源を切らずにそのままにしている。

画面はスリープモードで真っ暗だけど、マウスを少し動かすと画面

が明るくなった。

「……そういえば最近、瀧くんパソコン見ながらなやんでたことがあったよね？」

……好奇心というのは出てくるもので、悪いと思いつつ私はパソコンの画面が気になった。

インターネットで何かを調べていたみたいで、私はマウスのカーソルをWebブラウザのアイコンに持っていき、そのままクリックした。

——すると、一つの記事が画面に表示された。

「な、な、な………っ!!?」

——その記事は、クリスマス特集だった。

ただし、ただのクリスマス特集ではなく——性なる夜を恋人と過ごす、と題名付けられる記事だった！

「た、瀧くん……。や、やっぱりそうだよな？男の子なんだし、それに最近ご無沙汰だし……。うん、でもちゃんとクリスマスのことを考えてくれてたんだ」

そのことを嬉しいと思うと共に、私はどうしても画面に表示される記事が気になる。

……わ、私も瀧くんが初めての相手で、不慣れだし……。うん、こういうのは予習が大切っていうし？

いつも瀧くんに任せてるから、私もこういうことを勉強しないといけないよね？

……私は机に座り、マウスを片手に記事を読む。

——クリスマスに彼氏がサプライズ！そんな彼女は優しい彼氏にご奉仕するべし！聖なる夜を性なる夜にし、最高のクリスマスにしよう!!

……見出しはそんなことを書かれていた。

「う、うわあ……。え、でも出来るかな？……とりあえずあれを買って

——が、頑張らないと！」

——顔が熱い。記事を読み終わる頃には、気分がちよつと変な方向に向かっていた。

……やばい。今、瀧くんの顔ちゃんが見れないかも。

でも、瀧くんのために頑張ろう！

私がそう意気込んだ時だった。

「——三葉ー？ 来てるのか？ー」

——瀧くんが帰ってきた！

私はすぐにパソコンを閉じて、椅子から飛び退いて玄関に向かう。そして瀧くんに見られないために、勢い良く瀧くんを抱きついた。

「……………？ 三葉、どうしたんだ？」

「——私、頑張るから。瀧くんが喜んでくれるように勉強するからね」「ん？ なんかわからないけど、頑張れよ？」

瀧くんはキョトンとしながらそう言うと、そのままリビングに向かって歩いていく。

……全く、瀧くんめ。澄ました顔してえっちなことばかり考えて。でも次は私がやり返してやんやからね！

私はそう決意して、とりあえず夕食の準備をするのだった。

●○●○

——こうしてクリスマスは近づいていく。

クリスマスがあと一日と差し迫る中、瀧は当日のサプライズのために色々な準備をしていた。

たくさんの人に連絡を取る瀧は、今も電話を片手に手帳に色々と書き込んでいる。

「テツシーとさやちゃんは夜からなら大丈夫なんだよな？」

『おう、もちろんや。でも初めてのクリスマスやる？ 三葉と二人で過ごすってのもええと思うぞ？』

「……………それも考えたよ。でも俺はそれでもこれをしたと思ったんだ——きつと三葉も喜んでくれると思うんだ」

『……………そうやな。瀧が言うんやったら、きつとそうや——分かった。時間は必ず作るでな』

克彦はそう言うと、そのまま電話を切った。

「……これで皆の時間は合わせられたな」

瀧の手帳には様々な人物の名前が書かれていて、その名前には丸が付けられている。

……これは瀧が、三葉、そして自分が楽しむために用意したサプライズ。

瀧と三葉、互いの親しい友人たちを招いてする、一世一代のサプライズパーティーなのだ。

当然先ほど克彦に指摘されたことを瀧もまた考えはした。

……クリスマスは二人きりで過ごしてもいいんじゃないか。瀧はそれももちろん良いと思った。

——だが瀧は、彼女と出会ってからのことを思い出して、その考えを改めた。

……二人きりのクリスマスは、この先何十年も実現できる。だけど、瀧が今しようとしていることは今しかできないかもしれないのだ。

——司や真太、ミキや克彦、早耶香や四葉、一葉。それ以外にもたくさんの人に二人は祝福されてきた。

たくさんの人たちと出会い、再会し、自分たちが幸せであることを周りの人たちは喜んでくれた。それがどれだけ嬉しかったことか、恐らくそれは瀧の心中の中でしかわからない。

そんな人たちとも共に過ごすクリスマス——瀧はそれを何よりも素晴らしいものと思った。

だから瀧は実現に動いた。その結果、時間はまばらであるが他の皆の時間を合わせる事ができた。

「……それにこれも」

……ふと瀧は、手元の封筒を見る。

——瀧が三葉のために密かに用意していたクリスマスプレゼント。プレゼントといえるかも分からない品であるのだが、瀧はそれを手にとる。

——時を同じくして、東京のとあるショッピングモールの一角に、

三葉と四葉は買い物をしていた。

「あ、これ可愛い——お姉ちゃん見て！　これ、絶対お姉ちゃんに似合うと思うよ！　これを着れば瀧くんが喜ぶこと間違いなし♪」

「……………」

……四葉がリボンとシルエットをあしらったワンピースを三葉に見せるも、三葉の視線はそこにはなかった。

二人がいる反対側に位置しているお店を無言で、無表情で三葉は見つめる。

「どうしたの、お姉ちゃん？　何を見て——ッ!?」

四葉は、三葉の視線の先の店を見て戦慄する。

——それはランジェリーショップであった。しかもお高めの、少なくとも四葉は入ろうとも思わなかった高級ブランド。

四葉は基本的に鋭い少女である。目ざといと言ってもいい。

現に瀧からクリスマス予約を聞かれて瞬時にサプライズのことに気づいたレベルだ。

だからこそ分かる——三葉はあそこまで真剣にランジェリーショップを見つめる真意を。

「お、お姉ちゃんっ！　もしかして瀧くんとあれであれなクリスマスを過ごすために意気込んでる!?　……あれ、でも瀧くんは私を巻き込んでまで何かしようとしてるから二人きりじゃ……——ま、まさか私がいる前で!?!」

「お、お姉ちゃん！　私、ちゃんと空気読むからね!!」

「……………は？　何言つとるん、あんた」

一人、凄まじい勘違いをしている少女がいるのだが、三葉の視線は再びランジェリーショップに視線を映す。

——三葉は四葉を店に放置して、今日の本来の目的であったランジェリーショップの前に立つ。

まるで大きな門がそこに身構えていると錯覚する三葉。ごくつと息を飲んで、肩からかけるバッグをぎゅっと掴む。

……瀧が望んでいるのならば、それを叶えてあげるのが彼女の——
宮水三葉の役目である。

そう心に言い聞かせて、三葉は一步、前に進んだ。

「いらっしやませー」

その途端に女性店員の軽快な声が届き、少しばかりビクツとする。三葉は恐る恐る店を巡回して品物を確認していく——も、経験がないためにどうすべきか分からなくなつたところに、一人の店員が三葉に近づいてきた。

「——お客様、何かお困りでございますか?」

「へ? あ……はい、お困りです」

店員はニコニコした表情でそう尋ねてくる——まるで全てを悟っているかのように。

……店員は三葉をよく観察する。

——メリハリのついたスタイル。全体的に細いのにも関わらず、出るところはしっかりと出ているスタイルを見て、目を光らせた。

「その——もうすぐクリスマスじゃないですか? それでその……」

「——なるほど、勝負というわけですね」

「——はい、勝負です」

——宮水三葉がお求めの品は、彼女が持とうとも思わなかつたここぞという時に着用する下着。

勝負下着である。最初からそのことを分かつていた女性店員はニコリと笑つて三葉をあるコーナーに引き連れていった。

「……そんなお客様にぴったりの下着、当店は取り揃えております。ええ、私がしっかりとコーディネートしましょう!」

「は、はい! 不束者ですが、よろしくお願いします!!」

背筋をピンとしてそういう三葉を見て、店員は不覚にも同性である彼女を可愛いと思つたのだつた。

——クリスマスは迫る。

そんな中、あるカップルは互いのことを想つて行動しているのにも関わらず、凄まじいすれ違いを起こしていた。

……ランジエリーショップから出て、購入したそれを持ちながら顔を真っ赤にする。

……瀧は穏やかな表情で、自室にて用意したその淵をなぞる。

まこと偶然ながら、そのとき、その瞬間に二人の言葉は重なった。

「——三葉^{瀧くん}、よろこんでくれるかな？」

——そうして、二人（十一人）は勘違いを起こしたまま聖なるクリスマスを迎えた。

二人のプレゼント　　〜後編〜

——クリスマス・イヴの当日。俺は今日の夜のサプライズパーティーのために色々と用意をしていた。

今回は三葉に対するサプライズということで、事前に四葉にお願いして手伝ってもらっているんだ。

三葉には夜、俺の家に来てくれて言っている。

……準備は順調に進んでいるんだけど、手伝いをしてきている四葉が何故か、他所他所しいんだよな。さつきからずっと。

「どうしたんだよ、四葉。さつきからなんかそわそわしてないか？」

「え、ええ!?　そ、そんなことないよ?　……ちよつと慣れないものを着てると思いますか……」

「慣れないもの?」

「——な、なんでもないよ!!　それより早く買い物済ませようよ!」

四葉は顔を真っ赤にして俺の手を引つ張りながら先に進む。

……何事かは分からないけど、まあ気にするだけ無駄だよな。

——クリスマス・イヴである今日は天気が良く、しかしながら気温がかなり低い。もしかしたら今日は雪が降るかもしれないなんて天気予報で言っていたっけ。

……降ってくれたら嬉しいんだけど、あんまり期待しないでおう。

——ともあれ、今俺は四葉と二人でスーパーに食材の調達に來ていた。

ケーキとかは菓子店に予約しているけど、料理に関しては自分たちで用意したほうが安く済むからな。

それに今回は真太がパーティーに來れるらしい。なんでも真太の働いている店はクリスマスはあまり人が來ないらしく、今日は休みなんだそうだ。

だから昼過ぎからうちに來て手伝ってもらおう手筈になっている。

司は多少用事があるそうで今日は夕方から來るそうで、奥寺先輩は司と一緒に來るらしい。

さやちゃんとテッシーは夜になるかもしれないそうだ。

……本当は新婚のクリスマスは二人で過ごしたいはずなのに、二人は快く俺の願いを聞いてくれた。

今度なんかお礼しないとな。

「でも今日は何作るの？ 瀧くんのお友達の人が手伝ってくれるんだよね？」

「おう。しかも本格的な料理店の厨房で働いているから、すげーもん作ってくれるぞ？ まあ俺もするんだけどな」

「じゃあ四葉も手伝うー♪」

四葉はわざとらしく挙手してそう言うものだから、俺は苦笑してしまった。

そのとき、ふと思ったことを四葉に聞いてみることにした。

「そういえば四葉はクリスマス、予定とかなかったのか？ 快諾してくれたのは助かったけどさ」

「んー。強いて言えば友達に誘われたり、男の子に予定聞かれたりしてたけど」

「お、流石——って良いのかよ。そんなチャンスを棒に振って」

「——いいんだよ。だって私は瀧くんやお姉ちゃんと一緒にいる方が楽しいしぎ。同級生とお兄ちゃんならまずお兄ちゃんを選ぶよ」

「……お前のお兄ちゃん呼びも定着したな」

「ふふーん♪ 私は妹キャラを売りにしているんでね？」

四葉は俺の服の裾をキュツと掴み、はにかみながら俺を見た。

「……だからしばらくは今の関係のままでもいいんだ。硬派で有名な宮水姉妹にこんなにも想われるなんて、瀧くんは罪作りな男やよ？」

「——大丈夫だ。お前みたいな良い女は、良い男が放っておくわけないからさ。気づいたらすげえ男がお前のことを好きになってくれるよ」

「……………瀧くんがそんなだから、私のハードルがどんどん上がっているんだよね」

四葉は俺の気遣いを無視して、苦笑しながらそんなことを言うてる。

……お前の方も俺のことを過大評価しすぎだよ。俺はそんな風に思いつつ、四葉と買い物を買ったのだった。

○●○○●

俺と四葉で部屋の飾り付けをしている最中に真太がやってきた。

「おつす、瀧……つと、その子はあれか？ 瀧の愛人？」

「はい♪ 私、瀧くんの二番目のおん——」

四葉が真太の冗談に乗っかろうとしていたので、俺はその口を手で押さえて溜息を吐く。

……四葉は何か唸っているが、俺はニヤニヤしている真太を睨んだ。

「そんな怒るなって、冗談だろ？ それで紹介してくれよ、その子」

「……三葉の妹の四葉だよ。今回は色々手伝ってもらってる」

俺は四葉の口を押さえていた手を退けると、四葉はくるつと俺の方に顔を向けてきた。

「乙女の口を押さえるなんて罪深いよ、お兄ちゃん♪」

「お、お前……彼女の妹にお兄ちゃん呼びさせてんの!？」

「よ、四葉ああああ!!」

俺はなおも悪乗りをする四葉の名を叫ぶのだった。

——初めて会って何気に絶妙なコンビネーションで俺を弄ってきた二人はすぐに打ち解けた。

真太が面倒見が良いのも幸いしたんだろう。基本的に俺を巻き込んでに会話ではあるが、四葉も真太も楽しそうだ。

……っていうかタイプが同じで俺が疲れるってもんだよ。

「ほほう……瀧がそんなイケメン発言を連発か」

「そうなんですよー。それでお姉ちゃん、私に逐一それを話してくるから、困ったものなんですよ！——俺、三葉の傍にずっと一緒にいるんで。ああ、私も言われたいなー」

「俺も言ってみたいもんだ」

「——おまえらなあ！ 俺を弄ってそんなに楽しいか!？」

「もちろん♪」

……もうやだ、この二人。

俺はそんなことを思いつつ、包丁で野菜を適当な大きさに切つていく。

俺を弄りながらも真太は俺よりもテキパキとした手捌きで調理を進めていた。

「高木くん、すごいね！ 瀧くんよりも料理できる男の人、初めて見ました！」

「そりゃあこれを職業にしてるんだからな。逆にこいつが素人の癖に出来過ぎなんだよ。昔のイタリアンのバイトでもホールの癖にキツチンの仕事まで手を出してたんだからな」

「見てたらやりたくなつたんだから仕方ないだろ？ ホールつて色々面倒なんだしさ」

因縁つけてくる客もいるし、なんか奥寺先輩はピザに楊枝が入つていたなんていちやもんをつけられたらしいしな。

なんかその対応を最初にしていたのは俺らしいけど、何故か記憶にないんだよな。

「ローストビーフはあととは置いておくだけでオツケー。じゃあ瀧シェフ？ 次は何する？」

「ん〜……じゃあ野菜料理を」

「ならば高木オリジナルのシーザーサラダ作つてやるよ」

真太は少し楽しげにそう言うのと、また調理に取り掛かった。

……こいつは昔からこんなだ。好きなことに熱中して、それを極めようとする。

これと決めたら一直線で、義理堅くて、友達を大切にする。

——俺の自慢の親友だ。だから、三葉や三葉の親友の二人とも仲良くなつてほしい。

その理由も今回のサプライズパーティーに含まれている。……どうしようもなく、この面子で一度顔合わせをしたかつたんだよ。

——久しぶりに、自分の俺は掌を見つめた。

三葉と一緒になつてからは消えていた癖だ。何も無いのに、あたかもそこに何か大切なものがあるという錯覚。

……それを今の一瞬だけ、感じた。

「……すごいね。なんか、色々」

「真太はガチだからな。何度か食わせてもらったことあるけど、あいつの料理は本気で旨いから楽しみにしとけよ?」

「うん! ——でも今のすごいってのは、それだけじゃないんだよ?」

四葉は背中を俺に向けて、顔を見せずにそう言った。

……それだけじゃない? ならいつたい、四葉はなんのことを言っているんだろう。

「……お姉ちゃんのために色々な人に聞いて、たくさん頑張ってる瀧くんも。クリスマスを通して祝う方が楽なのに、瀧くんはこうしてサプライズを選んだんだよね?」

「……ああ。色々考えて、これなら皆喜ぶかなって思ったんだ」

「——それがすごいと思う。それに羨ましいって思っちゃやし、嬉しーいとも思っちゃうんだー」

四葉は満面の笑みを俺に浮かべた。

「……だから色々ありがとうって言いたかったの。ずっと言えてなかったから。たくさんのことを——私のこと、お姉ちゃんのこと。色々な事をありがとうって」

「……それは俺の台詞だよ。三葉に会って、四葉に会って……色々なことが楽しくなった。仕事も恋も、お前たちの絡みも全部全部新鮮でさ」

だから余計に、俺と三葉の二人だけの世界では終わらせたくないんだ。

「四葉や三葉たちにも俺の親友たちと仲良くなつてほしい。あいつら、すげえ良いやつだからさ」

「……うん。瀧くんの考えは絶対に間違いないよ——今日のサプライズ、絶対に成功させようね?」

「おう!」

俺と四葉は腕をがっしりと絡めて、笑いながらそう言った。

そんなとき、キッチンにいる真太は特に俺に話しかけることもせず、穏やかそうな笑顔で俺たちを見ていた。

「……瀧が幸せそうで何よりだ」

……そんな声が聞こえてきたような気がした。

——そんなとき、家の呼び鈴が鳴り響く。

俺は時間を確認すると、既に17時を迎えていた。

……もしかして三葉？ そんな風に思いながら家の扉を開けると、そこには予想が外れ、違う人たちがいた。

「——やつほ、瀧くん。ちよつと早いけど奥寺、入りま〜す♪」

「一応お土産も買ってきたぞ、瀧」

そこには奥寺先輩と司がいて、更にその後ろには——

「それと、この二人がお前の家を探していたみたいだから連れてきたぞ。お前が呼んだんだろ？」

「——テツシー、さやちゃん！」

——これまた予想外に、そこにはテツシーとさやちゃんが苦笑いしながらいた。

俺が二人を確認すると、そつと前に出てくる。

「夜になると思ってたんやけど、思った以上に早く来れたわ」

「結婚式以来やね、瀧くん」

「ああ——今日は来てくれて本当に嬉しいよ！」

俺は三葉を除く面々が予想外に早く集まったことについて嬉しくなり、声のトーンが少し上がる。

4人を家に招きいれ、そのままりビングに入ってもらおう。

既に待機していた真太と四葉がそれに気づいて、リビングでは会話が花が咲いた。

——四葉やさやちゃん、テツシーと司、真太、奥寺先輩の新鮮な会話が聞こえてくる中、俺は心が温かくなる。

……でもこの温かさは、一人で感じたくない。

——早く、三葉に会いたい。三葉と一緒に、この温もりを感じたい。

俺はそう、思わざるを得なかった。

……時は迫る——後は三葉が来るのを心待っただけであった。

●○●○

鏡の前で自分の姿を確認すること、12回。

今日着ていく服をコーディネートすること2時間30分。

……朝から私の行動は今日の夜のための用意で埋め尽くされていた。

数日前、瀧くんのパソコンの画面を見てから、その翌日に勝負下着を購入し、そして今日という日に備えた。

——準備は万全だ。……心以外は。

「うううう……なに、この妙なドキドキ。……時間は——」

こういうときに限って時間っていうものは経つのが遅い。

さつき見たときは昼過ぎだったのに、今はまだ3時に差し掛かったばかりだ。

……しかもこういう日に限って四葉は出かけちゃうし——つまり落ち着かなかった。

「おや、三葉。まだ家におったんか？」

……すると、寝室の方からおばあちゃんがゆっくりとした足つきで私に近づき、話しかけてきた。

「お、おばあちゃん！ 落ち着かんよお〜！」

「……なに子供みたいなこと言ってるんやさ。全く……それなら、瀧のそこに行ってしまえばええんやよ」

「それが、瀧くんが夜に来てくれていうんやよ？」

「……せつかく綺麗にしてるんやさ。情けない顔をするもんやない」

おばあちゃんは私の頭をそつと撫でて、微笑む。

……少し心が落ち着くような気がした。昔からおばあちゃんに育てられていたっていうのもあまって、私や四葉にとっておばあちゃんは親みたいなものだもん。

……瀧くんとは違う温もりを感じながら、おばあちゃんはふと声を漏らした。

「最初の。初めて三葉に男が出来たって聞いて気が気でなかったんやさ。ほんま大丈夫かって思った。……でも日が過ぎることにあんたは幸せそうになっていった——瀧と最初に会ったのはそんなときや。困っていたわしを、あの子は助けてくれた。言われてみれば些細なことや。やけど、そんな些細なことを、わしのことを三葉の祖母って知

らんのにやってくれた。——嬉かったんやよ。そんな良い男をしつかりと選んだあんたの成長が見れて」

「……おばあちゃん」

「——わしはもう90や。いつまで生きられるか分からん。でも生きている間に、あんたが幸せになる姿を見れた。四葉もそうや。……あの子にはな、感謝の言葉しか思い浮かばん」

……しわだらけの顔で、微笑を浮かべるおばあちゃん。

——私のことを誰よりも近くでずっと見てくれていたのは、思えばおばあちゃんだった。

四葉とは少し違う視点でいつも私を見守ってくれていたのは……おばあちゃんだったんだ。そのことに気づいて、私は少しだけ涙が溜まる。

「……なあ、三葉。落ち着かんのは、なんでや？ 自分に自信がないからか？」

「……わからない。すぐくソワソワして、緊張して——でもすぐにも会いに行きたいの。瀧くんのこと、大好きだから」

「——ならそれは良い緊張や。安心しない。あんたはわしの目から見ても良い女や。あんた以上の女、なかなかおらへん。瀧の目もな、あんたに釘付けや」

それだけ言うと、おばあちゃんは重い腰を上げて立ち上がる。

「三葉。今日は楽しんで来ない——きつと、あんたの人生で一番楽しい時間になるでな」

「……うん!!」

私はおばあちゃんの言葉に頷くと、もう一度鏡の前に行く。

……もちろん緊張はある。だけど、おばあちゃんのおかげでそれは心地良いもの変わった。

——努力は最大限した。多少の勉強もしたし、用意するものも用意した。

……瀧くんが喜んでくれるかな、それだけが唯一の心配。

——よし! ……私はそう意気込んだ。



時間はあれからあつという間に過ぎていき、私は家を出た。外もかなり暗くなっていて、非常に寒い。

……瀧くんの家の最寄駅につくと、そこには寒そうに体を振るわせる瀧くんがいた。

瀧くんは時計で時間を確認しながら私を待つてくれていたんだろう。来る時間なんて伝えてなかったから、ずっと待つてくれていたのかもしれない。

……私は彼に気づかれないように近づき、後ろから抱きついた。

「うえっ！」

「ふふ、何？ その声。変やよっ！」

瀧くんは突然私に抱きつかれたからか、素っ頓狂な声を漏らす。

それが私には面白くて、そして可愛く映った。……これが私の彼なんや、なんて惚気が私の頭の中で始まる。瀧くんの言葉や反応はいつも私のツボを的確に射抜くんだよね。

——これが惚れた弱みなのかな、なんて思った。

「み、三葉……」

「……待つててくれたの？ こんなに寒いのに」

私は瀧くんの手をそっと取り、自分の両手で覆う。

……冷たい。それはずっと、私のことを待つていてくれていた証拠。それが理解できて、余計に彼のことのが愛しく思った。

瀧くんはいつも一生懸命で、いつも私のことを想ってくれていて、私たちの関係を大切にしてくれている。……それだけじゃない。四葉やおばあちゃん、さやちゃんやテッシー。それに友達やミキさん——色々な人との関係を大事にしている本当に優しい人。

……今になって再確認した。

——あの時、あの電車ですれ違い、そして出会って会話を交わした瞬間の出来事が正しかったのだと。あの出会いが、私の見ていた世界を変えてくれたことを。

あの出会いがなかったら、きっと私は今もモヤモヤが残る現実をただ生きていただけだ。

……私は自分の手の温もりで、瀧くんの悴んだ冷たい手を優しく握

る。

「……三葉、良いよ。三葉だつて冷たいだろ？」

「いいの。……私が、こうしたいの」

——先ほどまでの緊張が嘘のようになくなった。

瀧くんと触れ合つて会話を交わして……それだけで寒いはずなのに、心と身体がポカポカと温かくなるような錯覚に囚われる。

……でもきつと、これは錯覚なんかじゃない。

「——瀧くん、行く？」

「……おう」

……この気分は、あれだよ——瀧くんが望んでいたことを、今私も強く望んでいた。

今すぐに瀧くんにキスしたい、今すぐにくつつきたい——今すぐにも、彼に尽くしてあげたい。

駅から瀧くんのお家までは大して距離はない。二人で歩いていると時間はあつという間に過ぎていつて、名残惜しく玄関の扉の前についてしまう。

私は扉の鍵を開け、扉をくぐり、家に入る——と同時に、瀧くんの身体を自分の方に引き寄せた。

「ちよ、みつ……は」

「んん……」

……こんなに強引に瀧くんにキスしたのはたぶん初めて。

——恥ずかしい。こんなことをして、淫らな女つて瀧くんに思われたくない。だけど今の感情を押し殺してまで普通でいれるほど、私は冷静じゃない。

……舌を瀧くんの口内に進入させ、彼の背中をギュツと抱きしめる。

「ちよ——ちよつと、待ってっ！」

「あ……」

……瀧くんの唇が私から離れて、名残惜しい声が漏れる。

——瀧くんは顔を真っ赤にしている、本当に驚いているつて顔をしていた。その顔が可愛くて、もつともつと彼と接したくなつた。

——そんなとき、瀧くんは優しく私を抱き寄せた。

「……こんな予定じゃ、なかつただけだな」

「……予定？」

「こつちの話——なあ三葉。今日はその……クリスマス・イヴじゃん？」

……すると瀧くんは少し恥ずかしげに私にそう言うってくる。

——そうだ。今日はこんなものでは終わらないし、終われない。瀧くんは私を望んでいるんだから、私は恋人としてそれに応えないと！

……それに私も、望んでいるし。

「……うん」

「それでさ。俺、考えたんだ——三葉に何かしてあげたいって。永遠に、心に残るイヴにしたいって」

——え、永遠に心に残るイヴ!? た、瀧くん一体何するつもりなん!?

……心底驚いた。これはやばい。本当にやばい……つ。いつものじゃないの!?! ——今日、履いてきて本当によかったと思った。

「……うん。私、頑張るんやよー!」

「……ん？」

瀧くんは何故かキョトンとした顔で首を傾げる——なるほど、瀧くんは主導権を握るから、私は頑張らなくても良いってこと? でもそれだといつも通りだし……

「まあいいや——だから色々俺も考えて、色々用意してさ」

「い、色々用意!?! た、瀧くん何するつもりやの!?!」

「え、そ、そんなに驚くの? まだ見せてないのに……」

「——だ、大丈夫! どんなすごいのも、私、受け止めるから!」

「お、おう——夜遅くまでなりそうだし、楽しもうな?」

——もう恥ずかしくて、取り繕うことも出来ない。

瀧くんが何をするのか、全く想像できないけど——二人でなら何とかなるよね!?!

「お、オールってことだね!?! た、体力持つかなあ……」

「……ほら、三葉。行くよ?」

た、瀧くんは色々と不安を抱く私の手を取ってリビングに向かう。

「……ま、まずは二人でシャワーを浴びて、それから——」

私は瀧くんにそう提案をした——それと同時に、瀧くんはリビングの扉を開いて私の背中を押した。

その瞬間——パンパン!! ……クラッカーを同時に鳴り響かせたような音が響いた。

「きゃっ……!」

私はその音に驚き、反射的に目を瞑る——そして薄目を開いて周りを見て、そして……目を見開かせて、驚いた。

『——メリークリスマス!!』

——たくさんの人の声が同時に私の耳に届き、そしてその声の主たちの姿をこの目で確認する。

——そこには、いろいろな人がいた。

……私は、ふと横に立つ瀧くんの顔を見上げる。

「た、瀧くん……こ、これは?」

「三葉と俺と、みんなで楽しめるのはなんだろうって考えてさ。……」

三葉の大切な人たちと俺の大切な人たち。皆で——サプライズパーティーだよ」

——四葉やさやちゃん、テツシーにミキさん。それに瀧くんの親友の二人。そこには、それぞれ笑顔を浮かべた皆がいた。

わ、私は状況が飲み込めない。

ただ——

「——今日はいっぱい、楽しもうな? 三葉!」

——私の大切な瀧くんからのプレゼント。それは本当に、優しすぎるものだった。

心が更に温かくなる。……自分が勘違いをしていたのにもすぐに気づいた。それで自分の考えの浅さにいやになるけど……今はそんなことどうだってよくなるくらい——本当に、嬉しかったんだ。

……涙が少しだけ零れる。私は指先でそれを拭い、笑みを浮かべている瀧くんにこう言った。

「——ありがと。大好き、瀧くん」

——本当に、ありがとう。その気持ちが私の全てであった。

○○●●

「話は瀧から色々聞いてます。俺、瀧の親友兼保護者の藤井司って言います」

「あ、君が司くんかあ……初めまして、宮水三葉です！」

「やつほ、三葉ちゃん♪ サプライズを予想通りの反応で、隠してきた甲斐があったもんだよね」

「み、ミキさん！ やつぱりこのこと知ってたんだ！ もう……」

「宮水さん、奥寺先輩の悪戯なところは半分諦めた方がいいっすよ？」

——サプライズパーティーがはじまって、三葉は瀧の友人たちと交流を深めていた。

その姿はある意味で新鮮とも言え、しかしどこかしつくりとくるものを彼は見て感じた。

そんな彼の傍によるのは、三葉の親しい面子である。

「……瀧くん、素敵なこと考えるよね。本当に三葉のこと好きなんやね」

「まあ俺の認めた男やからな。これくらいできんとな！ うんうん」

「……テツシーは逆立ちしても出来ないから、あんまり口開かない方が良いと思うよ？ ってか口開かないでね」

「四葉ちゃんが辛辣!」

瀧はその会話を聞いて苦笑した。

……三葉を除く他の面子が揃ってから、皆は交流を深めていた。

やはり価値観の違う多くが集まると会話は弾むようで、特に同性は同性とかなり仲がよくなっているようなのだ。

特に司もまた建築に携わる職業であるため、克彦と会話が合うことがあり、真太は持ち前の明るさや料理の点で克彦や早耶香、四葉とも会話を弾ませていた。

……その光景や、今の光景を見て、瀧はふと思う。

「……よかった。三葉、楽しそうで」

ふと漏れた呟きに、克彦と早耶香は顔を合わせて笑いあった。

「ほんまお前は三葉のこと大好きやな」

「そうね。ちよつと妬けちやうくらいにね」

「……でもそれが瀧くんだよ」

「——うるせー。しょうがないだろ？ ……嬉しいもんは嬉しいんだよ」

顔をプイツとさせ、恥ずかしそうにそう言う瀧に三人は更に笑みを浮かべる。

……四葉と早耶香はそのタイミングで三葉たちのところに行き、会話を花を咲かせた。

「……ありがとな。こんな機会、作ってくれて」

「……いいよ。俺がしたくてやったことだし、むしろ来てくれて助かったというか……」

「それでもや。やつぱりお前にはちゃんとお礼は言わんとあかんと思つてな——皆、ええ笑顔や」

克彦は瀧と二人で目の前の光景を見て、そう断言する。

……三葉も四葉も、ミキも早耶香も司も真太も——瀧も克彦も、皆が皆、笑顔を浮かべていた。

それは今日、瀧が三葉のために動かなければ起こることのなかった光景だ。それほどに綺麗なものがあるにはあつた。

「……不思議なもんや。出会つたんは本当に少し前やのに、俺はお前に確かな友情を感じてる。……どうしようもない信頼や。なあ、瀧——」

「——俺も。それはテッシーだけじゃないよ。さやちんとも、四葉とも、三葉とも。こんな言葉くさいけどさ——運命じゃないかって思う。俺たちが出会って、仲良くなつて、こうしてワイワイ騒げる関係になつたのはきつと、なるべくしてなつたんだ」

瀧は克彦に対して苦笑を向けながら、そう呟いた。

「だから、きつとこれは最後なんかじゃない。——一度結ばれたものってさ、中々解けないんだぜ？ ムスビはそういうもんなんだよ」
「……三葉みたいなこと言うんやな——やけど、そうだな。これから何年先、何十年先。お前らと楽しくやっていける。俺はそう思うわ」

「おう。だからまあ次はテッシーが考えてくれよ？　楽しいイベント」

「——しゃーないなあ」

克彦と瀧がそんな会話をしている最中、輪から抜けて司が二人に近づく。

「おつす、楽しんでるか？　司」

「ああ、おかげさまでな。……なんていうか。話し聞いてたからどんな人かっというのを知ってたけど、実際に話してみるとまあ理解できたな」

「理解？」

「ああ——あれは他の男が引つかからないわけだ。宮水さんの目には瀧のことしか入っていないってこと。瀧にはちよつと勿体無いみたいな？」

司は少し悪戯に言いながら笑みを浮かべる。

「おまえなあ……」

「あはは、嘘だよ、嘘——あの子にはお前しか無理だ。逆にお前にはあの子しか無理なようにな。だからまあ……今日は呼んでくれてありがとう。それだけ言いたかったんだ」

「……お前が素直だとなんか怖いな」

「失礼なやつだなあ——絶対に手放すなよ？　じゃないと俺が狙っちゃうからな」

「心配すんな——絶対、離さないから」

……そう言い合う瀧と司は、不敵に笑いあう。

「おーい、瀧くん♪　こつちにおいでー？」

するとそのとき、ミキがにやけた笑みを浮かべながら瀧を飛び、手招きをした。

それを見て少しばかり嫌な予感を感じる瀧だが、しかし傍の二人の友人は途端にニヤけ、そして瀧の背中を押しした。

「ほら、瀧。お呼びだぞ？」

「女待たせるもんじゃないでな。ほら、行ってこい！」

「お、おまえらなあ！　楽しんでるだけだろ!？」

「もちろん！」

克彦と司の見事な連携で、瀧は女性の輪の中に入ってしまった。それと同時に真太は克彦と司の元まで歩いてきて、二カツと笑った。

「真太あ、お前の料理上手かったでな。また次はお前の店に食べに行くわ」

「それは何より。是非是非おいでなすってくださいね」

「……んで？ どうしたんだ、真太」

「いいやー？ まあこつから瀧は女性陣のおもちやになるだろうからと、男子同士で交流を深めようと思ってな！」

真太は持ち前の二カツとした気持ちの良い笑みを浮かべると、司と克彦も微笑を浮かべる。

「——この出会いも、運命って瀧の奴が言うもった」

「ほう……あいつにしては中々ロマンチックなことを言っていますね」

「でも、まあそれもそうなんやないかな……なんて思ってしまうよな。この状況」

「そうっすね——んじや一発飲みましようか？」

「お、いいねえ。俺について来れるんか？」

「望むところです」

——瀧の興したサプライズパーティー。

それはただ交流を深めるだけのものではなかった。

様々な分野に精通した者たちが集まったこの出会いは、ただの出会いだけでは終わらない——もちろんそれはまた別のお話なのであるが。

……パーティーは笑顔のまま進んでいく。

——そうして、時は過ぎていった……

●●○○

「んんんんんん……楽しかったあ、本当に」

「……そうだな」

——日を跨いだ時間帯。

電車の終電になる前に他の皆は帰宅し、明日は用事があるという四葉も珍しく家に帰った今、瀧の家にいるのは三葉と瀧の二人だけであつた。

サプライズパーティーは無事終わり、今は二人で自室にて隣り合いながら話をしていた。

……今日のことを。楽しかった時間のことを。

「楽しい時間ってあつたという間だよね——瀧くん、ありがとう。私、本当に嬉しかったよ？ 瀧くんの大切なお友達とも仲良くなれて、その友達も私の大切な人たちと仲良くなつて……自分のことみたいに、嬉しかったんだ」

「俺もだよ——頑張つてきた甲斐があつた。なんて自画自賛してみたrina」

「……自画自賛じゃなくて、本当にそうなんだもん——色々勘違いしてたけどね」

……勘違い？ その言葉を聞いて、俺はつい不思議に思った。

そういえば最初の方、三葉は突然キスしてきたり、なんか話がかみ合わないことが多かつたような……。

「……実はね、瀧くんのパソコンの中、一回見ちゃつたんだよ」
「え」

——俺が最後にパソコンを使ったのは数日前。しかも調べていた内容は、魔がさして調べてしまった恋人たちが過ごす夜、みたいな記事だつた気が……ま、まさか!?

「そ、そこにね？ その……そういう記事が載つてて、瀧くんは私とこういうクリスマスを過ごしたいのかなつて思ったの」

「ち、ち、違うからな!？ さ、参考がてらにちよつと調べただけで、俺が強くそう望んでいたわけじゃ——」

「——違うの?」

——三葉は、俺の手をキュツと握りながら、ふとそう呟いた。

……頬はお酒を飲んだように紅潮していて、そのまま三葉は俺の肩に頭を乗せた。

「……ねえ、瀧くん。だから私、色々勉強してきたんだよ?」

「べ、勉強……」

ゴクリ、と息を呑む。

いつもとは少し印象の違う三葉の表情に、不意にドキリとした。なんていうんだろう——魔性、って言えばいいのか。

「……瀧くん、私さ——瀧くんを感じたい……かな？」

「……三葉っ」

——俺は、三葉を押し倒す。

……そこからのことは、深くは覚えていない。

っていうか刺激が強すぎて、思い出しただけで反応してしまうからであって——ただ一つだけ。

——主導権を握った三葉の行動は、それはもう恐ろしいものだった。

○○●●

「……そういえばさ。一つ忘れていたことがあるんだ」

「んん……忘れていたもの？」

「ああ——俺から三葉に対するプレゼント。って言っても同時に俺へのものであるんだけどさ。ほら、三葉は俺にマフラーを編んでくれただろ？ ……あれとはまた違うんだけどさ」

「……開けても良い？」

「ああ」

「——こ、これって……」

「ああ——次の春にさ。二人で旅行に行こう。その場所は——」

——物語は、紡がれる。

これはムスビの物語。

二人が出会うことで解かれたムスビは繋がれ、二人が繋がることでそのムスビは強まり——そして最後のムスビに向かう。

ただそれだけの物語。

出会うはずのなかった二人が出会った奇跡は、それだけでは終わらない。

——最後のムスビ。それを探す旅路が、今始まる。

思い出のあの場所へ

「——岐阜やああ!!」

——端々が上ずる三葉の声が響くように聞こえる。

……季節は冬の特に寒気が厳しい時期を通り越して、今は春の陽気が少しずつ見え始めてきた3月の下旬——そんな日に、俺と三葉は車を使って二人で旅行に来ていた。

それは去年のクリスマスに三葉に渡したクリスマスプレゼント。二人で休みをしっかりと取ることができたお陰で、今は2泊3日、この岐阜県飛騨へと旅行に来ているんだ。

飛騨といえば、三葉の生まれ育った地。……だからか、三葉のテンションは心なしに高かった。

「三葉、声大きいから!」

「あ……ごめんね? この景色見るの、ものすごく久しぶりだから」

「飛騨に入っつてすぐのパークキングエリアで叫ぶものでもないだろ?」

……まあ気持ちかわからないこともないけど」

俺はここまでずっと運転をしていたため、少し肩を回して伸びをする。

東京から岐阜までの距離は馬鹿にならないからな。昔一度来たときは新幹線とローカル線を利用してすげえ時間かかったから。

「……ちよつとさ。ここに来るのが心苦しいものがあつたんだよね。

私の生まれた地域はこの辺りだけど、私のいた場所はもうないから。……でもやっぱり実際にきたら、懐かしさからか——すつごく、嬉しいんやよ。ありがと、瀧くん!」

「……別に、俺も来たかつたわけだし、そんなにお礼を言うこともないんじゃないか?」

「……ううん。本当に、ありがと」

車に寄りかかっていた俺の隣に寄り添い、体重を掛けてくる三葉。

……春の陽気が俺たちを包むように暖かくなるけど、目的地にはまだ着いていないんだよな。

「三葉、そろそろ再出発だ! 目標は飛騨高山!」

「お、おー！」

三葉は突然上がった俺の声音に同調するように片手を挙げてそう言った。

もう一度車に乗り込み、目的地へと向かう。ただ朝の6時から移動したから、先ほどまでテンションの高かった三葉がうつらうつらと居眠りしていた。

……昨日は今日が楽しみで全然眠れてなかったからな。今はゆっくり寝かせてあげよう。

俺は三葉の頭を軽く撫で、車の運転に意識を集中した。

「……飛騨。——糸守」

……俺は小さな声で、そう呟いた。

○●○●

——たまに。本当にたまに、私は夢を見る。

夢の中の私はいつも誰かを探して、誰かの名前を呼んでいる。

『——くん』

その名前はいつも目を覚ます頃には覚えていなくて、そんな夢を見ていたということさえも忘れてしまう。

だけどそれは忘れてはいけなことなんだ。決して、忘れてしまつてはならないことなんだ。それを覚えようとしても、その覚えようとしたことさえ忘れてしまう。

そんな日が……何年も続いていた。

——最近はその一切なかったのに、今私は夢を見ていた。

『ねえ……覚えて、ない?』

私の顔は嫌に緊張していた。目の前の顔の見えない「彼」に、少しだけ上目遣いでそう尋ねる。人の混み合った満員電車の中で、単語帳を見る彼に問いかける。

……そうだ。いつも私は不安に、彼にそう問いかける。背丈が自分と同じくらいの彼に、幾度となくそう問いかけた。

それでも答えはいつも決まって——彼には届かなかった。

私は覚えているのに、彼は決して覚えていない。いつも返ってくるのは「お前、誰?」という言葉だけ。

だから今回も同じなんだろう——そう思ったとき。

『三葉』

——彼は、私の名前を優しげな声で呟いた。

満員電車の中なのに、その空間には私と彼しかいないような錯覚に囚われる。

電車の中が大きな草原の景色に変わり、風が強く舞い上がった。

『三葉。君の名前は……三葉？』

『——くんっ』

私は彼に手を伸ばす。手を開いて、縋るように手を伸ばし続けた。いつもは届かないこの手が、今なら彼に届くような気がして。愛おしい彼に——私の手が温もりに包まれる。

彼は私の手をしっかりと掴んで、決して離さなかった。

『——もう絶対に、離さない。なあ、三葉。お前に、言いたいことがあるんだ』

『……何？ ——くん』

『それは——』

——だけでも、夢はいずれは覚める。

彼が何か大切なことを言うけれど、私には届かない。

いつも同じ感覚。夢が覚めるとき、私はこれが夢であったことを自覚する。そして何よりもそれを覚えようとして、そしてすぐに忘れる。

それがいつもは苦しくて、悲しくて、空しく形なく私に残る——だけど今日はそれがなかった。

だから私は、夢の中の学生の頃の私はこう言った。

『——またね、瀧くん！』

——そして私は、また全てを忘れた。

「三葉、三葉。起きて」

「んん……」

——私は、瀧くんの優しげな声で目を覚ます。

車は既に停車していて、瀧くんはシートベルトを外して私の肩を揺

すっていた。

「……なんだろう。今、心なしか、いつも以上に心が暖かい気がした。『……なんか良い夢でも見たのか？　めちやくちや顔が緩んでいるけど』」

「……わかんないや。でもうん——すつごく良い夢を見た気がする。良い夢を見たあとで瀧くんに優しく起こされるんだから、すつごく幸せものだよね」

私はそんな小恥ずかしいことを恥じることなく瀧くんに言うと、瀧くんはすぐに視線を逸らして頭の後ろを手で押さえた。

それは瀧くんが緊張しているか、恥ずかしがっている証拠。私は瀧くんの腹部にぎゅっと抱きついた。

「……三葉。そうしてると、動けないぞ？」

「いいの。……今は少しでも瀧くんの傍にいたい気分なの」

「良いけどさ。……ったく、三葉ってたまに子供っぽくなるよな」

そう言いながら瀧くんは私の頭を、髪を梳くように撫でる。

……気持ちいい。性的ではなくて、精神的に。私にとつての旅行はどこに行くかではなく、瀧くんに行くつてというのが重要だからね。今回は場所も最高ではあるんだけど。

それに昔から旅行つていうのは縁がなくて、たぶんこれが二回目。さやちゃんとテッシーと卒業旅行に行つて以来だ。

「良いでしょ？　恋人の前だと彼女は気を抜くものやの！」

「……まあ三葉は外面めちやくちや気にするもんな。昔から——つて、昔つてなんだよつて話か」

瀧くんは自分で言つた言葉に首を傾げる。むむ……もしかしたら四葉の奴、私の昔のことを話したな？

これは帰つたらちよつとオハナシを……でも、今の反応は何か少し違う気がした。

まるで、本当は覚えているはずなのに忘れてしまった。……そんな感じ。

「……ところで瀧くん。目的地に着いたのかな？」

「おう。三葉がにやけながら眠つている間にな」

「に、にやけてないよ!?!」

瀧くんは悪戯つぼくそういうから、私はすぐに反論する。

……それと共に、私はそつとフロントウィンドウから見える景色を見た。

「……飛騨や」

「おう。まずは食べ歩きしよう! 俺、飛騨の名物とか色々調べたから食べたいもの多くてさ——三葉、案内してくれよ?」

「——うん! 私に任せて!」

——そうして私の永遠に思い出として残る、楽しい旅行が始まった。

●●●

「やっぱり飛騨牛使ったものが多いんだな」

「そうやよ。やっぱり飛騨といえは飛騨牛って言う人も多いし、メジャーやしねー。でもそれ以外にもおいしいものはいっぱいあるんやよー!」

俺は三葉と隣がけの席に座って、先ほど近くのお店で買った飛騨牛の玉焼きを食べていた。見た目はたこ焼きみたいだけど、中身は飛騨牛がふんだんに使われていておいしいんだよ、これが。

三葉の方にはみたらし団子があり、それもおいしそうだ。ただ、俺の知っているみたらし団子とは違うみたいなんだけど……

「このみたらし団子は普通の甘だれじゃなくて醤油の香ばしい味付けやの。素朴だけど、これがおいしいんだー」

「ほう、どれどれ」

俺は三葉の突き出してくる団子の一つを頬張る。口内に広がるのは三葉の言うとおりの香ばしい醤油だれの少し焦げた味。それが餅と絶妙なバランスで、辛さの後でもち独特の甘さが戻ってくる。

「うまいな、これ。三葉、今度作ってよ」

「うん! でも流石にフライパンでこれは再現するのは難しいかな?」

そう言っつて、俺が口をつけた団子の残りを食べる三葉。……いや、別に気にしないけどさ。特に意識したことなかったけど、これ外です

ることではない気が……

「ん？ どうしたん、瀧くん？」

「……何でもないよ」

とはいえここで反応したら馬鹿だ。俺は知らないふりをして残りの玉焼きを食べて、次のグルメを探した。

………のは良いんだけど、やはり俺が選ぶのは飛騨牛系ばかりだな。

俺は飛騨牛まんを頬張りながら時間を確認する。……二人でゆっくり食べ歩きをしていたから時間は予想以上に過ぎていた。

「おっと、もうこんな時間か」

「ん？ どうしたの？」

「ああ。そろそろ次の場所に移動しようと思つてな。また高山には明日来る予定だし、早めに切り上げて旅館に向かおうか」

高山で旅館を借りても良かったんだけど、俺はちよつと温泉に入りたくて、旅館はここから車で一時間ほどの場所にある下呂温泉に予約したんだ。

俺たちは三度車に乗り込み、再び移動する。三葉は車に乗り込む前に買った食べ物をたまに摘みながら、調子よく話題を振ってきた。

基本的には地元のこととか、最近あった出来事といった内容。

「つていうか瀧くん、この前私の会社まで来たでしょ？ あれのせいで私、先輩とか後輩にめちゃくちゃからかわれてるんだからね！」

「大切な資料を家に忘れる三葉が悪いからな。つていうか届けてあげたのにそれはないだろ？」

「……嬉しいけど、なんか自分の彼氏を見せびらかしてるみたいで、気が良くないつて言うかさ。うん、本音は複雑なんよー」

少し頬を膨らませる三葉に、俺はつい笑ってしまう。

「なに笑ってるんー!! 私、真剣なんよー！」

「わかってるつて。……そんなこと言ったら三葉、めぐ先輩になんか言っただろ？ 最近、謎に余所余所しいんだけど」

「え、別に何も言っていないけど……敢えて言うなら、朝会ったら瀧くんとよろしくお願いしますつて言うくらいで——」

「それだから。三葉、気づいて。もうそれしかないから」

そんな他愛のない会話を続けながら目的地へと向かう。

……俺と三葉は会話が途切れることがあまりない。趣味とかが合うってのもあるんだけど、会話をしていたら次々に話題が思い浮かぶんだよ。もちろん他の人とは気まずくなったりすることが多いんだけど、三葉とはそれが一切ない。

無言の時間でさえ心地よく感じるときもあるんだ。

「え、でも私は瀧くんの上司の先輩だから言っているだけで」

「……まあ別に良いんだけどさ——ちなみに前のしつこい男はどうなったんだ？」

「ああ、あいつ？ あれは女子社員の結束のお陰であれ以来、仕事のこ
と以外では女の子と一切話せなくなったよ？」

「……一因となった俺が言うのもなんだけど、ご愁傷様だな」

三葉に言い寄ってきた報いを受けていると思えばなんとも思わな
いけど、やはり少し同情してしまうな。見た感じ女遊びが激しいっぽ
い上に、三葉の会社は女性社員の比率が高いから、さぞかし居心地が
悪いだろ。

「ただ最近は本当に反省しているから、ちよつと緩和しているみたい
だけど——私には滅多なことがないと近づいてこないよ」

「それなら良し。また付きまとわれたらすぐに言えよ？ 飛んでいく
から」

「うわ、瀧くんが私を縛り付けてくるんよー」

三葉は笑いながら冗談を言ってくる。

……そう話している間に、目的地に到着した。

●●●

旅館にチェックインして、俺たちは部屋に入って少しの間のんびり
としていた。

普段はあまり座敷の部屋にすることが少ないからか、俺にとっては
旅館の部屋ってすごく新鮮なんだよな。

逆に三葉はこういう和風の部屋の方が慣れているのか、どこか落ち
着いていた。

「畳って久しぶりだなー。……それにしても良い旅館だね。結構お金掛かったんじゃない?」

「それを何とか抑えるために結構前から予約してたんだよ。……まあ俺も無事昇給したし、これくらい大丈夫だよ」

——テツシーの所属する会社との契約をこぎつけたことと、ここ最近の俺の仕事に対する姿勢を評価されたからか、俺の給料は上がったんだよな。もちろんまだまだ些細なレベルではあるんだけど。

……三葉は畳の上に寝転がる。畳の上で伸びをして、目を瞑った。

「三葉、ちよつと油断しすぎ。スカート捲れてるぞ?」

「え、うそ!」

三葉はすぐにスカートを押さええて起き上がる——まあ嘘だけだな。

それ気づいたのか、三葉はじいっと俺を見てきた。

「……瀧くん?」

「悪いって——まあ無防備なのは本当だぞ。いくら俺だからってちゃんとしないといけないときもあるんだからな」

「いいでしょ? ほら、瀧くんも!」

……三葉は俺の腕を引っ張って、その勢いのせいでそのまま一緒に寝転んだ。

「……せつかくの旅行なんだから、固いことはなしだよ?」

「……それもそうだな」

俺は一度だけ三葉にキスをして、もう起き上がる。

——だめだだめだ。最近は流されやす過ぎる。っていうか去年のクリスマス以降回数が増えている気がする。

……息を整えよう。俺は冷静、雰囲気流されるばっかの男じゃない。

——俺は三葉に手を差し伸べた。

「——浴衣に着替えて、足湯巡りに行かないか?」

「……うん!」

一瞬不満な表情を伺わせるも、三葉はすぐに笑みを戻して俺の提案に頷いたのだった。

——俺と三葉は部屋に用意されていた浴衣に着替えて、荷物を持つ

て外に出る。

世間はもう春休みだからか家族連れや外国人の観光客も多く、中には卒業旅行で来ている学生の姿もちろほら見えた。

……そんな周りを気にせず、俺と三葉は手を繋いで観光する。

時たま足湯に浸かり、そこにいるおじさんなどに効能を聞いたり、お土産シヨップによって四葉や友達のお土産を探したり……。

その途中、足湯カフェなるものがあってその中に入っっていったりと、中々な有意義な時間を過ごす。

……よし、三葉はプラン通り楽しんでくれているみたいだ。結構色々考えていたから不安はあつたけど、上手く言っついて良かった。

——そう、安心していたら少し眠くなってきた。

「それでね、瀧くん——」

……三葉の声が聞こえる。俺の名前を呼ぶ声。……その声がどこかで聞いたことがあるような気がした。今ではない、もっとも昔のこと。

——そして俺は、意識を軽く手放した。

●●●

「それでね、瀧くん——って……ふふ」

私が調子よく話していると、瀧くんは私の肩に頭を乗せて寝息を漏らしていた。

足湯に浸かりながら会話をしていた私たちだったが、瀧くんはとうやらお疲れのようで、眠っちゃったみたい。

……ここまでの運転をずっとしてくれていたからね。私は周りの人通りを確認して、瀧くんの頭を太もものほうに誘導する。

瀧くんの頭を摩りながら、私は穏やかな気持ちになっていた。

「君は年下の癖に頑張り過ぎやよ——でもこんな風に外で眠っちゃうくらい、私には心を開いてくれてるってことだよね」

そう考えると途端に嬉しくなってしまう。

甘やかされるのも好きだけど、自分から瀧くんを甘やかすのも好きなんだよね。

そうして瀧くんを遊んでいっていると、不意に私たちに近づいてくる人影

があった。

「こんにちは」

「あ、こんにちは」

それは結構年配の優しそうなおばあちゃんだった。どこか雰囲気
が私のおばあちゃんに似ている気がする。

「おうおう、ようねてるのお……君はそん子の恋人かい？」

「はい。……東京から旅行で来ているんですよ」

「よおきたな——って言っても君はここらへんの出身じゃないんかい
？」

「よ、よくわかりましたね——はい。糸守出身です」

「……………そうか。糸守の」

おばあちゃんは一瞬言葉に詰まるも、すぐに納得したような表情に
なった。

「……………あれは悲劇としかかな、言えん。まさか誰も、あんなことが起きる
とは思うわけないんやからなあ」

「……………そうですね。でも、死傷者はゼロだったんですから……………」

「——時に君。君は、もしや姓は宮水かい？」

——するとおばあちゃんは、突然そんなことを言ってきた。

私はそのことに素直に驚き、何もいえなくなっていると、おばあ
ちゃんはすぐに私に声をかけてくれた。

「やっぱそうか。……………そうかそうか。これも何かの運命、なんやなあ」

「あ、あの……………どうして分かったんですか？」

「……………昔なあ。君にそっくりなごつつ別嬪な娘とここで話したことが
あるんや。その子は宮水神社の巫女でな？ ……名前は宮水二葉つ
て、名乗っ取ったよ」

……………それは、私のお母さんの名前だった。

そうか……………お母さんはここに来て、おばあちゃんと話して、そして
私もここに来て、おばあちゃんと話している。

何か、どこか運命を感じてしまうよ。おばあちゃんの言うとおり。

「……………糸守、綺麗なところやったな」

「はい。……………あの時は何もなくて嫌って思っていましたけど、いざ帰

れなくなると悲しくなります」

「そりやそうや。……でも君には、大切なものが既にあるみたいやね」
おばあちゃんは私の太ももの上で眠っている瀧くんを見つめて、そう言ってきた。

「君たちを見てたら、昔の君のご両親のことを思い出すわ。あの子らも、ここに来て同じことをしてたからなあ」

「……お母さんとお父さんが」

「そうや——ちようど君がお腹におる頃にな」

——私は本当に、そのことをロマンチックに感じた。

「……だからや。懐かしいと思って話しかけたら、その子が子供やった。……なんか変な感動を覚えたわ。こうやって何事も結ばれていくんやなって」

「——ムスビは神様の所業ですから。ムスビこそ神だけが成せる業。宮水の女は、そのムスビのためにいるんです」

「……心の中にずっと残っているんやな。君にとっての糸守は」

「——はいっ!!」

……私が強く領いた時だった。

それまで心地よさそうに眠っていた瀧くんが、目を覚ました。

「……三葉？　ごめん、俺寝てたのか」

「瀧くん。……おはよう？　ちよつとだけお寝坊さんやよ？」

少しわざとらしくさういうと、瀧くんは微笑を浮かべた。

私はそれを笑顔で返し、そつとおばあちゃんの方を見た——

「……あれ？」

——でもそこには、おばあちゃんはいなかった。

……ちよつと前までそこにいたのに、おばあちゃんはどこに行っただらう？

「三葉？　どうしたんだ？」

「うん……さつきまでおばあちゃんと話していたんだ。それでちよつと目を離れたらいなくなってる……」

私はつい先ほどまでそこにいたおばあちゃんの様子を見て、不思議に思う。

……それが一体なんだったのかは分からないけど、今の会話はすごく大切であつたように思った。

あの景色を、再び

旅館に戻った俺と三葉は、部屋に既に用意されていた食事を前に息を飲む。

……予約をした時期がよかったから格安で良い宿を取れたんだけど、俺たちの前の豪華絢爛な食事を見たら、もう言葉を失うとしか言いようがない。

綺麗に盛り付けられたお刺身の盛り合わせ、飛騨牛をふんだんに使用したすき焼き風の石釜鍋。……基本的に和を基調とした様々な料理があった。

旅館の仲居さんがごゆっくりとお楽しみくださいませ、と言って出て行くまでとりあえずは圧倒されていたものだ。

——そんな食事を頂き、それを片付けてもらって今は二人で寄り添って話をしていた。

「……夕食、凄かったね」

「ああ。昔父さんに連れて行ってもらった料亭よりも凄かったよ」

素直にそう思う。もしかしたら地元の独自の調達ルートがあつて、あの金額であれだけの料理を振舞えるんだろうか。

……とにかく幸せだ。人間の三大欲求の一つである食欲を満たされて、満足としか言いようがない。

——それはそうと。さつきから少し気になっていることがある。

それは……

「三葉。どうしたんだ？　俺が起きてから、何か考え事してるのか？」

「え？　……うん」

——三葉が心なしか、ずっと考え事をしているということだ。

俺が足湯を楽しんでいる際、気が抜けて眠ってしまい、それから起きてからずっとだ。三葉は何かを考えるように無言が続くことがあった。

悩みとか不安とか、そういうのではないと思う。本当に、なんでだろうと考えるような仕草をとっていたんだ。

「さつきのおばあちゃんね。凄く良い人だったからもっとお話したかったんだけど、急にいなくなっちゃって」

「ああ、さつき言ってた人か。……俺が起きたから気を使って帰っちゃったのかな？」

「うん、そうだと思うんだけど……なんか気になるんよ。なんでかはわかんないんだけど」

……そう言ったとき、三葉は俺の手を少しだけ強く握った。

三葉は大切に考えているときに手を強く握る癖みたいなのがある。だからたぶん、そのおばあちゃんのことを本当に考えているんだろう。

——会ったのはほんの数分。そんな人のことを大切に考える。そんな三葉の優しいところに心底惚れたもんだな。

だけど、自分のことを考えてくれないってのは少しだけじゃないかな？

「三葉、ちよつと頭をこっちに寄せてくれ」

「頭？ 良いけど……」

三葉は俺の言うとおりに、頭を俺の方まで寄せてくる。

その瞬間、彼女の頭をガシツと掴んで、そのまま胡坐をかく俺の太ももに寝転ばせた。

「きやつ！ な、なにするんよー！」

「……やり返し。外で膝枕をして俺を辱めた三葉にお仕置きだ」

「は、辱めたって失礼やよ！ あれは瀧くんが気持ちよさそうに寝てるから、善意で……」

……反論をしようとする三葉だったが、俺の行動で次第に何も言わなくなった。

——ほつれた髪を直すように、引っかからないように手櫛で解く。一日外で歩き回っていたからだろうな。

三葉の髪は基本はストレートなんだけど、ちよつとだけ癖があるからな。

「……瀧くん、手櫛うまくなったね」

「まあな。三葉の髪の手弄る機会が多いし——ごめん、やっぱり嫌か

？ 女の子の命っていうもんな、髪の毛は」

「……嫌じゃないよ。瀧くんは優しいから、手櫛でも私を大切にしてくれるって実感できるから——好きだよ？」

「そっか。……んじや続けるな？」

手櫛をしつつも、たまに彼女の頭を撫でる。傍から見たらこの行動って見ていて恥ずかしいと思うんだろうか。

——まあ外ではやらないし、良いよな？ ちよつとくらいいいちやついても。

「ふふ……なんか、くすぐったいね。瀧くんはたまにはちよつと無理やりでも良いかも。いつもちよつと優しすぎ」

「るっせ。これでも色々考えてんの！ ……難しいんだからな。やらかしたら嫌われるって思うから、男は好きな奴に優しくするんだよ」

「……特別扱ってやつ？」

……そうだな。嫌われたくなくて、大切にしたいからとことん優しくする。

でもとことん優しくすることは、彼女の全てを一方的に受け入れるってことだ。それって良いことに見えて、少し壁があるように思える。

——心の壁。自分の良い部分だけを見せて、好きになってもらおうとする。だけどそうしてしまったら相手は距離を感じてしまうのかもしれない。

自分の本心、本当の姿を見せていないから。

だけど、俺は三葉には自分の全てを見せている。それはさ、良いところはめちやくちや頑張って努力して磨いて見せている。だけどあれだけ一緒にいて、あれだけ接していて本心を見せていないはずがない。

だったら、俺にとって三葉はどんな扱いなんだろう。

「……特別って言われたら当然だと思う。だけど、俺にとって三葉はお姫様じゃないんだと思う。それを言っちゃまえば、俺にとってのお姫様はたぶん四葉辺りなんじゃないか？」

「むむ……それはちよつと、恋人的に複雑なんだけどー？」

「……お姫様はさ、守ってばかりだろ？　だけど俺は三葉とは守るだけの関係じゃ嫌だな」

——こいつには、いつまでも隣にいて欲しい。支えるだけなんて嫌に決まっている。そんなもの、対等じゃない。

三葉はその意味を理解して、顔を真っ赤にして目を背ける。

「……三葉」

俺はそれをさせず、三葉の頬に手を添える。

……ちよつとくらい無理やりでも良いって言ったのはこいつだからな。

「……な、三葉。お前の望む俺は、こんな俺か？」

「た、瀧くん……す、スイッチ入っちゃったん？」

「……分からない。けど」

少し体勢を崩して、三葉の頬にキスをした。

「……今はこれくらいで良いや」

「……………」

三葉は顔を真っ赤にしながらも、俺の太ももから起き上がる。

俺の正面に座って、唇をツンと上向きにして、そして目を瞑った。

「……ちゃんと、唇にして」

「……そうだな。じゃあ……」

そして次は、三葉と唇をゆつくりと合わせた。

○●○○

……人生で不思議な体験は、誰にでも必ずある。

例えば俺もまたそんな経験をしたことがあった。

それはまだ俺が高校生のときの出来事だ。司と奥寺先輩と学校をサボってまで飛騨辺りまで旅行に来たことがあったんだ。旅行と、いうよりも……何かを捜し求めていたような気がする。

今になってそんな風に思い出した。なんで思い出したかは分からないけど、ただ——今まで曖昧で曇りがかかっていた記憶が、少しだけ晴れやかになったんだ。

そのとき、何かがあつて俺は二人と別行動した。俺はそのままどこかの山を登っていた。

……なんでそんなことをしていたんだっけか。
雨が降っているのに、一心不乱に山を登った。何も分からないのに、何かを求めて。

あいつに会いたかったから——あいつが誰であるか。それがまったく思い出せない。

だけど俺にとってあいつは、大切であつたんだ。決して失いたくなかった。会って、接したかった。

……思い出せない。思い出せそうなのに、答えが出る寸前でいつも消えてしまう。

誰なんだ、あいつは。俺のことを、俺の名前を呼んだ彼女は——
そんな、記憶を思い返すような夢だった。

『……あつた』

……その山の山頂は火山の噴火によってカルデラができていて、そこに木々や水が流れている大自然の光景だ。その円状の淵には人が走れるほどの道のようなものがある。

——俺はそこを知っていたはずなんだ。どこで知っていたかも分からないのに。

……その場所は——

——朝、目を覚ます。

そのとき、どうしようもない喪失感に襲われた。胸を締め付けられるような喪失感。なぜか涙が溢れてしまうほどだ。

こんなこと、最近ほとんどなかった。三葉と出会ってから一度もなかったのに、どうして……

——そんな時、俺は隣で安らかに眠っている三葉に気づいた。

別々の布団で寝ていたはずなのに、いつの間にか三葉は俺の布団の中に入っていた。

……俺はその姿を見た瞬間、咄嗟に彼女を抱きしめた。

自分の身体に彼女の柔らかい身体の感触を感じる。その温かさを感ずる。

——そうしていたら、先ほどの喪失感はどこかに消えた。

「……………んん。……………どうしたの、瀧くん」

……………優しいな三葉の声が聞こえる。

薄目を開けて微笑みを浮かべる三葉は、特に動揺することもなくそう問いかけてきた。

「……………なんか、夢を見てた気がするんだ。だけどさ、それが思い出せなくて……………——何か失くしてしまった気がして……………」

「……………そっか」

……………キュツと、三葉が寝ぼけながら抱きしめ返してくれた。

「……………私は、どこにもいかんよ?」

「……………当たり前だ。絶対離すもんか」

「私も離さないよ……………瀧、くん……………」

……………三葉は再び眠る。本当に寝ぼけたままだったのか。

——時計を見ると、時間はまだ6時過ぎだった。とは言っても目は冴えてしまっているからな。

俺は三葉を抱きしめるのを止めて、布団から出る。

……………ふと三葉を見ると、そこには帯が緩んで上半身がはだけている三葉がいた。

「……………油断しすぎ」

俺はそれを見て苦笑いをしながら、三葉に布団をかける。

——せっかくだし、朝風呂でも行くか。

俺は身支度を整えて、朝風呂に向かうのだった。

●●●

——私と瀧くんは旅行二日目を全力で謳歌していた。

鍾乳洞に行つて綺麗な景色を楽しんだり、ロープウェイに乗って雄大な北アルプスの光景を目の当たりにしたり……………。

それと職業柄で美術館に行ったりと……………瀧くんがそれを見て夢中になっている姿を見て眼福だったりしたんだよね。

本当に、子供みたいに絵を見つめる瀧くんの普段とのギャップで母性本能がくすぐられる。

——そんな風にデートの今、私と瀧くんはテラス席で休憩していた。

「本当に綺麗な造形だよな。建物の外も内も、装飾が凄すぎて圧倒されるよ」

……瀧くんにとっては関わりがあることだからか、私以上にその建物自体に興味を示していた。

もちろん中に展示されている作品も素晴らしいものばかりだった。

「ガラス工芸が個人的に凄かったね。世界有数の美術館だそうだよ？」

「ああ……—でもまあ、ある意味一番ほっこりしたのは子供たちの写生会のフロアかな？」

「ああ、あれね。すごく可愛いっていうか、見たものをそのまま自分の世界にして、頑張ってるっていうのが伝わってきてよかったね」

「……子供のときの想像力で、大人ではもう戻らないものだからな」

……失敗を恐れず、自分が良いと思ったことをする。それが子供のあるべき姿で、大人になるに連れて無くなってしまいう性質。

瀧くんはそれを良く見ていたんだろう。

「……もつと、頑張らないとな」

……何を、とは私は聞かなかった。

それを私が邪推する必要もない。頑張ることは素晴らしいことだし、それに対して瀧くんがやる気になっているなら、私は応援する。

瀧くんのことだから直接手伝うより支えてあげる方が喜ぶしね。

「そういうええまだ一区画見ていないよな？」

「そやね。確か期間限定の風景画のコーナーだっけ？」

瀧くんはパンフレットを手にとって、ある一角のコーナーを指差す。

普段はないコーナーらしいけど、期間限定でこの飛驒の風景を描いたコーナーがあるそうだな。

……瀧くんもそこが気になるみたいだし、私たちはそこへ向かった。

「……こういう絵って苦手なんやよ、私。だからちよつと瀧くんが羨ましいなー」

「三葉も練習すれば出来ると思うけどな。……結構今まで見てきたと

ころの風景が多いな」

瀧くと手を繋ぎながら展示されている絵を見ていく。

そこには私たちが今回の旅行で見た光景も幾つもあり、私たちの目で見たものとその絵はどこか違った世界に見えた。

実際に目で見ると感動と、絵で見る美しさの感動はどちらも違うもの。……そのときだった。

「たーきくん。なに見てるん?」

瀧くんの視線が目の中の絵ではなく、少し遠くの絵に向かっていくのに気づいた。

私はそれが気になり、瀧くんの視線の先を見て——そして、驚いた。

「……三葉、向こうに行っても良いか?」

「……うん」

私は頷き、瀧くんについていく。

そしてその絵を前にした——それは、私の故郷を描いた一枚。

——糸守の絵だった。

「……そっか。ここからそんなに遠くないもんね」

「ああ」

私たちはしばらくその絵の前で立ち尽くした。

——糸守を鳥瞰で見下ろしたような風景画だ。糸守湖を中心に広がる町並み。細かなところまで良く描かれていた。

……瀧くんのスケッチを見て以来の感動。あの絵と同じで、この風景画には糸守に対する想いが感じられた。

——私は瀧くんの手を強く握る。まるで彼が隣にいることを確認するように。私のことを離さないでと言いたいように。瀧くんは私を見ることなく、私の手を握り返した。

「……綺麗だな、糸守」

「うん——私の自慢の地元やの。今やったら、心の底からそう言える」
……そこからの私たちは無言だった。

ずっと手を繋ぎながら歩き、そのまま車に乗り込んで次の観光地に向かった。

——だけどどこに行っても、思い出すのは先ほどの糸守の絵のこと

だった。

「……ねえ、瀧くん」

「……なんだ、三葉」

旅館に戻って、無言でいる私の傍にいてくれる瀧くんに話しかける。

私も瀧くんも、心ここにあらずだった。それが少し嫌で、気分を変えたかった。

せっかくの旅行なんでもん。瀧くんが頑張って計画してくれたんだから、私も気持ちを入れ替えないと。

この良く分からない気分を……どうにかしたい。

「私、本当に楽しい。瀧くんとの旅行が。……色々な場所に行って、色々なものを食べて、景色を見て……全部新鮮だよ」

「俺もだよ。……でも、さっきの風景画を見てから、気分が落ち着かないんだ」

——瀧くんもまた、私と同じ気持ちだった。

私と同じであの絵に何か思うことがあつて、それで無言でいたんだ。

……求めてしまう。この不安な気持ちを、良く分からない気持ちを紛らわせたいがために、瀧くんを。

……チュツ、と。彼の唇にキスをする。

「ねえ、瀧くん。露天風呂もあるんだけど、この部屋のお風呂って二人で入れるくらい大きいんだよ？」

……こんなつもりじゃなかったのに、言うつもりもなかったのに。だけど気分が昂ぶって、何も考えられなくなる。瀧くん以外のことは——考えられなかった。

「——一緒に、入ろっか」

○●○○●

——部屋の家族風呂は二人で入るには丁度良い大ききだった。

小窓から外の景色が見えて、外側からは見えないマジックミラーになっっているらしい。

……そんな部屋付けのお風呂で、三葉と二人で身を寄せ合う。

もちろん彼女も俺も何も身に着けておらず、全部見えてしまっていた。

「……………」

そんな中で続く無言。

いつもとは違う場所で一緒に入浴している恥ずかしさと、先ほどまでの考え事が混じっているんだろうな。

……だけど、嫌ではない。先ほどまでの気分よりはマシだ。

「……………あつたかいね」

「三葉がくつついてるからかな？」

「……………私、変なところないよね？」

すると三葉は俺に見られていることに気づいたのか、不安げにそう言ってきた。

……何を不安がることがあるんだろう。三葉は全体的にスペックが高いから、何も気にする部分はないと思うんだけどな。

「三葉が変ならこの世の女の大半が変になるからな」

「そ、そうなんだ……………よかった」

三葉は安心したのか、肩の力を落とした。

……そして流れるのは、また無言。

時折水滴がポツンと落ちる音だけが聞こえ、その度に緊張の音が更に大きくなる。

「……………」

……俺は、隣にいる三葉を正面から抱きしめる。三葉は突然のことにビクツと驚くも、すぐに俺を抱きしめ返してくれた。

——自分の胸元を感じる柔らかい感触。俺はその状態で、三葉と顔を合わせた。

「……………そういえばさ。三葉、今日あの日と同じ下着つけてたよね」

「っ。……………あ、あの時はその……………で、出来心と言いますか勘違いと言いますか」

「すっごいよな、あれ」

クリスマス、三葉のものすごい勘違いが現実になったクリスマスの夜のことを思い出す。明らかに面積のおかしい、下着本来の目的を軽

く踏みにじった下着だった。もう男を誘惑することしか考えてないようなものすごい下着——三葉は今日、それを履いていた。

「ち、違うんよ！ あれは四葉がすり替えたの！ しかももうあれしかないし、同じの着るわけにはいかないから……」

「……別に悪いとは思ってないよ——」

最近、三葉にやられっぱなしだからな。偶にはやり返さないと気がすまない。

俺は三葉にキスをする。突然のことに三葉は驚くけど、俺は構わずもつと深くキスをした。

舌が三葉の口内に侵入して——水滴とは違う、粘膜が擦れる音が聞こえた。

「たきくん……もつと、いっぱい——んっ」

……三葉の胸を少し刺激すると、彼女はピクツと反応する。三葉の表情が蕩けるように赤くなった。

「ほんま……、このおところはあ……。たきくん、おっぱいすぎよね」

「なんか癖になるっていうか……。ふむ」

「も、もみしだくのきんしーっ！」

三葉はそういうも、それを無視してもつと揉みしだく。

そして残った手を胸よりもつと下へ——指先にお湯とは違う粘液が付着する。

……もう我慢できないからな、三葉。

「三葉。口では色々言ってるけど、三葉もエロいよな。クリスマスは勝手に勘違いして色々勉強してきて披露するし」

「た、たきくんもよろこんで……たでしよ……？」

「——じゃあ今日は俺が頑張ろっか？」

——俺がそう言うと、三葉は顔を俯かせた。

そして聞こえないくらいの小声で……

「……………うん」

そう、呟いた。

●○●○

……裸だった。まごうことなく、私も瀧くんも全裸だった。

昨日のお風呂のことを思い出す。そこで至ったことと、私の言動とか、声とかその他諸々を含めて——悶絶した。

「う、ううううっ……!! わ、私のあほ—— あんな恥ずかしいこと……しかも旅館のお風呂でなんて」

そ、掃除はしたから！ 旅館の人に迷惑かからないくらい、ピッカピカにしたから！

……新鮮な場所なのと、それまでの気分の昂ぶりのせいで、自分とは思えないくらいに乱れっぷりを反省する。っていうかそれに合わせてくる瀧くんが恐ろしい。

あの男はお酒も強けりやそっちも強いんかい！ ……前は結構主導権握ったけど、もう私は瀧くんには勝てません。

「おばあちゃん、四葉……三葉は汚れてしまいました」
「朝っぱらから何独り言呟いてるんだよ」

ツツツ!! た、瀧くんの笑い声が聞こえる。

瀧くんは寝転びながら肩肘をつけて、微妙ににやけながら私を見ていた。

……ちよつといらつてする顔だ。まるで「昨日、気持ちよかつたんだろ?」って言つてきそうな顔だ。

「昨日、気持ちよかつたんだろ?」

「あ、あほ——!! なに私の想像通りの台詞言つてんの——!」

「いや、今のは言わないといけないかと思つてな——ほら、朝から怒つても良いことないぞ?」

瀧くんはそういうと、上半身を起こしている私を自分の方にぐいと引つ張つた。

そして布団の上で私を抱きしめて、頭をぼんぼんと撫でる。

……それをされるだけ、何も言えなくなる私つて本当にアホ。けど……好き。そんな瀧くんが。

「……うん。やつと分かつた」

「……分かつた?」

すると瀧くんは、何かすつきりとしたような表情でそう呟いた。

私は彼の胸に顔を埋めた状態で瀧くんの顔を見る。

「ああ。……なあ三葉。今日、東京に戻る時間が遅くなるかもしれないけど、良いか?」

「……ま、まさか今からっ!？」

「……………お前のピンク脳に俺も驚きだよ」

瀧くんが私の勘違いを聞いて、呆れ顔をする。

……ごめんなさい、今のは私が悪いです。私が若干申し訳ない顔をしていると、瀧くんはニコツと笑った。

「——行きたいところがあるんだ。三葉と二人で、どうしても」

——私と瀧くんは早めに旅館をチェックアウトして、二人で車に乗り込む。

その間、瀧くんは昨日の雰囲気とは裏腹に、私に明るく声を掛けてくれた。

ほとんど他愛無い話だったけど、それだけで瀧くんの悩みや迷いがなくなったように感じた。

……………どこに向かうんだろう。私はそれが分からなかった。飛騨で、瀧くんが行きたい場所がまだあるのかと思った。

……道を進み、少しずつ私は理解していった。

瀧くんの行動の目的が。それはとても彼らしく、優しいものだった。

それを理解して私も瀧くんと同じようにすっきりとした声音になる。

——やっとなかった。ずっと、心ここにあらずだった原因が。

……ガクンと、車が停車する。

瀧くんは先に車を降りて、歩いていった。

「——やっぱり。そうだったんだね」

……私は車を降りて、その光景を背景にした瀧くんにそう言った。

——一番最初に思いついた言葉は、懐かしいだった。二つ目に思いついた言葉は寂しいで、最後に思いついたのは……ありがとう。

「ああ。ずっと思ってた。俺たちが一番見たい景色は、光景はなんな

んだらうって。あの絵を美術館で見たときからずっと何を見ても心から楽しめなかったんだ。……だけどやつと分かった。俺は一番来たいのは、ここなんだって」

例えそこには元の光景がなくても、そこにあったという軌跡だけは残る。

……うん、分かるよ。瀧くん。

「……うん。私も分かった。ここに来て、確信したんだ——ありがとう、瀧くん。瀧くんがいなかったら私はずっとあの気持ちを背負ったままだったよ」

「ああ……」

私は瀧くんの隣に立って、フェンスから少し離れたところでその光景を見る。

……寂れた校舎。壊れた窓ガラス。木々もめちやくちや。それが私の知ってる最後の記憶。

——私は呟く。

「……ただいま」

——言わないといけない気がして。

——私たちの目の前には、湖が二つになった糸守の光景があった。

……その光景を見て、涙が少し零れる。

そんな私の肩を瀧くんは抱き寄せた。

「……三葉。無くなったものは帰ってこない——だけどき。またそこから何かは生まれる」

「……っ」

瀧くんは視線を被災地である湖の回りに向けた。

——復興が、始まっていたんだ。本当に少しずつ、あの事件で生まれた傷跡を埋めるように。

「復興、始まってたんだよ。今、国を上げて少しずつ元に戻そうとしているらしい。……何年かかるか分からない。元の形には戻らないと思う——それでもきつと、糸守は帰ってくる。新しい糸守がき」

「……うんっ！ きつと、いつかは……っ!!」

——私は瀧くんを抱きついた。涙が溢れ出て、その涙が瀧くんの服

を濡らす。

それでも瀧くんは何も嫌がることなく、私のことをあやすように頭を撫でた。

……知らなかった。知らないといけないのに、ずっと目を背けていた。だから気づけなかったんだ。

——私は泣き止んだとき、ふと瀧くに声を掛ける。

「ねえ、瀧くん」

「……なんだ、三葉？」

そんな私に優しくそう言ってくれる瀧くん。大好きすぎて、頭がどうにかなくなってしまいそうだった。

……私は我俣を言う。

「二つだけ、私の我俣を聞いてくれない？」

「……我俣、か。——言ってみろよ。なんでも叶えてやる」

……男らしい瀧くんの笑みを向けられ、私は少し気持ちの整理をする。

——気持ちの整理が出来て、私は言った。

「——行きたい場所があるの。どうしても行かないと行けない気がする場所があるの。瀧くと二人で」

「……ああ」

瀧くんは私の申し出を受け入れてくれる。

そして——私たちは向かった。

……この旅路の、最後の光景を見に。

——宮水の御神体のあるあの場所へ。

ムスビの神は、きつとほくそ笑んでいる

宮水神社の御神体があるのは、糸守からそう離れていない山の山頂だ。

火山の噴火によって出来た窪地の、岩と大樹が結ばたことによつて生まれた洞窟の中にそれはある。

道路整備された山道から、人が歩くために人為的に切り開かれた山道を登つていく先に、そこはあつた。

……そんな山道を、瀧と三葉は二人で歩いていた。時折聞こえる鳥の声や、歩いていると野山の動物たちの姿も見える。

それが春の訪れを感じさせるには十分だった。

瀧と三葉はそんな山道を、穏やかな雰囲気ですべて登っていく。しっかりと手を繋ぎ、決して離さないように。

山頂に到着するその途中、その山腹で休憩をする二人は、そこから見える景色を見ていた。

「……本当に久しぶりだよ。この山に登るの。8年ぶりかな？」

「8年、か。……俺は5年前にここ、登っているんだよな」

瀧は臙げな記憶を引き出すように、そう言うと三葉は驚く。

「どうして瀧くんがあそこに行ったん？」

「……わからないんだよ、それが。司と奥寺先輩と飛驒に来て、二人と別れて——なんでかここに来た。この道と同じ道順でさ」

瀧はペットボトルの水を飲んで、人が座れるほどの大きさの岩に腰掛け、辺りの景色を見ながらそう言った。

季節は春からか、近くの一輪草が蕾から少し花卉を覗かせ、陽が温かく二人を照らす。

「……そっか。あ、それなら私も昔高校生の時に、一人で東京に行ったことあるよっ……」

「へー。それは初耳だな」

「……理由は、なんだろう。何か目的があつたはずなんだけど……ダメや、思い出せない」

三葉は過去を思い出すように頭を捻るも、すぐに降参というように苦笑いを浮かべる。

——この山に入ってから、二人は何故か昔のことを思い出していた。この山道も、瀧はずつと忘れていた。山頂にいたという記憶だけはずつとあつたが、それまでの過程を思い出せなかったのだ。

にも関わらず、今はその道筋をしつかりと覚えている。

……三葉も同じだ。東京に行ったという事自体、長い間忘れていたのだ。それを今になって、この山を二人で登って思い出す。

「変な話だよな。たった5年前の出来事が思い出せないんだ」

「私は8年前だよ。……そっか。もう8年なんだよね」

三葉は山腹から見える景色を見ながら、しみじみとそう呟く。

少し見えにくいのが、三葉の視線の先には糸守が見える。2つになつてしまった隕石湖。災害の爪跡は確かに残っているが、しかし陽の光を反射した湖の景色は——美しかった。

「……ダメだと思つても、やっぱり綺麗つて思うんやよ。糸守湖……今は2つになつちやつたけど、あの景色が」

「……ダメじゃないと思う。だって綺麗なもの綺麗なんだ。俺はその気持ちを抑えたくないな」

「………うん」

……災害の傷跡を『綺麗』と表現することを三葉は戸惑つた。あんなことがなければ、きっと今でも糸守はその変わらない景色を保つていたからはずだから。

それでも三葉はその景色を変わず『綺麗』だと言い、瀧はそれを肯定する。

「……もし、さ」

瀧は少し続いた無言の間を破るように、ふと声を漏らした。

「もし、あの災害が起きなかつたとしたら……糸守が未曾有の大災害に襲われなかつたら、きっとそれが一番良いんだと、思う」

「………うん」

「………だけど、そうだとしたらさ。俺と三葉は、きっと出会つてなかつたんだよな」

瀧の手が、三葉の華奢な手を強く握る。

「そう思うと、さ。俺、複雑なんだ。だって、そうなったら今はない。三葉と一緒に話すこともなかった。こうやって山を登ることだって——糸守に来ることさえもなかったかもしれないんだ。だから……無くなくなった景色は悲しいけど、三葉と出会えたことは……彗星のおかげなのかもしれないって、思うんだ」

瀧は理解している。自分がどれだけ被災者の人々に対してかけてはならない言葉を発してるかを。

……それでも瀧には、その言葉以外は思いつかなかった。自分のありのままを、三葉に伝えた。

「……ッ。ごめん、三葉。こんなの、言っちゃダメなのに」

「……ううん。良いの」

ハツとして謝る瀧に、三葉は首を横に振る。

……三葉は分かっている。瀧が悪気があってそのことを言ったのではないということ。

瀧の言いたいことは三葉にしつかりと伝わった。それはもつともなことだった。

「……もし、瀧くんが言う通り、災害がなくて、糸守がずっと変わらないままだったら。そしたら、たぶん私はずっと糸守で、自分を押し殺していたと思う」

宮水神社の巫女として、巫女舞を奉納し、口噛み酒を御神体に供えて、同級生にからかわれて。早耶香や克彦と相変わらず仲良く——変わらない毎日を、ただ過ごしてただけ。

「……つまらない人生って思ってた。こんな人生嫌で、来世は東京のイケメン男子になりたいって思ったこともあった——でもね？ それは東京に行っても同じだったんやさ」

「……ッ」

——四葉と最初に会って交わした会話を、瀧は思い出す。

三葉はずっと、本当の笑顔を浮かべることがなかった。例え家族の前だとしても、心から今を楽しんでいるということがなかった。

鏡越しの自分を見て、少し悲しげな表情を浮かべる。それがずっ

と、何年も続いていたらと。

「……私、きつと瀧さんと出会わなかったらずっと変わらなかつたんやよ。前にも言ったよね？ 君と出会って、自分の世界が変わったって——災害は悲しい。でもいつまでもそれを引き摺るほど私たちは弱くないよ？」

「……そう、だよな——例え何もなかったても、それでも俺は三葉と出会える。そんな気が、するよ」

「当然、やよ！」

——陽に照らされる三葉は、瀧が見惚れるほどに綺麗だった。

「彗星が来ても来なくても私たちはきつと出会えた！ もしかしたら瀧くんが今回みたい旅行に来て、出会って……今みたいに、なれたよ。絶対に」

「……それなら感謝も何もないよな。結果が一緒なら——」

……瀧は自分の手首に巻かれる紐を見る。

——ムスビ。一葉が言っていたムスビは、こういうことかと。

例えもしもパラレルワールドだったとしても、糸を手繰り寄せるように俺たちはまた出会える。出会えばきつと理解し合えると。

……そう思っ、瀧は不意に笑みを浮かべた。

「……三葉、行こう」

瀧は三葉に手を差し伸べる。三葉はそんな瀧の手をしっかりと握り、頷いた。

「うん！」

○●○●

山の山頂。窪地は緑で覆われた湿地帯になっており、その中心部に大きな大樹——今は無き宮水神社の御神体が佇んでいた。

足元が不安定な岩場の上に立ちすくむ瀧と三葉。

「……すっげえな。空中庭園みたいだ」

「まあ確かにちよつと別世界みたいな空気があるよね、ここ。……ここは、災害の影響がなかったんだ。

今更知ったよ」

……二人は苔だらけの岩場から窪地の底に降りて、上からではなく

正面の遠目から御神体を見上げる。

「……宮水の巫女として、お参りしないとね。あの大樹の岩場の下にお社があるの」

三葉は瀧の手を引き、窪地を歩いて行く。

その先には小さな小川が流れており、大樹はその先にあった。

三葉はその小川を前に立ち止まり、少し屈んでその小川の水を掬う。

「……お婆ちゃん曰くね。この先はカクリヨらしいの」

「カクリヨって……ああ、隠れ世のことか。……あの世かあ」

「なんでそれを知ってるかは知らないけど——あの世の行く覚悟、ある?」

すると三葉は少し悪戯な笑みを浮かべながらそう言った。

「……三葉と一緒になら、別に構わないかな」

「なっ……そういうこと、真面目な顔を言わんといてよね、恥ずかしいからー!」

「なに、照れてんの? 三葉っていざって時に照れるよな。昨日も——」

「き、昨日の話はナシ! ……もう。この男は本当に!」

……三葉は少し怒り気味に眉間に皺を寄せるも——次の瞬間、二人は噴き出すように笑い合った。

「あははは! ……あの世の目前でこんな馬鹿な会話してる俺たちなんだ。ムスビの神様も『もう好きにしない』とか言いそうじゃないか?」

「あはは……言ってる。でも今の言い方、ちよつとお婆ちゃんっぽいよ?」

「意識したからな、うん」

……そんな会話をしながら、二人は小川を越え、そして御神体のある大樹の前に佇む。

近くでみるその迫力に瀧は改まって「おお」と感嘆の声を漏らす。まるでこの世ならざるもののように映り、瀧はふと両手を合わせて祈った。

「……なんでここでお祈り？」

「いや、なんかしないといけない気がする。うん」

「もう……行くよ？」

三葉はまるで子供に言い聞かせるかのようにそう言うと、瀧の手を再び引いて御神体の奥へと向かう。

そこには取って付けたような階段があり、瀧はスマートフォンを取り出してライトを灯した。

階段を降りきるとそこには四畳半ほどの小さな空間があり、石造りの祭壇がある。たったそれだけの小さなお社であった。

「……ここがお社。昔は一年に一回、ここに口噛み酒っていうものを神様にお供えするんよ」

「口噛み酒？」

「……それについては聞かないで。私の黒歴史だから」

三葉はそれ以上は語らない。

……三葉は祭壇の前で屈んで、そこに献納されている二つの苔の生えた瓶を見ていた。

「……これが、口噛み酒。たぶんそれ、私と四葉が8年くらい前に献納したものだよ。よく覚えてないけど」

「8年も前か。……お酒ってことは、飲めるの？」

「の、飲む!?! え、そ、そんなんあかんに決まってるでしょ!?!」

三葉は瀧の何気ない台詞に過剰に反応し、そう叫んだ。

……静けさを保っていた洞窟の中に三葉の声が反響し、何とも不気味な音を奏でる。

瀧は詳しくは知らないが、口噛み酒は米と唾液を用いて醸造する酒だ。それに用いられる唾液は三葉のものであり、つまりそれを口にするとという事は——そういう事である。

「……8年ぶりでこんなに騒がしくてごめんなさい」

……三葉は屈みながら手を合わせ、お祈りをするように喋った。

「……糸守は無くなったけど、ありがとうございます。あなたのおかげで、人的被害はありませんでした。私のお婆ちゃんも、四葉も、皆元気です。だから……ムスビの神様はここで、ずっと見守っていてく

ださい」

「……………」

三葉の祈りを真似するように、瀧も無言で目を瞑り、祈るとはいえ、瀧にとつて何か言いたいことがあるわけではない。

……ただ祈りを捧げた。意味も分からず、そうしないといけないと思つて。

「……瀧くん」

祈りを終えた三葉は、隣の瀧と同じ目線で笑みを浮かべる。

瀧はその声を聞いて、ハッと目を開ける。

「別に瀧くんが祈る必要はないんよ？ 変なところが真面目つか……」

「……そんなんじゃないよ。ただ、俺もちゃんと祈らないと罰が当たるかなつて思つただけ」

「ふーん。……でも、どうして私の方の口噛み酒は組紐が解かれてるんだろ？ ……もしかして誰かが飲んだとか」

「仮に開けたとしても、意味分らない場所にある飲み物なんて誰も飲まないだろ？ 気にし過ぎだよ、三葉」

瀧は軽口を叩きながら、ふと立ち上がる。

足場は少し濡れており、油断をすると転びそうなほど不安定だった。

「……三葉。足元、気をつけろよ？」

「うん」

瀧は立ち上がる三葉に手を差し伸べた。三葉はその手をしっかりと握り、立ち上がろうとした——その時だった。

「ぎゃっ……………」

——三葉は不自然に、その場で足を滑らした。

瀧はすぐさまそれに反応し、彼女を抱きかかえようとするも、足元の不安定さによつてそれが出来なかった。

瀧もまた足を滑らせ、体勢を崩して倒れそうになった。

瀧は咄嗟に三葉の頭を左手で守るように抑えた。

「んっ……………?!」

——その結果、瀧と三葉は洞窟内でキスをすることになった。

それはほんの一瞬の出来事。しかしその突然の出来事に瀧は手を離してしまう。

……その手が離れる瞬間、瀧の左腕の組紐と、三葉の髪結いの組紐が触れ合った。

——その瞬間、洞窟の中にキーンという、鈴の音のような音が響いた。

瀧と三葉は、そのまま地面に頭をぶつけた。

さほど大きくぶつけたわけではないにも関わらず、瀧と三葉の意識は少しずつ途切れていく。

「……みつ、は」

途切れ行く意識の中、瀧は同じように倒れる三葉に手を伸ばした。

「たき、くん……」

三葉もまた瀧に手を伸ばす。

——瀧と三葉が手を繋いだ瞬間、二人はほぼ同時に意識が途切れた。

——心の中で、それはずっと残っている。

糸を繋げ、人を繋げ、時間さえも繋ぐ。それがムスビ。

よりあつまつて形を作り、捻じれて絡まって、時には戻って、途切れ、また繋がる。

だからこれは必然。

……外は昼を過ぎ、そして迎える。

黄昏れ時。糸守の言葉で——カタワレ時を、迎える。

きつとムスビの神はほくそ笑んでいる。計画通りと言わんばかりのしてやったりという顔を浮かべているに違いない。

優しそうで、しわくちなな笑顔で——おばあちゃんが孫を見守るように。

——二人は、ただ……夢を、見ていた。

あの日、忘れてしまった物語

——いつだったか。変な夢を見ることがあった。

それは変な話なんだけど、妙に現実のような夢であったことを、今になって思い出した。

……自分ではない誰かの人生を歩むっていう変わった夢。その中で俺私は確かにあいつあの人だった。

……その誰か、つていうのが、どうしようもなく浮かばない。存在は覚えているのに、顔と名前だけがどうしても思い出せない。

——それでも理解できる。俺私にとってあいつあの人は大切な存在であったことだけは。

絶対に失いたくなくて、絶対に死んでほしくなくて、絶対に触れ合いたくて、会いたくて……それだけは、思い出せた。

……この光景はなんなんだろう。

まるで追憶のように、映像が流れていくように思い出す。

——それを思い出して、ただ懐かしい。そう感じていた。

——朝起きたとき、自分の体が違っていた。ただひたすらに胸が柔らかかった。

明らかに自分の体と違い色々な部分が柔らかかった。そこそこある揉み心地の良い胸に、俺は言葉にしようのない感動を覚えた。揉んでも元に戻ることにとおおつと感心した。思春期男子だからな。そりゃあ揉むだろう？ むしろ揉まない奴がいたら、そいつがおかしい。

ともあれ、俺はあいつになっていた。意味が分からない夢だけど、夢ならば仕方ない。

幸いそのあいつの妹が自分の行き先を知っていたから、俺はいつでもどおりシャツを着て、慣れないスカートを履いてあいつの学校に向かった。

……第一印象は、すげえ田舎だなってことだ。見渡す限り自然豊かな綺麗な町並みだった。

すれ違うおじいちゃんやおばあちゃんは気持ちのいい挨拶をしてくれる。それは東京ではあまり体験できない経験だったから、俺も大きな声で挨拶した。

なんか途中で知らないおっさんに怒鳴られたけど、無視してやった。「お前、何をみつともない格好をしているんだ！」なんて言われて気づいた。……下着つけずにワイシャツ一枚だったことに。

学校に行くと、まずあいつの友達に怒られた。ブラはどうしたの、髪は？ 寝癖直すからこっち来ない！ ……それはもう散々怒られたもんだ。

散々怒られて、散々変な奴のように見られたな。いや、だって俺は元のあいつを知らないもんだから。

誰かも分からないあいつは、何でも割りと有名人であることをその時に知った。巫女で美人な癖に彼氏とかそういう浮ついた話が一切ない。友達が少なく、あまり交流もないらしい。

——心底俺は気になった。そこまで驚かれる普段のあいつを。だから俺はあいつのノートに、お前は誰だ、と記した。

——朝、起きると周りの反応がおかしかった。

さやちゃんは私に昨日は大丈夫だって聞いてきて、テツシーは私のことを「狐憑き」なんて言ってきた。

全く何のことが分からず、ただ私は昨日何か夢を見ていたようなことをを臆ろげに思い出した。詳しいことは全く思い出せないけど。

……学校で授業を受けて、古典のノートの新しいページを開いたとき、そこに私の知らない文字で「お前は誰だ？」って記されてあった。お前は誰だ？ ……最初はテツシーのものと思ったけど、違った。ならなんなんだろう。誰かの悪戯？ 何か釈然としないものを感じながら、私は面倒な家の行事をして、眠って……

そして——初めて私があの人になったとき、本当に何事かと思った。

朝起きたら自分ではない知らない男の子になっていた。自分よりも筋肉質の体に、少し乾燥した唇。目つきは少し鋭く男の子っぽく

て、少しかつこよかった。

何が起きたか全く理解できない状況で男の子の友人から「走って来い」って連絡があつて、家を出て——私の小さな夢の一つが叶った。

そのとき、私の視界を埋め尽くしたのは、夢にまで見た東京の景色だった。物がごった返すように人がたくさんいた。電車の中は経験したことのないようなほどの満員電車で、ただの町並みなのに別世界のように見えた。

そしてその男の子の学校に行き、その子の友人の人とお昼を食べ……そしてこれも憧れだったカフェに行つた。

そのときは本当に驚いた！ だってカフェにあるパンケーキ一つの値段で私、一ヶ月は生活できるんだもん。まあ夢だし自分のお金でもないから一番高いパンケーキを頼んだけどね。

そんな時、また知らない誰かからメッセージが届いた。男の子のバイト先だった。もちろん私がその場所を知るはずがなく、男の子の友達から場所を聞いてバイト先に向かった。

私にとって唐突に迎えた初バイトは、十分に一回怒られるレベルで、そのときばかりは男の子にごめんなさいと心で謝つた。バイト中、文句をつけて因縁を吹っかけて来る客に絡まれて大問題になりそうなときに、女の先輩が私を助けてくれた。

——そして私は友達になつたんだ。彼女と。

——綺麗な字で、みつは。そう書かれていた。

その前日のことを俺は思い出せなかった。覚えてはいない代わりに、俺の目の前にあるのはその文字だけ。意味がわからなかったが、とりあえずスマホの日記を確認した。……まるで覚えのない出来事がそこには記されていた。

奥寺先輩と仲良くなつた？ 私の女子力のおかげ？ ……まるで意味がわからなかった。一瞬司の悪戯かと疑つたけど、あいつの反応を見る限りではそれも違った。

とりあえず俺は学校に行き、放課後に司と高木と喋って時間を潰し、バイトに行こうとした。

……バイトに行くなり先輩に肩掴まれて尋問されて、奥寺先輩は前よりも親しげで……本当に訳が分からなかった。

朝起きると、またもやおかしな現象に頭を悩ませた。

腕に乱暴な字で「お前は誰なんだ？」と書かれていた。……当然私には記憶がなかった。っていうか私が自分でそんなことをするはずがない。

家を出て、学校に行くと、またもや異様なほど視線を感じた。私は居心地悪く自分の席に行き、さやちんに話しかけて——真実を知った。

自分の記憶がないのに、知らない間にしでかしたこと。嫌味を言われて、それを我慢せずにやり返したなんて私だったら絶対にしない。——私の知らないところで、私ではない私がしたんだ。

私は急いで家に帰って古典のノートを開いて、そこにあることを見て確信した。

——俺^私は、夢の中であ^あいつと入れ替わっているということ。

あいつは凄まじい勢いで俺の人間関係を変えた。

女だからかは分からないけど、奥寺先輩と異様に仲良くしているのは明らかだった。だってあの奥寺先輩から凄い親しげなメールが来るんだ。

司とはベタベタするし、女言葉や訛るせいで周りから変な目で見られるし……本当に最悪だった。

あの人は本当に、ほんつつつととうに最低だ。四葉から聞いた限りでは私の胸を揉んでいたらしいし、テッシーとは異様に距離が近かった。男の子の体感で私の身体を扱うから、スカートで脚を広げるのは、胸が揺れるのも関係なしに体育で大活躍するは……もうめっちゃくちゃだ。だから私も仕返しのようにあの人の身体で好き勝手して

やった。

——記憶にない思い出が、次々に頭の中を過っていく。それが自分にとって本当に大切であったことを、思い出した。

……でも、そんな日常が、本当は苦じゃなかった。

何も無い田舎町の生活。空気は上手いし、景色は綺麗で、妹は可愛いし、お婆ちゃん料理は美味しい。

あいつの親友は良い奴だし、……だからこそ、そんな人間関係を築けるあいつが、気になった。

……私は、あの人が羨ましかった。

私には出来ないことを、あの人はパツとしてしまう。決して言動はぶれないし、人生を楽しく好きに生きている。……それがどうしても羨ましかった。

——あの人はたぶん、意識していなかったと思う。私が言いたくても言えないことを、あの人は私に代わって言ってくれた。

陰口をたたかれても何も言えなかった私の代わりに、あの人はいつも行動で示した。当然それが褒められたやり方ではなかったこともある。

私だけではなく、それはたぶん周りにも、だ。

あの人と入れ替わってからテツシーとは違う意味で仲良くなって、少し楽し気な表情を浮かべるようになった。四葉が同級生に虐められた時だって、彼なりのやり方で四葉を慰めてくれた。

本当のあいつは、突然東京に来て、何も知らずにバイト先に行つて、失敗を連続してもなおそれを笑顔でやり過ごしてしまうファンキーな女だ。自分の主張はちやんとと言えるはずなのに、ここでのあいつはずっとそれをしなかった。

内面と外面のギャップ。

静かな優等生で、自己主張がなく、どちらかといえば教室で静かに

いるあいつ。

東京で持ち前のコミュニケーションスキルを駆使して次々に俺の人間関係を変えまくるあいつ。

……俺は一体、どっちのあいつに興味を持っているんだろう。

——夢の中の出来事はいつも、起きたら忘れている。

忘れたくないのに、いつも絶対に……だからこれも、忘れてしまうのかもしれない。

——だけど今は、覚えている！

あいつであつたあの日々を、あの光景を！

——あいつのことが好きであつたことを！

だからもう忘れない！ 目を覚まして、きつと——

●○○

——綺麗なまでの、夕焼けだった。

穏やかに山頂を照らす橙色の陽の光は、確かに美しかった。

俺は、その光景に見惚れた。

ああ、なんて美しい光景なんだろう。幻想的だ。これを見るのは、これが二度目だ。

……歩く。山頂を歩き、探す。あいつを。

ご神体から出て、山頂の盆地をぐるりと取り囲む岩場の方に向かう。

だけど、あの時と違って名前を呼ぶ必要はない。

だって……いると、わかっているのだから。

「——綺麗だな」

——彼の声がする。

私の目の前で、横から光る夕陽を背景に。

「——そうだね。……うん。知ってる？ この現象のこと」

——彼女の声がした。

夕陽に照らされる彼女はどこか優し気で、涙を少し溜めていた。

「……黄昏時？」

俺は彼女の質問に答える。

「……ううん——って、知ってるよね？」

私は本当は知っている癖にとぼける彼に、少しジト目で睨んでやった。

「……そうだな。ごめん、嘘ついた」

——太陽が雲の後ろに沈み、直射から間接光で周囲が色を満ちていった。

光と影が溶け合って、周りの景色が輪郭を失うようにぼんやりと柔らかくなる。

その空間がまるで別世界のようになる。

……俺私はこの現象を知っている。

黄昏時よりも古い言い方で、この世ならざるものと出会う時間。

その名前は——

「カタワレ時——」

——彼女と声が重なる。

「……なあ。聞かせてくれないか？」

「……何を？」

「——俺だけだったら、話が出来ないからさ」

「……そうだね」

——光は地上を照らす。

暗くなった山頂で、俺私たちは手を取り合った。

指と指の間までしっかりと手を握る。

——あの時、俺は思い出せなかった。

——あの時、私は忘れてしまった。

……だけど、あの時の願いは叶った。私たちは、また出会うことが出来た。出会って、恋をした。

だからこれも、必然。だからきつと、質問はたった一つ。それを知れば、俺たちはまた——出会える。

「——君の、名前は？」

——そう、俺は私三葉瀧くんに問いかけた。
カタワレ時は、繋いだ——切れてしまった、俺たち私の最後の糸を。
——最後のムスビを。

君と、ずっと

君の名前は、と。二人は確認し合うように、そう言った。

瀧と三葉は繋いだ手を強く握りしめ、互いの存在を確かめ合うように——より強く、もっと強く握り合った。

繋いだ手から感じるの確かな温もり。そこに瀧、三葉がいると確信できた。

それを確認して——手が震える。

三葉がいる。瀧がいる。……そこにいることが奇跡のように感じ、涙を流した。

「……瀧、くんなんよね？ 本当に……そこにいるんだよね？」

「ああ……っ。俺は、ここにいるよ——三葉。やっつと、お前に会えた……っ！」

……瀧は涙で濡れたままの頬で、三葉を抱き寄せた。

その華奢な身体を力一杯抱きしめた。壊れそうなほど力を込めると、三葉はそれを受け入れるように瀧の背中に手を回す。

——あの時は、こんなにくっつかなかったな、と瀧は思った。

……あの時、この場所で、二人は確かに会っていた。そのことを思い出した。

祭壇の前で眠り、そして見た夢の内容を、今二人は確かに覚えていた。

「……瀧くんや。瀧くんが、おる……っ」

「……なんだよ、それ。あの時の真似？」

三葉が感傷深く言った言葉に、瀧は苦笑しながらそう返した。

——カタワレ時。辺りは暗く、しかし空はまだ輝いていて辺りをピンク色の間接光で包み込んでいる。

これを二人で体感するのは、これで二度目だった。

「……でも、変な感じだよ。全部思い出しても、あんまり変わらないや」

「だって最近ずっと一緒にいるんだからさ。……でも色々納得し

た。三葉と出会ってからのこと——全部思い出したから」

——記憶は確かに蘇った。

瀧と三葉は会っていた。今よりも昔に、二人が高校生であったあの時に。会っていた、という認識は少し違う。

会っていた、のではなく入れ替わっていたのだ。

瀧は三葉に、三葉は瀧に。夢の中で入れ替わって、その違う人生の一部分を生きてきた。

「……そうだ。俺たちは入れ替わっていたんだ。俺の中に、お前が入っていたんだったな」

「——あ、思い出したからね。瀧くん、私の胸を揉んでたでしょ？」

「……そ、そうだっけ？」

「——そうだよね？」

三葉の満面の笑みが瀧に向けられ、瀧は何も言えず素直に「はい」と言った。

それを見て三葉はくすつと笑みを溢す。

「……なんだよ。仕方ないだろ？ あれは、その……男の性なんだよ。うん」

「もう、怒ってないから言い訳しないの！ ……笑ったのは、本当に思っ出したんだなって今になって実感したから。今まであったモヤモヤがやっと晴れたから」

二人は抱きしめ合うのを止めて、そつと離れる。

しかしその手は繋いだまま顔をしっかりと見合わせた。

「……運命ってさ。俺、ずっと信じる事が出来なかったんだ」

「……うん」

「ずつと何かを探して、何も上手くいかなくて、モヤモヤしてむしゃくしゃして……三葉のことを忘れてしまっただけから、俺ずつとそんな感じだったんだ」

瀧は思い出すように、そう吐き出す。

「ずつと探していたんだ。顔も名前も知らないはずなのに、気付いたら誰かを探して。でもその正体が分からなくて、余計に気になって……」

「……そうだね——でも、会えたよ？ 瀧くん」

——三葉は両手で瀧の手を包み隠すように覆い、微笑みを浮かべてそう言った。

……穏やかな笑みだった。これまで瀧が見てきた三葉の中でも、安堵に包み込まれた表情。……本当の意味での、満面の笑みだ。

三葉は穏やかな表情のまま話し続けた。

「私たちは思い出さなくても出会って、恋をしたんやよ。例え全部忘れてしまっても、私たちは会えた——私たちだから、その奇跡が起きたんだと思う。互いを思い合っていたから」

「三葉……」

「——私たちはきつと、出会ったらすぐに分かったんだ。私の中に入っていたのは君なんだって。君の中に入っていたのは私なんだって。……例え覚えていなくても、大切な存在であるってことを」

恥ずかしげもなくそんな台詞を漏らす三葉を、瀧は無性に愛しいと思った。

この握られる手を振りほどいて、今すぐにも抱きしめて、キスをしたいとも思った。

……しかし、この手を振りほどくことは出来ない。

——今は、一瞬でも彼女から離れたくないから。

だから瀧は言葉で態度を示す。

「なあ、三葉」

「……なに、瀧くん」

「——好きだ」

——単純だった。

たった一つの言葉だった。

自分の想いをただ一言の言葉でまとめたもの……その言葉を聞いて、三葉の瞳にまたもや涙が溢れた。

——あの時、瀧の名前を忘れて、どうしようもない気持ちに囚われた。

忘れてはいけないのに、忘れるはずがないのに、少しずつ消えていく瀧のこと。その感覚に焦りを覚えて何も考えられなかった——そ

の時、自分を奮起させてくれた瀧からのメッセージ。それと同時に彼女が自分の本当の気持ちに気付くことが出来た言葉。

手の平にマジックペンで書かれたその言葉を、三葉は思い出した。

……だから彼女の返す言葉もまた、たった一つだ。

あのととき彼に伝えることが出来なかった言葉。

三葉は言う。

はつきりとした声音で、瀧の目をしっかりと見据えて、涙を流しながらも笑顔で。

「——大好きだよ、瀧くん……っ！」

——カタワレ時の糸守を背景にして、今、ようやくその言葉が交わされる。

その景色は——ただひたすらに、美しいものだった。

○●○●

山頂の岩場に二人は座り込んでいた。

肩を寄せ合い、片手を繋いで糸守を見ながら、なんてことのない会話をしていた。

「おまえってなんで昔、あんなに悪口言われて何も言わなかったんだよ。俺の中に入っている時はかなりファンキーに生活してた癖に」

「ふ、ファンキーは失礼やよ！」

瀧のふとした軽口に、三葉は反応しながらも彼の質問について考えた。

「……そうやね。たぶん、色々なことを諦めてたんだと思う。私は宮水の巫女で、ここでずっといることはほとんど内定しているようなものだから。だから一々周りの言葉に反応してたら疲れるだけやからね。だから外面ばかり気にして内側にあるものは何にも見せようとしなかった」

「……そっか」

「うん。でも……ちよつと瀧くんに感謝もしとつたよ。確かに瀧くんは私の身体で色々好き勝手しとつたけど」

グサリと刺さる三葉の言葉。瀧は思い当る節があり過ぎて（主に毎朝の日課）、凶星を突かれたように引き笑いになる。

「髪の毛はしつかりしないし、下着はちゃんとつけないし、男子の目があるのに飛んだり跳ねたりするし、脚は開くし、マイケルの真似するし、体育で無駄に目立つし、胸は揉むし……言ったらムカついてきた」

「そ、それは言ったらキリがないだろ!?!」

「——でも、瀧くんは私のことを思って行動してくれてたよね」

三葉は瀧の言葉を遮るように、そう言った。

「泣いてる四葉をフォローしてくれて、後から聞いたけどこの山に登った時、お婆ちゃんをおぶってくれたんやよね? ……でも一番は、たぶん私の言えないことを私の代わりに言ってくれたこと」

「……あれか」

「うん。私が影口を叩かれてる時、いつも瀧くんはちよつと荒っぽい方法だけど、助けてくれたよ。それで最初は勝手にせんといいつて言ってたけど、本音はいつもありがとう、だったの」

「……別に。俺はああいうの嫌いなだけ。ああいう陰湿なのがムカついただけだ」

「でも、それをはつきり言うのは中々出来ないことだと思う。実際に他のクラスメイトは誰も言えなかったんだもん」

瀧が恥ずかしがろうと、それは確定的なのだ。

三葉は少し恥ずかしがる瀧に面白がって言葉を立て掛ける。

「そんな瀧くんだもん。私越しであっても、さやちゃんもテッシーも瀧くんのことを友達って認めてたと思う。だから二人とも仲良くなれたんだと思うよ?」

「……やめろって。何か、恥ずかしい」

「ううん、やめへんよ。あ、そういえば胸は揉む癖にお風呂は絶対に入らんかったよね、瀧くん」

「……それは境目として、ちゃんとしなさいといけないと思ったからだよ。揉むのは我慢できなかったけど、三葉の全裸を自分から見るのはなんか違うなって思ったんだよ」

実際に、胸を揉む時も服の上からしか揉まなかったしな、などとも漏らす瀧。

……そのとき、ふと瀧はお風呂というキーワードで思い出したことがあった。

「——おい三葉。お前、実は俺の身体でお風呂入ってただろ」

「……へ？」

……今まで自分が優勢のまままで会話が進んでいたため、三葉は油断をしていた。そのため瀧の突然の発言に態度を隠すことなく反応してしまったのだ。

「な、なんのこと？」

「しらを切るなよ？ お前が入った次の日に、俺の頭からシャンプーの匂いがしたんだよ。親父に聞いたら、昨日普通にお風呂入ってたって言ってたからな」

「……な、なんのことなか？ 三葉さん、ちよつとそこは思い出していないや〜」

瀧のジト目が、三葉に突き刺さる。

——もちろん、嘘である。

瀧の言う通り、三葉はしっかりとお風呂に入っていた。

女の子のため、一日の汗をしっかりと洗い流さないと気持ちが悪いかことと——単に男の子の身体に興味があったのだ。

自分とは違う肉体。自分よりも背丈が高く、声が低くて身体が全体的に筋肉質。……思春期の男子が女子の身体に興味津々なのと同様に、三葉もまた興味があったのだ。

「三葉。俺だけ責めて、自分だけ逃げるのはちよつと違うと思うんだよ。な、三葉？」

「ううう……その、ね？ 中身は女の子やし、お風呂入らんかったら気持ち悪くて、その……ごめんさい」

三葉は言い訳のしようがないことを悟ったのか、素直に謝る。

そんな三葉を見て、瀧は少し悪戯な表情を浮かべながら彼女の頭を撫でた。

「……ま、おあいこだけだな。この話題は二人とも傷つくから止めようぜ」

「そ、そうだね」

二人はその意見に同調した。

——そして、ふと少しずつ沈む日を見つめた。

「綺麗だね」

ふと三葉は夕陽が差し込む糸守を見て、眩いた。

二つに増えた糸守湖の水面はカタワレ時の夕陽によって反射され、ただひたすらに美しい光景を写していた。

まるで現実ではないような、幻想的な光景。奇跡のような光景。

……三葉は、瀧は、この状況を不思議に思っていた。

あの日、この場所で二人は出会い、全てを忘れた。

二人にとってこの御神体は奇跡を起こしてくれる場所であると同時に、大切なことを忘れた場所でもある。

——もしかしたら、奇跡は一時だけで、また忘れてしまうのかもしれない。

あの時、ここで再会し、ここで別れた。

未来を変えるために、二人は代償として互いのことをすべて忘れた。

「……ねえ、瀧くん」

三葉は瀧の手を少し強く握る。

キユツと、その存在を確かめるように。

「……怖いよな」

——そんな三葉の心を理解しているように、瀧はそう言った。

瀧は三葉の方を見ることなく、糸守を見下ろしながら眩いた。

「……うん。怖いよ。今、こうして瀧くんと話していることが、どうしようもなく幸せすぎて——それを忘れてしまうのかもしれないって考えたら……、どうしようもなく、怖い……ッ」

「……そうだな——俺も、苦しかったし、怖かったよ」

瀧は思い出すように話す。

——あの日、カタワレ時に三葉と出会い、語らい、触れ合ったあの日。あの時の時間を、今は鮮明に思い出せる。

しかしカタワレ時が終わり、次第に消えていった。三葉との語らいも、触れ合いも、名前でさえも。

奇跡の代償を支払うように、嫌なほど綺麗に忘れてしまった。
その怖さを、今なら思い出せる。

「大切な人って理解しているのに、少しずつ消えていくんだ。君のことが……。辛かった。涙も流した。——でも今は違うんだ」

瀧は立ち上がって、空を見上げた。

その声は恐れなどない晴れ晴れとした声で、明々と話を続けた。

「忘れていても、忘れないことはあった。三葉とちゃんと出会って、それだけは断言できる。俺は君を探していたって。世界中の誰よりも、君と出会いたくて、君を探して——見つけたんだ」

「瀧くん……ッ」

「……だから今、あの時言えなかったことを言うよ——例え三葉は世界中のどこに居たって、俺が必ず逢いに行く。……つつても、出会ってるんだけどさ」

……瀧は少し苦笑しながら、三葉に手を伸ばした。

「……そっか。それなら、私も怖くないよ」

その手を、三葉は握る。

三葉は立ち上がり、瀧を見上げた。

「この手は、もう二度と離してなんてやらないんやよ。覚悟してね、瀧くん——ずっと、この手は離さないだから」

「望むところだ。……よし」

——その時、瀧は意を決するように意気込んだ。

瀧は自分の鞆をあげ、その中から箱のようなものを取り出した。

三葉は瀧のその姿を不思議そうに見つめながら、彼のことを待っている、瀧は覚悟を決めたように立ち上がる。

「……本当なら、もつと先にしようと思っていたんだ。まだ早いかなって、先に買うだけ買って、中々勇気が出なくて——でも今しかないって思ったんだ」

「今しかないって、瀧くん何言って……」

——その瞬間、沈みかけていたはずの日の光が一瞬、強く輝いた。

三葉は、自分の前に出されたものを見て、言葉を失う。

言葉を失った後に初めて出したのは、言葉ではなく——涙だった。

「あ、こ、これって……そ、その……」

「……………」

三葉はアワアワとした声で狼狽した。

瀧が差し出した箱の中身と、その意味を理解すると余計に何も考えられなくなった。

——嬉しすぎて。ただ嬉しくて、慌てた。

「……まだまだ俺、三葉のことを支えるくらいにしつかりと自立は出来ない。社会人一年目で、未熟かもしれない——でも俺、絶対に三葉と幸せになる自信があるんだ。三葉となら、どんな困難でも二人で乗り切れる。何年も、何十年も、何億光年だって!!」

紡ぐ言葉は、彼女への誓い。

三葉は瀧から発せられる感情的で、ぶっつけ本番の本音を何度も聞いて応えた。

「だから、その……こんなとき、なんて言葉を言えば良いかわかんないけど——」

——瀧が視線を逸らした瞬間、三葉は彼にキスをした。

瀧はその行為に驚いて目を見開くも……すぐに心を落ち着かせた。唇がゆつくりと離れる。

……三葉は何も言わず、瀧に笑顔を見せた。そこには先ほどまで見せた慌てた素振りはなく、ただ瀧の言葉を待っていた。

……瀧は一度、深呼吸して——

「俺は——立花瀧は、宮水三葉のことを、心の底から愛しています。だから、俺とずっと一緒に同じ人生を歩んでくれませんか？」

「——はい。喜んで」

——瀧の言葉に、三葉は一瞬の躊躇いもなく頷いて見せた。

瀧に左手の差し出す。

「……このことだって忘れるかもしれないのに。瀧くんって本当にあほよね。ロマン的に最高だけど、後のことを何も考えてないでしょ？」

「……自分でも馬鹿って分かってるよ——もし忘れたなら、その時は忘れてしまった俺が悪いから、未来の俺がどうにか三葉に想いを伝え

るよ」

「……じゃあ三葉さんがそんな瀧くんに教えてあげる——例えどんな場面でも、私は瀧くんの想いを受け止める自信があるよ?」

「じゃあ、安心だよな」

……瀧は箱から婚約指輪を取り出し、三葉の左手の薬指に嵌めた。指に金属の冷たさが伝わる度に三葉の心は温かくなり、彼のことを愛おしくなる。

三葉の指に婚約指輪が嵌り、彼女はそれを眺めるために手を開いた。

「……言葉に出来ないね。実感がないっていうか、嬉しすぎてどうにかなつちやいそうやよ」

「……めちやくちや緊張したんだからな。たぶん三葉に会って一番頑張ったよ、俺」

——二人は笑い合う。

幸せそうに、手と手を取り合つて。

……そんな幸せな時間は、本当にあつという間に過ぎてしまう。

少しずつ色褪せていく空が、濃紺に向けて染まっっていく様が確認できた。

それはこの時間の終わりを告げていた。カタワレ時の終わり。

——忘れるかもしれない。忘れないのかもしれない。どう転ぶかは二人でさえ分からない。

……そんなとき、瀧は三葉に声を掛けた。

「……あの時は、手の平に名前を書こうとしてたよな。忘れないために」

「瀧くん、名前書くつて言った癖に好きだつて書いたよね?」

「あ、あれは! ……絶対忘れないつて思ったから、先に言いくいことを言おうつて思つて」

「——分かつてるよ。そんなこと」

どうなるか分からない状況下でも、それでも——二人には確信があった。

「——じゃあさ、前みたいに最後に手の平にメッセージ書こうぜ」

「……良いね、それ。忘れちゃった場合の防止策？」

「それもあるし、普通にやってみたい。あの時は時間が足りなかったけど、今なら大丈夫だろう？」

瀧は鞆からマジックペンを取り出して、キャップを外して三葉の手の平に書き込む。

その間、三葉はそれを見ようとせず、書き終るとペンを受け取った。「何書いたかは、カタワレ時が終わってから見よ？ ……じゃあ私も」

……三葉は瀧の手の平にマジックペンの先を滑らせる。優しい気な微笑みを浮かばせて。このメッセージを見た後、彼はどのような反応をするか。それを思い浮かべると自然と笑みが零れたのだ。

……互いにメッセージを書いた手を握り合い、見つめ合った。

「……もうすぐ、終わっちゃうね。カタワレ時」

「ああ。だけど——何があっても俺たちは」

——それを言おうとした瞬間だった。

日は完全に沈み、そして——カタワレ時は、終わった。

その瞬間、瀧と三葉は唐突に意識が薄れる。

薄れゆく意識の中、二人は決して手を離さなかった。

……二人は確かな確信があった。

それは——



——目を覚ますと、そこには大切な人の顔があった。

山頂の岩場にいる俺たちは、何故か岩場の上で手をしっかりと繋いで眠っていた。

「んん……俺たち、なんでこんなところで眠ってたんだろ？」

「……なんでだろうね」

瀧くん 三葉は不思議そうな顔でこちらを見てくる。

……でもなんでだろう——この心が満たされたような気持ちは。

——何か、大切なことを忘れたような気がした。それなのに、なぜこんなにも心が満たされているんだろう。

何か分からないのに、どうして満足しているんだろう。

今までにない感覚が、俺の中にはあった。

——そう、俺私は感じた。

——ふと、私は自分の薬指にある違和感に気付いた。瀧くんと手を繋いでいるのに、金物を付けているような冷たさを感じた。

そこにあつたのは……指輪。

「え……えええ!? な、なにこれ!」

「ん、どうしたんだよ、三葉——はああ!? な、なんで三葉、それつけてんだよ!」

それは、俺がいざという時にいつでも渡せるように用意していた、婚約指輪だった。

なんでそれが三葉の薬指に嵌められているということに、心の底から驚きを隠せなかった。

「し、知らんよ!? っていうか、え? こ、これってそういうこと!」
「そ、そういうことだけど、そういう事だけ!! 俺、渡した記憶ないんだけど!」

「渡された記憶もないよ! っていうか瀧くん、こういう大切なことはもつとロマンチックな場面だね!——っていうかもしかして、驚かそうと思って私起きる前にこっそり……ッ!!」

「違うからな!? 流石の俺もその線引きくらいは分かるから!」

——そんな会話をする。

起きたら意味の分からない状況になっている。

そんなことがあつたのは初めてだった——それなのに、何故だか昔に同じような状況にあつたことがあるような気がした。

なぜこうも、この意味の分からない状況下で心が満たされているのか。

どうして今までほんの少しだけ残っていた不安が消えているのか。それは、自分たちでも分からなかった。

何も覚えていないのに、それでも心が休まるのは初めてだった。

……ほんの少し、脳裏に宿るのは見知らぬ記憶。それは一瞬、風のように通り抜けて消えていく。

……忘れるんじゃないなくて、脳裏に浸透して自分の一部になってい

る。そんな気がした。

——言い合いをしている中、俺たちはふと空を見上げた。

「——あ。流れ星」

そんな時、雲一つない空を一筋の流星が流れた。

それは少しの間に何度も流れては消え、また流れる。

その光景は昔見た光景にそっくりだった。

——9年前のティアマト彗星。甚大な悲劇を起こしたあの災害の大元。

それでも……それでも、ただ美しいと感じた。

「……ここで見る流れ星は、特別に感じるな」

「そうだね——ん？」

……ふと、私は手の平にある違和感に気が付いた。

それは俺も同じで、俺と三葉は同時に手を開いて、そこにあるものを見て目を見開いた。

「……これって——」

「……ほんと、何なんだろうな。これ」

俺はその文字を見て、笑みを溢した。

こんなものを、いつ書いたんだろうと。

——それを見て、また心が温かくなる。

……いつの間にか、手の平を見ることが癖になっていた。いつ頃かはしつかりとは覚えていない。本当にある日突然だった。

……その意味が、今ようやく繋がった気がした。

——全く、本当に三葉は仕方がないと思った。

こういう分かりにくい方法で、大切なことを伝えるんだから。だから、言ってやろう——答えを。

「——お前のことを、一生愛し続けるよ」

「——喜んで、君のお嫁さんになるんやよ？」

——そこにあつたのは、一つのメッセージだった。

たぶん、目の前のこいつが自分に送った大切なメッセージ。

それは本当に率直で、幸せでしかないようなものだった。

——俺の手の平に描かれたメッセージは、「ずっと、愛してね？」

だった。

——私の手の平に描かれたメッセージは、「結婚してください」だった。

それを俺は力強く頷いて、満点の星空の下でキスをする。

流星がしきりに流れる中、俺は心の底から強く願った。

——これから先のことを。たくさん色々なことを経験して、二人で成長していく未来を。

その光景が次々と思い浮かんでいく。

結婚して、子供を作って、父と母になって、年を取って、子供が結婚して、孫が出来て。

——結婚式では友人らを呼んで、盛大にしよう。

——子供は二人、男の子と女の子の二人が良いな。

——子供たちと一緒に色々な経験をして、幸せな家庭を築こう。

——子供たちが思春期になったら、その時は彼と一緒に苦難を乗り越えよう。

——あの日、テツシーと約束したことを絶対に果たそう。

——四葉と彼と三人で、いつまでも変わらない関係でいよう。

——きつとそれは、何にも替えられない幸せな光景だ!!

「——ねえ瀧くん」

「……なんだ、三葉」

「これから先のこと。色々なことがあると思う」

「……そうだな。幸せだけじゃあ、すまないことだってあると思う。だけど——」

「——私たちなら、大丈夫だよ」

「——当たり前だろう？」

……これから先の幸せを願い——そのために必要なことをひたすらに願った。

それは——どこまでも、何年でも、何十年先も。

どんな時でも——

夜空に流れる流星は、まるで何本もの糸が一つの場所に収束するよ

うに、ひたすらに流れる。

それはまるで自分たちの今を、これからを現しているようだった。

「——瀧くんとなら。君とならどこまで」

「……ずっと一緒に」

——君と、ずっと……どこまでも、幸せに生きていこう。

そんな未来を——二人で描き続けていく。

蛇足編

幸せな未来のプロローグ

「ねえねえ、パパー」

「——ん、どーした？」

幼稚園児ほどの大きさの可愛げな女の子を膝の上に乗せて、彼は休日のひとつ時を過ごしていた。ソファアーに座って一緒に娘とテレビを見ていた彼なのだが、娘のその問いかけに視線を娘に向ける。

キツチンの方からはトントントン、と包丁とまな板が小刻みに奏でる家庭的な音が聞こえ、そちらからは彼女が微笑ましそうにその光景を見つめていた。

「パパってどうしてママとけっこんしたの？」

「……どうした、いきなり」

娘の少しばかりおませな発言に彼は苦笑いをしてしまう。キツチンの方からはカシヤンと物音が聞こえたことを考えると、彼女も少し動揺しているのが手にとってわかる。

「きのうね、あかぐみのたかしくんが『けっこんしようぜ！』っていつてきたの」

「——よし、そのたかしくんのお家を教えなさい。俺が抗議にいつてくる」

——親ばかというべきか、過保護というべきか。彼は割りと真剣な顔でそんな言葉を口走るものだから、娘はむむつと難しい顔をする。

しかしこの娘、どこの誰に似たのかは定かではないが非常に耳年増である。結婚の意味もすっかりと理解しており、それを理解した上で彼にそう問いかけているのだ。本当に誰に似たのか、彼は若干心当たりがあるため、その心当たりを今度説教することを心に決めた。

「あ、でもおにいちゃんかたかしくんをせつきょうしてたよ？」

「——流石は俺の息子だ。たまに男を見せるな」

「——たまにってひどいぞ、とうちゃん!!」

彼女の傍でお手伝いをしていた息子は彼の発言に断固反抗するも

の、彼女に治められる。

……しかし、と彼は考えた。

彼女と結婚を決めた理由というのが、実はないのだ。これが決め手だったというものがないため、非常に困る。

——だって出会ったあの時に、既にこんな未来を望んでいたのだから。

最初に会った時から彼の想いは彼女だけに向かい、彼女の想いもまた彼にだけ向かっていた。こんな幸せな未来は約束されたものであったのだから。

「そうだな。んじゃ分かりやすく一言でいうなら——運命だよ」

「うんめい？」

「そつ。あいつ以外は考えられなかったから、何が何でもあいつと一緒に居たかったから、結婚した——な？」

「……何を恥ずかしいことを言ってるの、もう」

——リビングに息子を連れてきた彼女に彼がそう尋ねると、彼女は恥ずかしそうな表情を浮かべて顔をほんのり赤くする。

その顔を見て彼は悪戯な笑みを浮かべた。

「まあそんなところだよ——双葉」

「むう……」

「ふ、ふたばばかりズルイゾー！」

「ははは、お前もまだまだ甘えん坊だなあ——龍一」

——彼は娘と息子の頭を優しく撫でる。それを見て彼女はそつと彼の隣に座って、寄り添った。

温かな家庭であると誰もが言う。微笑ましい家族であると誰もが称するだろう。

それは彼と彼女が——立花瀧と立花三葉が描いた未来のページであった。

——これは蛇足の物語。幸せな彼らの後をほんの少し描いた……ただの蛇足の物語である。



——二人の結婚生活を語る上で欠かせないのは、彼女である。

二人と最も近い距離に居て、二人のことを最も大好きな少女。宮水三葉の妹である彼女の名は——

「あ、ごめんねー。私、あなたに興味ないからそれじゃあね」

——宮水四葉は今日も今日とて男子を振っていた。

女子高生として最後の年の春からというもの、彼女の元に押し寄せるのは告白の嵐であった。彼女は気になる人がいなく、男子に対してドキドキすることがないという難病に掛かっていた。

その結果が何十人切りという告白玉砕だ。数多の男子は彼女に好意を持ってしまいが、結果的に全てが玉砕されてしまう。それでも男子は馬鹿なもので、懲りずに彼女にアプローチするのだ。

宮水四葉はそれに若干嫌気を刺しながらも、無碍にはせず真正面から玉砕させる。

来年には大学生になるための受験があるため、彼女としては色恋沙汰は二の次——というよりも恋人がいなくても現状、満たされているのだ。だから恋人を必要としていない。

それもこれも——

「あの二人のせいだよ、本当に」

「ああ、四葉のお姉さんと義理のお兄さんだっけ？」

——あの二人のせいだと、四葉は勝手に言いがかりをつけていた。

……この一年、三葉と瀧に挟まれて過ごしてきた四葉は人生でこれでもかというほどに幸せであった。その結果、今までなら「カッコいい」や「いいかな」と思っていた男性に対して一切の興味をなくしてしまい、それでも良いとまで考えるようになってしまったのだ。

——さて、そんな二人なのであるが、近々結婚を控えている。

なんとあの瀧が三葉にプロポーズして、それを三葉が受け入れたのだ。付き合い始めて大体1年目の出来事であり、それはもう宮水家は荒れた。

……結婚を決めた途端に、今まで達観を決め込んでいた三葉の父の俊樹が、結婚を反対までとはいかないが早すぎるのではないか、と言いだ始めたのだ。

そして本当ならば春に結婚するはずだったが、瀧と俊樹の話し合いが続き、今年の夏に入る前の6月に結婚となったのだ。

「うん。お姉ちゃんとお兄ちゃんが私に甘いから」

「あんたってシスコンを隠さないようになったよね。本当に」

「シスコンじゃないって」

四葉の中では尊敬しかっこいいと思う人ランキングのトップ2が瀧と三葉で埋まっているのだから仕方がない。

もしも日本で重婚が許されているのならば、彼女は迷わず瀧に求婚することは目に見えているだろう。

——さて、そんな彼女が二人の結婚を聞かされたときの心情はというと……それは複雑、であった。

祝福する気持ちは大きい。しかし自分がこれから二人に甘えられなくなると考えると、少し複雑な気持ちが隠せないのである。

「ふむふむ、四葉は素直に二人の結婚を喜べないと見た——乙女心って面倒だよねえ」

「そうそう、乙女心は大変なの」

友人の言葉に素直に頷く四葉。

実際に四葉の中の瀧に対する想いが本当に親愛なのか、恋心なのかはまだ理解していない。ただ少なくとも大好きな存在であるということだけは断言できる。

とはいえ、自分が姉から彼を仮に奪えたとしても——その結果の未来も、違うのだ。

その答えが出ないからこそ四葉はモヤモヤしていた。

「……ちなみに結婚式っていつなの？」

「明後日」

「——まさかの近日!？」

——結婚二日前の出来事であった。

○○●●

——とはいえ二人の結婚は素直に嬉しい。ということと四葉はこの一年間、アルバイトで少しずつ貯めたお金を握り締めて二人の結婚

祝いを捜し求めていた。

東京の街を一人散策する中で、四葉はたまたま旧友に出会う。

「——四葉ちゃん！」

——三葉の幼馴染の名取早耶香……ではなく、勅使河原 早耶香である。結婚して一番の悩みは名前を書くときに字画数が多すぎるという点である彼女は、東京で偶然四葉と再会した。

その手には買い物をした後なのか、手袋を幾つか握っていた。

「さやちゃんはお買い物？」

「そうやよ。四葉ちゃんは——もしかして三葉と瀧くんのあれかな？」

流石に彼女の幼馴染は鋭かった。再会してもものの数分で自分が東京を散策している理由を感じられたため、四葉は素直に頷く。

すると早耶香は突然、腕を組んでうんうんと頷き始める。

「やっぱりお姉ちゃん想いやね、四葉ちゃんは！」

「あ、あはは——ちなみにさやちゃんはもう買ったの？」

一応、参考までに四葉はそう尋ねた。勅使河原夫妻も二人の結婚式に参加するため、用意しているのであろうと考えてのこと。無論、その考え通り早耶香たちも祝いの品は用意していた。

「うん。二人は新生活だろうから、便利家具でもあげようって克彦と話し合ってたね。やんわり瀧くんに探りも入れてな」

「なるほど、瀧くんに探りか……でも出来れば二人にはサプライズであげたいんだよね」

「あ、そっか。……ちなみに予算はどれくらいなん？」

「えつと……」

四葉は早耶香に財布の中身を見せると、早耶香は「おおお」と唸り声を出す。

それもそうだろう。四葉の財布の中には学生が用意するような額が入っていないのだから。普段自分の服以外にお金を使わない四葉の貯金は中々溜まっていたため、少し無茶が出来るのである。

……とはいえ、大金を使って用意したら四葉を心配する二人の姿は目に映る。

「……でも中々思いつかないんだよ。お姉ちゃんとおに……瀧くんが欲しがりそうなもの」

「んー、そうだね——欲しがりそうなもの、っていうのは少し違うんじゃないかな？」

早耶香は人差し指を唇に当てて、ふとそう漏らした。

「たぶんあの二人は四葉ちゃんがくれるものなら何でも喜ぶと思うんやよ」

「それはそうだけど、せっかくなら——あ、そっか」

四葉は何かを言いかけて、はっと何か気付いたような表情を浮かべた。そして徐にスマートフォンを開いて、画面を操作しながらそれをじっと見つめ続ける。

……そうだ、これだ。そう思うと同時に四葉は居ても立っても居られなくなり、顔をバツと上げた。

「ごめん、さやちゃん！　なんとなく思いついた!!」

「ちよ、四葉ちゃん——あ、いっちゃった」

思い立ったが吉日というように、四葉は早耶香を置き去りにして人ごみの中を走っていく。

それを見て早耶香は少しばかり呆れつつも、微笑を浮かべて漏らした。

「ああいうところは三葉にそっくりやよ」

そう呟くと、唐突に彼女のスマートフォンが震える。早耶香が画面に触れると、そこには三葉の二文字が表示されていた。

早耶香は苦笑を浮かべつつ彼女からの電話に出る。

『あ、さやちゃん！　さつき二人からのお祝い届いたよ！　ありがとね、大事に使うよ!!』

「ちよ、三葉、声大きい」

『あ、ごめん……』

「——ほんま、この姉妹はこうと決めたらとまらんよね」
しみじみとそう思う早耶香なのであった。



——結婚式を前日に控えた瀧と三葉なのであるが、実はあまり緊張

はしていなかった。

瀧是三葉の父親と対峙した時の方が万倍緊張しており、逆に三葉は三歳上のアドバンテージでそこまでの緊張を感じていないのである。

よって結婚前日の二人の新居での二人と言えば――

「瀧くん、プリン作ったけど」

「食べるよ」

拍子抜けなほどにまったりしていた。この光景を早耶香と克彦が見れば愕然とするであろう（結婚前日の二人はガチガチに緊張していたため）。

しかし二人にとって通るべき通過点は既に過ぎ去っているため、結婚式は一つのイベントに過ぎないのである。

――あの日、宮水神社で起きた奇跡を二人は覚えていない。しかし、あの日を境に二人は完全に繋がったのだ。

途切れた糸が完全に結ばれたあの日からの二人と言えば、最早夫婦のような雰囲気であった。

「……こういう日って普通は実家に帰るとかするんじゃないのか？」

「私もそう思ったんだけど、おばあちゃんが瀧くんのところに行きなさいって」

二人は三葉の作ったプリンを食べながら穏やかにそう会話を交わす。どこの世界に結婚前夜にプリンを頬張りながら安心してきつた顔でのんびり過ごしているカップルがいるだろうか。

――二人はプリンを食べながらも、隣合わせで座りながら一冊の本を読んでいた。その題名は……「消えた糸守」。

今はもうない糸守の風景画をまとめた一冊のビジュアルブックであった。

その一ページ、一ページを捲りながら二人して微笑を浮かべる。

「これが宮水神社。こつちが学校に行くときに渡ってた橋で、こつちが……なんで私たちのカフェが映ってるんだろ」

そこの一つ、昔に克彦と三葉（彼女には記憶なし）が作った、自動販売機の近くに置かれている木々でできたテーブルと椅子であった。なおその答えはこの本作成の監修の一人に克彦が携わっているから

である。

「……三葉は不安とかないのか？」

「ふふ、わかっているくせになんでそれを聞くん？ 私の口から言わせたいの？」

「——言葉にしてくれないと分かんないな——」

瀧はあえてすっ呆けたようにそういうと、三葉は「もう」などと吹きを漏らすも瀧にもたれ掛かり——

「瀧くんとだから、不安じゃなくて喜びが大きいんやよ。明日やつと夫婦になれるって。これからはずっと一緒に入れるって思ったら、嬉しくて……だから、不安なんてないよ」

「そっか」

「あ、私も言ったんだから瀧くんもちゃんと言葉にしてよ！」

瀧がそうして流そうとするものだから、三葉はずるいと言った。自分が恥ずかしいことを言ったのだから、瀧も言葉にしないと不公平であると抗議する。

……可愛らしい態度だと瀧は思った。出会って一年以上過ぎるのに、瀧の三葉に対する想いは留まらない。常に一番は彼女であると自覚し、他の人物に目移りをしないのである。

そんな愛らしい彼女の——妻の要求を呑むのは旦那の努めである。

瀧は肩を寄せる三葉の頭を撫でながらこう漏らした。

「——俺がこれから不安になることがあるとすれば、俺たちの宝物が生まれる時だけだよ」

「……………へ？ そ、それって」

三葉は瀧の突然の宣言に目を丸くして驚くと、瀧はすかさず彼女を押し倒した。その顔は少しばかり悪戯な笑みに包まれており、三葉は自分の現状を理解するのに数秒という時間を要した。

そして理解が済むと次は顔を真っ赤にする——アドリブにめっぽう弱いのが彼女なのだ。

「え、た、瀧くん？ き、今日は前日だし、それにまだ私たちそういうのは早いっていうか——」

「——お前の思考回路は先に進みすぎだから。何で今日作ることにな

るんだよ」

瀧は三葉の土壇場の動揺具合に最早苦笑を浮かべる。だが押し倒すのは止めず、少しずつ彼女と顔を近づけていった。

「きよ、今日はしないんじゃないん!?!」

「——作らないけど、しないとは言ってないよ?」

「で、でも結婚前夜だし、えっと」

——こうして夜は更ける。結婚前夜にも関わらず締まらないというのはある意味では、瀧と三葉らしいといえばらしかった。

幸せな未来のサクセッション

「あー、このお写真、ママが泣いてるー」

瀧と三葉の愛娘である双葉は、本棚の中にあつたアルバムに挟まる写真の一枚を指差して、そんなことを言いだした。

そんな双葉を膝の上に乗せて家族サービスをしている瀧は、娘の横から顔を覗かせてその一枚を見る。

「ああ、それな。パパとママの結婚式の時の写真だよ」

「……ママきれいだね」

「そうだなあ。ママはな、それはもう美人さんな上に化粧もぼつちりだったから、それはもう綺麗でな。いや、今でも綺麗なんだけど」

「……パパ、ふたばはかわいい？」

「もちろん、世界で一番可愛いぞ」

「ママより？」

「……可愛さ部門ではぶつちぎりだよ」

娘の何気ない嫉妬に上手に返す瀧は、少し頬を膨らませる娘の頭を優しく撫でた。すると満更でもないのか、双葉は蕩けた笑みを浮かべて父の胸に顔を埋める。

……双葉はもちろん母である三葉にも懐いているが、どちらかといえばお父さん子なのだ。瀧の子供たちとの距離間は絶妙で、非常に年下に好まれることが多い。それについては三葉も少しばかり嫉妬している様子である。

「でもパパ、しゃんよりもいまのほうがかっこいいよー？」

「そっか、ありがとな」

「——でもうわきはだめだよ？　パパ、ただでさえねんねんモテてきてるんだから」

「……お前は本当に耳年増だよ。っていうかモテないから。そんなことを言ったらママがすげえ不安がるんだぞ？」

「え、でもよつはちゃんか、かいしやでパパはにんきがすごいっていつてたよ？」

「——あの野郎、今度仕事倍増にしてやる」

今ではすっかり優秀な部下である義妹を思い出して、休日明けで顔を合わせる時にどうしてやろうかと考える瀧。

そんなことをしていると、リビングにドタドタと足音が響いた。

「とうちゃん、そとでサッカーしよう!!」

「え、双葉とのんびりしてるから一人でゴーだ」

「——ちよつとはあそんでよー!!」

「……しゃーないなー。双葉、お兄ちゃんが我が儘ばかり言っているけど、どう思う?」

「……しかたないなー。おにいちゃんのためにいもうとがひとはだぬぎますかー」

「——ふたばがとうちゃんみたいになってるきがする」

しかし遊んでもらえることが嬉しいのか、息子の龍一はサッカーボールを片手に先に庭に出て行った。双葉もなんだかんだで兄のことが大好きなのか、兄についていって一緒にサッカーで遊んでいる様子。

「あ、瀧くん。あとで買い物に行くんだけど、良い?」

すると二階から洗濯籠をもって降りてきた三葉が、瀧にそう話しかけてきた。

「おう。車で行くか?」

「うん——つて、アルバム見てたの?」

すると三葉は机の上に広げられたアルバムを発見し、そしてそこにある写真を見る。

「……懐かしいね。結婚式の写真だね。しかも私、泣いてるし」

「そうだな。……8年くらい前じゃないか?」

「うん——そっか、もう8年も経ったんだね」

時の流れの早さに驚きを隠せない二人である。

「結婚して、龍一が生まれて双葉が生まれて……私、ちゃんと瀧くんのお嫁さん出来てるかな?」

「バーカ。三葉で出来てなかったら誰も嫁に出来ねえよ」

なぜか不安がる三葉の頭をクシャクシャと撫で回す瀧。

「そ、そういうのは子供たちだけにしてや! 恥ずかしい……」

「変に不安がるから悪い——心配しなくても三葉は良妻賢母で有名だから大丈夫だよ」

「ちよつと待って、どこで有名なん!? 瀧くん、もしかして会社で言いふらしてるんじゃない?……ちよつと、顔を合わせなさい!」

——結婚8年目の夫婦の会話である。良くも悪くも変わらない二人をじつと見つめるのは、彼らの愛息子と愛娘。庭から二人を見つめていた。

「おにーちゃん、パパとママがイチャイチャしてる!」

「よつはちゃんに報告だ!!」

「二——それだけはやめてー!!」

——立花夫婦の全力の叫び声が重なり響くのであった。

……風が吹き、アルバムの次のページが捲られる。

それは、二人にとつての最愛の妹に泣かされた思い出だ。

写真には三人泣き腫らした顔で、しかし確かな笑顔で写真に映っている。幸せな記憶、二度と忘れない出来事だ。

——幸せな未来へのサクサーション。続きの話は、もう少しだけ続く。



恐らく、この会場の誰よりも緊張をしているのは私である——そんなことを考えている私、宮水四葉の心臓はバクバクとうるさいくらいに木霊していた。

髪の毛をきつちりと整え、高校の制服を着て豪華絢爛な椅子に座り、借りてきた猫のようにちよこんと座っている。

……こういうことは慣れていないというのもあるけど、それ以上に大きいのは不安だ。

——お姉ちゃんと瀧くんの結婚式が本当にあと少しで始まる。既に結婚式に参加する人は大方は集まっているようだけど、ほぼ大半が私よりも大人だ。少なくとも高校の制服を着た人なんて一人もいない。

「なにを緊張しとるんや、四葉」

「そ、そんなことないよっ。」
嘘である。

私の左側に座る、いつもよりも豪華な着物を着込んでいるお婆ちゃんが呆れるようにため息を吐いていた。

……しかし緊張していても仕方ないというのはわかってる。だってこれは私の大舞台でも晴れ舞台でもない、この世界で一番大好きな二人の晴れ舞台なのだから。

私が緊張していることはもつと別のこと。それは足元にある、紙袋の中身のことだ。

——二人へ向けたプレゼント。色々と考えて用意したそれは、決して高価なものではない。だけど私の思いが全部こもっている。お姉ちゃんへ向けた想いと瀧くんに向けた想い。色々複雑な気持ちはあるけれども、それでも伝えたいことをこのプレゼントに乗せた——と思いたい。

……すると私に近づいてくる影が二つ。

「——えっと、四葉ちゃんだっけか？　かなり前のクリスマス以来だな！」

「俺は少し前に瀧と会ったけどな。久しぶり、四葉ちゃん」

瀧くんの親友の高木真太さんと藤井司さんだ。すっかりとスーツを着込んだ二人が、親友の晴れ舞台に足を運ばせたんだろう。

私の方に近づいて、挨拶をしてくれた。

「お久しぶりです！　藤井さんは……そうですね、一週間前にちよつと会いましたね」

私と瀧くんがお買い物物の約束をしていて、それまでの時間を藤井さんと会っていたそうで、そこで私は彼に再会した。

……すると藤井さんは目ざとく、私の足元のことを発見した。

「……頑張つて」

「は、はい」

私の肩に手を置いて、全てを悟ったようにそういう藤井さん。この人、無駄に鋭いつて瀧くんがいつていたけど、本当にそうだ。

……二人は私に挨拶を済ますと、次は私の近くのお婆あちゃん、そ

してお父さんの方に向かっていった。

お父さんはなんとというか、近づき難いオーラのようなものがある。しかしそんなことをはお構いなしに話しかける二人は流石だ。

「初めまして。私は立花瀧の親友の藤井司といいます。三葉さんとも少しばかり交流がありました。ご挨拶に来ました。こっちは同じ親友の……」

「高木真太です！ 今日ちよつと司会を頼まれているんで、前の方で騒がしくすると思うんで、そこところは平にご容赦をお願いします！」

「ああ、三葉と瀧くんから話はよく聞いているよ。今日は私の子供たちのために来てくれてありがとう。それと、ぜひとも今後とも二人をよろしく頼むよ」

「老婆のことは気にせず、好きにするとええよ」

……お父さんは本当に穏やかになった。今でも見た目は厳格だけど、それでも物腰は昔のように張り詰めたものではなくなった。

流石に結婚のときは色々と大変だったけれど、今ではもう瀧くんのことを息子のように思っているからね。

おばあちゃんは相変わらずだけど。

……私たちへの挨拶を済ますと、二人は手を軽く振りながらその場から離れていく。

「……あ、いた」

私は少し遠い席に顔見知りを見つけ、バツと席を立ってそっちのほうに小走りで向かっていった。

「テツシー、さやちゃん！ ……と、奥寺さん!!」

その席はお姉ちゃんと瀧くんの友人席で、そこに三人が座っていた。奥寺さんはお姉ちゃんたちと同世代で、その繋がりがあってかすぐに打ち解けて仲良くなったんだよね。だから私も少し顔見知りで、前のご飯をご馳走になったりもしていた。

「四葉ちゃん、やつほー。メイクもばっちりだし、流石は三葉ちゃんの妹。可愛いのお〜」

「ちよ、奥寺さん！」

奥寺さんは私の頬に手を添えてこねるように触ってくる。嫌ではないけど、なんか子供扱いされているようで複雑。もちろん悪意はないんだらうけどね。

……しかし奥寺さんは綺麗だ。スタイル抜群で、大人の色気がすごい。これで人妻なんだから、さぞ会社では男性にモテるんだらうな。対するさやちゃんはなんていうか……安心する。

「ちよ、四葉ちゃん！ 今、私とミキちゃん交互に見てほっこりしたやろ!? どういうこと!? ねえ、どういうこと!?」

「あはは、そんなことないよ。さやちゃんはなんか見てて安心するの」「——それ、全然褒めてへんよね!?」

……さやちゃんも綺麗ではあると思うけど、奥寺さんに比べればね。それにどちらかといえば可愛い系だし。

——そう思うとお姉ちゃんってどっちでもないよね。可愛い系でもあるし、綺麗系でもある。ちょうどその中間地点の良い位置。

……私はどっちなんだろう。後で瀧くんに聞いてみよう。

「それで、どうや? 瀧と三葉は」

するとテツシーは私にそう聞いてきた。

どう、と聞かれれば——

「普通だったよ。なんか、いつも通り過ぎて肩透かしというか……あ、でもお姉ちゃんは結構すごいことになってるかも」

「すごいこと?」

「うん。胸元とか、お化粧とか」

「……………」

……あ、テツシーがゴクリと飲んだ。きつとお姉ちゃんのその姿を想像したんだらう。隣のさやちゃんはすぐく怒って彼に掴みかかっていた。

「あんだ、三葉を変な目で見たら許さんよ!!」

「そ、そんな目で見ん!! っていうかなんも言っとらんやろ!」

「鼻がのびてるんやさ!」

……微笑ましいなあ。ちなみに奥寺さんも同じような目だった。

「……四葉ちゃん、そろそろ時間だから席に戻りなよ」

「あ、はい。……じゃあ今日は、よろしくお願いします！」

私は奥寺さんに言われるがまま自分の席に戻る。私が戻るとおばあちゃんが一瞥するが、特に何も言わずに前を向いてしまった。

——そうしていると、アナウンスが入った。

お父さんは一旦席を立って別室に向かう。たぶん新婦であるお姉ちゃんの下に向かったんだろう。

挙式が始まると途端に静かになる。私の方が何故かドキドキとしてきた。

ちよつと前にさやちゃんとテツシーの結婚式があつたばかりだから流れを知っているはずなのに、あの時とは違う緊張感に包まれる。

——すると、新郎である瀧くんが、脇から現れた。

……かつこいと、素直に思った。

白いタキシードに身を包んでいて、いつもよりも髪型をしつかりと整えていた。表情は堂々としていて、不安な要素が全くないといわんばかりの微笑を浮かべている。

……ふと瀧くんは私の方を見た。

「……がんばれ、瀧くん」

小声で私がそういうと、瀧くんは私に向けて笑みを浮かべてくれる。

『ご来賓の皆様、大変長らくお待たせしました。これより、新婦の入場となります』

——そして、アナウンスが流れる。チャペルの扉が開き、そこから二つの人影が見えた。

一つはお父さんで、もう一つがお姉ちゃん。

……私は今一度、お姉ちゃんの姿を目視する。

——ああ、綺麗な人だな、と。そう改めて思った。お父さんに手を引かれて歩くお姉ちゃんは、晴れやかな表情を浮かべて一歩、また一歩と、瀧くんに向かって歩いていく。

その道中、お姉ちゃんを祝福する声が聞こえた。私たちの席は一番前だから、通るのは最後だ。

……近づいてくると、胸が嫌なほどにドキドキとうるさくなる。

ああ、この鼓動はいつになったら収まってくれるのだろう。

——お姉ちゃんが、私の隣にくる。今まで周りに向いていた視線は私に向き、そして顔があったとき……私は自然と声が出た。

「お姉ちゃん、おめでとー！」

……私の祝福の言葉を聞くと、お姉ちゃんはにこりと笑って一瞬私の頭を撫でた。しかしその手はすぐに離れ、お姉ちゃんは瀧くんの方に歩いていってしまう。

——ああ、懐かしい手だった。優しく私の頭を撫でってくれる、姉の手。昔から何かあったときはいつもやさしくて、たまに変だけど強いお姉ちゃん。

……離れていく感覚に囚われる。そんな風に思ってしまう自分がどうしようもなく情けない。

「……幸せにしてくれないと、許さないからね」

……小声で私は瀧くんに向かって、そう呟いた。

——それはお姉ちゃんのことでもあるし、きっと私のことでもある。お姉ちゃんを幸せにするのなら、妹の私も幸せにしてくれないといけないっていう、すごく自分勝手な言い分だ。

だけどあの人は、そんなことを言わずともそうしてくれる——だからずるいんだよね。

……そして、二人が結ばれる挙式が始まった。

○●○○

——目の前にいる彼女が綺麗だと、彼は心の中で思っていた。

緊張なんてしない、なんて思っていたが、実際にこの場に立ってみるとそんなことがあるはずがない。周りから見たら堂々としているその姿も、内心は緊張だらけなのだ。

……それも最愛の彼女が隣に来ることで消えてくれた。今は不安などない。

「新郎、瀧殿」

「はい」

……神父の優しげな問いかけがかかる。瀧はそれに応えると、神父は恒例の言葉を口にした。

「あなたはこの女性を健やかな時も、病める時も富める時も、良い時も悪い時も。どんな時でも愛し合い、敬い、慰め助けて、変わらなく永遠の愛を誓いますか？」

「はい、誓います」

「よろしい——それでは新婦、三葉殿」

神父に呼ばれて一瞬だけビクツとする三葉。そんな彼女の手をそっと握る瀧。

「はい」

「あなたはこの男性を健やかな時も、病める時も富める時も。どんな時でも愛し合い、敬い、慰め助けて支え合い、変わらない永遠の愛を誓いますか？」

「——誓います。必ず」

よろしい、と神父が言った。

……そして次が最後の誓いだ。

「あなたたちは、自分自身の全てを互いに捧げることが誓いますか？」

「——誓います」

「よろしい。ではここに永遠の愛を誓うための証明として、指輪を」

神父の言葉を聞いて、瀧は指輪を取り出し、三葉の細い指にすっと嵌めた。そして彼女のヴェールを上げて、彼女と向き合う。

……彼女の顔は赤く染まっていた。

「……顔、真っ赤だぞ」

「うん……なんか、これで瀧くんはずっと一緒だなんて思ったたら、緊張してきちゃって——きつと嬉しいんだよ」

「よくそんなことを公衆の面前で言えるな」

だがそれを嫌がるそぶりは見せない。

「まだまだ俺はさ、未熟だよ。社会人としても男としても半人前だと思おう——それでも俺は三葉を守っていける自信があるんだ」

「……うん」

「だから——俺と一緒に、幸せになってくれますか？」

瀧の言葉がチャペルに響く。その言葉を聞いて涙を浮かべる人がいて、ジーンと感動をするものがいた。聞いている方が恥ずかしくな

るような言葉。

……そんな瀧の心の底からの本音を、三葉はチャペルに負けないほどの明るい笑顔で応えた。

「——幸せに、してください」

——二人だけの誓いが、結ばれる。

そして次第に二人は顔を近づける。神父から誓いのキスの催促があったからだ。

……キスなど、何度でもしてきた。

だけど、このキスは人生で一度きりと大切なものだ。永遠の愛を誓うためのキス。そして——二人の新しい一步を踏み出すための、そんな誓い。

「——」

重なる唇。

交差する吐息。

会場は息を呑むようにその美しい光景を目の当たりにした。

——こうなったこと自体が奇跡なのではないかと、誰かが思った。

糸守を襲った未曾有の災害で三葉がもしも死んでいたら、決して見えなかった光景。

……奇跡が起きて、町の住民のほとんどが生き延びた。

——誰も知らないだろう。大切な人を守るために時空さえも超えて、懸命に救おうとした少年少女の物語など。そしてその二人が結ばれる奇跡の一瞬であるということなど。

知らない。だけど——それは確かにあったこと。

そして、それは今もずっと残っている——二人の心の中で、今もまだ残り続けているのだ。

幸せな未来へのエピローグ

綺麗だった。

純白のドレスに身を包んだお姉ちゃんと、普段はあまり見慣れない純白のタキシードを着た二人の繋がった瞬間を見て、私が一番最初に思いついた言葉はそれだった。

過去これまで感じたことのない想いに心が支配される。

大好きな二人の愛し合う姿はとても綺麗で、とても絵になっていた。

……ああ、本当にこれで二人は名実ともに夫婦になってしまったのかと思うと、やっぱり寂しい。実際にはこれから二人は変わらず私に優しくしてくれるだろう。変に余所余所しくなることもありえない。

——私の隣で、お父さんが男泣きをしていた。おばあちゃんも瞳に涙を浮かべている。だけど私はどうしてか二人みたいな態度をとることができなかった。

……なんていうんだろう。どうしてかこう思ったのだ。

——二人がこうなるのは、運命で決まっていた。

だからこれは必然で、しみじみと涙を浮かべることなく、ただ別のことを考えている。

……幸せな未来はきつと訪れる。そしてあの二人はいつまでも笑顔でいるんだろう。

——思い浮かぶのは、そんな二人の間に挟まれて笑顔を浮かべている自分だった。

……そんなことを思っていて、いいのだろうか。いつまでもあの二人に甘えていてもいいのだろうか。

きつと私の心の中で引っかかるのはそこだ。それがどうしようもなく分らないんだ。瀧くんは面倒見がいいから、苦笑いしながらも構わないって言うと思う。お姉ちゃんもしょうがないな、なんていつてなんだかんだで甘やかしてくれる。

……それだと、なぜか私だけが取り残されている気がするんだ。さ

やちんもテッシーも自分たちの道を進んでいる。お姉ちゃんと瀧くんも自分の道を進んでいて——だったら私は、どこに進んでいるんだろう。

自問自答しても、いつまで経っても答えは出ない。だけどどこかに必ず答えがあるはずなんだ。

——それを知ること初めて二人を心から祝福できる。

……二人のキスする姿を見ていて、それが永遠に続くのではないかと思ってしまう。実際にはほんの数秒のことなのに、私はその姿が何十秒にも感じた。

——ああ。あの二人に混じりたい。そんな駄目なことを考えてしまう妹を許してください。

……分かりきっていたことだ。私の悩みはひたすらにどうでもいいことだ。だって私はただ——お姉ちゃんと瀧くんがどうしようもなく好きだけなのだから。

●●●

『こちらは、新郎の瀧の高校生時代の文化祭での一幕でございませす!! 見てください、三葉さん! 瀧の野郎、女子に告白されていますよ!』

「——おいこら真太あ! 何してくれちゃってんだよ、馬鹿野郎!!」

「……瀧くん、後でちよつと話があるからね?」

……マイク越しの高木さんの声で私ははっとした。

——挙式が終わって、今は披露宴だ。会場は先ほどまでの神聖な場所ではなく、少しばかり騒がしい披露宴会場に映っている。今は瀧くんのお友達の高木さんの司会進行で進んでいて、それなりの盛り上がりを見せていた。

ちなみに瀧くんに向けるお姉ちゃんの目は、中々に寒気を催すものであることは私でも分かった。

……私はふと目の前にある料理に口をつける。おいしいとは思うけど……お姉ちゃんと瀧くんの料理に比べたらなあ。

「……なにをばうつと呆けているんや」

「……ううん、何でもないよ」

おばあちゃんが目ざとく私にそう尋ねてくるけれど、私は首を横に振って何でもないよ、と返す。

……そんなに楽しくなさそうな顔をしていたのかな。私は自分の今の表情が気になつて、さつと席を立った。

「四葉、どこに行くんだ？」

「お父さん、デリカシーないよ？」

「……すまん」

お父さんは私の一言で察したのか、特にそれ以上追及することはなかった。

私は席を離れて披露宴会場から出て、化粧室に向かう。鏡で自分の顔を見つめると、そこにあつたのは

「……うん、いつも通りだよね」

特に変化があつたとは思えない私の顔だつた。何もおかしいところはない、可愛らしい女子高生が映っているだけだ。

「なんだかなあ……」

「——なあにを悩んでるのかなー、お姫様は」

……びつくりした。私は声の聞こえた方を見ると、そこには瀧くんの先輩でお姉ちゃんの友達の奥寺さんがいた。

手には化粧品が入つたポーチを持つてるから、私と違つて本当に化粧直しに来たのだろう。

「浮かない顔してるね。あれかな、二人が結婚するのが嬉しい反面、内心では複雑な感じ？」

「……お姉ちゃんが言つてた通り、勘が良すぎです！」

ま、まさか一発で言い当てられてしまうなんて……。そんなに顔に出ていたのか、と不安になる。恐るべし奥寺ミキさんだ。

この人の旦那さんは確実に浮気なんてできないんだらうなあ……まあこんな美人な奥さん以上の人なんて、なかなか現れないだらうけどや。

「まあまあ、落ち着きなさいって。何も取つて食おうつて言つてるわけじゃないんだからさ。……まあ私も、四葉ちゃんの気持ちがちよつ

とは分かるからね」

「……え、もしかして奥寺さん、お姉ちゃんのことを」

「——そっちじゃないよ」

私が冗談めかしてそう言うと、奥寺さんは私の頭を軽く小突いた。……でも、そっちじゃないってことはそういうことだよ。奥寺さん、もしかして……

「もしかして奥寺さん、瀧くんのことか……」

「昔のことよ——瀧くんが高校生のとき、同じバイト先で働いてたときに、可愛いなって思ってた時期があつてね。でも逆に瀧くんは、その時期から私にあんまり興味が無くなってさ」

「結局、実らず終いの恋、か」

「恋かどうかもわかんないよ。……でも、それを知りたいために色々おせっかい焼いてたのかなって、今になったら思う」

奥寺さんは鏡に映る自分の顔を見て、そう呟いた。その顔が何を意味しているのかは私にはわからない。

……私と同じ感覚なのかも、しれない。奥寺さんの表情はどこか私と似ている。

奥寺さんによって瀧くんは今でも大切な後輩なんだと思う。でも私の場合は……二人に対して、だもんなあ。だから余計にたちが悪いんだ。一人ならともかく、お姉ちゃんと瀧くん。二人共を同時に好きに思ってしまったのだから。

「——私はお姉ちゃんと瀧くん、両方とも大好きです」

……包み隠すことなく、私は奥寺さんにそう言った。奥寺さんはそれが最初からわかっていたというような表情を浮かべて、腕を組んで微笑んでいる。どうせ見透かしているなら、全部隠さず話したほうがすつきりするよね。

「だから、色々複雑なんです。大好きが二人が結婚したら、私だけが取り残されてしまう気がして……二人は優しいからきつと、今までどおり私に優しくしてくれるんだろうけど……それで気を遣わせるのが嫌で——本当に面倒くさいですよ。二人と一緒にいたいくせに、私には気を遣ってほしくないなんて」

私が自傷気味にそういうと、奥寺さんは……ほんと、私の頭に手を乗せて、私の頭を優しく撫でた。

……私はなんのことだと思つて奥寺さんの方を伺うように見ると

「——心配しなくて、あの二人は気を遣わないよ。だって見ていて微笑ましくなるくらい、三人は自然体なんだから」

「……自然体、ですか？」

私は奥寺さんの言ったことが気になつて、そう聞き返した。……自分ではわからないことだ。私はただ二人に甘えていて、それを二人が許容してくれている。ただそれだけ。

なのに奥寺さんはそんな私たちを自然体と言つた。

「あちやく、自覚症状なしか。……よし、こうなればお姉さんが人肌脱ぐよ」

「へ？」

奥寺さんは私の肩をガシツと掴んで、さも「私に任せて」と言わんばかりの心強い表情を浮かべていた。

……何故だか嫌な予感がするも、私はとりあえず助けしてくれるという事で領いた。

○●○○

——新郎新婦は大忙しであつた。

自由時間は自分の友人らや三葉の友人たち、親戚筋から話しかけられたりで中々ゆつくりとする時間はない。更には司や真太の用意した映像によって三葉の表情が笑っているのに笑っていないものになつているのだ。

……そんな中で、瀧はいの一番に二人の下に来るはずだった四葉が、自分たちのところに来ないことが不思議に思っていた。

「……なあ、三葉。四葉に何かあつたのか？」

「え？ ……そうだね。今日はちよつと浮かない顔をしてるよね」

——二人とも、四葉の異変には気づいていた。しかし今日という立場上、中々彼女の元に近づくことができないというのが本音だ。今も彼女の姿を探すも、残念なことに席を外している。

「……もしかして、四葉は私たちの結婚に乗り気じゃないんじや」

三葉の頭にそのことが浮かんで、途端に不安そうな表情を浮かべた。

「……そんなことがあるはずがないということは、三葉はもちろん理解している。しかし芽生えた不安は自分の思惑とは別方向に転じてしまうため、そのようなことを考えてしまうのだ。」

「……馬鹿。他の誰でもない四葉が、そんなことを思うはずがないだろ」

「で、でも」

「でも、じゃない。……知ってるだろ。俺たちが結婚するって知ったとき、誰よりも喜んでいたのがあいつだって」

瀧が三葉に春の旅行のときに告白をした数日後、一番最初にそれを報告したのは四葉であった。瀧と三葉は二人して四葉に対してそのことを報告すると、四葉は……

『え、本当に!? ——おめでどうっ!!』

そう満面の笑みを浮かべて、二人に抱きついたのだ。すりすり二人に頬擦りをするその姿は、一見すれば子猫のような仕草であったが……。そんな姿を知っているからこそ、瀧は四葉を信じていた。

「……あとで四葉と話そう。あいつって肝心なときに本心を隠すからさ。そういうところ、本当に三葉と似ているよ」

「……わ、私は違うよ? ちゃんと話すからね?」

三葉はそう否定はするも、瀧から完全にスルーされてしまうのであった。

——と、そのときだった。突然会場の照明が暗くなり、会場がどよめいた。これは知らされていないことで、すぐにそれがサプライズ的なものであるということ瀧は理解した。三葉は面白いくらいに才口オロしているが。

今回司会を任せているのは真太で、なおかつ企画はあの司である。これくらいのこと瀧からすれば予想の範疇なのだ。

スポットライトが新郎新婦の近くにいる真太に向けられる。

『ご食事の最中ではございますが、ここでとある匿名の方より一つ、提案がいただきました』

……瀧は「おつ？」と思った。どうせ自分の親友たちのサプライズと思ったのに、二人ではない人の企画であったからだ。

しかし、わざわざ匿名の方と分かりやすく濁すところを鑑みるに、瀧はミキの方をチラツと見た。

「イエイ♪」

ミキは舌をペロツと出してピースサインを浮かべ、なんて擬音が聞こえてきそうな表情を浮かべていた。

その顔は何か悪巧みを考えている時のそれである。

「三葉、奥寺先輩の仕業だぞ、これ」

「え……ミキちゃんかあ。何やるんかなあ」

多少の不安はあれど、何が起きるか楽しみでもあるようだ。

真太は会場の反応を見て、少しばかり勿体をつける。しかし次の

瞬間――

『二人の愛妹、宮水四葉さんによる二人への想いを告げる時間です!!!』

……そう高らかに宣言するのであった。

会場は静まり返る。暗い会場の中でスポットライトが真太から、

宮水家の席――四葉に当てられた時、静寂を破るように

「え、ええええええええ!!」

……四葉の驚きの声が響き渡るのであった。

○●○●

宮水四葉の緊張具合は最高潮へと突入していた。

突然の指名でスポットライトを当てられ、なおかつ壇上の二人の目の前に立っている。

これで緊張するなという方が無理な話だ。しかし、彼女はこの状況を少しだけだがラッキーであるとも考えていた。

……二人の前か、皆の前かという違いだけだ。どちらにしる二人に思いの丈を伝えようとは思っていたのだ。

「――お姉ちゃん、瀧くん」

そう思うと、もう四葉には緊張はなかった。ただ今は、二人に言葉を伝えたい。

祝福の言葉を伝えたい。でも少し複雑なことも伝えたい。二人の

ことが大好きであるということも伝えたい。伝えたいことが多すぎて、何を話していいかも考えがまとまらなかった。

——まどめなくて良いんだ、と四葉は思った。二人には纏めた言葉よりも、感情から湧き出たを本音の欠片を、雑に並べて積んでいっても怒りやしない。

そう思うと緊張はなくなった。

「私は、お姉ちゃんも、瀧くんも……二人とも大好きです」

——会場は、しんと静かになる。

四葉の涼やかな声音に、会場中は惹きこまれたのだ。その中で目を見開いているのは三葉と瀧の二人だ。

……直接言われたことはなかったことを、はっきりと言われたのだ。少なからずの同様が、二人にはあった。

「ごめんね、こんな場所で、みんな聞いているのに——でも、本当の気持ちなんだ。昔はおねえちゃんのこと、変な人だなんて思うときもあったけど……その根本では、ずっと大好きだったんだ。だからお姉ちゃんに彼氏が出来たって知ったときは、やっぱりちよつと寂しかったよ」

とうとう姉にもそんな時期が来てしまったのかと。妹ながらしみじみと悲しくなったものだ。

そんな小話を入れると会場に笑いが生まれる。

「でもやっぱりお姉ちゃんの初彼氏は気になったから、すぐに瀧くんとも仲良くなろうとした——それで納得しちやっただ。だって瀧くんは、とつても素敵な男性だったから」

初めてあったときから自分を対等に扱ってくれたこと。みんなが「ちゃん」付けする中、彼は最初から呼び捨てで、親しげに接してくれたのだ。

自分のわがままもたくさん聞いてくれた——彼と接すると、まるで姉と接しているようで……心が温かくなったのだ。

「二人のデートに紛れ込んでごめんなさい。でも嫌な顔ひとつしないでありがとう。二人と一緒にいる時間はすつごく楽しくて、他のどんな友達と遊ぶよりも幸せなんだ。……自分でも呆れるくらいのシス

コンだって、思うよ」

「……四葉っ」

三葉が彼女の名前を呟きながら嗚咽を漏らした。そんな三葉の手を、瀧はそつと重ねる。

「お姉ちゃんの好きなどころを何十個も言えます。瀧くんの素敵などころも同じくらいに言えます。……二人を大切に思う言葉は、もつと言える。それくらい、私、宮水四葉にとって二人は——かけがえのない、大切な存在!!」

——四葉は満面の笑みで、大きな声でそう言った。会場中に響き渡るその言葉で、涙を見せる人もいた。

しかし彼女の話は、まだ終わらない。

「……でも、一つだけ、どうしても心の整理がつかないんだよ」

四葉の肩が、少し震える。

……ここまでずっと、どうして自分が心から祝福できないのか。四葉は自分でもわからなかった。

でも今、この場に立って四葉は自覚したのだ。

「——私、まだ……二人と、一緒にいたいよお……っ」

——頭では理解していた。そろそろ姉離れを、瀧離れをしないといけない。だけど本音では、もつとずっと二人と一緒にいたかったのだ。

それを理性で駄目だと決め付けて、押し殺していた。だからこそ、四葉は心から祝福することが出来ないのだ。

「わがままでも、私は、私は……っ、お姉ちゃんと、瀧ぐんと……っ」
ついには、涙を隠すことが出来ず、会場で一人泣いてしまう四葉。スポットライトに照らされながら、泣いてしまう彼女に声援の言葉も届く。

頑張れと。泣いてもいいんだよ。しかしその言葉は決して四葉には届かなかった。

欲しいのはそんな言葉ではない。彼女が欲しいのは——

「しょうがないな、四葉は」

——俯きながら泣いている四葉に、呆れたような声が届く。それと

共に、彼女の身体が、二つの温もりによって包み込まれた。

「え……う？」

四葉は突然のことで、顔を見上げた。

——そこには、先ほどまで新郎新婦の席にいた、三葉と瀧がいた。二人が彼女を優しく抱きしめていたのだ。

「ほんと、そういうことは三人のときにしないよ。人前で泣いちゃうし……」

「それは三葉もだろ？ ……つたく、何を心配しているのかと思ったら、お前な。結婚してお前を蔑ろにするとか、お義父さんにバレたら俺、殺される事案だぞ」

「え？ え？」

何が起きているのか、四葉は頭が追いつかなかった。

……だが二人は彼女を手元から逃がさないように、強く抱きしめていた。

「……わがままを言ってもいいの。四葉が私たちのこと、大好きなのと同じくらい私たちも四葉が大好きなんだから——そんな悲しいこと、言わないでよ……っ」

「お姉ちゃん——ごめんなさいっ」

……瀧はそつと、二人から離れる。

スポットライトは三葉と四葉の二人を照らす。三葉の純白のドレスは光が照らされて、ひどく幻想的な光景を作り出す。

そんな姉妹愛を前に、瀧は自分に出る幕はないなど感じた。恥ずかしながら、自分では役不足であると。

「……何してんだよ、色男」

「あ？ ……司。見てわからないか？ 俺は邪魔だろ、今は」

「さあね。でも四葉ちゃんの告白にはお前も入ってるだろ——お前の泣き面がないのが気に食わない」

舞台脇で司はニヤリと笑うと、瀧の背中を押して再度二人の方に向けしかけた。

「おい、司、てめえ！」

「——お姫様のお迎えには、王子様ってな。今のお前はどっからどう

見ても王子様だろ」

司は軽くウインクをして、不敵に笑った。

……気づくと、視線は瀧に向かっていった。三葉と四葉の視線はもちろん、会場全体の視線が彼に向かっていった。

——まるで自分の言葉を待つような視線。

「……腹、括るしかねえか」

それを前に瀧は諦めたのか、再びスポットライトの中へと入っていく。

「四葉。寂しい思いさせて悪かった。そういえば最近は忙しくて中々話すこともなかったもんな」

「瀧、くん」

「な、泣くなよ！ ……いつもの悪戯な笑いはどこいったんだよ。そっちの方が、お前らしいのにさ」

瀧は少し腰を屈め、四葉の頭に手を置いた。

「——心配しなくても、お前との腐れ縁はとぎれねえよ。何でも俺たちは結びで繋がってるらしいからな」

「……むすび？」

彼女にとっても馴染み深い言葉に、目を丸くする。

それを瀧が口にするのが変に思えるのだが……不思議なことに、その言葉が様になっていた。

「俺らは固結びだ。いいか、固結びはやってしまったら中々解けないんだぞ。不器用な男子だったら一度は通る道だ——絶対に解かない。逆にお前が嫌気が指すくらい構ってやる」

本来なら、こんなことを口もすることも恥ずかしいだろう。それでも瀧は四葉を安心させるために、そして——自分の本心を吐露した。

「——お前は、俺にとっても、大切な妹なんだからな」

「——」

瀧が微笑んでそう言ったときだった。

その微笑みが——隣にいる三葉と重なった。

それを見て、四葉は安堵した——ああ、大丈夫なのだ。自分の不安も心配も、二人の前では全くどうでもいいことなのだ。

ならば、いつまで駄々をこねているのだ。四葉は涙をぬぐい、いつもの笑みを浮かべた。

「当たり前だよ——瀧お兄ちゃん!!」

多くの人の前で、盛大に瀧のことを兄と言う。

それはまるで自分に言い聞かせるような言葉で——しかしそこには一切の躊躇はなかった。

……四葉はふと足元のことを思い出す。それは二人のために用意した、四葉にしか用意できなかった結婚祝い。

それを渡すのは今しかない。そして今しか、あの言葉は言えない。

「お姉ちゃん、お兄ちゃん」

四葉はそれを手に持ち、二人の前に立って——

「——結婚、おめでとう!!!」

そう、屈託のない笑顔で二人を祝福した。

「……っ。お、おう」

「やっと、瀧くん泣いたー」

「やっとだね、可愛いよ？ お兄ちゃん？」

「う、うるせえ！ これだから、ああ——ありがとな、四葉」

瀧は涙を拭いながら、そう礼を言う——するとそのときだった。

カメラを持った司が、三人の近くに寄ってきた。

それを見計らい、マイクを持つ真太が声を上げた。

『では、美しい姉妹愛、兄妹愛を見せてもらったことで、三人には記念撮影といきましょう!! 皆さん、盛大な拍手を!!』

……真太の煽りを受けて、会場から盛大な拍手が響いた。

それに包まれて、三人は顔を見合わせる——そして、笑いあった。

「ほら三人とも！ 寄って寄って！」

「ほら、お姉ちゃん、お兄ちゃん!!」

四葉は瀧と三葉の手を引いて、自分の左右に立たせる。

四葉を中心に、新郎新婦を左右に配置した状態で、司はシャッターを切った。

——そこには、本当に幸せそうな……そんな三人の姿が写っていた。



「ところで、今日、あいつ来るんだっけか？」

「そうらしいよ——今日は騒がしくなるね」

「……まあ、それもいいだろ」

眠る子供二人を抱きながら、三葉と瀧はそんな会話をしていた。

——手元には思い出のアルバムがある。実はこれこそが、四葉が用意した結婚祝いなのだったのだ。

それは二人が付き合ってからの写真や、三人で撮影した写真が半分以上を占めていた。そして残りの半分は、これからの将来、みんなで撮ろうという意味で空白になっていたのだ。

とてもロマンチックなものだと、二人は思ったものだ。

「……今日はご馳走作ってやるか」

「やった、瀧さんの料理は久しぶり！」

「ほら、そこは奥さんの立場を考えて遠慮してるんだよ。それに三葉のご飯の方が俺は好きだし」

「……ありがとう——あなた」

三葉は子供が寝静まっていることをいいことに、彼の方に頭を乗せた。

……すると、そのときであった。家のインターホンが鳴り響く。

その音が響いた瞬間、龍一と双葉が飛び起きた。

「あ、よつはちゃんだあ!!」

「おむかえだぞ、ふたば!!」

四葉に非常に懐いている二人は、瀧と三葉を置いて玄関の方に向かっていった。

それを見て、二人は苦笑いを浮かべる。

「……三葉」

瀧は立ち上がって、三葉に手を差し伸べた。三葉はその手を取る——互いの薬指にある銀色の指輪が、掠れるような音がする。

玄関の方では子供と彼女の騒ぎ声が聞こえた。

「元気だなあ、龍くんは♪ 双葉ちゃんはもうかわいすぎ!!」

「は、はなせええ!!」

「えへへへ〜♪」

「龍くん、嬉しいくせに!」

……玄関先で何をしているんだと、ついついツツコミたくなる。そこには息子と娘を抱きしめて頬ずりをしている彼女の姿があった。

「なあにしているんだよ」

「玩具にしているんだよ、こうして」

「お、おもちゃ!?!」

「龍一は構わんけど、双葉は駄目」

「とうちゃん!?!」

蔑ろにされる幼き龍一、無残である。

……しかし程なくして龍一と双葉は解放される。そして彼女は手をパンパンと払い、そして――

「――ただいま、お姉ちゃん、お兄ちゃん!!」

「おかえりなさい――四葉」

「少しは静かに来いよな――おかえり、四葉」

――幸せな未来は、確かにある。

幸せとは笑顔であり、心だ。心は笑顔と共に豊かになり、未来への架け橋になる。

そんな彼らの未来の幸せなエピソードの一幕。

……幸せな未来のエピソードは、まだまだ始まったばかりであった。

特別番外編 「君と俺がもつと早く」

ああ、どうしてこうも、胸が苦しくなるんだろう。

こんなにも毎日に充実感が欠けてしまったのか、自分でもよく理解できない。

気づけば手の平を開き、そこにあるはずのない「何か」をひたすら探し求めている。その何かがわからず、考えてもきつかけすらも掴めない。

ならば、そんなもの捨ててしまえばいい——それもできない。

何かも分らないこの空虚な想いを捨ててしまえば、何か取り返しのつかないことになるような気がして……

いや、違うな。そんなものは方便で、俺はただ捨てたくないんだ。

この手の平の先にある、形がなく記憶にもない「大切なもの」を、永遠に大切にしたい。

「世界一周でもしたら、とか」

家のベランダから空を見上げて、感傷に耽ってそんなことを呟く。

自分でも何を言っているんだ、と思う。

現実的に考えてここから世界の隅々まで歩くことは不可能で、そもそもそんな予算もない。

……なら、このどうしようもない無気力な気持ちをどこに追いやればいいんだ。

「あー、むしやくしやすするなあ……」

どうにかしないと受験勉強にすら集中できない。

——世界の隅々まで歩くことができないのなら、せめて何か目の前が大きく変わることが起きて欲しいと願った。

……そんな風に思いながら、窓辺から夜空を見上げる。

東京の更に満点の星空が広がっているはずがない。そもそも見たことの方が少ない。

だけど、どうしてだろう。

——俺は満点の星空を、毎日のように見ていたと。そう思う時が

あった。

「東京生まれ東京育ちだろ……」

気になって、自分の出生を調べたことがあるけど、田舎生まれである事実はなかった。

それどころか親の実家さえも関東地方の中だった。

だからこれは絶対に勘違いなんだ。なのに、俺の心はそれを勘違いで済ませられない。

そうして俺は、毎日が無作為に過ごしていく。

いつかこんな気持ちが無くなることを願って。

●??●??

高校三年生になると、受験シーズンで遊ぶ時間はなくなる。

それは例に漏れず、立花瀧も同じであった。

彼は友人である藤井司と同じで建築に興味があり、それを学べる大学へと進学を希望している。その大学は中々の規模を誇る、いわゆるマンモス校というもので、建築学に限らずあらゆる分野に精通した大学だ。

目的があり、志望校も決まっているのならば後は邁進するだけ——のだが、彼は中々勉強に熱が入らない。

「あああああ……やる気、でねえ」

「何回目だよ。入試まであんまり時間ないんだぞ?」

立花家のリビングで一緒に入試対策をしている司が呆れた顔でそう指摘した。

……しかし、やる気が出ないものは出ないのだ。学校のレベルからしても安全圏であるのだが、それでも油断大敵だ。

入試当日に何かあるかわかったものではない。もしかしたらインフルエンザに感染するかもしれないさ、極度の緊張で腹痛に悩まされるかもしれない。

「つていうか、最近ずっとそんな感じだよな」

「……そうか?」

「そうだよ——ほら、あの旅行から帰ってきてから、お前ずっとそんなんだぞ」

「……っ」

あの旅行、と言われて瀧は息を飲む。

司の言うところのそれは、半年以上も前に瀧と司、そしてバイト先の先輩の奥寺ミキとの三人で行った飛騨旅行だ。

しかしその途中で何故か瀧は二人とは別行動をし、そして気づいた時にはとある山の山頂で眠っていたという。

しかもおかしいのは、その間の記憶——そもそもその旅行の記憶自体が曖昧なのだ。

「……やっぱり、一回被って貰った方がいいって。お前、変なものに憑かれてるんだよ。ほら、俺たちが行った飛騨の……糸守の跡地って何が出そうじゃん」

「……あんまりそういうこと言うなよな。不謹慎だぞ」

「悪い悪い——まあそれもないか。事実、あの災害で奇跡的に人的被害はほとんどなかったんだからさ」

三年前——日本の町一つを消し飛ばした災害がある。それはティアマト彗星の一部が分裂し、それが糸守という田舎町を襲ったのだ。

だが奇跡的にもその日、町総出で避難訓練をしており、そしてその避難場所が偶然にも安全地帯の区域だった。

そんな奇跡が重なり、この事件で死亡者はいないとされている。

「……瀧よ。そういうえば最近年下の後輩に告られたんだって?」

瀧が中々思い出せないことに微妙な表情をしていると、司が唐突にそう話題を振った。

「お、お前どこでそれ!」

「ははは——んで、どういうわけよ。相手の子、すごい評判いいし可愛いのに、振っちまってさ」

「……別に、可愛いからオツケーするのは違うだろ。それに俺、あの子のことあんまり知らないし」

瀧はパイと顔わ背け、ぶっきらぼうにそう言った。

——瀧に告白した後輩は、二年生の中でも容姿端麗で有名な子だ。しかも性格も良く、飾り気のなさが男女ともに人気を博している。

瀧とは同じ委員会面で面識があり、時折だが話をしていただけが……

まさか彼も告白されるとは思っていなかった。

「いやいや、あのレベルの子はとりあえずオツケーするでしょ？
なに、もしかしてあれ以上のレベル、求めているのか？」

「ちっげえよー。俺はそんな面食いじゃねえし——ただ、なんか違
うなって思っただけだ」

瀧は手の平を広げて見つめる。まるでそこに大切な何かがあるか
のように見つめるその姿をみて、司は肩を竦めた。

「最近よく手の平を見てるよな」

「前まではそんなことなかったんだけどな。……なんか癖になった」

「——まああれだな。一回気分転換に遊びにでも出かけるか」

すると司はスマホを操作しながらそう提案する。

「遊びって、何するんだよ」

「ほら、受験生の俺たちにうってつけのやつがあるだろ——オープン
キャンパスついでに、本命の学祭でも行こうぜ」

司が見せてくるのは、彼らの志望校のホームページだった。

そこにはオープンキャンパスのお知らせと、更に当日にしている学
祭のことが記されている。

「日程は……明日かよ」

「そーそー、明日は学校昼までだし、高木も誘って行こうぜ」

瀧は少し考えるも、今の状況を考えれば、気分転換するという選択
肢には魅力を感じた。

ふう、と息を吐き、そして

「わかったよ、行くよ」

「そうこなくっちゃな。んじゃ、高木に連絡するか」

司は嬉しそうにスマホを操作して、友人の高木真太に連絡を送
る。

何がそれほど嬉しいかは瀧にも分からない。

——だけど、何故だかこの時、ドクンと胸が鼓動を打っていたの
だった。

○●○○

オープンキャンパスに来て、瀧は非常に満足していた。建築の教授

の話は終始、興味をそそられる内容で、特にインテリアデザインというものを知り、余計にこの大学に入りたいと思っていた。

……しかし、そんな気分とは裏腹に、今の瀧は非常に困っていた。「人多すぎ。あと、二人はどこに行った」

オープンキャンパスと学祭を兼ねているためか、人が非常に多い。これほど盛大な学園祭というものを体験したのは初めてだからか、瀧は少し戸惑いを隠せなかった。

しかし学祭でも一人でいるのは、心情的にあまり良くない。

周りで一人でいるのは瀧くらいなものだった。

「はああ……帰るか」

そう呟くものの、ここで勝手に帰ったら友人に何を言われるかわかったものではない。

とりあえず静かな場所を探すため、校舎の方へと向かっていった。

「……色々あるもんだな」

校舎はたくさん棟に分かれていた、教室数も異常に多い。それだけ色々な勉強が出来るということだ、と瀧は感心する。

校舎の中は比較的人は少ない。外は模擬店などをしているからか、賑わいが異常だ。

……どんな授業があるのかと、色々と見回っていると、学生服ではない女性たちが歩いてくる。

化粧が達者で、恐らくは女子大生だろう。

瀧は特に興味がなく、通り過ぎようとした時——そのうちの一人が突然、彼の肩を掴んだ。

「君、高校生？」

「は、はあ。そうですけど」

突然話しかけられたことで、瀧は少し動揺した。

「もしかしてこの大学に入るの？　ねね、見て見て。この子、結構かっこいいよー」

「ちよつとー、年下の子をナンパー？　あ、でも確かに結構好みか

も」

「あ、あの……困ります」

「あはは、照れてて可愛いー！　ねね、君、一人なら、私たちと一緒に学祭楽しまない？」

一人の女性が突然、そんなことを言い出す。すると周りの女性たちも騒ぎ始めた。

「お、いいね！　お姉さんたち、この大学の先輩だから、色々教えてあげるよー？　あ、君のことも教えて欲しいなー」

「お、俺、友達と来てて。それではぐれちやって、今はそいつらを探してるんです」

「だったら一緒に探してあげるよー！」

振り切ろうにも、中々にしつこい。もしかしたら瀧に一目惚れをしたのかもしれないが、当人からすればはた迷惑な話だ。

しかもこの手の無理矢理な女性は、瀧が苦手とするタイプである。

「えっと、だから——」

「あ、連絡先交換しようよ！　ほらほらー」

瀧は手を握られ、強引に連絡先を交換させられそうになる。

——カツカツ、と、ヒールの音が建物の中に響いた。

その音は少しずつ瀧の方に向かって来て、そして……

「嫌がつてるから、やめてあげたらどうですか？」

——瀧の反対の手が引かれ、女性から引き剥がされる。

そして、瀧の前に新しい女性が現れる。すぐに瀧と女性グループの間に入ったため、顔は見えない。

後ろ姿からその女性が細身で、黒髪のみディアムボブであることだけがわかった。

「えー、別にいいじゃん。未来の後輩と仲良くしようとしてるだけだよ」

「それにしては嫌がつていたよ。未来の後輩には優しくしないといけんよ」

「……何？　いきなり出てきてお説教？　っていうかあなた誰——」

あからさまに不機嫌な顔をする女性だが、助けに現れた女性の顔をじっくりと見て目を見開く。

そしてすぐに背を向けた。

「去年のミスコンに喧嘩売ったら、後が怖いから引き下がりますー
ーんじゃ、君、また会えたらいいね♪」

そうして女性グループは二人の元から去っていった。

……残された瀧は、突然の出来事にまごつくも、すぐに助けられた女性に感謝の言葉を口にした。

「すみません、助かりました」

「いいよ。困ったときはお互いさまやよ?」

どこかの方言で話すその女性は、背中を向けながら気を遣いながら話してくれる。

瀧はその気遣いに感謝しつつ、しかし気になることがあった。

去年のミスコン。つまりこの大学生はとてつもなく美人であるということだ。

瀧とて男子高校生。美人と聞かされたらその容姿を見たくなるものだ。

そんなことを考えていると、その女性はスタスタと前を歩いて行ってしまふ。

「あ、あのっ!」

瀧がその女生徒に話しかけようとした——その時だった。

「お姉ちゃん、そんなところでなにしてんの?」

瀧の声をかき消すように、前方からツインテールの少女が女生徒の方に駆け寄ってくる。

「学校案内してくれるのに勝手にいなくならんといてよー! ほらほら、早く行くよ!」

「ちよ、四葉、待って——」

瀧は瞬時にその少女が彼女の妹であることに気付くが、ツインテールの少女は瀧に気付かず、姉であろう女生徒を引っ張って歩いて行ってしまった。

廊下の角で彼女たちが見えなくなる時、ふと少女の横顔が遠目ではんの少し見えた。

「——ッ」

——その時、瀧の胸がトクンと脈打つ。

横顔が美人であったとか、色白で目元がぱっちりしてたとか、胸が結構大きいとか。

そんな容姿への驚きなどではなかった。

何かはわからない。何かもわからないのに、彼女を今すぐに追いかけないといけないと思った。

気づいた時には彼は走り出していた。

彼女たちが歩いて行った後を追いかけるも、しかし既に視線の先には二人の姿はない。

「……どーしちゃったんだよ、俺は」

たった今出会ったばかりの、横顔しか知らない大学生に熱烈な感情を抱いてしまう。

そんな、これまで経験してこなかった感情が立花瀧を支配する。

——胸が苦しい。まただ。また何かを忘れてしまっている感覚に囚われる。

手の平を見つめる。そこに何か大切な何かがあるような気がしていた。ずっと前からそうだ。

——立ち止まった足は、再び動いた。

今立ち止まったら、二度とこの手の中にその大切なものは手に入らないかもしれない。

これが瀧の勘違いで、大恥をかくかもしれない。

それでも立花瀧は、立ち止まることができなかった。

司や高木からの電話度お構いなしに、彼女を探す。

周囲を見渡し、必死に誰かを探す姿はどこか挙動不審にも見えるだろう。

それでも、他人の目など気にもならないほど、瀧は必死に、夢中にながむしやらに彼女を探した。

「くっそ、このガッコー、広すぎっ」

……つい悪態が出た。

○●○●

宮水三葉は曰く、高嶺の花である。

幼少期より宮水神社の巫女としての立ち振る舞い、有事の際は舞踊り、父親は糸守町町長。故に糸守町という小さな町では彼女はちよつとした有名人だった。

しかしティアマト彗星の落下に伴い糸守町は地図から姿を消し、町に住んでいた住民は離散した。

無論、三葉もその一人である。

糸守という小さなコミュニティから出てしまえば、地元ではちよつとした有名人もただの一人の女性である。

それでも宮水三葉は周りから一目置かれていた。

まずは美貌。どこか儂げな、浮世絵離れした雰囲気を持つ彼女は、特にメイクしなくとも美人といえるほどで、大学生になってからはメイクを覚え、それに美しさに拍車がかかった。

しかし男の影は一切なく、学内での交流は女性オンリー。サークルも女子大生メインのサークルに入り、そのサークル内の悪ふざけでミスコンに勝手に出場させられ、何の因果か他に圧倒的な差をつけてグランプリに輝いた。

それでも彼女は男に媚びることなく、凜としている。

——そんな三葉は同じ大学の女生徒が男子高校生にナンパをしているという事案に直面した。

三葉は何の躊躇いもなく困っている男子高校生を助けようとして、ナンパ女を退散させた。

しかし三葉はその男子高校生と顔を合わせることはなかった。

「お姉ちゃんも、可愛い妹をこんな節操なしの巣窟に一人にさせないでよね！　なんか変なのにめっちゃ声掛けられたんだから！」

「あはは、ごめんごめん」

三葉の妹、宮水四葉は頬を膨らませてジト目で姉を睨む。

だが当の三葉は、まるで後ろ髪を引かれるように周りをキョロキョロとしていた。

「さっきの子、大丈夫かな。変な女に捕まってるのかな」

「……それってさっき近くにいた男の子ののど？」

「うん。なんかナンパされて困ってそうだったから助けたんだけど

……」

「確かに割とイケメンだったけど——お姉ちゃんって男に興味あったんだ」

割と失礼な発言である。

しかし妹の四葉がそう驚いてしまうほど、三葉は男だけがないのも事実であった。

「別に興味があるというか——なんか最後、言いたそうにしてたから」
「お姉ちゃん、それあれだよ。助けてもらった口実にお礼させてーみたいな奴だよ」

四葉はそう邪推すると、一人でそそくさと前を歩いていく。

三葉はそれを聞いて首を傾げ、

「ん、ほんとにそんなのかな？」

——顔も見えないイケメン男子高校生のことが妙に気になった。

別に容姿が気になったわけではない。ただ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～
それらを思い出して、少しだけ懐かしい気持ちになるのだ。

——ふと、手の平を見つめる。そうした途端に心が火照て、そして同時に寂しさを感じてしまった。

何かを忘れてしまっている。だけでも身体はその何かを覚えてい
る。

それが三年も前から続いていたのだ。

「でもなんでだろ。今は」

とても近くに忘れているものがある。そう思った時であった。

「——お姉ちゃん、電車が人身事故で止まってるやつて！」

そろそろ帰ろうと駅に向かっていた時、四葉はスマホを片手の画面
を三葉に見せる。

そこには人身事故により山手線が運転見合わせの情報があつた。

「まあ別に歩いて帰れないことはないけどな——」

「えー、四葉タクシーで帰る」

「都会っ子め、いつそんな贅沢覚えた」

なお四葉は姉を差し置いて本当にタクシーを呼んで、かつ姉にタク
シー代を巻き上げてそそくさと帰っていったのだった。

一緒に帰ることもできた三葉だが、しかしどうにも歩きたい気分であつた。

歩いて1時間程度なら、少し長い散歩と考えればポジティブである。

三葉はそう思いながら、母校の文化祭から背を向け、気の向くままに歩き出した。

○●○○●

散々だつた。

名前も顔もろくに知らない女子大生を探し回つてる間に電車は止まるし、司と高木は俺を置いて新宿に遊びに行くし……俺が無視するのが悪いけどな。

そうして自宅のある四谷に向かって歩いてるけど、こんな道普段歩かないから普通に迷子になるし、スマホはタイミング悪く充電切れるし……。

そうして俺は神社近くの階段に座り込んで休憩していた。

「どこだよー」

須賀神社の階段の上から見えるのは閑静な住宅街。そこから見える景色は……割と絵になっている。

今スケッチブックがあればとりあえず絵にしたいくらいには景色は綺麗だつた。

——瞬きをして目を瞑つたとき、ふわりと誰かが俺の隣を横切つた。

「——あつ」

「え？」

つい、声が出てしまった。俺の声にその人も驚いて振り返る。

——まるで時が止まったように、俺たちは顔を見合わせた。

彼女の表情は目を見開いて驚いていて、きつと俺もそうだった。

綺麗に切り揃えられた前下がりのボブと、白色のワンピースに黄色のカーディガン。

そしてなによりも特徴的なのは髪についている、組紐。

……組紐。いくつもの糸で編まれ、結びつく。

結び——なんなだろう、この唐突に浮かび上がったフレーズは。

寄り集まって形を作り、捻れて絡まって、時には戻って、途切れ、また繋がる。

どこかでその言葉を聞いた。

「あ、あの」

言葉が出てこなかった。さっき助けてもらったことのお礼を言いたいのか。

それとも、もっと別のことを聞きたいのか。

ただ言葉が思い浮かばなかった。

ただ彼女は数段下の階段から、俺を見上げてじっと見つめていた。その視線は冷たいものではなくて、なんていうか……暖かかった。

俺は深呼吸して、

「さっきは、ありがとうございます」

「う、うん。別に構わんよ。それよりも——ごめん、変なこと聞くんやけど」

彼女は一段、階段を上がる。

もう一段、さらにもう一段。そうしてすぐ目の前に、彼女はまっすぐと俺を見据えていた。

「私たち、どこかで会ったこと、ない？」

「——ない、けどある。そんな、気がする」

「あ、あはは……おかしいね。会ったことないって断言できるのに、でも絶対会ったことがある気がするんやよ」

顔を見合わせればわかる。これは確信的なもので、俺は彼女のことを知っている。

きつと彼女も同じで、俺たちは……どちらともなく笑った。

「俺は、瀧。立花瀧」

そこでようやく俺は自分の名前を彼女に伝えた。

「瀧……瀧くん、か。うん、なんかしつくりくる」

「なあ。君の名前を、教えてくれ」

そう問いかけると、彼女は俺の手を握り、瞳には涙を浮かべた。
——その瞬間、あたりは夕日に照らされ、昼と夜が曖昧になる。
俺はこと現象を知っている。黄昏時、じゃなくて、確か……

——カタワレ時。

「私の、名前は——」

夕焼けに照らされた彼女はあまりにも綺麗で、あまりにも浮世絵離れ
れしていて。

でもその姿はどうしようもなく愛くるしくて。

こんな一時の出会いでこんなふうになってしまうほど、俺と彼女が
出会ったのは——結びだ。

そうして彼女は自身の名前を紡ぐ。

「——宮水三葉、です……っ！」

そうして俺と彼女——宮水三葉は、出会った。